THE CENTRAL REVIEW

中央公論

二月號

第三十五年　第二號　第三百七

發行（毎月一回一日發行）

法學士 新田左逸氏新著

最新刊

現代社會生活の批判

—(著者多年研究の大著)—

四六判最上製本
全一冊四百餘頁
正價金貳圓
送料拾貳錢

輓近社會生活の多端なるに伴ひ社會問題に關する著書は尠からずと雖も多くは其研究の一方面のみに偏し社會生活の全般に渉りて其根本的解決を與へたるもの無し。本書は此點を遺憾とし汎く貧窮・疾病・犯罪及性慾的墮落の諸問題に渉りて之を組織的に考究せるものにて其目的は現代生活に對する嚴正なる批判にあり。今や一切の文化的或は教化的活動は凡て實證的科學的批判によりて始められざる可からず。本書は先づ原論に於て社會生活的自然的歷史的及法律的關係を明かにし各論に於ては其原理の適用たる刑事政策と社會政策との調和に就きて總述せり。新人の言—社會改造の要諦は本書によりて始めて明かとならむ。—(好評を博しつゝあり)—

■原作は妙趣盡きざる世界的名著■校訂者は女流國文學者 小林女史

四六判最上製
全一冊八百頁
正價金貳圓八拾錢
送料拾貳錢

忽ち再版

近松世話淨瑠璃集成

(内容目次)

長町女腹切▼淀鯉出世瀧德▼曾根崎心中▼薩摩歌▼心中重井筒▲心中二枚繪草紙▼戀八卦柱暦▼堀川波の鼓▼卯月の紅葉▼卯月の潤色▼伊達染手綱▼心中萬年草▲五十年忌歌念佛▼今宮心中▼心中刄は氷の朔日▼夕霧阿波の鳴渡▼冥土の飛脚▼生玉心中▼鑓の權三重帷子▼壽門松▼博多小女郎浪枕▼心中天の網島▼女殺油地獄▼心中宵庚申▼附錄心中二ッ腹帶

【本文の一節】……此の身の果を讀賣に誰が節附て田舍まで唄流さん蜆川、水も濁て此世へは何時歸り住む根無草、右手は無常の燒草と情からぬ身け惜からず。灰と成さうか此肌、煙と成るか此形—(卯月潤色)

東京市神田區
表神保町七番地
大同館發行
振替貯金口座
東京八七貳番


新春には
專賣特許 黒中山帽
平和ダービー
ピース
純品質主義
株式會社 高橋製帽所



中央公論第卅五年二月號目次





PRINTEMPS PARISIEN

BY HARRY B. LACHMAN

エレン・ケイ著　原田　實氏譯（四六判大冊箱入　定價貳圓四拾錢　送料八錢）

全譯　戀愛と結婚

人生の根本問題たる戀愛と結婚を論じて微に入り細に徹し、固陋なる因襲道德を駁撃粉碎して眞正の道德を新たに樹立せんとせるエレン・ケイが最大代表作の全譯にして、全篇燦爛たる天才的直覺を詩藻の閃めきとを以て珠玉を聯ぬるが如し、社會改造の大喚聲を徹底的たらしめんとせば須からく本書の如きに依りて改造根本の方針を確立せざるべからず。

ストリンドベルヒ原著　三浦關造氏新譯（定價壹圓四拾錢　送料六錢）

新生の曙

世界的文豪の最大傑作と稱せられ、現代の聖書と呼ばるゝ『春巻』の完譯にして其新人生觀、新道德觀を披瀝し之を趣味深き日常の談話に託したるもの、一語一句悉く聖者が救濟の靈界より發掘し來れる寶玉の如し。讀者は大なる勇氣と、滿足と、安心とを得む。

東京市飯田町一丁目二番地　株式會社　天佑社　振替東京一〇一二八　電話番町一一七九番

法學博士 吉野作

普通選擧論

普通選擧の秋來る 本書は我…

る吉野博士會心の著…

へり。時代思潮…

ろ…

菊判二…

價…上

郵税

東京京橋區…

大阪南區三…

名産

東西大家小

又玄會主催 諸名家餘技展覽會 十一日より十四日迄

東西大家新作逸品會 廿日より廿五日迄

言論の自由と國家

所謂森戸問題は再び『言論の自由』を思想界に呼び起した。事件の內容に立ち入りて論ずるの自由を有せざるも、同氏の論文が客觀的に公安妨害の恐ありとして所罰すると云ふのなら、今日の社會の許に於ては致方があるまい。斯んな事が理由で當然其職を退かねばならぬと云ふ時に、初めて『大學の自由』が問題になる。更に進んで森戸氏の無政府主義が朝憲紊亂に該當するや否や、否、無政府主義とは常に斯の如く解せざる可らざるやと云ふに至つて、茲に立派な言論自由の問題となる。

森戸問題の批判は之を他日に讓り、茲には『言論の自由』に對する國家の正當なる態度を考へて見よう。

凡そ一國の文化は專ら自由なる精神活動から生るゝ。國家は文化を助長することは出來るけれども、之を創造することは出來ない。國家は教育機關を設備する。併し制度としての教育上の設備は、文化創造の直接の源泉ではない。文化の創造は常に『人』である。其自由なる精神活動である。

然るに從來の國家は多く此理を謬つた。或る場合には自ら文化を作り得べしと自負して文學藝術の奬勵を試みた。けれども文展や院展は歐洲中世に於ける國教制度と同じく僞善と迎合と阿附とを贏ち得たに過ぎぬではないか。又或る場合には文化を一定の型式に强いんとして反對の傾向を抑壓した。けれども此政策は畢竟精神生活を其內奥の本質に於て毒するに止つたではないか。

言論を自由に放任するの結果謬つた思想の横行することは已むを得ぬ。併し謬つた思想は、思想としては、只內面的にのみ之を正し得べきである。是れ言論の自由が信仰の自由と相併んで健全なる精神生活の二大要諦たる所以である。

蓋し眞理は一度に其自身の全貌を示さない。謂はば幾多の誤謬を通して己を現はすものである。換言すれば所信と所信との戰の裡に自己を證明するものである。而して吾々は常に眞理が最後の勝利者たるを疑はぬが、只之が爲めには、(一)精神上の戰に誹謗脅迫乃至非道の强制が行はれざる事、(二)共同生活の條件を保維し得る限り精神的活動の自由を保障する事が必要である。是れ實に國家の獨り能く爲し得る所。而して僅に此範圍に於てのみ國家は文化開展の事業に積極的に與り得るのである。

然れども兎角政治家は現存するものを餘りに神聖視したがる。從つて共同生活の條件の維持に急にして、動もすれば其批判をすら禁ぜんとする傾がある。但批評は輕卒を愼み流行に阿らず眞摯公平なる考量を要するは言ふまでもないが、祖國と人類との道義的偉大を求むるの見地より、最良の智識と良心とに基く自由批評は、寧ろ大に歡迎すべきである。之をしも邪惡視するは、道德觀念の昏迷である。淺薄なる似而非愛國心の盲動に外ならない。

中央公論



第卅五年第二號
二月號
第三百七拾九號

戰後の農業政策

法學博士
農學博士　高岡熊雄

一

四千億圓の軍事費を費し、七百餘萬の生命を失ひ、四ケ年有半の長き年月を繼續したる今回の世界戰爭は言ふまでも無く歷史あつて以來の一大動亂なりしが、幸にして今や干戈漸く息まり再び平和の天地を見るに至れり。然りと雖も今回の如き大戰爭は單に兵馬の戰爭そのものゝ終れるを以て戰爭終結を告げたりと謂ふ可らず、軍事上は勿論政治上、經濟上、思想上等社會の各般に向つて大なる影響を及ぼし今や將に一大改造行れんとしつゝあり。此の秋に際して能く戰時中に得たる教訓に鑑みて以て適切なる政策を樹てて之を實行する國は榮へ行くも、其の然らざるものは盍し世の落伍者

たらん。吾人は今玆に將來我が帝國が農業界の改良發達を計らんとするに當り、如何なる方針を以て進むべきや、如何なる政策を樹つ可きやに就いて研究せんとす。

二

今回の大戰爭に於ては敵國たる獨逸側に在ても、亦聯合諸國に在ても戰局の發展するに伴ひ最初定めたる計畫の齟齬せしもの少なからざりしが如し。敵國側の方は姑らく措き、聯合諸國に就いて觀察するに、英國が宣戰を布告せしときは遲くも六ケ月間には戰爭は終結を告げ得べしと考へたりと云ふ。何となれば獨逸の經濟的實力は到底半年以上の戰爭を支ふること不可能なりとなしたるが爲めなり。然るに獨逸は戰爭始まりてより三ケ月以內に前後三回に亘り莫大なる軍事公債を募集せしに、應募額は常に募集額を超過せるの盛況を呈して軍事費の支出に何等の故障を生ぜしめず、英國をして獨逸の經濟的實力の豫想以上に充實し居るに一驚を喫せしめたり。是れ英國當局者の大なる謬見なりしなり。實際獨逸の經濟的實力は近來顯著なる發達をなし僅に六ケ月乃至一ケ年の短期間に於て衰退するが如きものにあらず、戰爭の勃發せし當時獨逸の特使として亞米利加に派遣せられしヘルフエリツヒは、最近十五ケ年間に獨逸は百億の富を增加し得たりとて母國の富の充實せることを宣傳したることありたり。若し英國にして獨逸の經濟的實力に關し斯の如く誤れる觀察を下すこと無かりしならば、或は今回の大動亂も未發に防ぎ得たりしやも知る可らず。經濟的實力の競爭に於ては容易に勝利を獲難きを悟るや、英國は對獨政策を變更せざる可からざるに至れり。

三

英國が第二に採りたる政策は、往時奈翁が英國に對して行ひたる故智に倣ひ優越せる英國の海軍力を以て敵國の沿岸を包塞し、外國よりして軍需品は勿論食糧品の輸入を嚴禁し、以て獨逸人を饑餓に陷らしめて之を征服せんとするに在りたり。干戈を交へて相爭ふの不利なるを知れる英國は、敵人に對する食糧供給の途を絕て以て已むを得ず和を講ずるに至

らしめんとするに在りたり。此の政策は獨逸に取りては確に一大打撃にして昨年十一月十一日――十一月十一日は獨逸の歴史上紀念すべき月日にして、嘗てフリードリッヒ、ウキルヘルムがスタインの宰相時代に有名なる農政改革を行ひ多年領主の壓制の下に呻吟しつゝありし農民に無償を以て身體の自由權を與へたる日なり、――に獨逸か愈々講和を申出で本年六月講和條約に調印せしも、獨逸國內に於ける食糧の供給其の不足を告ぐるに至りしが爲めなりと論ずるものあり。此說の是非は未だ明瞭に知ることを得ずと雖も、兎に角英吉利の饑餓政策が獨逸に對して致命傷を與へたる主なる原因の一たりしことは充分に想像するを得。是に於て乎或る一部の論者は論じて獨逸の如く多年食糧自給の政策を採り來れる邦國にしてすら尙且戰利あらず遂には和を敵の軍門に乞ふに至れり、食糧自給策が國家の政策として其の當を得たるものにあらざるや以て知るべきのみと、吾人は先づ此の問題に就きて少しく講究せん。

四

元來獨逸は天惠に浴せる國にあらず、自然の恩惠を受くることの少なき國なり。北緯四十七度より五十五度の間にありて、氣候も他の强國に比すれば寒冷にして、且土質豐饒ならず、集約的農業を行ふに不適なり、加之地理上歐洲の中心にありて數多の强國に依りて取り圍まるゝを以て常に之に對する策を講ぜざる可らざりき。斯る境遇の下に在りし獨逸が從來採り來りし經濟政策を管見するに、十九世紀の半頃までは工業製作業未だ盛にならず重要なる生產業は依然として農業にして之が改良發展を計るが爲め代々の帝王及び宰相は全力を注ぎ保護干涉至らざるなく、彼のフリードリッヒ大王の如き馬鈴薯栽培の必要を認めて大に之を奬勵せしも、保守的なる農民は容易に大王の意に則はざりしを以て、遂に憲兵の力を假りて强制的に農民をして之を栽培せしめたるが如きは有名なる一の挿話なり。其の結果として現時獨逸に於ては馬鈴薯の栽培盛んに行はれ遂に馬鈴薯は獨逸人の食膳に缺く可からざる一の食糧品となれり。獨逸農業の發展の爲めに力を盡せし人多しと雖も、就中近時に於て斯業の發達に最も努めたるは鐵血宰相ビスマーク其の人なりき。

ビスマークは獨逸將來の立國策として商工業を發達せしむるの必要大なりと雖も獨り斯業のみを以て立國の基礎とな

すべからず、商工業の隆盛を計ると共に農業をも亦發展せしめざる可らず、先進國たる英吉利の例に倣ふて獨逸の經濟政策を樹つるは、斯國の地理上より考ふるも又政治上の見地より論ずるも決して當を得たるものにあらずとせり。而して獨逸の農業を發展せしむるに當り、特に注意を加ふべきは獨逸國民の要する所の食糧は獨逸國民自から之を供給せざる可らず、此の重大なる目的を充分に貫徹し得る程度に獨逸の農業を維持し否な之を發達せしむるの必要ありとて、之に對する種々なる政策を實施せり。就中外國より輸入する穀類に關税を課して以て自國農業を保護せり。

獨逸農業史を案ずるに一八〇七年より一八五〇年に至る間に行はれし有名なるスタイン及びハーデンベルヒ農政改革の結果として、一八六〇年より一八七〇年に至る十年間は實に獨逸農業界の全盛を極めし時代となり、農業者の經濟的方面に於ても著しき改善を示せり。然るに一八七〇年頃よりして全世界に於ける交通及び通信機關の發達に促がされ、或は新大陸より或は濠洲より若くは露西亞等よりして比較的價格の低廉なる小麥は續々として歐洲の舊天地に輸入せられて歐洲産の小麥の價格をも低落せしめたり。例へば一八七一年乃至一八八〇年には小麥百斤の價格十一麻克一六なりしが、一八八一年—一八八五年には九麻克四五。一八八六年—一八九〇年には八麻克七六となり、萊麥も亦一八八一年より一八九〇年までに八麻克一六より七麻克六一に下落せり。千八百六十年代までは獨逸に於て栽培せる穀類の如き國内の需要を滿足せしめて尙多少の餘剰ありし爲め主として之を英國に輸出しつゝありしが、一朝海外よりして廉價なる小麥の輸入激增するや、獨逸の農業者は非常なる打擊を被り經濟上困難なる境遇に陷れり。

元來獨逸の農業經營は我が國の如く小規模のものにあらずして、斯國の官廳統計等にても二町歩以下を以て過小農とし獨立して農業を經營し能はざるものとす。而して、二町歩乃至五町歩を小農、五町歩乃至二十町歩を小農の大、二十町歩乃至百町歩を中農、百町歩以上を以て大農とせり。百町歩以上の大農の數の如きも千九百〇七年には二萬三千五百六十六の多きに上り、農業經營の方針が一般に生産物を他に販賣して以て利益を獲得せんとする所謂る一の營利的企業たり。而して從來農業者の栽培せる作物中小麥及び萊麥は最も重要なるものなりしに一朝海外農業の爲めに壓倒せられ其の價格は低落せしに反し、他方にては勞働賃銀は工業の發達に促されて漸次騰貴し、營利を目的となす農業經營は收入

減じて支出增加し遂に收支相償はざるものありて、土地の價格は低落し、農業者は非常なる困難に陷り一大恐慌は將に獨逸の農業界を襲はんとせり。

是に於て乎炯眼なるビスマークは此間の事情を能く洞察し之が救濟策としては穀類の價格を維持するを以て最大急務となし、輸入穀類に課するに關稅を以てせり、卽ち小麥及び裸麥百キログラムに對し一八七九年一麻克の關稅を課し、一八八五年には之を三麻克に後一八八七年には五麻克に增加せり。ビスマークに代つてカプリヴイ宰相の印綬を帶ぶるや、商工業者等の壓迫を被むり、遂に一八九一年關稅を低減して一時三麻克五〇となせしが、其の後には農業立國論者と商工業立國論者との間に激烈なる論爭あり、其の結果一九〇三年には再び關稅を上して五麻克五〇となせり。獨り關稅政策のみならず自國農業の發展を計るが爲に政府及び國民の爲す所到れり盡せりと謂はざる可らず。

此等種々なる農業政策の結果として、近年斯國に於ては商工業非常なる速力を以て進步せしにも拘らず、農業も亦全然往時の面目を改め、今回の大戰爭前に於ては小麥の生產は未だ充分に國民の需要に應ずる能はず、年々外國より幾分之が供給を仰ぎつゝありしも、裸麥は國內の需要を充實して尙餘裕あり、之を外國に輸出せり。其の外馬鈴薯燕麥大麥等の生產額も大に增加せり。若し食糧政策其の宜きを得るときは稍食糧の自給を爲し得るが如き有樣にして、開戰當初に於ては當局者も食糧問題に關しては餘り多くの注意を拂はさりしが如し。

斯くの如く獨逸は既に數十年前よりして自國の國勢に鑑みる所ありて食糧自給の政策を樹て、着々として其の效果を奏しつゝありしが、今回の大戰爭が豫想外に長引に從ひ、多數の農業者は鍬犂を捨て銃劍を手にして、戰場に出て農村に殘れるものは身體薄弱にして兵役の義務に服し難きものか、若くは婦女子及び老幼のみ、加ふるに家畜も亦軍用として徵發せられし爲め、農業用の勞働力減退し、肥料の供給は不充分となり大に土地の生產力を減耗せり。

今一二の實例を示さんに、一九一三年卽ち世界戰爭の勃發せし前年に於ては、小麥の生產額は四百六十五萬噸なりしが、一九一六年には三百萬噸一九一七年には二百十七萬噸、而して一九一八年には二百四十六萬噸となれり。同一期間に裸麥は千二百二十萬噸より八百九十萬噸、六百九十八萬噸及び八百萬噸に、大麥は三百六十七萬噸より二百七十五萬噸、

百八十二萬噸及び二百萬噸に、燕麥は九百七十萬噸より六百九十萬噸、三百六十萬噸及び四百七十萬噸、而して馬鈴薯は五千四百萬噸より二千四百七十萬噸、三千四百四十萬噸、及び二千九百五十萬噸に減少し、遂に平和を乞ふ一大原因となれり。

斯く論述し來れば或は假令食糧の自給政策を講ずるも一朝事あるの際には到底能く其の目的を達する能はざるものなりとて、之を非難するものあらんも、是れ楯の一面のみを見て他を顧みざるの議論と謂はざる可らず。若し獨逸にしてビスマーク以來の農業政策を採らず、英國の先例に倣ひて商工業立國説を主張し自國農業を保護せず、自由に外國より●して農産物を輸入せしめしならば、如何に敏捷なる食糧政策を實行するも食糧を自給し能はざるを以て、假令如何に獨逸の陸軍が強くとも又假令斯國の經濟的實力が充實すと雖も到底四ケ年有半の長き間二十四國を對手として大戰爭を繼續する能はず、英の封鎖政策に着手するや直に敵の軍門に和を乞ふに至りしや必せり。獨逸をして斯くも長年月の間能く大敵に當り獨逸をして能く獨逸たらしめし所以のものは、獨逸が從來幾多の困難あり有力なる反對ありしにも拘はらず國家百年の長計を考へて重を農業に置き食糧自給政策を樹て着々として之を實行せし結果なりと言はざる可らず。

五

轉じて英吉利の情態を一考せん。百有餘年の間商工立國主義のもとに立てる英吉利に於ても、亦農業の頗る隆盛を極めたる時代あり。フリードリッヒ大王の如き英吉利よりして農業教師を聘して所謂英國農業法を輸入し以て自國農業の改良を計れり。當時獨逸に於ては尙三圃農業の如き極めて幼稚なる農業經營法行はれつゝありしが、英國にては業已に農業經營上家畜の舍飼を行ひ、廣く穀菽農業行はれたり。

英國の農業は歐洲大陸の諸國に比し、一歩先に進みつゝありしが、十八世紀の末頃より十九世紀の初に及びて工業用の機械續々として發明せられし爲め、工業組織に一大變化を來し所謂産業革命となり、他の諸國が未だ農業の改良に全力を注ぎつゝありし間に、英國は工業の發展に力を盡し、品質の善良なるものを廉價に且多量に生産するを得て、全世

界を以て自國生産物の市場と爲せり。加之九十世紀に入りてより、他の列國が只國内の政治等にのみ氣を奪はれつゝありし間に、廣く海外發展の策を講じ世界の各地に廣漠たる植民地を建設せり。故を以て單に英本國のみを見れば恰も商工立國なるが如しと雖も、英帝國全體を通じて考ふるときは、一方に商工業の盛なる地方あれば、他方には農業を以て主要なる產業となせる地方あり、英本國に於て生産する工藝品は之を植民地に送りて植民地に於て生産する農産物と相交換して以て食糧の自給を計り得る境遇に在り、是れ他の强國と大に事情を異にする所にして若し今日我が國に於て商工業立國論を唱へ、英本國の事情のみを見て食糧自給問題に考を及ぼさゞるものあらんか、英國の實情を充分に洞察せざるものなりとの譏を免るゝ能はざる可し。

平素英國は優秀なる海軍を有し且海運業は非常なる發展をなして他の國を凌駕しつゝあるを以て、假令他國と戰端を開くの日ありと雖も能く制海權を掌握し自由に外國或は植民地よりして必要なる食糧の供給を仰ぎ得べしと自信せり。然るに今回の大戰爭始まりてより、獨逸の潜水艇の活動の爲めに食物の輸入は非常なる妨害を被り供給は不足して需要に應ずる能はず、價格大に騰貴せしかば、遂に食糧の消費に嚴格なる制限を加ふるの已むなきに至りたると共に、百有餘年來殆んど放棄して顧みざりし自國農業の進歩發展を計るが爲めに、或は牧草地を變じて農耕地となし、或は耕作すべき作物の種類に制限を加へ、或は農産物の最低價格を保證する等出來得る限りの手段方法を施して以て食糧自給の途を講ぜり。是れ斯國經濟政策の一大變化なりと謂はざる可らず。干戈正に收れり、英國は果して戰時中の苦痛を忘却して、再び從前の政策に復歸し農業界をして自然の儘に放棄すや否なや、グロープスが其の著「現時の田園問題」中、世界戰爭と田園生活を論ぜる節に於て、今回の大戰爭は國民をして食糧生産問題に深き注意を拂はしめたり、最も思慮なき者と雖も農業者の社會に對して貢獻することの如何に至大にして必要缺ぐ可らざるやを悟れりと論ぜしは蓋し公平なる論評ならん。

六

以上は只獨逸及び英吉利の兩國に於ける食糧問題に就てのみ陳述せるに過ぎずと雖も、大戰爭中食糧問題の爲めに非常なる苦痛を感ぜしは獨り此等兩國のみにあらず、佛蘭西然り伊太利然り、其の他何れの邦國と雖も程度に多少の差こそあれ純然たる農業國の外斯問題の爲めに惱まされざりしものなかりしなり、是れ今回の大戰爭が總ての國の農業界に對して與へたる一大教訓なり。我が帝國も亦將來の農業政策に樹るに當り等しく食糧自給問題に對して特に重を置くの必要あるなり。

或は論じて曰く食糧自給問題の如きは世に戰爭あればこそ研究するの必要あらん。然るに戰爭は凶事にして常に起るものにあらず、特に今回の大動亂の結果として世界を改造せんとし深遠なる目的を以て國際聯盟に關する議は着々として進行しつゝある今日に於て、今更食糧自給問題を云々するが如きは是れ即ち戰後の風潮に逆つて進まんとするものにして、世の落伍者たるを免かれざる可しと論ずるものあるやも知れず。然り今回の大戰爭は本論の初に於ても論じたる如く社會の各方面に於て一大改造を試みつゝあり、國際聯盟の如き確かに其の一なり。

國際聯盟問題は今回ウヰルソン大統領に依りて主唱せられたりと雖も是れ既に昔時希臘時代よりして唱へられたる說にして、從來此の種の說を主張せし學者少なしとせず。吾人も亦國際聯盟問題が適當に解決せられて、戰爭の如き蠻的行動の起ることなからんことを希冀して已まざるなり、否な人類の一員として各自之に向つて努力すべき責務を有す。然りと雖も此れ一の冀望なり、將來に對する努力なり、今日幸にして國際聯盟問題解決せらるゝとなすも直ちに之に依りて以て將來戰爭の絕無なることを保證するもの恐らくは一人もあらざらん。此の世の中に文明の傍に非文明あり、强者と弱者と相竝んで立てる間は戰爭を根絕せしむることは蓋し至難の業ならん。吾人は戰爭の起ること勿らんことを冀望す、然りと雖も徒らに國際聯盟等の效果を過信して、將來戰爭の起ることなしとして國家の政策を樹つるは危險の大なるものあるを信ずるものなり。今回の大動亂に於ても或る國民は盛に正義人道を高唱せり、然れども吾人をして言はしむれば是れ人類としての正義人道の聲にあらずして或る國民の正義人道なり。是れ今回の講和會議の狀況によりて明かに察知するを得べし。抑も是れ何に基するか、其の由て來る所は何處に在りや、是れ他にあらず、重きを國家に置くが

爲めなり。人類よりは國家を重んずるが爲めなり。人類の一員としての正義人道を唱道するにあらず、一の國民としての正義人道を論ずるが爲めなり。若個人と人類の兩者のみが全世界を支配するならば、戰爭の如き不淨事に就きて考ふるの必要遙かに減少せんも、今日の如く假令國際聯盟成立するの暁に於ても國家が依然として個人と人類との間に立つて之が連鎖機關として存在する間は、人類を土臺としての利害關係と國家を土臺としての利害關係とは必ずしも常に相一致するものにあらず、寧ろ往々にして互に衝突するものあるを覺悟せざるべからず。將來政治的に世界が統一せられて或は一大帝國となるか或は一大共和國となるが如き時期に際會せんか吾人は國家を土臺としての食糧自給說を主張せざるなり。然りと雖も世界主義 Cosmopolitanismus の實現は蓋し痴人の夢を說くが如きものにして、將來と雖も國家の存在を必要とし國民の福利を增進し國民經濟の發展を計らざる可からざる以上は、自己の立場を忘却し戰爭は再び起るものにあらずとの前提の下に政策を樹つるは危險の甚だしきものなり。吾人は我が帝國をして孤立的境遇に置かんとするものにあらず、將來は國際主義 Internationalismus に基きて行動すべきものたるを確信す。然るに獨り國民の生命を維持するが爲めに一日と雖も必要缺ぐ可からざる主要食糧に付ては出來得る丈け自國の勢力の及ぶ區域内に於て之が供給し以て一朝有事の際に豫め備ふるの途を講ぜざる可からざるは今回の世界大戰爭が吾人に與へたる教訓の一なり。

七

戰時に對する政策として食糧自給の必要なること上述の如し、然りと雖も本問題は獨り戰時に對するのみならず、平和の時代に於ても亦考慮を廻らす必要あるなり。戰時は勿論平時に在ても各國の行ふ經濟政策は何れも皆な人類の休戚のみを基とするものにあらずして、國家の隆盛を計らんとするに在るが如し。先づ自國に關する利害得失を能く考へ而して後始めて之を他に及す。現に昨年末我が帝國に於て米の供給不足を告げ價格暴騰するや、之を救濟するが爲めには海外よりして米穀を輸入するより他に適切なる方法なかりき、而して我が國に對し多額の米穀を供給し得る能力ある國

は英佛領印度及び暹羅の三國あるのみ。若し人道の上より之を論ずれば既に暴動まで起すが如く米穀の缺乏を感ぜる我が國には喜んで米穀の輸出を許可すべき理なりと雖も、英吉利は英領印度の米は英本國に必要なりとして容易に之を我が國に輸出せしめず、佛領印度の米に對する佛蘭西の政策も亦然りしたり。又本年に入りて政府當局者が再び外米の輸入に關し外國政府の認許を得んとするに當り非常なる困難に遭遇せりと云ふ。米穀を輸出せしむると否なとは當該國家の方針、而かも自國の利害を基とせる方針如何により定まり、未だ人道上のみよりして之を論議し之を强制する能はざるなり。

又假令海外諸國よりして米穀を輸入し得るとなすも、外國米と日本米とは其の品質を異にし直に採つて以て我が需用を補ふ能はず、加ふるに世界に於ける米の生產數量は約五億五千萬石內外に上ると雖も、其の內海外市場に提供せらるゝものは僅に三千七八百萬石即ち七分內外に過ぎざれば、若し我が國の需要激增せんか直に市價に大なる影響を及ぼすは明かにして、巨額の代金を外國に支拂はざる可からざるは明かなり。現に本年政府の買入れたる外國米中には一石の價格百圓に上れるものあり又總價額數千萬圓に達せしと云ふにあらずや。是に由りて之を觀れば獨り戰時に於てのみならず平時に在ても國民の要する主要食糧品は出其得る丈け自給し得るの途を講ずるの必要を痛切に感ぜらるゝなり。

八

世界大戰爭の齎せる敎訓に基き將來我が帝國の農業政策として否な國家的政策として出來得る丈け食糧自給の途を立つるの必要ありとせば、之を實現すべき施設方法如何。吾人は次の三者を以て其の主なるものなりとす。曰く農耕地の增加是なり、曰く土地の生產力の增進是なり、曰く食糧品の改良是なりとす。以下此等の諸問題に就きて論究の步を進めん。

農耕地の增加は現在及び將來の農業界に於ける一大問題なり。農業は一の生產業なれば之を經營する爲には土地、勞働及び資本の三者を必要となすは今更言を待たず。勞力の供給に就ては我が國の情態は餘り憂ふるに足らざるなり。人

口の數と勞働の量とは必ずしも相比例するものにあらずと雖も、人口の多數なる處にては勞働の供給も自から大なるは一般の現象なり。我が國は幸にして年々數十萬人の人口を增加し其の程度より論ずれば世界に於て第四位にあるなり。然るに勞働の能率に至りては個人に依り又民族に依り差異あるを免かれずして、日本人の勞働能率と外國人の夫と必ずしも同一ならず、シユモラー教授の如きは日本人支那人の勞働能率は獨逸人に比して其の三分の一に過ぎずと論ぜることあり。殊に我が國の農業者の勞働能率に至りては今後改善を加ふるの餘地頗る大なり。世人動もすれば晨に星を戴きて出で夕に月を履んで歸るてふ支那流の形容詞を藉り來りて、農業勞働の頗る長時間に亘れるを論ずるものありと雖も、吾人の見る所を以てすれば彼等が圃上に在るの時間は長きにも拘はらず、時間に關する觀念の薄き農業者は徒らに時間を空費し、實際勞働に從事しつゝある時間を積算せば蓋し思ひ半ばに過ぐるものあらん。我が國の農業者をして時間的觀念を養成せしむるは、彼等の勞働能率を增進せしむるに必要なる一手段たり。

資本に就ては世界大戰爭の好影響を被りて正貨二十億圓を有するに至れりとて喜ぶが如き有樣にして、遺憾ながら我が國は他の列强に比し依然として貧國たるの譏を免かれずと雖も資本其の物は人の力に依りて增加せしめ得るものなり、必要なる場合には他よりして之が供給をも仰ぎ得可し。

然りと雖も勞力及び資本と異なり農業の基礎をなす土地に至りては只天然に我が國民に賦與せられたるものを利用し得るに過ぎずして殆んど人力を以て之を增減すること不可能なり。若し我が國力の及ぶ範圍を擴張し以て農業經營上利用すべき土地を增加せんと欲せば、外國よりして土地を購入するか若くは戰爭等の如き非常手段に訴ふるより他に策なきなり。我が帝國が最近に二三十年間に此の種の手段によりて獲得したる土地の面積は一萬九千方里に上れり、是れ軍國主義を以て立國の本となすとて外國よりして批難を被むる所以なり。非常手段は非常の際に用ゆべき手段にして、常道にあらず、吾人常に之に依りて以て農耕地の面積を擴張する能はず、只現在與へられたる土地を出來得る丈け有利的に利用して以て殖産興業の途を計るべきのみ。

故を以て吾人は先づ我が國に於ける土地利用の現狀に一瞥を與ふるの必要あり。然るに此の問題に關する調査資料は頗る不完全にして、本年四月東京に於て開催せし畜產工藝品評會に於ける農商務省山林局の出品に依れば、我が本國に在る耕地面積は內地五百十七萬町步、北海道六十七萬町步計五百七十五萬町步、原野は四百八十五萬町步、森林二千三百七十八萬町步其の他四百六十六萬町步なり。又本年十月二十八日の官報に揭載せる農商務省の調査に依れば、本年一月一日現在の耕地は六百〇四萬町步なりと云ふ。而して余の調査せし所にては此等の調査より耕地面積稍大にして六百二十四萬町步あり。今假りに耕地面積の最も多き余の調査を採るも尙全國の總面積に比し僅かに一割六分に相當するに過ぎず。斯くの如く耕地の割合に少なきは瑞典及び那威の兩國を除くの外文明國中他に之を見出すを得ざるなり。山岳重疊する希臘の如き、又アルプス山麓に在る瑞西の如き國すら尙且我が帝國より農耕地の割合大なり。獨逸佛蘭西の如きに至りては農耕地の割合實に全面積の五割以上に上れり。我が國が過去二千有餘年の間唯一の生產業として農業を經營し來りしにも拘らず、農耕地の割合今尙ほ僅かに一割六分に過ぎざるが如きは、果して我が國の天然要素上より考へて此の割合以上に農耕地を增加せしむること能はざりしが爲めなるか、現今の六百余萬町步は我が國に於て開き得べき農耕地の最高面積を示すものなるや、或は原野を改良し或は森林地を解除し或は不耕地を利用して以て更に農耕地を增進し得べき餘裕は皆無なるや否なや、是れが解決は食糧自給問題を考究するに當り最も重要なる問題なり。

此の問題に關する農商務省の調査に依れば、將來我が國に於て增加し得べき農耕地の面積は約二百二十萬町步にして、其の內百三十萬町步は本州に於て殘りの九十萬町步は北海道に於て增助せしめ得可しと云ふ。北海道に對する推測面積は吾人が嘗て北海道廳の依囑に依り北海道將來に於ける土地利用面積を調査せるものに準據せるものなり。二百二十萬町步の內水田たり得べきもの八十萬町步、畑となし得べきもの百四十萬町步なり、二百二十萬町步は現在の農耕地面積の約三分の一にして、若し將來此等の土地を總て皆な充分に利用する曉に至らば農耕地の總面積は八百四十萬町步とな

りて全國の總面積の二割二分に相當し、之を外國の實例に比するに先づ葡萄牙に於ける土地利用の狀態と相類似するに至る。

政府當局者も農耕地增加の必要を認め、既に開墾助成法を制定し府縣に於て開墾をなすものには投資金に對し年六分の利子に相當する額を補助するの策を定め、本年度の如き五千町步の開墾豫定なりしに既に豫定以上の申請をなしつゝありと云ふ。

吾人は府縣に於て將來開墾し得べき百三十萬町步の土地が一日も早く開けて以て耕地と變ぜんことを冀望して止まざると共に政府は何が故に開墾助成法の實施を府縣のみに限りて帝國の一大富源たる北海道を除外せしやを疑ふものなり。之に對し前議會に於て政府の爲せる答辯の如きは殆んど漠として其の眞意を捕ふるに由なかりき。北海道に於て九十萬町步の農耕地を得るが爲には府縣に於けるよりは勞する所割合少なくして效果却つて大なり。殊に九十萬町步の內には開きて以て水田となし得べきもの二十餘萬町步の多きに上るに於てをや。更に又朝鮮臺灣樺太等の如き植民地に於ても新たに開き得べきもの或は地目を變換し得べき農耕地の面積決して少なからず。滿洲に於ける水田可耕地面積の如きも專門家の調査に依れば數十萬町步に上ると云ふにあらずや。

將來我が國に於ける食糧自給の途を樹つるに當りては政府當局者が現在施設しあるが如く、單に府縣の小天地のみを眼中に置かず、廣く我が帝國の勢力の及べる範圍の全部を包括して以て永遠の策を講ずべきなり。此等の地方に於ける開墾事業に對しても國家は須らく府縣に於けるが如く否な寧ろ府縣に於けるよりは更に一層手厚き保護奬勵を加へ以て事業遂行を促進すべきなり。將來は獨り食糧自給問題と云はず、總ての農業問題は、植民地の農業を度外視しては到底適切なる解決を下すこと能はざるなり。我が國の農業政策と植民政策とは極めて密接にして離るべからざる關係を有することは、徒に府縣の農事改良にのみ思を馳せ他を多く顧みざる政府當局者の特に注意を要する所なり。

食糧自給問題を解決するに當り、將來我が帝國の勢力範圍內に於て出來得る丈け廣く農耕地を擴張するの必要と可能なることゝは前陳せるが如し、而して農耕地擴張問題と相竝んで考究すべき重要なる問題は、農耕地の單位面積に對する生產力の增進と國民の食糧改良問題是なり。

我が國に於ては他に類例少なき集約的農業行はれ、耕耘除草等頗る丁寧に行き屆き恰も園藝農の如き觀を呈し、曾て獨逸の學者をして日本の農業は世界の模範たりと激賞せしめたることすらあり。然るに之が生產力を以て等しく集約的農業の行はるゝを以て有名なる丁抹、白耳義、和蘭等に比すれば遺憾ながら我が國の農業は劣れるものゝ如し。此等の諸國は何れも皆な國土の過半を開きて以て農耕地となし、獨り土質豐饒なる土地のみならず頗る瘠薄なるものを開きて利用しつゝあり。然るに等しく集約的農業を營み全國の總面積の僅に一割六分を耕作するに過ぎざる我が國に於て、却つて土地の生產力の劣れる原因は抑も何處に在りや。吾人をして之に答へしめば、是れ主として農業經營の方法其の宜きを得ざるに起因すと謂はざるを得ず。

從來我が國の農業者は只徒らに多くの勞力を土地に投入して以て集約的農業を營めり。農業經營上勞力は必要缺ぐ可からざる要素たるは言ふを待たずと雖も土地には報酬漸減法なるものありて多量の勞力を投入するも或る程度を越ゆるときは遂には投入せし勞力の割合に報酬を擧げ得るものにあらざるを以て、將來我が國の土地の生產力を增進せしめんと欲せば、獨り勞力に集約なるのみならず更に又資本にも集約ならざる可らず。一言に之を言ひ現せば、勞力的農業を變じて資本的農業となすに在り。更に稍詳細に亘りて之を論究すれば、從來我が國の農業が兎角主穀農に偏し合理的農業經營を行ふに最も必要なる飼畜の如き極めて微々として振はず、其の結果適當なる輪作法も行はれず、養分を土地に償還すべき厩肥の生產も不充分にして、且つ廣く動物力の利用せられざるが如きは農業經營上の一大缺點なれば、極力之が改善に努力せざる可らず。其の他排水灌漑の設置、農用道路の改良、土地の分合等の如き土地改良事業を行ひ、又大に二毛作を奬勵すべし。農商務省の調査によれば農耕地百町步に對する主要農產物の栽培面積は百三十八町八反にして、農耕地の約三割九分に於てのみ二毛作行はれつゝあるが如し。將來此の步合を進めて少なくも五割となすは、我が

國の氣候上等より見て不可能にあらざる可し。其の他農業技術に關しては品種の改良、病蟲害の豫防、農具の改良、肥料の增資、生産物の貯藏等種々なる點に於て改良を加ふるの餘地ある可し。且從來我が國の農業が重きを稻作にのみ置きて動ともすれば畑作を輕視するが如き傾向あるを以て、此の弊害を矯正して以て土地利用の途を計るときは益し土地の生産力は今日より更に一層增進するや疑なきなり。

上來陳述せし如く將來我が國に於て食糧增殖の途を樹んと欲せば、一方に於ては出來得る丈け多く我が帝國の勢力範圍内に於て農耕地の增加を計ると共に他方に在ては土地の生産力の增進に力を盡し、一單位面積よりしての生産額を增加せしむべきなり。

然りと雖も將來我が國に於て經濟的實力漸次充實するに從ひ國民の生活の程度も次第に向上し、若し今日の儘に放任するときは益米穀を消費するもの增加すべきは過去の實績に徵して明かに之に推知するを得可し、加ふるに人口は年々其の數を增加するを以て、假令耕地の擴張土地生産力の增進等に力を注ぐも尙且國民所要の食糧の全部を自給し得ることは容易の業にあらざる可し。是に於て乎吾人は我が國民の食糧改良問題に考慮を廻らす必要を感ずるなり。

今日我が日本人が主要食糧品として米穀に重を置くは千有餘年來の習慣に基するものなりと雖も、食糧自給の前途を考ふるときは之が改善を計らざる可らず。吾人は或る一部の論者の唱道する如く米食を廢して麵麭食となすべしと云ふが如き極端なる主張は實行困難にして只机上の空論に過ぎずと信ずるものにして、我が國民が將來と雖も依然として米穀を以て主要なる食糧となすは可なりとなすも、之を以て唯一の食糧となさず更に之に混ずるに他の農産物を以てして米穀の消費の節約を計るべきなり。特に麥類を之に加ふるに極めて行ひ易くして、其の齎す所の利益決して少々にあらず、食糧自給策を解決するに當り有力なる一手段たり。吾人は切に國民の自覺と自制とを冀望して已まざるなり。

二

戰後の農業政策として第二に努むべきは各農家の經營面積を擴張すること是なり。

經營の大小に關しては從來農業界よりは寧ろ工業界に於て議論喧然たりき。十八世紀の末葉以來歐洲の工業界に於て種々なる機械發明せられ、品質良好にして價格の低廉なるものを多量に生產し得るに至り、小經營は經濟上に於ても亦技術上に在ても到底大經營と競爭する能はず、漸次彼等の爲めに併呑せられ、工事の經營の規模は次第に膨張せり。

工業界に於ける此の種の趨勢は、農業界に於ても亦認められ、小農は經營上大農と競爭場裡に相驅逐すること能はず、漸次其の數を減少すべしと論ずるものあり。カールマルクス一派の說く所は卽ち是にして殊にカウツキーの如きは其の著「農政問題」に於て之を力說せり。然るに之を諸國の實例に徵するに農業經營の規模は擴張せられず、寧ろ却つて之が反對の現象を呈せり歐洲の農業界に於ても、亦最も盛んに資本的農業の行はるゝ米國に於ても然りとす。

然らば工業界は農業界とは何故に斯くの如く其の事情を異にするや。是れ此の兩種の生產業が根本的に其の性質を異にする所あるが爲なり。概說すれば農業は生物の發達を助長する業にして、工業は無生物に對する加工なり。農業者が春季播種をなして秋之を收穫するまでの働きは、生物の發育と外界の狀況とを能く調和して出來得る丈け發育の結果を良好ならしめんとするものにして、生物の働が主にして人力は只之を補助するに在り、家畜の飼育に就きても亦然りとす。故を以て農業的生產は人の意の儘に之を行ふ能はず、又之が完結には相當の時間を要するに反し、工業は無生物に加工するものなれば、其の生產は人の力に依りて左右せられ、期節の制裁を被むること少なく自由に其の生產額を增減するを得。且つ一種の事業にのみ全力と全時間とを費すことを得ると雖も、農業にては年中間斷なく活動せんと欲せば種々なる事業を起さゞる可らず、爲めに手廣の農業を經營せんと欲せば大地積の土地を要し事業の監督は次第に困難となる。加之工業にては機械の据付けてある工場に製造原料を持來りて以て加工するが故に有利的に能く大機械を使用し得ると雖も、農業にては生物の成育しつゝある所に機械を持つて行きて之を運轉せざる可らざるを以て其の大には自から制限あり。近年米國等にてはトラクターを以て動物力に代ふるものありと雖も、其の大なるもの尙三四十馬力に過ぎずして到底工業用機械の夫れに及ばざるなり。

工業界に革命を惹起せし大機械と分業とは廣く農業界に適用する能はずして、工業界と異なり農業界にては經營集約

となるに伴ひ其の規模は寧ろ縮少せらるゝ傾向を有す。

二

然らば我が國に於ける農業經營の範圍は如何。本邦に於ける農業經營の極めて狹小なることは世間周知の事實なり。全國の平均にては一戶宛の經營面積一町步にして、本州のみにては僅に九段八畝步に過ぎず。農業者の約七割は一町步以下の耕地を經營しつゝあり。是れ農業を專業となすものも亦兼業となすものも合しての平均數なり。農業專業者のみの經營面積に就ては調査資料乏しきを以て精確に之を知ること能はずと雖も、一戶平均一町三反步を上らざるべしと信ず。而して專業農業者中三十萬戶は僅に五段步以下の土地を經營して以て一家を支へつゝあるなり。外國の實例に比較するに佛蘭西にては一町步以下、獨逸にては二町步以下を以て過小農と稱し一家の生計を支へ難き經營面積なりとす。而して北米合衆國にては普通農家一戶に對する未開地拂下面積は百六十英町步即ち六十四町步なり。農業經營面積の大小の如きは勿論農業技術上、經濟上及び社會上等種々なる原因に依りて左右せらるゝを以て、外國の實例よりのみ推して以て直ちに我が國の事情を判定し得べきものにあらず、然りと雖も僅かに一町步內外の耕地を耕作し、假令他に若干の副收入ありとなすも果して能く相當なる生計を維持し得るや、又農業者一家の勞力を充分に利用し得るや否なや是れ解決を要する重要なる問題なり。此の問題に就きて詳細に論究するは餘りに專門的に亘る恐あるを以て只吾人の論旨の要點のみを陳述するに留めん。

帝國農會は大正二年よりして各府縣に於て代表的農家を選びて一ヶ年間に於ける農家經濟に關する詳細なる調査をなせり。其の結果として大正二年三年及び四年の報告公にせらる。

今此の報告に依れば農家一戶の平均農業所得は大正二年七百五十五圓二十錢、同三年四百六十三圓八十五錢、同四年四百〇四圓三十七錢三厘而して三ヶ年平均五百四十一圓四十四錢一厘なり。之に對する生計費は六百九十七圓十九錢七厘、五百八十三圓六十九錢三厘、五百四十八圓九十二錢六厘平均六百九圓九十三錢九厘なりしかば、大正二年にては五十

八圓三厘の過剩ありしが、大正三年には百十九圓八十四錢三厘、四年には百四十四圓五十四錢七厘、三ケ年平均にて六十八圓七十九錢八厘の不足となれり。而して經營面積は大正四年には田畑一町六段六畝餘、其の他の土地一町六段餘合計三町二段七畝餘なり。其他の年に於ても之と大差なし。而して調査農家中には米麥の栽培を主となせるものもあれば、養蠶、蔬菜果樹栽培、農產製造を兼ぬるものをも含めるを以て前述せる普通農家の經營上の收入は其の面積に比して決して少なしと云ふ可らず、然るにも拘はらず尚一家の生計を支ふること能はずして多少の不足を生ぜり。其の不足額は貯蓄あるものは其れより支辨するが、他より負債を起すか或は財產を處分して之を支拂ふの外他に途なからん。今日我が國の農家の負債額は大凡幾何に上れるや最近の調査無きを以て明かに之を知るに由なきも、少なくも、十億圓を下らざる可し。而して起債の主なる原因は一家の生計を維持するに在るは從來の調査研究に依り明かに推知し得可し。

三町餘の農業經營は本邦に於ては小農の大に屬するものならん、而して六百圓の生計費は我が現行所得稅法に於ける組稅免除額を相去る遠からざるなり、農家の生計上支出額決して大なりと云ふ可らず。斯くの如く吾人の生計に最も必要なる經費すら一ケ年粒々辛苦して得たる結果を以て支辨する能はざるは是れ農業經營上の收入の少なきを證して餘りあり。況んや農業者の大多數を占むる三町步以下の農業經營者の生活狀態の憫然たるは推測するに堪へたり。近年米價騰貴等の爲め農家の收入稍變化を來せしが如しと雖も是れ生產物を他に販賣し得べき餘裕あるもののみの受けたる好果にして、其の然らざるものに至りては一般物價の騰貴せし結果經濟上却つて困難を感ずるものも亦少なからざるなり。米價の如きも果して長く現狀を維持し得るや否なや、價格騰貴の反面には又下落あることを決して忘る可からず。米價暴落して之が引き上げ策に苦心せしは僅に數年前の出來事にあらずや。

現今尚我が國の識者中には彼の二宮尊德翁の「飯と汁木綿着物ぞ身を助く其の餘は我が身を責むるものなり」の主義を以て農民に望まんとするものあり。然れども吾人をして之を評せしめば是れ時勢の變遷を知らざるものの行動なり。農民も亦一の人格を備へたる公民たることを悟らざるものなり。農業者以外の生產業者の慾望の增加と向上とを以て合理的とし且つ之を必要なりとせば、農業者の慾望の漸次向上するは至當にして寧ろ獎勵すべきなり。尊德翁の咏歌の

如き精神を以て農業者に望まんよりは、寧ろヘンリー四世が佛蘭西の農民をしてせめて一週一回鷄肉を食膳に上らしむるが朕の政治の目的なりと言ひし如く積極的に農業者の經濟的境遇を改善すべき方針を以て政策を施行すべきにあらずや。斯く論ずるも吾人は決して農業者に奢侈を勸むるものにあらず、何となれば奢侈は獨り彼等の經濟的境遇を破壞するのみならず一の罪惡たればなり。然りと雖も現今我が國の農業者が一般に生計の最低限度と公認せらるる生計費すら一ケ年の辛苦を以て充分に滿足せしむる能はざるが如きは、農家の支出過大なるが爲めにあらずして收入少なきが爲めなり、彼等は必要なる支出をも充分になす能はずして經濟上困難なる境遇に沈吟しつゝあるなり。故を以て現今の農業界を改良し農業者の經濟的境遇と社會的地位とを改良せんと欲せば、收入の增加を計りて以て收支の均衡を保たしめざる可らず。

收入の增加を計るの途は種々あり、今日の農業組織が主穀農に偏するを以て之に家畜を加ふるが如き或は農產物の販賣方法或は生計上若くは農業經營上必要なるものを購入する方法を改善するが如きも重要なる改良策なりと雖も、吾人は農業の基礎たる土地の面積が餘りに狹小に失し、農業收入の少なきが最も主なる原因なりと信ずるを以て之が擴張を計るを以て最大急務なりとす。既に述しが如く農業者一戶平均耕作者僅かに一町步內外なるが如き、又五段以下の專業農家數三十萬戶を算ふるが如きは決して健全なる農業界と言ふ可らず。爲めに農業者は農業經營上獨り適當なる收入を得る能はざるのみならず、一戶の可能勞力をも充分に利用する能はず、而かも餘れる勞力は之を空費するに忍びず、已むなく必要以上の程度に勞力を土地に投入し、遂に耕作をして園藝的たらしむるに至れり。勿論多くの勞力を土地に投入すれば總額に於てはよく多くの收入を擧げ得べしと雖も、得たる收入は果して投入せし餘分の勞力を償ひ得るや、既に土地報酬漸減の區域に進みつゝあるは我が國農業界の現狀なり、況んや將來我が國の農業を改良せんと欲せば大に飼畜を奬勵して施肥を豐かにすると共に動物力を利用し又改良農具を使用するの必要切なるものあるに於ておや。故を以て農家の收入を增進せしむる上より見るも、又彼等の勞力を利用する上より考ふるも各農家の經營面積の擴張を計るは我が國の農業界に對する根本政策の一なり。

農家經營面積の擴張を計るが爲めには、既に食物自給問題を論ずるに當り述べたる我が帝國內に於ける農耕地の面積を增加せしむるは第一の手段なり。府縣及び北海道に於て果して政府調査の如く二百二十萬町步の農耕地を增加し得るの曉に於ては是現在總面積の三分の一餘に相當するを以て農業者の數を現在と同一なりとなすときは、一戶平均耕作面積も亦三分の一餘を增加して一町四段七畝となり、府縣のみにては增加面積百三十萬町步なるを以て一戶當り平均一町二段三畝となるべし。

耕地面積の增加策と相竝んで努むべきは、我が國に於ける農業者の分布の改善を計るに在り。農業地の面積に對する農業者の割合は府縣に依りて多少の差異あり、畿內中國東海四國の如きは農民頗る蝟集せる地方なるを以て、此等の地方よりしてあり餘れる農民一部を比較的疎薄なる地方に移住せしむるも一策なり。更に進んでは我が植民地其の他我が帝國の勢力の範圍內に在る地方に向つて彼等を送り出し、彼地に於て農耕地を增進せしむるは食糧自給の途を講ずる上より見るも必要なり。而して又力を商工業等農業以外の生產業の發展に盡し、農業者の一部を之に吸集せしむるも有力なる一手段たるを免かれず。現時の如き國民經濟の時代に於ては各種の生產業は互に密接なる關係を有し、農業榮へるときは商工業も亦榮ゆると等しく、商工業隆盛を來せば農業も亦必ずや好影響を被むる可し、農業者が農業經營上自給主義を捨てて、彼等の生產するものの一部は之を市場に提供して他に販賣し以て利益を上ぐべき營利的企業を營まざる可らざる現代に於ては、農產物に對する市場關係は農業經營の成否に至大なる關係を有す。商工業の隆盛に赴きて農產物に對する消流の途開けんか、我が國の如く小規模の農業經營の行はるゝ國に於ては必ずや農業者の經濟的狀態を改善すべし。

若し上陳せるが如き農民分布の政策を實際に施行せんか、爲めに農業者の數を減少すべしとて之に反對する論者あらん。然り此等の政策の結果としては農業者の數は多少減少するを免かれざる可し。現今我が國に於ける農業者の數は完

全なる職業調査なきを以て精確に之を知り難しと雖も、全國民の五割五分乃至六割に相當すと見るときは大なる誤なからんか。農業者の割合にして斯くの如く大なるは文明國中他に多くの類例を見ざる所なり。今若し今後も從來の如く、農業者は依然として僅かに一町歩未滿の土地を經營すべしとなすときは、將來教育は普及し、交通及び通信機關は完備し、商工業の隆盛に赴くに從ひ農業者の子弟は到底永く小規模の農業經營を以て滿足せず、遂には漸次都會若しくは工業地方に走りて、田園は意志の極めて薄弱なるものか、身體不健康なるものか若くは老幼婦女子を以て充たさるゝに至り、其の結果等しく農業者の數は漸次減少せん。而かも社會の落伍者の如きもののみ田園に殘されん。然るに今若し適切なる農業者分布の政策を適當に實行し、他に出て農業を經營するものも、又後に殘れるものも共に共に從來よりはより大なる面積の土地を經營し得るに至らんか、有爲の青年輩も亦農業界に於て多少共の手腕を揮ひ得るを以て必ずや相携へて都市若くは工業界に走るもの減少せん。吾人は我が國家の健全なる發展上より見て、農業者の數が他の生産業者に比し常に多數を占むるの必要を信ずるものなりと雖も、單に其の數のみ多しとて農業者は決して彼等が有する天職を全ふするものにあらず、數の問題と共に其の質如何をも考へざる可からず、質の善良なる農業者を比較的多く有せざる可らず。能く此の目的を達せんと欲せば彼等が其の技倆を充分に振ひて相當なる生活を爲し得るに足る丈けの經營面積を與へざる可からず。是れ今後我が國の農業界の改良策として最も大切なる政策の一なり。

一四

戰後の農業政策として第三に重要なる問題は地主對小作人問題なり。大戰爭以來我が國の思想界は一大變化を來し延て其の影響を經濟界に及ぼし、既に工業界に於ては勞働者の社會的地位の向上を計り彼等の經濟的境遇を改良する爲め勞働問題は日一日と喧しく論議せられ、着々之が改善を實現しつゝあり。今後工業界に於ける資本家對勞働者問題と相對して考究を要すべき農業界に於ける社會問題は其れ地主對小作人問題か。

地主自ら土地を耕作せず他に之を貸與して利用せしむる所謂貸地法は農場管理法の一種にして、現今我が國農業界に

於て頗る廣く行はれ、農商務省の調査によれば大正六年には地主の總數四百八十五萬三千〇四十二戶あり。其の內自營地主は三百九十三萬三千六百五十五戶にして、他の九十一萬九千三百八十七戶は何れも皆純然たる貸附地主なり。自營地主中にも土地の一部を他に貸與するもの頗る多し。其の結果農業經營者五百四十六萬七千二百七十七戶の內自作農の百六十九萬五千八百五十四戶に對し自作兼小作農二百二十三萬七千八百〇一戶、小作農百五十三萬三千六百二十二戶の多きに及び、其の割合は三一・〇二%、四〇・九三%、及び二八・〇五%なり。

更に經營面積上より之を見れば自作地は田百四十四萬九千三百八十五町步、畑百七十五萬四千六百五十二町步、小作地は田百五十四萬八千百三十五町步、畑百二十一萬三千十一町步にして其の割合は田にては自作四八・三五%小作五一・六五%にして、畑にては自作五九・三三%小作四〇・六七%なり。即ち畑に於ては自作地の割合稍多きも、田に於ては小作地却つて大なり。

而して自作農及び小作農增減の趨勢を見るに、前陳せし大正六年の狀況を以て此種の調査を初めて行ひたる明治四十二年の夫れと比較するときは、自作農は十萬三千二百九十戶を減じ、自作兼小作農は十二萬六千七百三十四戶、小作農は三萬六千六百三十戶を增加せり。

之を外國の實例と相對照するに、一二の例外を除くの外我が國の如く小農作の多數なるもの他に其の例少なし。例へば北米合衆國の如き一九一〇年の國勢調査によれば、農場數の六二・一%は自作農にして監督農は〇・九%、小作農は三七%なり。之が面積上より見れば自作農は土地の六八・一%を占め、監督農は六・一%にして小作農は二五・八%のみ。獨逸の如きも農耕地の僅かに一二%のみが小作地なり。随て此等の諸國に於ては農政問題として小作問題は未だ我が國の如く之が解決に痛切なる必要を感ぜざるは宜なりと謂つ可し。

元來自作農は小作農とは種々なる點に於て優劣あり。自作農は所有地に對して特殊の觀念を有し、常に永遠に亙れる計畫を樹てゝ之を實施し、土地の改良施肥等を充分に行ひ、不羈獨立の生活を營み國家柱石の士たり得可しと雖も、一小作農に在ては農業の基礎たる土地が他人の所有に屬し、或る年限の間のみ之を利用し得るに過ぎざるを以て彼等の生

活は不安定にして土地を愛するの念も少なく、兎角掠奪的農業を行ふ傾向あり。將來我が國に於て重要問題たる土地の生產力を增進する上に於ても小作農は到底自作農の比にあらざるなり。

然りと雖も農業界よりして全然小作制度を除却せんとするが如きは不可能なり、經濟上の必要は此の制度を生ぜしめたり。何となれば小作制度は經濟上に於ける一の分業にして、土地を所有するも之を經營するに必要なる勞力資本若くは技倆或は意思を缺けるものと農業經營上の必要なる勞資あり且つ技倆あり、意思あるも土地を所有せざるものとが、相合し相協力して一の農業を經營し以て其の依て生ずる所の利益を互に分配せんとするものなり。假令自作農が小作農に比して優れる所ありとなすも、經濟上斯くの如き特點を有する一制度なれば到底農業界よりして小作制度を驅逐する能はず、又全然之を驅逐するの必要なきなり。之を歷史上の事實に徵するに、佛蘭西の革命の如き、又一八〇七年より一八五〇年に亙つて實施せられたる普魯西の農政改革の如き、領主と農民間に蟠まりし隸屬的關係を打破し農民の地位を進めて不羈獨立の農業經營者たらしめしと雖も、現時再び小作農の發生を見るが如き又我が帝國に於ても維新の際等しくこの農民を解放せしと雖も今日既に曩きに陳述せし如く多數の小作人の存在するが如き、明かに之を證明して餘あり。

小作制度は經濟上一種の分業なく。地主と小作人とは兩々相待つて初めて能く生產の目的を達し得るものにして、此等二階級の間には何等甲乙の差なく、經濟上及び社會上に於て常に同等の地位に立つべき理なり。然るに我が國の農業界の狀況を觀察するに地主の勢力のみ徒らに强大にして、小作人は土地の賃借上只地主の命の儘に服從せざる可からざる有樣なり。維新の改革によりて農民は身體自由の權を得たり、居所移轉の自由の權を得たり、職業撰擇の自由の權を得たり、法制上彼等に對して何等强制的服從の義務を負はしめずと雖も、事實上の服從は尙依然として現在し、地主と小作人との社會上の地位は益々懸隔し、經濟上の境遇も亦益隔絕せり。是れ蓋し封建時代に於ける餘習未だ全く去らず、農民の性質に保守的にして依然として呉下の舊阿蒙たるに依れること大なりと雖も、從來我が國が一の農業國にして農業以外には他の生產未だ盛んならず、國民は生計を維持する爲めに收入の途を計らざる可らず。之が爲めには職を求めざる可らず、職を求むる爲めには土地を所有せざるものは地主に哀願して彼等の所有地を借り入れて農業を經營

するより他に適當なる方法なし、而かも土地は獨占的性質を帶び供給に自ら限りあるを以て、地主の權力は次第に增長し、小作契約事項の如き、主として地主の受る利益より打算して決定せられ、小作料の如きも頗る多額に上り、小作人は農業經營に投入せし勞力及び資本に對して至當なる報酬を受るを得ず、經濟上頗る困難なる境遇に陷れるもの少なしとせざるなり。

一五

然るに今や敎育は漸次普及し、交通及び通信機關は發達し、農業以外に幾多の生產業は勃興し、加ふるに近來思想界に一大變遷を來せし等四圍の境遇は一大變化を來し、農業者も漸次自己の天職と地位とを自覺するに至り、從來の如く從順に地主の命是れ從ふと云ふが如き境遇に甘んぜず、地主に對する小作人の關係は漸次險惡となれる傾向あり。保守的なる性質を有し、且つ一ケ處に集合せざる農業者なれば、今日工業界に於て見るが如き急劇なる變遷は起らざるべしと雖も若し小作人に對する地主の態度にして今日の儘何等改善を見ることなからんか、自覺せる小作人は遂には已むを得ず鍬鎌を捨てゝ起つの日ある可し。而かも工業勞働者等と異なり思慮の一層簡單なる小作人なれば、其の境遇に悲憤して起つや其の及ぼす弊害の慘憺たるものあるは農民戰爭史の敎ゆる所なり。

工業の比較的發達せる福岡愛知岐阜等に於ては今日既に小作人相團結して以て小作條項の緩和を地主に要求し、若し之を許認せざれば土地を耕作せず之を返還すべしと强迫するものありと云ふ。今にして之に對し適當なる施設を講ずるにあらずんば、一葉落ちて天下の秋を知る將來斯る風潮が漸次他に波及するや必せり。只是れ時の問題にして、實に地主對小作人の問題は將來の農業界に於ける一大噴火口なり。從來只手を拱いて以て不勞所得を收め他を顧みざりし余の所謂貸附地主の一大覺悟を要する時代となれり。小作人の勢力益强大となり不利益なる條件の下には土地を貸借せざるに至らんか、土地借入に關し競爭の劇甚なる時代に定めたる高率の小作料の如きは果して長く之を維持することを得るや。若し高率の小作料を標準として買ひ入れたる土地の價格に相當する小作料を徵收する能はざらんか、地主階級は一

大恐慌を來し、經濟上非常なる困難に陷るや必せり。是に於て乎貸附地主中には單に不勞所得を收納するを以て甘んぜず、自から進んで自己の所有地の全部若くは一部を經營する余の所謂自營地主と變じて以て其の困難を救濟せんとするものあらん。或は所有地を分割して之を小作人に賣却し以て自作農たらしむるの途を開くものあらん。吾人は今日既に府縣に於て此種の實例に接する少なしとせず。余の研究に依れば、近年貸附地主は減少し自營地主は少數ながら增加の傾向あり。（金井博士就職廿五年紀念論文集内拙稿參照）又香川縣の如き所謂「解き賣り」と稱して所有地の分割賣買行はれつゝありと云ふ。

貸附地主が變じて自營地主となり、小作人が進んで自作農となれば農業界の爲めに慶賀すべき一現象にして吾人は將來益此現象の廣く實現せんことを翼望する次第なり。然りと雖も土地の解賣を行ふに當りては注意を要する問題あり、地主と小作人との間に一種の階級生れ出て、一方に於ては地主の經濟上の困難を利用して土地を出來得る丈け低廉に買ひ入れ、他方に在ては土地慾の盛んなる小作人に對して出來得る限り高價に土地を賣り附て以て其の間多額の利益を獲得せんとし、社會の事情に暗き農業者は遂に收益價格以上の價格を支拂つて土地を買ひ入れ、自營地主となりたるが爲に却つて經濟上困難に陷ること是れなり。

外國にては斯くの如き場合に土地の解賣買をなすものあり。而して其の弊害頗る甚しきものありしかば之を矯正するが爲め法律を以て土地の解賣買をなすときは酒肴を供することを禁じ、或は一度契約せし取引も或る期間に於ては買主に於て之を破約し得るの制を設け、或は料理店等に於ては土地の賣買をなすを禁止せるものありたり。我が國に於ては土地の分割賣買未だ廣く行はれざるを以て斯る弊害も未だ多く聞かざる所なりと雖も、將來貸附地主等が自營上土地の解賣を行ふもの增加するに至らんか、斯る弊害の之に伴ふは又推測するに難からざるなり。地主は須らく斯の如き弊害を發生せしめざるが爲め第三者を其の中間に加へず直接小作人と交渉し、合理的の價格を以つて土地を分割讓與するは自他の爲めに必要にして且つ得策なり。而して又國家は此の種の問題を單に地主及び小作人の兩階級の自由行爲にのみ放任せず、自から進んで一大機關を設立し、一方には土地を買ひ入れ、他方には買入地を其の儘若くは之を細分して以て

小作人其の他農業を自ら經營せんとするものに賣却し低利にして年賦償還法に依りて其の責務を全ふし得べき法を講ずべし。然るときは我が農業界に於て自作農を増加せしむると共に地主對小作人問題を最も有利的に解決するを得ん。是れ國家百年の長計なり。

然りと雖も既に論ぜし如く假令如何に自作農を増加せしむる策を樹て之れを實行すと雖も、到底農業界よりして貸附地主及び小作人を全然驅逐する能はず、又之を驅逐し去るの必要なしとせば、地主及び小作人間の貸借關係は互に衝突することなく、成る可く圓滿に進行し、兩階級共に滿足なる發展をなし得るの途を講ぜざる可らず。是が爲めには適切なる小作條例を制定して以て地主及び小作人の權義を明かにし互に其の本分を守らしむるより他に良策なきなり。而して小作條例を制定するに當りては能く從來の習慣を調査し、其れを基とし是を是とし非を非となすべきものにして決して單純なる法理上の見地のみより立案すべきものにあらず、而して果して以上述べたるが如き種々なる施設にして適當に實行せられんか、將來我が國の農業界に於ける噴火口を破裂することなくして健全なる發展をなすを得ん。

吾人は上來數萬言を費して食糧の自給、各農家經營面積の擴張及び地主對小作人の三問題に就て論究せり。戰後の農業政策は此等三問題を適當に解決すれば以て足れりとなすにあらず、他に論究すべきもの多々あり雖も、今玆には數多き農業政策の内最も重要なるもの三題を撰びて論究せしのみ。(大八、十一、)

サンタヤナの提唱せる「理性生活」と「自由社會」

ドクトル・オヴ・フィロソフィイ
立敎大學敎授　小島茂雄

一

曩に本誌に於いて吾が國現前の思想界を論じた時、私は其處に多年御家流傳説として遵奉せられて來た獨逸哲學に於ける自尊主義の將さに失墜せむとする形勢を發見し、この際サンタヤナを徹底的に紹介することが恐らくは大戰後の改造期にある吾が思想界に對する一大貢獻であるべきを具さに言つて置いた。又故後に吾が文藝界に一瞥を與へた時、私は其處に十九世紀初半の浪漫主義が復興して意志本位の思潮に徹底して行つた結果作家も批評家も唯我獨尊的態度に墮してゐる形勢を指摘し、この際この方面にもサンタヤナを紹介する機會を逸してはならぬことを言つて置いた。今や讀者にサンタヤナに果して如何なる思想を期待してゐるであらうか。彼の思想の主要なる部分は、第一に「理性生活」の提唱にある。

如何なる勢力が人間生活を支配し得るとしても、若しそれが苟も人間に認められるものであるならば、必ず自らを人間の經驗の中に示すものでなければならぬ。而して人間經驗の進步の跡を迎つて見るに、科學に於いても、道德に於いても、藝術に於いても、將た宗教に於いても、それは吾等が習慣及び心意の

狀態に於ける面白い變化である、エピソードである。人類の經驗の進步の委曲を盡した歷史は、恐らく、幾億千の人々が各自に托せられた眞理の解釋を持ち寄つて編み合せた浩瀚な人類の自叙傳でなければなるまい。その中には頭腦と心胸との異つた色の交叉もあらうし、又種々の冒險の連鎖もあらう。その何れに於いて人類は眞の進步を認むべきか。これは一大？の附せられてる疑問である。この問に答へむとするものは、須らく、人類に關する博大なる知識と深甚なる同情とをもつて、自らをば、アリストテレースの言つたやうに、人類の記憶と判斷との代辯者とする大望を懷く哲學者でなければならぬ。現代の多くの哲學者が、認識論とか論理とか學派とか學說とかいふ各自の狹い專門の中に沒頭踽踏してゐる間に、勇ましく陣頭に立つて、而も極めて謙遜な態度でこの役目を演じてるものはたゞ一人サンタヤナのみである。彼の名著「理性の生活」一名「人間進步の諸相」こそは、實に、彼が右の問題に對する解答で、その第一卷には「常識に於ける理性」、その第二卷には「社會に於ける理性」、その第三卷には「宗教に於ける理性」、その第四卷には「藝術に於ける理性」、その第五卷には「科學に於ける理性」が闡明せられてる。則ち、彼は人類進步の主調を「理性生活」の展開の中に認め、希臘文化の衰頽と共にこの「理性生活」のヴィジョンを失つて以來二千年の間種々の變化を經驗した世界に向つて、新たに人類生活の諸相に亘る「理性生活」を提唱してゐるのである。

二

今日理性といふ言葉には雜多な聯想が伴つて、殊に純な感情生活を樂しむ詩人等には呪はるべき言葉とせられてるが、是處に私は先づ第一に讀者と共にこの言葉によつてサンタヤナは何を意味するかを忠實に學んで置かなければならぬ。

人が苟も官覺の中に全然浸つてることを止めて、前後を見、喜怒哀樂を感じ、何等かの慾望を起すことになると、その瞬間彼は感覺のニツチもサツチも行かない流動（フラックス）の中から人生の表現的部分に上つて來るのである。而してこの表現作用は單なる空想に終ることは滅多にないもので、記憶と反省とがこの現存せざるものを見る理想的機能に未來を形容する實踐的機能を加へるのが常である。サンタヤナの言葉を藉りて言へば、『生々たる人間衝動が反省によつて形容せられ、且過去の上に下されたる判斷に同情をもつて方向を轉ずる時に正當に理性と呼ばるゝのである。』則ち、反省が諸ろの經驗を聚めて夫等の相對的價値を認める時に、吾人が以前よりもヨリよく理會せられ且或る目的

に向けられた世界に面して意志の新たな態度を表白することである。而してこの表白は單なる空想ではなく、その現存する事實が既に吾等の肉體的變化に有意的行爲てふ威嚴を附するものである。

されば、「理性生活」は反省が單に起るだけでなく、その有效に起る瞬間より成るのである、現存せざるものが現在に於いて働き、價値が未だ感ぜられざるところに措かるゝ瞬間より成るのである。この意味に於いて、「理性生活」とは理想を知覺し且追求する吾等の經驗に與へらるゝ名稱である。若し生活をば、アリストテレースの如く、或る一定の理想的興味を持つ世界に面して幸福なる生存を遂ぐる意に解すれば、「理性生活」とは自然的幸福を完成すべく統制せられたる凡べての行爲としかく解釋せらるゝ凡べての官覺とを指すことになるのである。

世の中には、理性のないところにも猶、記憶のないところに於けるが如く、人生の快樂と苦痛とはあり得る。然しながら、この場合に於いては、苦痛を減じ快樂を増すことが出來てもそれが總て必ずしも人生の改善進歩を意味しない。記憶と理性とによつて賦與せらるゝ理想的連續のないところに道德的存在者のある筈がなく、道德的存在者のないところに人間進歩のある筈がないからである。故に、人間の進歩に於いて、理性は官覺に對する奉仕の中にその唯一の價値を有する偶然的方便ではない。却つて、官覺に於ける改善もそれが理性に於ける進歩でなければ進歩にならず、又增し加へられつゝある快樂にしてもそれが吾等を樂ましむる或る對象を啓示するのでなければ進歩にはならない。何者その事態が心意に措かるゝことなしには、改善進歩は記憶もせられず、欲望もせられないからである。從つて「理性生活」とは人間進歩に於ける單なる方便でもなければ又單なる偶發事でもない、それは總體的且體現的の進歩それ自身であつて、官覺の快樂をばその理會的に享樂せられ追求せられ得る範圍に於いて含むものである。」

由來、理性は人間同樣に古く且人性同樣に一般的のものである、何者吾人は動物の本能が或る程度までその目的を意識し且理想をばその程度に於いて行爲に適切なるものたらしむるにあらざれば、彼を人間と認むべきではないからである。理性と人性とは本能作用と理想作用との結合に始まるのである。故に「理性生活」は普通世界では殆んど全く沒交渉に送られてゐる二つの生活典型を融和するものでなければならぬ。則ち、「理性生活」は衝動の生活と理性の生活との結合よりなるもので、若しこの兩者が全然分離せらるゝ場合あらむか。前者は人をたゞ社會の俗事と肉體の慾望とにのみ走る野獸たらしめ、後者に人を

たゞ宗教と哲學とに於ける反省にのみ沒頭する狂人たらしむるであらう。然しながら衝動と理想とのこの幸福な結婚は容易に實現せられるものではない。却つてこの兩者の破鏡の嘆が屢々吾等の誤謬と失敗と悔恨と悲哀との中に裏切らるゝのである。

遮莫、「理性生活」は全然吾等が日常の經驗を離れた空想に止まるものではなくて、吾人が何か有用な技術を實踐に現す時、或は吾人の情慾が幸ひ吾人に啓蒙を與ふる時、或は吾人の夢想が究竟の善に對する憧憬を生む時等に明かに確かに經驗せらるるものである。「理性生活」は、この意味に於いて、廣義の藝術である。則ち、理想が夢でなくなり、動作が空でなくなり、行爲がその目的を意識し、その方法が教授せられ得るものとなるところに完全な「理性生活」が生れて來るのである。

この項を終るに當つて、私が充分にサンタヤナの意を盡すためには、「理性生活」の根據に就いて附言して置かなければなるまい。

恰も完全な藝術に於いて理想が單に體現せらるゝために存在し、而してその作品の各部分が何れも皆この理想を愉快に表象してゐる如くに、「理性生活」も亦具合のよい環境に於ける自由な天才の自發的表象である。かういふと「理性生活」は如何にも、奔放不羈なものゝように見ゆるけれども、實際は決してさうではない。純な理想は凡べて自然的根據を有するもので、時にその束縛に出會することとすらある。理想が都合よい環境に體現せらるゝ過程にして奏功的に藝術と化し、そしてその藝術が廣く自然界の凡ゆる活動を含むようになると、理想は全能者の如くに解せらるゝけれども、これは目的と事實或は機能と原因との混同より生ずる誤解で、人間進歩の味方をするものゝ當然避けねばならぬものである。誰でも理想を安全に理會せむとせば、その依つて生ずる自然的根據に綿密な注意を拂はねばならぬ。理想は自由なものであるが、それを生ずる自然の根據の多様なるに優るものではない。故に「理性生活」を解釋するに當つて最も大切なるものは、蓋し、分析の精神と生活の成敗を識別する慧眼とであらう。若も「理性生活」の記錄者は、人間進歩に方向づける衝動とそが自然の標的に向つて躓きながら辿る環境とに對して、理想に對すると同様の注意を拂はねばならぬ。古來かゝる人間進歩の批判者が吾等のサンタヤナを措いて他に幾人あつたであらうか。

三

近世哲學の諸學派を通じて、これを仔細に檢察するに、未だ

人類進步の批判者が安心して全く身を掩するに足る學派は不幸にして一つも見當らない。殆んど凡べての學派は、時にその物理學說によつて、時にその認識論によつて、時にその論理的分析によつて、多少の利益を齎して吳れる。吾人は、例へば、現今の科學と思辨哲學とから人類の事情と環境、歷史と心意的習慣の描寫を學ばねばならぬ。然しながら、この描寫は單に人間進步のドラマに舞臺を供給するだけに止まつて、その眞の構想と意味とを提供するものではない。今日の哲學者位想像力を缺いてるものは、古來の思想史上どの頁にも見附からないところである。

吾人が存在の意味を穿鑿し且世界の眞相を發見せむとする企圖は、昔から、人間の天性に根ざしてる。而してこの企圖は偉大なる想像力によつて裏附けられなければ到底成功し難いものである。然るに現今の哲學者は大抵哲職業的哲學者で、秘密結社的なる專門技巧と專門熟語との御家流傳說を遵奉し、却つて人類一般の通常經驗に現はれたる記憶と判斷とを代辯することに豐かな想像力の天分を示す者を擯斥してゐる。この所謂職業的哲學者の一部が、恰もドン・キホーテが醜い甲冑を打ち鳴らして終ひに失敗に終る前途を誇つたように、軈ては唾棄すべき自我主義に墮する認識原則や斷片的なる論理的分析に沒頭してゐることは、私が既に（本誌昨年十一月號に於いて）論じたところである。而して彼等の他の一部を見るに、自然の研究に謙遜にして、心理學と進化論とに造詣深きもに拘はらず、往々にして人生を外部より觀察し、自然の過程の複雜なるに眩惑してその單純なる効用と目標とを忘却してゐる者が多い。彼等は、謂はゞ、學校から逃げ出した子供等のようなもので、學校を棄てるに多大なる勇氣と智慧との必然だつたことを誇り、たゞ奔放不羈なる自由の裡に幸福を見出してるが、彼等は果して眞に何を要求してるかを知らない。彼等の積極的理想は何かと問はるゝならば、彼等は得意に世界最多數の民衆の唯我獨尊主義からの解放と彼等が凡べて平等であるべき欲望とを數へ立てゝ、さてそれ以上の眞理は、大統領でも選擧するように、多數の投票に待たねばならぬことを主張するであらう。彼等は、サンタヤナが明かに指摘してゐるように、吾等の祖先が理想を體現せしめた種々の制度や神話や宗教や藝術を坊主憎ければ袈裟まで流に排斥して了つた、彼等は之等のものが「理性生活」を象徵するもので、純粹の人性を幻想的に表象するものなるを覺り得なかつた。而して彼等は、かくの如くにして、終ひに、理想を目して何か偶然的にして無意味なるものとし、自然に於ける人間の有限生活中にその溫室と發育とを見出し難きものと斷ずる

非常なる誤謬に陷るのである。

基督教哲學も亦終ひに「理性生活」を充分に實想し得なかつた。由來、基督教哲學は神話的方法によつて理想的生活を表象するものであるが、夢と覺めてる知覺、象徵と象徵せられたる事物、內的情緖と外的勢力等を識別することの出來ない心意の原始性に根ざすところのかの詩的構想を目して超自然的事實となす本能に起因するものであるがために、サンタヤナの所謂理性の生活を正當に評價することを能くしないのである。何者、基督敎哲學に於けるが如く、諸ろの理想が實體化せられて自身に存在する力を具へてるものとせらるゝ時には「理性生活」は到底意想し難いからである。則ち、理論的に見て、その活動の領域は早や他に買占められその職能は既に失はれたることになり、實踐的に見て、その內的衝動は人巧的刺擊と抑制とによつて歪められてることになるからである。

餘程合理的だと稱せらるゝ自由神學にしても、その根底に於いて神話的である。たゞこの場合に於いては、初代敎父時代の基督教哲學とは異つて、神話がそのまゝ自然世界へ延長せらるゝ代りに、却つてその實體となつてる。自由神學はこの實在世界に一の理想的體系を假想して、この超自然的根據の上に人間をして自然的生活を營ましむることを敎へるものである。その結果、自由神學の魅力の下にある人々は、人生の自然的條件を甘受するけれども、自然的理想を許容しない。從つて、サンタヤナの所謂理性の生活はかゝる人々には存在し得ないのである。何者、彼等は有限的人間的な價値標準を寬容せず、又人生の眞價を定むるに當つて吾等の判斷と動作とを指導する現實的興味を侮蔑するからである。

其處で吾等の瞥見は遠く希臘哲學に遡らねばならぬ古代希臘人は極めて合理的であつた。又彼等の興味は誠に廣汎なもので、人間進步の種々の方面に限なく及んでゐた。物理學に於いて、彼等は一躍して力學的統一と一般的進化とを發見し、これを人生の背景に置くに至つた。而して如何に彼等の觀察が鋭敏であつたか又如何に彼等が近世科學の先驅者たる役目を滿足に果したかゞこの間に窺はれるのである。

希臘哲學に於いては、物理的存在の究竟的にして合理的なる說明として二つの系統が提供せられてる。その一つはヘーラクライトスの思想で、吾人が直接經驗の眞相を流動、斷えざる變化だと說くものである。則ち、自然に於いても人心に於いても、一定の實體とかいふものはなく、凡べてが不安定

であり、矛盾であり、改造であり、忘却であつて、人は二度と同じ河の中へ跳び込むことは出來ないのである。その後、神秘論と懐疑論と超絶論とがその各々の方法をもつてこのヘーラクライトスが到底捕捉し難い變化だとしたものを説明せむとしたが、何れも皆終ひにその直接的觀察に或る種の神話か詭辯か詐僞的人工かを加へてゐる。然るにヘーラクライトスは終始直接經驗の正直な豫言者であつた、狂はしい喜悅と惡しい修辭とを持たざる神秘論者であつた、世間的常套に頼らない意味で懐疑論者であつた、而して衒學と獨斷とを持たざる超絶論者であつた。

他の一つの系統はデーモクリトスの思想で、これは現象を成るべく單純な要素に還元して、その複合と分離とが一定の法則に從ふものなることを主張するのである。誰にもせよ吾人が經驗を單に言ひ現はすだけでなくこれを理會せむとするものは、必ずこの立場を執らなければならない。心理的存在をば彼が元子論の中に含めることによつて、デーモクリトスはその後自然科學が殆んど放棄したけれども續て亦取り上げねばならぬ問題を明かに指示した。彼の元子論は今日の吾等には甚だ粗糙に見ゆるけれども、自然を理會せむとする科學的理想にその究竟的表現即ち機械論的表現を與へたといふ功績は永久に記憶せらるべきものである。機械論は形而上學の究極的眞理でないかも知れぬ、然しながら自然を實際的に理會するにはこれに依る他に何等の方法もない。機械論は數ある説明原理の一つではなくて、説明することが即ち起原と變化と法則とを發見することである自然哲學に於いては機械論は説明それ自身である。この意味で、デーモクリトスは實に理性の永久的代辯者である。

ソークラテースとプラトーンとアリストテレースとの人類思想の進步に對する貢獻は今更特に取り立てゝ數へる必要もなからう。ソークラテースは人間心意の自律性を見出しプラトーンはその理想に充分な表現を與へ、而してアリストテレースはこれにその自然的根據を供へた。さりながら「理性生活」を論ずるに當つて此處に讀者の注意を惹いて置かなければならぬことは、ヘーラクライトスの物理學はプラトーンに吸收せられたけれども、デーモクリトスのそれは不幸にしてアリストテレースに吸收せられなかつたといふ一事である。若しヘーラクライトスの所謂流動が正當に觀察せられ、そしてこれを説明するためにデーモクリトスの機械論が滿足に豫想せられたならば、存在に關する學說は完成せられたであらう。而して若し完成せられた物理學說がソークラテース等の哲學の中に合併せしめられたならば、智慧は殆ど凡べての點に於いて完備せられたであら

う。然るに、デーモクリトスの現はるゝことの餘りに早く、又アリストテレースは既に理想の科學が全盛を極めて思辨的物理學を生んだ時に出で、彼にあれ程の科學的氣質と研究とがあつたにも拘はらず、自然哲學をば一の悲しむべき誤解の上に建てゝ、それ以後二千年の思想界を混亂せしめたのである。

その事情はかうである。先づ、プラトーンはヘーラクライトスの流動説を容れてこれを現象世界と見たが、ソークラテースの心意自律説をエレア學派の影響の下に展開して、この現象世界の一事一物が或る觀念の體現であるとし、剰へ之等の觀念に形而上學的實體性を附與した。觀念のかゝる荒唐無稽な勝利は非常な誤解を生むに助けとなつて吾等の目撃する現象の各々の持つてる價値は今や觀念として別々に離れて存在するものと考へられ、更に進んでこの觀念が現象に先行し且その存在の原因であると主張せらるゝに至つた。アリストテレースはこの觀念の形而上學的實體性を拒否したけれども、猶ほ觀念を自然界に作用する本質とし、これを個々特殊の事物の生命或は形式と同一視した。かくしてかの觀念の荒唐無稽な勝利は幾分その鋭鋒を挫かれたけれども、事物を單純に思辨的に理會するところに猶ほ勝利の壘を固めてゐる。これ、實に、アリストテレースの科學がデーモクリトスの機械論を吸收してゐなかつたからである。前者の眼には後者の機械論の含蓄する使命が當然の姿で映じなかつたゝめに、彼は事物の直接原因を檢察する時に於いてすらこれを觀念的性質に歸してゐるのである。要するに、サンタヤナの言つてる如く、プラトーンは何等の物理學をも持たず、アリストテレースの物理學は誤謬的であつた。其處で理想の科學は前者に於いては環境と制御とを缺き、後者に於いてはその應用せらるべからざるところに濫用せられたのである。その結果、終ひに、サンタヤナの所謂理性の生活はソークラテースが人間心意の自律性を強調したところに意想せらるべくして、プラトーンが天才的希臘人の良心の興感から政治と藝術とに於ける自由の愛と美の愛とを喚起して大いに理想の生活を高調したところに解釋せらるべくして、而してアリストテレースが理想的なる凡ゆる事物に自然的根據を自然的なる凡ゆる事物に理想的發展を與へたところに古典的説明を見出すべくして、然もイマ一と息といふところで流産したのは、實に、「理想生活」の根據たる自然を正しく理會する點に希臘の哲學者等が充分徹底し得なかつたからである。

四

あのように偏見から解放せられ、あのように人性に關する該

博な知識と同情と展望との天分を豐かに賦與せられてゐた希臘人の間にすら、一人で「理性生活」を全體として體驗し或は理會したものはない。その範圍と判斷と權威とに於いて古今に比類なき研究を有するアリストテレースすら、デーモクリトスの機械論を容るゝ寛大がなかつた。吾人は希臘人以後彼等程に博大寛厚なる國民を見ない、アリストテレース以後彼程に雄健なる哲學者を知らない。中世紀に於けるが如く、科學を排し哲學を神學の奴婢として遇する時代に、「理性生活」を體現する國民或は個人を見出すことは出來ない。文藝復興期（ルネッサンス）に於ける「我」の發見に始まる近世思想の覺醒及び進歩が、何時も隨所に教權と國家と自然との外部的壓迫を蒙りつゝ、且それ自身の内部的不調和と乖離とを調停しつゝカントの「超個人我」の發見に至るまではよかつたが、それが總て獨逸國民性の自尊的特性と結合して自己を宇宙の中心だと主張する唯我獨尊的態度に墮したことは、私が既に本誌昨年十一月號に於いて委曲を盡して說明したところであるから是處には繰り返さない。たゞかゝる間より人類民衆の記憶と判斷とを眞に代辯する哲學者を期待するの不可能なることを讀者の諒解に待つことが出來ればよいのである。

然らば、遂に私が言つたように、希臘文化の頽廢と共に「理性生活」の幻影を失つた世界に向ひ、今新たに人類生活の諸相に亘つて「理性生活」を提唱する吾等がサンタヤナは如何なる立場に立つ人か。彼は明かに言つてる、自分は希臘人の如くならざる國民の間に生れ、アリストテレースの如き天分を持たざる者なれば、彼等が既に成就したところのものを全く新たに爲さむと試むるは無益であると。彼の態度には全然唯我獨尊的態度を脫して、極めて謙遜なるものがある。彼の憧憬は確かに二千年の昔に遡つて單純典雅な希臘の文化に向けられてる。然しながら、彼の態度は男性的であり、又彼の憧憬は批判的であることを記憶せねばならぬ。

暫くサンタヤナの希臘文化批判を聽け。第一に彼は時が歷史の上に齎らす變化を忘れてゐない。如何に理性の原則は同一であつても、人間の生命と良心との事實は刻々に變化するものである。絕えず新しい背景と應用の根據とが論理を迎へてゐる。例へば、アリストテレースの道德觀にしても、彼は徹頭徹尾希臘的であつた。彼は、希臘人として、理想の論說を理想の本質から區別し難い事例や評價や概念やと混同してゐる。之等は近世になつて置き換へられたものに比すれば非論辯的であり且遙かに高尙であるけれども、今日の吾等の眼には之等が自然の道德に於ける深甚廣汎たるものを強いて吾等の生命に適せざる形像の中に體現せしむることによつてこれに緣飾を加へたかの如く映

るのである。吾人は其處に吾等が道徳の最も恐ろしい審判と最後の允許とを見出すことが出來ないのである。希臘文化の成熟期は吾等の現實に住んでゐるこの世界の粗硬なるところに較べてすら單純であるが故に、吾等には屢々小供らしく見ゆるのである。吾人は其處に吾等の罪惡と聖潔と慈愛と名譽とを見出し能はぬのである。よし吾人が希臘文化の中にしがみつきたい程尊重親愛すべきものを認めたにせよ、吾人は二千年の歷史を遡つて古典希臘に復歸して希臘人になることは不可能である。

この點に於いて、サンタヤナは少しも時代錯誤に陷つてゐない。又、この點に於いて、彼はルツソーやトルストイと立場を大いに異にしてゐる。ルツソーは自然と原始的とを一つに見て、人間は原始人の如き生活に立ち歸ることによつて自然より遠ざかりつゝある文明の墮落から逃れ、人間本然の善を肯定することが出來るものと考へた。ルツソーの文明觀は、老子の『夫天下多忌諱而民彌貧、人多利器國家滋昏、民多技巧奇物滋起、法令滋彰盜賊多有、……吾無欲而民自樸』と叫んで『雖有舟無所乘之、雖有甲兵無所陳之、使民復結繩而用之、甘其食、美其服、安其居、樂其俗、隣國相望、鷄犬之聲相聞、民至老死不相往來』といふような理想郷に憧憬した文明觀と殆んど同じである。而してかゝる文明觀が自然と原始的とを混同して甚だ詭辯的であり、文明の中に進歩を認めない虛僞の假設から出發する空想であることは、今更、繰り返す必要もなからう。然も彼が「自然に歸れ！」といふ中には清新にして詩的なところがあるために、この叫びは、何れの時代に於いても、殊に詩人の如く極端に煩雜な因襲を避けて單純な自然につかむとするものゝ心胸の奥に深く秘められてる琴線に共鳴するのである。

近代に於いて、この最も高い共鳴を傳へてゐるものはトルストイである。如何にルツソーがトルストイの中に響鳴するに至つたかは、後者の「吾等何を爲すべきか」を讀むとその過程がよく解かる。田舍からモスコーの都に出て其處の窮民の有樣を目のあたりに見るや、彼は己れの奢侈を驚き恥ぢた。彼は自分が貧民の背に自分の重い身體を載せかけて喘ぎながら、その上から下りようとはせずにたゞ口に救濟を說くことの愚なるに驚き怖れた。而して彼は都會の塵を拂つてヤスナヤ・ポリアナの片田舍に歸り、自ら衣食住共に一農夫の生活を擇んだ、少くとも擇まむとした。彼の眞意は、民衆の貧苦を救ふために吾は自ら勞働して、成るべく他人をして吾のために勞働せしむべきでないといふことにあつた。一九一〇年十一月十二日、あの不思議な隱遁の決斷を實行せむとする首途に於いて、アスタポボの停車場で死んだトルストイが、果して彼の主張をその生活に

於いて徹底し得たかどうかといふ問題は、私の今是處に關するところではない。私はたゞ彼の主張が單に科學と藝術とを棄つることを辭せぬばかりでなく、近代の文明を一概に侮蔑し、農園の勞働のみを尊重して工場のそれを度外視し、結局、彼の文明觀が、その動機に於いて如何に異つてゐるにもせよ、その文明を棄避する點に於いてルツソーのそれと全然同一であるといふことを言つて置けば足りるものである。吾人はこの文明に對してどれ程不滿を感ずることがあつても、その現在あるがまゝのもの、又その現に推移しつゝあるものに對して相當の尊敬を拂ひ且相當の愛を捧げずにはゐられないものである。吾人は、到底、自ら享けてる文明を棄避否定することの出來ぬものである。どこ〳〵までもこれをその深奥に於いて把握肯定せずにはゐられぬものである。其處に人生の進歩があり、道德があり、解放があるのである。

翻つてサンタヤナを見るに、彼も同じく「自然に歸れ！」といふ言葉に中心から共鳴する者であるが、彼は決して現在の外に解放せられむことを說く者ではなくて、勇敢に現在の中に解放せられむことを主張する者である。故に吾人が希臘道德から學ぶことの出來るものは、サンタヤナに從へば、單にその發達の抽象的原則、即ち、道德が人性の諸勢力に根ざし、その間に完全な調和を建設せむと努むる過程の含む教訓に過ぎないのである。これは道德に就いてだけではなく、人間進歩の諸相に亘つても然りである。

亦、サンタヤナは希臘文化以後人類が異常な實驗を多く嘗めて來たといふ事實に盲目でない。之等の實驗はプラトーンやアリストテレースが夢にも想到し得なかつたもので、彼等の思想を醇化するに大いに役立つものである。例へば、文藝復興期の如き、宗教改革の如き、佛蘭西革命の如き、デモクラシーの如き、產業革命の如き、一としてこの役目を演じ得ぬものはない。サンタヤナの希臘文化に對する憧憬は、正當な批判となり、翻て希臘哲學の改設或は醇化となるのである。これが、實に彼の眞の立場である。

其處で、サンタヤナが新たに「理性生活」を提唱するに當つて、彼の問題は、旣に言つたように、人間の生きてる自然的條件に關する信賴するに足るべき意想をば、人間の有する興味に關する適切なる意想に結び付くることであるが、彼の前には幸ひに手繰るべき二つの糸口がある。その一は、即ち、相互に補足的なヘーラクライトスとデーモクリトスとの自然觀である。その二は、即ち、ソークラテースとプラトーンとアリストテレ

ースとの道德觀である。而してサンタヤナが之等の思想系統を改說醇化する態度は謙遜であり、寛容である。彼が建設せむと欲する仕事は諸々の理想を解釋し、對比し、そして殆んど閑却せられてるその自然的根據と對照することである。世界は今や彼と共に敵意を挾んだ論爭の時代を棄てゝ、同情を持つた解釋の時代に移りつゝあるのである。

さて、サンタヤナが「理性生活」を解釋する順序は、先づ凡べての對象と衝動とを吾等に與ふる直接經驗の流動から出發し、如何なる事實と目的とが第一義的に見ゆるか、如何にしてその周圍に自然と人生との意想が聚まるか、如何にして理性が經驗を統率して思想及び動作の理想に到達するか、而して如何にしてこの理想が社會の諸制度を生み、總て人間が自由に宗敎と藝術と科學とを享樂するに至るかを說明するにある。田中王堂氏は嘗て現代に於ける人類解放の三使徒を紹介して、「ジエエムスは心理學的に人の心のはたらき振りを發見することに依つて、人間を解放した。ペエタアは審美的に、藝術的に、道德の壓制から色彩の鑑賞を救ひ出すことに依つて、人間を解放した。サンタヤナの仕事は、是等よりも、更らに大なる、そして、更らに崇高なものであつた。彼れは、個人の經驗と、社會の活動とを通して、如何に衝動が理想となり、如何に理想が機關となり、最後に到つて、如何に機關が變化し、發展するかを示すと同時に、是等は、總べて、人間の理性が永久におのれの完成を求め行く經過に過ぎないことを示すことに依つて、人間を解放したのである」とサンタヤナを激賞したが、私は次ぎに彼の個人觀及び社會觀を齎らし、終始成るべくサンタヤナ自身の言葉に忠實にして讀者に親しみたいと思ふ。

五

事物の起原に混沌があつたか或は序次があつたかは、以前、哲學の諸學派に於いて隨分論議せられた問題であつたが、その後暫く中止の姿であつた。これは問題が解決せられたといふよりも、寧ろ、混沌說を主張する方面の人々が一時敎權と社會との壓迫によつて沈默せしめられたからである。夫故に、この問題は自然の觀察と思辨の飛翔とが再び自由になる時代に遭遇する每に、新たに繰り返さるゝ運命を持つてゐる。而して自然主義者は凡ゆる事物の生成の特長を變遷に認め、今日世界に建設せられてる序次がその未だ現はれなかつた混沌狀態に歸せらるべきを力說し、思辨哲學者は事物の變遷の中に一定の法則を認め、世界の序次が常に正確に存在してゐることを强調する。然しながら是等の二大見解は、一見甚だ相反するが如くに見ゆる

にも拘はらず、其處には恐らく和解の餘地が見出さるゝであらう。則ち、若し自然主義者が混沌をば人間の生命及び思想に對して何等親しい關係を持たぬ自然と解するならば、今日ですら宇宙の遠い奥の方には混沌の支配してゐる部分があるように思はれる、そしてこれには如何に極端な思辨哲學者も同意を表するであらう。又若し思辨哲學者が序次をば吾等が住んでゐるとの自然界に於けるその運動の傾向と作用と生物の官覺と理性とを說明するために必然的に假定せらるゝものと解するならば、强ち固定的にして無力無關心なる絕對的序次を神化し形而上學化する必要がなくなり、宇宙間の特殊の事物はその相對的關係に於いてのみ宇宙を善とし、宇宙は同じくその相對的關係に於いてのみ特殊の事物を善とするように理解せらるることになると思はれる。そしてこれには如何に極端な自然主義者も反對を唱へぬであらう。

吾等の生ける人生は、謂はゞ、この混沌と序次との相對的交錯の經驗より成るものである。人の意識は彼の運命に密着してゐるもので、恰も寒暖計の如くに彼の運命の溫度を指示し、又、出來る限りに於いて、彼の運命の依存してゐる動因を表現するものである。而して意識のこの作用が充分に滿たされなかつた時に、意識は全然混亂し、從つて世界が混沌となつて來るのである。然しながら、後に至つて、若し經驗が或る形を備へるようになり、人間心意の作用するところに一定の範疇と對象とが見出さるゝようになれば、事物の最初からの性癖も亦序次的であり、且爾來成就せられた本能と理智との功績を機械的に招致するようなものであるといふ推定が生ずる。起原とか價値とか自然法とかの學說はかくの如くにして構成せられ、總て種々の事物の生起に照して確認せらるゝのである。然るに是處に注意せねばならぬ一事は、過去に關して肯定せられたことは過去がそれ自身に調製して吾等の上に課した報告ではない。報告には相違ないが、それは吾等が現在の經驗に基づく合理理的建設である。それだから不注意なものに對しては何等の力をも持たず、無知なものに對しては何等の存在をも持たぬものである。然らば假に宇宙は混沌から出て來なかつたとしても、人間の經驗は確かに自分の一私的なそして夢想的な混沌に始まつたもので、この混沌から猶僅かに部分的に且一時的に出て來たに過ぎぬものである。勿論、かくの如き分離の歷史は究極に於いて發見せらるゝ環境世界のそれとは同一でないが、發見そのものゝ歷史であり、これなければ世界は到底人間に解らないといふ知識そのものの歷史である。從つて吾人は今理性の出生及び發育の跡を辿るに當つて、實在的な宇宙序次とか自然とか絕對とか神と

かいふものに向つて早くから豫備的に敬意を表して置かずともよいのである。

理性の生るゝや、そが後に至つて發見したように、既に驚くべき程度にまで組織せられた世界の中に現はるゝので、その先驅者は所謂生命であり、その座所は異常な彈力性を持つてゐる有機體で、そしてその職能にこの有機體の輕快な本能と感覺とを相互に調和せしめ、且之等をして外界に適應せしむることである。

吾人は、矢張、ヘーラクライトスの所謂流動から出發せねばならぬが、理性の種子はこの自然の流動の中に潜んでゐるといはねばならぬ。この流動それ自身が、謂はゞ、混亂の中から理性に於ける平衡を求め、その結果或る種の理想的恒常の影を認むるに至るのである。而してこの流動が如何にかして渦をつくり、呼吸と營養とによつて所謂生命を維持するようになる時に、思想のために輕微ながらも足場と對象とを供給し、そして或る程度まで永久なるものゝ、移動的住居となるのである。生命は、亦、其處に或る一定の生くるものと或る一種の生くる目的となるものとがある時に、直ぐその價値と持續性とを具備し始めるのである。

フィヒテやシヨーペンハウエルが意志の優位性を高調したのは、恐らく、生命の右の事態を神話的に指示したものであらう。然し吾人は、彼等が考へたように、意志の撰擇が單なる觀念から演繹せらるゝものとは思はない、何者如何なる興味でも事物の形式的關係の中に含まれてゐるものはないからである。凡べての觀測は專斷的な出發點を要し、凡べての價値測定は不合理的な偏執に倚るものである。この專斷的な出發點と不合理的な偏執とが吾等の肉體をば一定の情欲をもつて鼓舞し、外界からの特殊な刺撃に服從せしめる―これが凡べての觀察と推理、失敗と成功の首要條件である。而してこの事態は上下寒暑快不快善惡等の理想的にして相對的な二元雙對を、流動が渦いてその運動に於ける各部分と方向との區別を可能とするところに、生ずるのである。かゝる裡に、最初は、嬰兒が母の乳房を探す時のように、本能の摸索のみを見るが、實驗によつて阻碍せらるゝ衝動と衝動によつて再び判斷せらるゝ實驗との交錯はかの本能を核心とする吾等の生活を嚮導して、曩に私がサンタヤナの「理性生活」の意義を明らかにした時に指摘したように、軈て反省の生活に進展するのである。

六

人が官覺の中に浸つてることを止めて前後を見るようになると、自然の發見と統一といふ驚嘆すべき事業を成就するのである

る。

由來、自然は人の住む家である。人は自然の住民として以外に意想出來ぬものである。この家の中にあつて、人の反省がかの混沌的經驗の總觀に轉じ、眼前に去來する事物の反覆の姿を常規的に整頓せむとする時に、反省は必ず力學的にして他に依存せざるものゝ方向に向ひ、その結果はデーモクリトスの機械的科學に奏功するに至る。然るに反省は、他方、事物の本性を意想せむとするもので、この場合には必ず觀念の方向に向ひ、その結果はソークラテースの存在の論理に奏功するに至る。則ち、反省に於いて、吾人は事物にその反覆を常規化するために獨自性を歸し、その組成を常規化するために本質を歸する。而して獨自性は究竟的には物的過程に於いて假定せらるゝ恒常で、本質は論說に於ける觀念的意義に於いて假定せらるゝ恒常である。一は對象の系統的分配を標示し、他はその定著的性格を標示するのである。

反省に於いて、吾人の知性は屢々探險を敢へてする、吾人は知覺の反覆を云爲するけれども、物的に思考して見るに、反覆せらるる知覺といふものはない筈である。各知覺は一定の連鎖の一つで、永久的にその連鎖に於けるその地位と數位とを保持するものである。然しながら、普通に凡ゆる官覺與件は直ちに飢ゑてる知性に暴食嚥下せられ、相互に類似したものに同化せらるるものである。故に、その結果、普通記憶に殘るものは特殊の瞬間に於ける刺擊の代表者ではなくて、寧ろその論理的所有、即ち、知識の意識である。而して人間は、天生プラトーン的な動物で、知性のかゝる暴食の間に、自然の理想的目標に觸れるものである。さりながら、この理想的目標は暴食者が時に見る白夢の如きものでないことを斷つて置かねばならぬ。

凡ての實在的對象が共に同一の空間に備はるといふことは、既に、餘程プラトーン的の意想である。然もこれは未だ自然の表現に於ける初步であつて、猶其處にはかゝる自然を意想するその行爲によつて自然と所を並べて或は寧ろ自然の懷の中に現はるゝ心的なるものが同樣に表現せらるゝことを待つてゐるのを見逃してはならぬ。心的なるものとは、サンタヤナに從へば、かの存在の設計と單なる事實とを意味する超絶的のものでなくて、動物の肉體に住みそして心理學で研究せらるゝ一定の存在形式たる心意を指すのである。この意味に於ける心意は、宇宙から物的世界が切り離された時に殘される、謂はば、存在の殘滓である。吾人は、最初、自然を神話的に意想する間、隨分理解し難い動物の單獨習慣をも多く把持するけれども。總て注意が覺醒し識別し實際的に確實安固になつて來ると、自ら機械

的にして不變的序次のみを保留して、その他の部分を心的なるものと稱して自然の圏外に置かむとするものである。夫故に、心的世界は物的世界に比して、何か幽靈見たいなもの丶如くに誤解せられる、が然しこの物的世界が既に、智性の暴食と人間のプラトーン的氣質との故をもつて、人間の思想と實踐とに適するような形に、經驗の或る一部が完成せられたものなのであるから、物的世界の觀念がつくられたその原本の物的世界の元質と吾等が心意の元質とは連結してゐるものである。これ心物兩世界の共通實體は直接流動だからである。

されば自然の統一は既存の事實ではなくて、倦まざる思想によつてのみ將來に期せらるべきものである。サンタヤナが自然の發見と統一とに關して、古來の哲學者の自然觀及び認識論に切實なる批判を加へつ丶自らの見解を達成するところは、蓋し、彼の「理性の生活」第一卷に於ける偉觀の一であるが、紙幅の制限から此處にはこれを割愛せねばならぬ。

七

吾等が通常經驗を仔細に檢察して見ると、其處には自然と普通に稱せらる丶もの丶他にもう一つの背景がある。機械論の徹底する科學をもつてしては到底包容し切れない、謂はば、エピソードがある。この幾多のエピソードを相互に關係づける必要がなかつたら、今日の科學はそのま丶それを表現してゐる科學的思想と同一視せられてよからう。然るに現今の科學的學說は僅かに人生に散在する數瞬間と連結するだけで、それ自身が此處に謂ふところのエピソードの一つにして、それも最後のそして最小のものに過ぎないのである。か丶る事態に處して、吾人にエピソードとエピソードとを結合するといふが如き觀念の起るそのことが、世の中の吾等が同胞心意の實在するを物語つてゐるのではなからうか。

同胞心意の發見は、思ふに、相互に同樣の存在者が同樣の生活をしつ丶、共通の習慣と技巧との接觸傳染によつて相互に自身の經驗から他人の現に經驗してゐるところと相通ずることの可能なる社會にある。故に動作と形體との間の類比が同胞心意の存在に關する妥當的推理の證據である、けれども、勿論、これは吾人が同胞心意を豫想するに至る原因を說明するものではない。吾人が他のものに歸するところのものは、終始、吾人が直接に感じたるもの、卽ち、他のもの丶動作が吾等に暗示したところのものである。よしこの暗示せられたものが夢であるにもせよ、夢は夢のま丶、無批判的にこれをその他のものに歸するのである。かくて吾人は屢々誤謬に陷るが、單一の場合に於

いてのみ、如上の夢がその歸せられたる他のものが現に見つゝある夢と全く同一である。而してこの單一の場合とは、則ち、他のものが自分と形體の構成に於いても又動作に於いても全く同樣である時を指すのである。かくの如きが理解し得る表象と眞實なる交通との條件である、この制限を越えて可能なるはたゞ神話と隱喩とである。

八

サンタヤナの個人常識觀を少しく叮嚀に紹介せむとするものは、これより直ちに「物」「心」の相對的價値、思想エンテレキー論、反省に於ける價値測定、及び理想の抽象的條件等の解説を試みねばならぬ。然し之等は多少專門的に走る懸念もあるし、又紙幅の制限も顧慮しなければならぬから、此處には之等の凡べてを割愛することゝして、此處にはたゞ人性の恒常に僅かに言及するに止めて置きたいと思ふ。

人間の進歩は變化よりも寧ろ把握にある。把握することの弱い人生は小兒と野蠻人とのそれである、これに反して成人と文明人との人生は把握力強く、環境に馴致して新習慣をよくつくり、而もこれを核心に横はる本能に接いで一層大なる滿足を實現するのである。人生が幾代續いたところで、若し最初に存在した或る理想が次ぎから次ぎへ引き繼がれて絶えず實現せられるのでなければ、即ち、人生の核心に於ける安定把握がなければ、如何にしても進歩を認めることは出來ない。

サンタヤナは人性を大略次ぎの如く定義してゐる。人性はその核心として一般自然の實體を有する、その一層複雜した形の一つである。その決定は進歩である。その歴史的表現は無限の變化を示し、その消失するところを見るに、これを單に博物學の見地よりすれば、最早人間と稱せられ得ぬものとなる。如何なる瞬間に於いてもそは一定の決定的エンテレキー、即ち、彼の本能に基礎づけられ、彼の品性に於いて總括せられ、彼の反省に於いて焼點に當て篏められ、而して彼が有する有機組織の域に既に達したるもの或はこれを嗣ぐものによつて享有せらるゝ彼が生命の理想を持つてる。彼が知覺及び推理の機能は人性の部分として彼の中に體現せらるゝもので、信仰或は欲望の凡べての對象は、彼が承認し得べき正義と職分との凡べての標準と共に、人性の臓本で、人性によつて條件づけられ、且人性の天生的傾向の表象としてのみ正しとせらるゝものである。人性に關するこの定義は、サンタヤナも指摘してゐるように、それ自身において明瞭的確であり得且諸ろの事實に對して眞實であり得るも、そして恐らくは讀者をして彼がこの定義に達する道程の

如何に長くその手段の如何に係いなるかを想像せしめ得るも、未だ「理想生活」が自然的根據の上で理想の世界に創造的にして絶對的な權威を有するかを充が明白にしてゐない。吾人は今やサンタヤナの社會觀に就いて、彼が人生とその合理的職能に如何なる一般的描寫を與へ、そが社會の諸制度に發展して自らの完成を具體的に期する有樣を如何に說明するかを見るべく急がねばならぬ。

九

人間が天使の如きものであるならばいざ知らず、彼が動物であり、自然の流動の一部分である以上、彼の天性は移動的中心を有し、彼の職能は外部的參照を待ち、彼の理想は眞實の理想性を持つものである。而して若し彼の存在に缺くべからざる均衡が何時までも安定なるものならば、營養も生殖も官覺も要せぬであらう。然しながら吾人の存在が現在のまゝでは、官覺が絶えず彼の觀念を新たにして本能をその向ふところに助勢し、營養と生殖とが彼の實體の不斷に消費せらるゝところを補つて行かねばならぬ。

營養と生殖との二を個々の自己意義の見地より見れば、若し肉體の營養が缺くるならばその凡ゆる機能が枯渴するが故に、營養の方が根本的である。然しながら、科學者や哲學者のすべきように、この事態を少し離れて上から見れば、肉體は、謂はゞ、不死の靈魂が宿る家の如きもので、營養は既に存在してゐる靈魂に有用であるが、生殖は未だ存在せざる靈魂に奉仕するものである。かく生殖は生命の發意で、常に生命の核心に止まり、畢竟するに人間の凡べての機能は生殖なければ終ひに不可能となるのである。營養が自己の榮光を求める間に、生殖は自己の遺言狀に捺印して相續者に渡すのである。

戀愛の根據は生殖機能である。この根據を無視して、戀愛の理想的方面のみを高調するは無益である。生殖機關の進化は博物學の問題であるが、生殖作用が性的になつたといふだけでは、若しそれが異性兩體の抱合を要しなければ、戀愛の根據とはならぬ。この動物的戀愛は、禽獸には吾等に通ずる言語がないから解からぬが、人間に於いてすら、この種の戀愛は屢々幾多の人々の自叙傳に於ける唯一の美しい頁である。

戀愛の環境としては、美容と驚異的快樂と社交的同情及び道德的符號とが數へられるであらう。然し之等のものは戀愛の核心をなすものではない、其處には奥底に默してゐる本能的親和性が到底表白し難い程度に心胸に燃ゆる情熱を捉へてゐる。古來プラトーンの流を汲んだ詩人哲學者等が單に戀愛の理想的方

面のみを強調し、他方獣欲主義者がプラトーン的戀愛の面皮を剥ぐをもつて職務とするに、之等の二方面が相互に矛盾するものと思考せられたからであらう。吾人はサンタヤナに於いて、戀愛の自然的根據と共にその對象の理想的方面（この方面の紹介は略す）の代辯者を見出すのである。

戀愛は人生の序幕に過ぎない、人生の本筋の如何なるものなるかを象徴してゐるが、それは未だ實質とはなつてゐない。情慾は所有と同棲とに落ち付き、快樂は常習となる。而して戀半ばは神秘にして半ばは玩具なる小供が生れて、吾人が如何なることを爲せしかを示し、且その結果を永續的ならしむるのである。かくて家族は自發的に形成せらるゝのである。

小供の幼年期の長いことが、次ぎに、兩親に育兒の職能を賦與した。猶又吾人は自らの相續者が既に世に出でたるを見て、吾人は彼に地位を與へ、且彼をして吾人が實現せむとして失敗したる希望を成就せしめむと望むに至るのである。其處で家族には種々の偶生的職能が加はつて來るのである。由來、人生は實驗的なもので、何にても或る必要缺くことの出來ない職能を遂行するものは往々にして多くの新しい實驗に對する出發點に安全な核心を提供するものである。その如く家族は種族永續に貢獻するその本來の職能を果してゐる間に、多くの制度の出發點となつた。例へば、文明國に於いては、夫婦の同棲は單に戀愛と育兒との必要期間だけに止まらず、之等の機能が滿足に果された後までも一生涯續くのが常である。夫婦の同棲は普通共同の住居、宗教と而して屢々共同の友誼及び財産所有を含むものである。又、家族は、羅馬に於けるが如く、小供の解放を殆んど無限に延期して、財産及び宗教に於ける家長制度を實現することもある。又、家族は往々にして産業的單位となり、殆んど凡ての必須品が家庭經濟の下に生産せらるゝこともある。

今日家族制度の改良を叫ぶものが漸く多くなつて來たようであるが、その改善が改善を意味する以上、サンタヤナに從へば、そは第一に生殖の機能を完成するものでなければならぬ、第二に自然の情慾と合理的の育兒と道德的自由とを保證するものでなければならぬ。

一〇

吾人は家族が單なる戀愛と育兒との域を越えて、經濟的單位を構成するものなるを見たが、嫡子ならざる多數の小供等が奴隷となり、その他にも奴隷が養はれ、それに家畜を加へると、

家族が家長の己が部族を率ゆる宛然たる所領と化する。而してかゝる部族が或る一定の土地に定着して豐かな收獲ある農業を營む時に、國家をつくるのである。人口と從つて必須品の增加は一の部族をして近隣の部族を襲撃せしめる、そしてこの襲撃は戰爭を意味し、戰爭は陸軍と將軍とを意味し、野外の戰爭は部族内に常備軍を必要とし、其處に法官と僧侶と醫師と奴隷とが要せらるゝのである。プラトーンの古典的說明を待つまでもなく、これが所謂文明の起首である。

　文明に少くとも三大利益がある、その一はヨリ大なる富、その二はヨリ大なる安全、その三はヨリ大なる經驗の變化である。吾等の「理性生活」にとつて、文明は必要な條件である。「理性生活」は自然の生活には相違ないが、人間の官能を擴張し心意の範圍を擴充せずに營むことの出來ないものである。而して若し吾人の記憶と目的とが常に增大し、生活の確實な技巧が本能と夢とに附加せらるべきものとせば、富と安全と經驗の變化とは凡べて吾人に要せらるゝものである。

　吾等は今サンタヤナの提唱せる「自由社會」を紹介する途上にある。產業及び戰爭に關しては、たゞ僅かに瞥見を殘すに止めて置かねばならぬ。

　サンタヤナは富の生產をもつて任ずる產業を目して、その生產する富が「理性生活」者に幸福を保證する限りに於いてその存在理由を承認するのである。故に彼は勞働の勞役に終るを許さない、人間を器械視する產業を暴君として斥け、飽くまで吾人が產業に從事する勞働が遊戲の基礎となるべきを主張する。

　勞働と遊戲との關係を單に進化論的に觀察するならば、前者は生命に對する必然的にして有用なる凡べての動作を意味し、後者は生命にとつて無用なる活動、即ち、生命の進展の過程に於いて急迫的に要求せられないところの力を放出せむとする生理的衝動から生ずる凡べての運動を意味する。若し勞働と遊戲とがかく客觀的に判然と區別せらるゝものならば、勞働は祝福すべきもの、遊戲は貶黜すべきものであらう。何者吾等の力は少しも無駄がなく役立てられて、決して目的のない運動に消費せらるゝことのない方が遙かに望ましいことだからである。

　若し、進化論者のいふが如く、遊戲が人生の無用なる修飾として人類進化の過程の何れかの時期に破棄せらるゝものとせば、進化とは人生を豐裕ならしめずして、却つてこれを甚だ貧弱ならしむるものではなからうか。吾人の「理性生活」は、一方、齷齪として些少の閑日月すらも持たぬ現今の產業的勞働を排し、他方、よし寄生的でもよいから、かの想像的な自發的な

遊戯が進化の中に永久に生き殘ることを冀ふのである。想像的な自發的なそして歡喜に滿ち溢れてるものをば、進化の過程に於ける落伍者たるべき運命を持てるものとして斥けて了ふことは、これ全く人生の内容に徹底しない無頓着極まる無批判的な態度を裏切るものといはなければならぬ。有用とか無用とかいふことは、假定せられた功利のためになされたものに對して下さるゝ致命的求刑である。けれどもそれ自身のために爲されたものはそれ自身がそれ自身の存在理由である。而して眞の遊戯は後者に屬するものである。

眞の遊戯とは、サンタヤナに從へば、外部的功利の有無を顧慮せずに、自由に自發的に想像的にそしてそれ自身のために爲される人生の活動を指すのである。遊戯はこの意味に於いては、最早進化の過程に於ける外部的必然性或は環境の壓威等によつて促迫せられて爲さねばならぬ勞働を超越するもので、進化は却つて外部的刺戟或は抑制によつて餘儀なくせしめらるゝ勞働を廢除して、自由な自發的なそして撞着と摩擦とのない滑かな遊戯を容易ならしむる傾向を具有してゐる、則ち、單に苦痛と死とを避けむがため人をして屢々冷酷なる内外環境の奴隸たらしむる勞働は、「理性生活」においては、總て醇化せられ變容せられて遊戯になるべきものである。其處に進化の莊嚴があり、文明の進展があり、人生の幸福があるのである。

サンタヤナの戰爭觀は、彼の「兵營哲學」と題する一章に明らかである。彼に從へば、爭鬪性は人間の本能である。故に人は、正直に告白すれば、戰爭を愛する。戰爭は實に花々しく興味あるスペクタクルである、國民の歷史に轉捩點を提供し、それが勝利者の場合には、國民の心臟に狂喜的活躍を與ふるものである。又戰爭の機關たる兵備は國家の文化を野蠻民の襲撃から防禦するものであり、兵營生活は立派な從順てふ德性の生長する温室である。然しながら、見よ、戰爭の慘禍を。戰爭は國富を浪費し、産業を阻遏し、國民の精華を殺し、國際的同情心を枯死せしめ、時に獸的冒險者をして文化を蹂躙せしめ、非愛國的にして多くは不具なる戰敗者をして次代の國民を生ましめる。されば戰爭を目して勇氣なる美德の温室といふは、サンタヤナの言つたように、恰も多淫を目して神聖なる戀愛の温室といふが如きものである。

而して此處に一つの問題が生ずる。人間天性の爭鬪的本能は之を如何にするか。吾人は「理性生活」を營むに當つて、これを殺して了つてはならぬ。却つてこれを他の諸本能と均衡を保たしめ、一の方向を好戰的なるものより他の文明的競技（スポート）に轉せし

むるところに吾等の求むる「理性生活」がある。何者、競技に於いて、人は戰爭に於けるが如く他を征服せむがために有力たらむとはせずして、ただ自らの優秀なるを欲するがためにその優秀なるを誇せむとするからである。かくして吾人は天性の爭鬪的本能性を肉的に滿足せしめ、同時に「理性生活」を營むことが出來るのである。

二

サンタヤナの提唱せる「自由社會」を検察する前に、私は讀者の前に一應彼のデモクラシー觀を簡單に解說して置く必要を認める。

デモクラシーを論ずるに當つて、吾人は先づ社會的デモクラシーと政治的デモクラシーとを區別せねばならぬ。發生の上からいふと、社會的デモクラシーは原始的で、一般的競爭と個人的優越者とのない社會に自ら生ずるもので、自然的にして社會的の平等を主張するものである。かくの如き社會は同時にデモクラティックの政治を持つてると言はれ得る、否、寧ろデモクラティックの政治の中で最もデモクラティックなもの、卽ち何等の政治をも持たないものである。然しながら四圍の危險と內部の鬪爭との壓迫が社會的デモクラシーに對して嚴然たる指導を長く必要とする時に、その政治のとる形式は選擧か或は一般的同意かによつて採用せれる、原本的モナーキである。これがアリストクラシーに進展するは普通自然のことである。他方、政治的デモクラシーは權力が多かれ少かれ直接人民の手にあるを主張する立憲政治で、發生の上からいふと、社會的デモクラシーよりも後世の生産物で、人巧的なものである。則ち、そはアリストクラティックな特權が、その濫用に對する人民側の抗議に面して、次第に延長せらるるところに生ずる。その原則は優越者の缺損ではなくて、現存する優越者が最早純粹の代表者でないことの發見である。そは隨分複雜した政體とも、大帝國とも、アリストクラティックな社會とも相容るゝものである。何者、デモクラティックな政治の下に、人民は國家を創造したのではなくして、單にこれを統禦するのだからである。

次ぎに理想の點からいつても、社會的デモクラシーと政治的デモクラシーとの間には著しい差異がある。前者は一般的な倫理の理想で、人間の平等と四海同胞とを目がけ、家族及び世襲財産等の制度と相容れざるものである。後者は、これに反して、目的に達するまでの單なる方便で、或る時局に處する或る國家のヨリ良くヨリ滑らかな政治に對する便法である。そは何等人生の特殊な理想を含むものでない、政策の問題である、則ち、

凡べての男子に（恐らくは凡べての女子にも）選擧に於ける平等の發言權を與ふることが一般的利益によリ良く奉仕するか否かの問題である。何者、政治的デモクラシーは、大きなそして、複雜した國家にあつて、必然的に代議政治であらねばならず、且人民の前に提出せらるゝ問題は主として粗大なる一般的政治策か或は政黨內閣の信認問題だからである。

右に於いて明らかなる如く、社會的デモクラシーは英雄のなかつた原始的平等の社會に根ざす理想で、政治的デモクラシーは英雄の特權の濫用に乘じて、これを一般凡人に延長する人巧的平等である。英雄は、普通に、代表的でないとせらるゝが、これは誤れるデモクラシーの學說で、代表的ならざる優越は優越にならないし、優越とは元來總合的にして、その總合するところのものを代表するのが英雄ではないか。政府は普通選擧といふ機械的便法でその政府員が全部選まれたからとて必ずしも代表的とは言はれない。そはその政策の中に人民の意識的或は無意識的の利害關係を體現することによつてのみ代表的となることが出來るのである。故に、英雄を除外して眞のデモクラシーは望み得ないのである。勿論、吾人は在來のセオクラシーやモナーキーやオリガーキーが人民の代表的政治でなかつたことと、從つて、一般的の幸福を確保することに失敗を重ねて來たのを認むるに吝かなるものではない、けれども、亦、今日流行のデモクラシーが餘りに產業的色彩に富んで、デモクラシーの市民は凡べて勞働者でなければならぬといひ、且彼等の指導者ですら、純正のデモクラシーに於いては、勞働者の階級から出でて同一階級の他の人々と同一の教育と習慣とを有するものでなければならぬといふのに對して、無造作に同意するに躊躇するものである。何者、かゝる主張は今日の文明を原始時代のそれに引き下げむとするからである、文化の標準を「理性生活」以下の水準に低落せしむるからである、英雄を駆逐して凡庸が跳梁するからである。「理性生活」を無視した物質的デモクラシーの恐怖があるからである。

故に、若し高貴にして文明なるデモクラシーが存在するとせば、その時には、普通市民が何處か英雄の素質を具備したものでなければならぬ。而してこれは原始的なる社會的デモクラシーに見出すことが出來ず、又單なる方便に過ぎざる政治的デモクラシーにも期することが出來ぬものである。これサンタヤナの所謂「自由社會（フリーソサイティ）」の提唱ある所以である。

二

結婚といひ、家族といひ、產業といひ、政治といひ、戰爭とい

ふも、之等は皆時間と空間との中で生活する人間の自然的及び形體的なる運命に對する關心である。其處には何時でも理想に對する自然の優位がある。而してこの自然の優位は、或る意味に於いて、終りまで續く、何者理想は凡べて何ものかの理想（或は精神）としてゞなければならず、又理性は何か物的の組織體が下に横はつてゐて思想にその場合と見地とを供へ選擇にその方向を與へることがなかつたら到底意想し難いからである。然しながら、同時に、自然的及び形體的（それが個人的にせよ或は社會的にせよ）の生長は、そが吾人の歡喜あり自由ある經驗を支持することによつて始めて進歩達成であり得る方面を忘れてはならない。自然の働きはそが喚起する、謂はゞ、傍註の中にその本意を見出すものである、機械的過程の絶頂はそを表象する生命の見地よりのみ興味があるものである、自然の價値はその生じた理想が既往に遡つて自然に歸したものである、故に理想はその物的依存の中に自らの論理的及び道德的優位を具備してゐることを忘はれてはならぬ。かくて「理想生活」は世界を支配し、その上に絶對的の權威を把握するように運命づけられてゐるのである、何者そは社會の有機的均衡が自然の世界に建設せられたところに於いて可能な理想の生活だからである。是處にサンタヤナが「理性生活」提唱の當然の歸結として、デモクラシーの上に「自由社會」を唱導する理由が見出さるゝのである。

自由社會が自然的にして立法的なる社會と異なる點は、そが究極に於いて物的な關係を涵養せずして、專ら精神的意味に於ける一致と理想に於ける共働とに轉ずるところにある。自由社會の根據が自然であるは既に言つた通りであるが、自由社會は明からに理想的目標を有し、理想は共同一致によらざれば到底觸れ得ないことを主張するものである。而してこの世の偶發的關係より起つて總て理想的にして本質的な共同一致に終るものを、吾人は友誼（フレンドシップ）の中に見出すことが出來る。

友誼は元來偶然的のもので、郷里を同じくするとか、同じ職業を共に勵むとかいふような同僚間の好誼から生ずるものである。然しながらこの環境に支配せらるゝ同僚の好誼と稱するものが友誼に轉ずる時に、恰も凡べての理想が偶發的自然自らの理想的進展である如く、後者は前者が理想的に進展して自らをその理想の中に承認したものである。されば友誼の外的條件として吾人は同性とか同齡とかを數へ得るであらうが、凡べてかくの如きものは未だ友誼の積極的本質を形成するものではない。

友誼の本質は友が友に己れ自身を與ふることでなければなら

ぬ。而して若し友誼がかくして吾人がそれ自身の故に愛するものゝ理想的所有に至らないならば、友誼は友誼でなく、到底自由社會の樣式たり得ないのである。かゝる友誼の生ずるには、第一に、個人間の肉と血とが齎つた親しみから始まらねばならぬ、第二に、相互の個性的同情と道德的評價とが充分に強くなつて自然の本能に反動し、今まで缺けてゐた友情を喚起せねばならぬ、第三に、互ひに見交はす眼が理想的同情を屈折する仲介でなければならぬが、又同時にこの仲介は私情を棄てた透明なものでなければならぬ、而して第四に、相互の間に共同理想が輝いて來なければならぬ。この最後の階段に達すると、二人は共同理想の下に各々が己れ自身を他のものに與へて、一向共に理想の體現に共働することの中に無上の幸福を見出すのである、かゝる生活を實現することになると、吾人は同じ社會に現存する優越者を崇拜することを啟めて、その優秀者と共に理想的な英雄崇拜に徹底するに至るのである。則ち、理想的に英雄と神とを創造するに至るのである。

優良なる政治はその市民に如上の友誼を保護するものでなければならぬ。若しデモクラシイーがこの點に於いて失敗するならば、それは徒らに市民の凡庸化と勞働者崇拜論とに終つて、少しも文化の向上に貢獻するところがないであらう。眞正のデモクラシイーは、實に「自由社會」の實現によつて、その使命を全うするものといはねばならぬ。デモクラシイーは未だ社會の自然的階級にあるもので、その職能は個人を生じて、彼に裝ふに道德的自由の準備をもつてするにある。この準備が成つた時に、社會は友誼と一致と私慾を離れた同情との「自由社會」に上り得るのである。而してこの自由社會の內容と活動とに至つては、自由社會の理想的興味が全然吾人の心靈を支配する宗教と藝術と科學とであるが、この方面に於いて吾人の「理性生活」が如何なる程度まで盛んに可能なるかはまた他日の紹介に讓らねばならぬ。

支那に於ける日英米三國の關係

法學博士　堀江歸一

三國は經濟上の敵國なり

日英米の三國は支那に對する外交政策として、門戶開放、機會均等を主義とすることは、從來機會ある毎に、三國夫れぐの當局者に依て、聲明された所であつて、此點に於ては、三國の政策は其根、柢に於て、一致して居るのである。隨て三國は常に提携協調して、自分の國の利益を謀ると共に、支那の利益に貢献するかと云へば、決してさうではなく、彼等の間には、暗闘もあれば、公爭もあり、之に支那の官民が加はつて、常に支那全省到る所に於て權勢の消長を生じつゝあるのである。

歐洲戰爭の永引くに隨ひ、歐米交戰諸國が支那に政治上なり、經濟上なり、力を伸すことの出來なかつた時に乘じて、日本が其支那に有する地歩を鞏固にしたことは爭う可からざる事實である。試に貿易の一點に就て、開戰前と開戰後との變動を見ると、千九百十三年支那と英國との輸出入は六、合衆國との輸出入は一、日本との輸出入は二、七の割合であつたが、千九百十七年には、合衆國の一に對して、英吉利は二、二であり、日本は二、一である。而して英國の貿易額には香港の輸出入も加算されて居るのであるから、純粹の英支貿易だけを勘定したならば、英國は貿易に於て、日本に凌駕されてる事實である。又之を實際の狀況に就て云つても、揚子江沿岸は英國經濟上の權力範圍であるから、他國の覬覦を許さないと云つた所で、昔の思出を述懷するのに過ぎない譯であつて、近年はドン／＼日本の競爭を蒙つて居る一方に、滿洲の方面に於ては、日本が盛に勢力を扶植し、蒙古方面にも其手を伸ばさんとして居る。斯くて英國既存の勢力が日本に侵されるのは勿論合衆國の如きも其新興の勢力を發展させることが出來なかつたのである。現に歐洲戰爭中、支那が外國に借欵を起せば、其對手は必ず日本であつて、英米の資本家の如きは、單に自國の戰時財政上の要求に應ずるだけで、支那に財力を及ぼして、日本と競爭するの餘地はなかつたのである。

寺内内閣の對支借款政策に就ては、今日に至るまで種々の議論はあるが、支那が今日外國に求める所は實に財政救援の事であつて、而して支那の財政を救援するには、借款の外に、策の見る可きものはないのである。随て支那に借款の便を與へて與れる國さへあれば、支那は必ず其國と親善することを辭さない。私は大正六年十月から十二月に至る三個月間北京に滯在して居つたが、今日から見れば、此時こそ所謂日支親善の最高潮に達した時代であつて、大隈内閣の對支要求に對する怨恨や、之に伴つて生じたボイコツト騒などは、全然國民の脳裡から取去られ、一にも日本、二にも日本と云ふ状況であり、又日本は随分對支借款の求に應じ、借款の成立すると共に、日本の勢力の支那に伸張したのは、爭ふ可からざる事實であつた。

當時英米兩國は斯る日支の關係に對して、如何なる感を懐いたであらうか。ジョルダンにしろ、ラインシュにしろ、夫れ〳〵内閣の訓勢を背後に控へて、支那に臨んでは居たが、何分にも本國は戰爭に忙はしく、他を顧みるの餘地がないと云つたならば、日支の關係に對抗するだけの方策を施すことは出來ないのは勿論であつて、随て兩國共に傍觀的態度を取つて居つたものゝ、心中に於ては他日を期して居つたものと想像される。然るに今や時運は一轉し、又世轉し、講和會議に續いて青島還附問題が起り、日貨排斥から、曹汝霖、陸宗輿等親日派の失脚と爲り、米國財主アボツトの支那漫遊の後を承けて、對支借款團組織の問題を生ずると云ふ風に、殆ど走馬燈然たる變動に接しつゝある其間に於て、日本の對支關係が從前と趣の異なつて來たのは明白の事實である。上記の事實の起つたことに對して、英米兩國は如何なる程度まで關係を持つて居るか、例へば日貨排斥にしても、英米兩國の商賈人が影武者と爲つて、支那人を煽動し、歐洲戰時に擴張された日本の商權に一撃を加へやうとする考から來て居るものと想像しなければならぬ。

英米兩國の對支經濟的根據

英國は千九百十七年に於て、香港貿易を加へて、支那に對する輸出は一億四千百九十三萬兩、支那よりの輸入は一億一千[illegible]十九萬兩、合計二億五千二百五十二萬兩で、日本の輸出入三億二千七百四十三萬兩と略ぼ伯仲の間に在るが、是れは戰爭の爲めに生じた一時の變態であつて、何分にも多年に亘つて、英國が支那に扶殖した勢力には根抵の動かす可からざるものがある。本國の經濟界が戰後に於て次第に恢復し、印度洋から東洋方面にかけての航路も恢復すれば、内國の資金も次第に支那に注入される、對支借款にも英國が加入すると云ふ状態と爲つたならば、各地方に根據を構へて居る英國の勢力に一陽來復の

趣を生ずるのは勿論であつて、日本との競爭は次第に劇烈と爲ることを覺悟しなければならぬ。一體東洋殊に支那に居る英國人は本國に居る英國人に比較すると、品性の劣等であると云ふことが、天下の公評である。然し此品性の劣等なることが一面から云へば、支那人と結託したり、支那人を籠絡したりするに都合の好い所であり、又外國に對して、不法の競爭を敢てするに至る所以である。

合衆國は支那に向つて、經濟的發展を務行する程、充分な根據を持たぬ。先年ウヰルソン氏が例の正義振りを見せる爲めに、合衆國自ら對支借款團を脱退した一事は大なる失策であつて、借款團の改造を機會として、再び支那に財政上の關係を結び付け、他國財力の疲弊に乘じやうとして居るが如きは、醜態と云ふの外ない。然し合衆國が先年團匪事件の賠償金を免除して、其代りに支那人を自國に留學させて居ることや、自國の政府財團又は教會が協力して、支那の諸地方に教育機關や、病院を設立して居ることなどは、遠大の計畫には相違ないが、同時に支那人の腦裡に合衆國の親愛す可き國であるといふ觀念を吹き込むのに少なからぬ効果を及ぼしつゝあるのである。親米派と云ふ一團體は從來からもあり、時には頗る頼母しからぬ分子も這入つて居るが、本式に合衆國で教育され、思想から感情まで米國化した支那青年が夫れ〲米國の要地に就いた時には、立派な親米派の拔く可からざるもの丶出來る勢と爲るに相違ない。

日本の對支關係

日英米の三國は共に與國であるとか、對支方針に就て、根本の主義が一致して居るなどゝ云つた所で、支那に於ける三國の經濟上の競爭が緩和される可き譯のものではない。三國は今後火花を散して、競爭す可きであつて、殊に近頃英米支三國の間にA・B・C倶樂部と稱さる團體が出來たと云ふ報道などは自ら氣の弱い日本人の神經を刺戟させる次第である。然し日本として支那に今日まで扶植した勢力を維持し、又開發しやうとするならば、自ら相當の政策のある可き道理であつて、私は聊か左に其項目を擧げやうと思ふ。

一、日本は支那に對して、下らぬ領土上の野心を去つて仕舞う可きである。一方に借款に應じながら、他の一方に領土上の權利を得るなどは以ての外の心得違ひで、結局支那人の反感を招くに過ぎない。

二、支那に居る日本人は支那人に對して公正の考を持つことが必要である。支那人の短所ばかり見て、其長所を認めず、只管自家に從屬せしめやうとする風で、どうして日支親

を實現させ得るであらうか。

三、日本人は支那に向つて、教育なり、病院なり、無形の恩澤を施すことを工夫しなければならぬ。領土上の野心を退うする爲めに、軍事上の權力で、支那を痛め付ける。此位い日支の交誼を害するの甚だしきものはないのである。

日本が英米兩國と角逐して、支那で經濟上の權勢を張らう、又支那に開發された富源を日本で利用しやうとするならば、此位の大局に着眼しなければならぬ。

アナーキズムに對する新解釋

法學博士 吉野作造

我國でアナーキズムと云へば直ちに飛んでもない大それた事を計畫する反逆人のやうに思ひ做さるゝを常とするが、實際此名の下に理解さるゝ思想は、必ずしもさう云つたやうな危險なもの許りでも無いのである。無論從來はアナーキズムは久しい間當面の政府乃至支配階級に對する猛烈な感情的反感に基く種々の議論を總稱したもので、頗る危險な破壞的の思想であつた事は疑ひない。從つて今日でも世人動もすれば此名稱の下に露西亞の虚無黨などを聯想するのであるが、然し最近は段々國家の理論の發達變遷と共に、種々變つた意味がアナーキズムといふ文字に盛られ、今日では格別實際上の危險を伴はないやうな意味に解かるゝやうになつた。一部の官僚一派はアナーキズムと云へば恐るべきものと看做して之を取締り、又は斯ういふものゝ名をさへ口にせしめざらんとするけれども、現に西洋では危險でも何でもない意味に此文字を使つて居り、それが自然と我國にも入つて來るやうになり、又之を成程と思ふ者もあれば、如何に政府で取締つた所が始末が着かない。それよりも寧ろアナーキズムといふ文字が今日何ういふ意味に使はるゝか、それを正直有りの儘に明かにした方が可からうと思ふ。

歴史的に見ればアナーキズムといふ文字は、其始めに一部の官僚の今日間違つて理解して居るやうに、隨分危險なものに相違なかつた。併し此時代のアナーキズムは眼前の政府國家に對

する虐けられて居る者の感情的反感に基くもので、如何に鹿爪らしい說明を之に加へても、晴は〻一種の空想的無政府主義(ユートピアン、アナーキズム)に過ぎなかつた。社會主義に空想的なると科學的なるとあるが如く、無政府主義の發達にも空想的時代と科學的時代とある。而してアナーキズムを空想的感情論から科學的領域に移した者はクロポトキンである。此點に於て彼は社會主義に於けるマルクスの地位に等しい。而してマルクスもクロポトキンも共に佛蘭西のプルードンに負ふ所多きは面白い現象である。

クロポトキンのアナーキズムは、現在の國家を直ちに破壞すべしといふのだから、無論危險なものに相違ない。唯其議論はもと〳〵感情論に基くものでなく、或る學問上の根據に立つものだから、或る意味に於て案外話が仕易い。なぜなら感情に動くものは何と云つても容易に云ふ事を聽かないが、學問上の理論から發足する者は、理論の說破に依つて變說改論せしむる事が出來るからである。故にアナーキズムが空想的より科學的になつたといふ事は、其自身に於て大いにアナーキズムの危險性を減ずるものである。――假令クロポトキンの說其物は危險性を帶びたとしても。

クロポトキンは現在の强制組織を以て人間自然の本性を損ふものと觀た。人間は其自然の本性に一任して置くと、種々共同生活に必要なる制度を工夫し創造するものである、なまなか政府などがある爲めに種々本性が損はれ、萬人の幸福が侵される。斯く人間の本性を觀た事は今日の學問から見て誤りではあるけれども、クロポトキンに取つては生物學上の研究に相當の根據があつたのであつた。兎に角斯く人間の生物學的本能を推し極めて、政府を打壞しさへすれば黃金時代が直ちに來るやうに說いてある。故に彼の思想の危險なる點、即ち現在の國家組織を直ちに破るべしとする點は、感情から來て居るのではなくして、彼の生物學上の科學的確信に基いて居るのである。故に此科學上の結論を破りさへすれば、またクロポトキンは直ちに無政府的狀態即時實現を斷念したに違ひない。只併し乍ら彼は此點を斷念しても、現在の國家なり政府なりが著るしく人類の自然の發達を損つて居るといふ見識だけは變らない。此點は何うしても所謂國家主義者とは一致しない。此處から新しいアナーキズムが發展し來る根據がある。

アナーキズムは一概に政府を破り、國家を否認すると云ふけれども、人類の共同生活を破壞し其秩序を否認するといふのではない。アナーキズムは吾々の共同生活から一切の秩序を取去つて混沌たる狀態に陷れるものであると觀るならば、それは大い

に孤妄の言である。アナーキズムも感情的空想的なのは格別、少くともクロポトキン以後のそれは吾々の共同生活をより堅き基礎の上に置きたいといふ動機に出づるものである。此點は國家主義者と異なる所はない。然らば共同じ動機に立ちながら、アナーキズムと國家主義との岐るゝ所は如何と云ふに、それは次の點に在る。

吾々は共同生活に於てのみ吾々の生存を完うする事が出來る。之は疑ひない。而して共同生活内に於て各自の生存を如何にして完うする事が出來るかと云へば、クロポトキンは之を自然に放任すれば可いと云ふたが、之は人間自然の本性を餘りに樂天的に観た考へである。自然に放任しては共同生活が完うされないから、故に種々の制度が生れて共同生活は秩序を着ける。斯くして吾々の共同生活には之を秩序着ける所の統括原理が發生した。而して共統括原理の最も顯著なるものに強制力がある。而して此強制りに依つて統括されて居るといふ方面より共同生活を見て吾々は之を國家といふ。

そこで問題となるのは吾々の共同生活を統括する原理として強制力は唯一のものか何うかといふ事である。此處に於て國家主義と他の主義とは分れる。國家主義では強制組織を以つて社會的秩序の唯一の根源、共同生活を統括する唯一の原理とする。であるから此立場を執る人々に取つては、吾々の共同生活を完うする事は、之が唯一の統括原理たる強制組織を出來る丈け強くする事である。此處から國家至上主義が生れる。而して彼等に從へば共同生活は強制組織に依つてのみ統括されて居るのであるから、強制組織の否認は即ち共同生活其物の破壞である。故に例へばアナーキズムは強制組織を共同生活の最高の統括原理とする事を否認するもので、共同生活其物の破壞を希望するものではないなどといふ説明はノンセンスになる。

併し乍ら強制力は果して人類の共同生活を規律する唯一の原理であらうか。最近の社會學は斷じて此結論を容れない。又強制力は共同生活を統轄する最高の原理であらうか。命令服從といふやうな水臭い關係でなければ治まらないやうな社會は決して高級の共同生活と云ふ事は出來ない。日本の國體なども權力服從で説明しようなどゝいふ考は、甚た我が國體の道徳的意義を没却するものと考へて居る。と云つて強制力なしに共同生活が維持されるとは、今日の人間の狀態を以てしては考へられない。けれども若し共同生活を統括する種々の原理に上下の別を立てる事を許すなら、權力の如きは最も低級なるものと云はなければならない。只夫れ今日の場合に於ては權力が必要だ。けれども共權力が段々に道徳化して、共同生活の統括原理が命令

服從の形式的關係から實質的道德關係に進む所に社會の進歩があると思ふ。斯ういふ見地からすれば、所謂國家至上主義に低級なる統括原理に執着するものであつて、却つて社會の進歩を妨ぐるものと云はなければならない。

けれども强制力は將來の發達を來す必要なる段階であるから、之を否認するのは誤りである。即ち無政府的狀態を直ちに實現せんとするならば大いなる誤りである。此點に於て即時實行を目的とする無政府主義は、今日の思想界に於ては成立たない。けれども强制を必要とせざる狀態は、遠い將來に於て吾々の到達すべき社會的理想である。此理想に到達するを目的として吾々は戰々兢々として今日の强制組織を運用すべきである。强制組織を出來る丈け鞏固にする事が決して共同生活を完うする所以ではない。そこで現在目前の事業としては、吾々は强制組織を賴む、權力を必要とする。即ち國家の必要なる所以である。けれども吾々は國家的權力を運用するに方つては、之が共同生活の唯一最高の統括原理であるとする從來の見解を棄てなければならない。此點に於て從來の舊い國家觀は吾々の取る所でない。即ち遠い將來の理想としては、無强制の完全な道德的狀態を打建てるといふ事でなければならない。斯ういふ思想に如何なる名稱を附すべきやは固より人の好む所によるけれども、今日の學界に於ては屢々之に與ふアナーキズムといふ名前が附けられて居る。之が學界の約束である以上、吾々も亦アナーキズムといふ名稱の下に斯くの如き新理想をも諒解するのである。斯くして最近能く政治の最終の理想は無政府狀態であるとか、或は社會政策の最終の理想は無强制の狀態であるとか云はるゝのである。即ちアナーキズムといふ名稱は斯ういふ新らしい見解を附けられて、昨今一つの社會的理想として思想界に生きつゝある。此意味のアナーキズムは是から大いに研究され、唱道されねばなるまい。只アナーキズムの名に怖れて、此と彼とを混同し、菽麥一摑、撲滅を計るといふのは誤である。

近藤經一氏新著（原稿壹千枚の大長篇）（四六判大冊定價 貳圓參拾錢送料拾錢）

長篇小説

第二の誕生

若き作者が若き日の熱烈悲慘なる戀愛の經過を、一字一句をも苟くもせざる態度を以て、頗る率直眞摯な、火の如き筆を以て描寫せる大長篇として、白樺誌上、新人の大傑作として江湖に喧傳せられたるもの也。戀に惱む若き人々よ此書に來れ、卿等はなつかしき同感と暖かき慰めとを得む。

中村孤月氏新著　岡落葉畫伯裝幀（四六判美本箱入定價 壹圓五拾錢送料八錢）

子供の喜ぶ新知識

子供の親である以上は、新しい事を知りたがる子供達に對して、それを滿足さしてやらねばなりません、本書は活動寫眞の映るわけとか飛行機の飛ぶ理由など子供の知りたがる新知識數十項を詳しく說明したもので、少し大きくなつた子供には直接讀み得るやうに面白く書いたものであります。

東京市飯田町一丁目二番地　株式會社　天佑社　振替東京一〇一二八　電話番町一七九番

有名小賣店に販賣す

西伯利駐兵是非

西伯利撤兵の急務

エム、エー、エル、エル、ビー　米田實

一

原白頭翁を首相とする現政友會内閣は、撤兵を根本方針として然かも增兵を決定したと言ふことである、妥協的で、無方針で、前後矛盾の行動を平氣でやつて居る同政府の事であるから、一方では世間の撤兵論に攻め立てられ、他方では陸軍閥の增兵論に壓迫せられて、「兩方をもに立てねばならぬ所から」、コンナ鵺的な苦策を採用したのではあるまい乎、其自製自造の窮境や洵に惻笑に堪えないものと言はねばならぬ、蓋し露國は獨立の友邦であつて我邦が占領し得可き所では無く、從つて撤兵が根本的方針でなければならぬことは、三尺の童子も了解する、今日の問題は斯くの如き將來の問題では無くして現實の

增兵である、予輩は此增加に對して異論を稱へぬ譯には行か無い、人或は言ふ、撤兵期は半年以内にあるであらうと、然らば則ち今日の增兵は何の意味であるのか、二年間に列國と協同してさへ出來無かつた過激派の掃蕩が、我が單獨の力で僅々六箇月以内に成功する見込がある乎、假りに我が增兵が反過激派の保護てふ制限的目的に在るとしても、同樣の必要は六箇月後に至つて絶滅する見込があるであらう乎、予は之を思ふて愈々政府の愚策に驚き、更らに此間に軍閥者流の陰謀伏在せざるやを危まぬ譯には行かぬのである。

打ち明けて言ふと、予は常に國際的に消極主義をのみ執れと言ふ論者では無い、時としては出兵を唱へねばならぬこともあり、時としては撤兵に反對せねばならぬこともあるは十分に承知する、併し現在の對露出兵問題に對しては、列國々際關係に照しても、日本と露西亞との親善から見ても、將た日本自身の眞の利益から考へても斷々乎として增兵に反對するは勿論、寧ろ即時撤兵の急務なるを呼號せねばならぬと確信する一人であ

る。

二

然らば我等は何故に撤兵せねばならぬ乎。

其理由には種々の分子があり材料がある、予は序を逐ふて之を陳述して見度いと思ふ。

予が先づ彼等增兵論者に問ひ度いと考へるのは、英米佛以下列强が種々研究に研究を重ねた末、撤兵の外は無いとの結論に逢着し、已に各々其方針に出でつゝある今日、日本のみ之に正反對な增兵を決行し西伯利の平治を圖り得るであらう乎、彼等は西伯利若くは東部西伯利が決して孤立した島でも無く、他から隔絕した別世界でも無く、陸續きに面積八百萬方哩の露西亞全部と聯絡して居り、其人口は一億七千萬てふ大人口の一部であつて之と無差別に連結混淆して居ると言ふことを了解して居るであらう乎、則ち是れである。

一昨年十一月獨逸との休戰成り、殊に昨年六月同じく講和條約成立した後の列强の對露策が、漸次撤兵てふ大方針に向つて居たことは、恐らくは誰も異論無い所であらう、先づ英國を見るが善い、英國首相ロイドヂョルヂ氏は過激派の恐怖政治に慊ら無かつたけれど、對露干涉には早くから反對して居た一人である、彼の國際聯盟原案が巴里講和會議に發表せられた日の二日以前（昨年二月十二日）、早くもロ氏は英國下院に演說して言つた、「過激派は露國の輿論を代表せ無い、そは唯だ恐怖手段で政治を遣つて居ると言はれる、同じ様なことが佛國革命の時も言はれた、如何にも其通りだ、併し其時我等は干涉して二十二年間の戰爭を見たのである、誰か今日之を行はんと提議するものぞ」と、此時英國は略ぼ撤兵の意を堅めて居たのであつた、六月になつて對獨講和條約が調印せられると、撤兵は一層急がれて來た、昨年七月二十九日陸軍卿チャーチル氏が同國下院で勞働派の威脅に答へて聲明した所に依ると、露國出兵は對獨作戰が主要な目的であつたので、同年三月の閣議で、昨年中にアルハンゲル等よりの撤兵を終了することに決定し、已に着々實行中と言ふことであつた、又た昨年十一月に入ると、首相ロイドヂョルヂ氏は下院に於て演說し「英國は自分丈けの負擔が重いので、露西亞の內國戰爭にまで援助を與ふることは出來無い」と公言した、而して英國は實際歐露の軍隊を撤去したのみならず、西伯利の軍隊をも撤退せしめて居る、オムスクのコルチャツクが政府を樹立したのも、英國司令官ノックス將軍の多大なる同情援助に依つた位ひだが、此ノックス閣下の英軍撤退の事も已に新聞所報に見ゆる通りである、次ぎに米國はと言ふと、之は國務卿ランシング（一九一八年九月の中立國宛米國政

府公文書參考）駐露米國大使フランシス（昨年三月八日上院オヴアマン委員會證言參考）等の表面的過激派政府攻擊あるに係らず、裏面では赤十字社代表レイモン、ロビンス、講和全權隨行委員ブリツー等に依つて盛んに過激派政府との接近妥協を策せしめた程であるから、其撤兵策は早くから講ぜられて居た、民間では一昨年末頃から撤兵論が勃興し、カリフォニア出身の上院領袖ヘイラム、ジョンソン氏の質問及撤兵要求（一九一八年十二月十二日上院議事錄參照）となつて現はれて居た、昨年五月になると共和黨名士上院議員ポインデクスター、同ボーラ諸氏の質問及び撤兵遲延彈劾となつた、然かも當時米國は已にアルハンゲル及びムルマンスク方面から撤兵を開始して居たのである、大統領ウイルソン氏の態度は本國に於ても、巴里に於ても「餘りに過激派に寛容なり」とさへ非難せられた位ゐであつたから、其玆に至れるのも強ち意外とは言へ無かつた、若しそれ其西伯利に於ける撤兵の決定に至つては昨秋以來の事で、然かも今度（一月）愈々公式に全部撤兵を我國に通知し來つた次第である、獨り此英米の撤兵策に對して強硬な出兵論、干渉策を主張し來つたのは佛蘭西であつた、巴里講和會議の例を見ると、首相クレマンソー氏及外相ピシヨン氏は最も強硬な干渉論者であつて、我日本の如きも、幾分其後塵を拜しつゝある姿が見えた、昨年一月二十二日講和會議が決定した「露國各派政府（過激派政府を含む）の代表者をプリンキポに集めて妥協せしめんとする」案の如き、本來佛國は賛成では無かつた、是れ一月二十三日フイガロ、マタン、ラペル、ジユルナル等の所說でも相分る所である、其他その後のクレマンソー、ピシヨン以下佛國政事家の演說やら、議論やらは、強硬なる對露干渉策を形據立てゝ居た、佛國人が斯の如く對露干渉策を主張した理由の一は同國の地位が英米と異り歐洲大陸に位ゐして然かも獨逸に隣りする所から、露國を獨逸の勢力下に占められぬやうに之を安全にする必要を一層深く感じたにもあるけれど、又た佛國人が多年の間長大の資金を露西亞に投下し、其利子の收入が無いのに困つて居る所から、國債否認の過激派政府が仆れて他の政府が樹立せらるゝのを熱望した爲めでもあつたに違ひ無い、併し此佛蘭西さへも今や形勢一變、遂に撤兵策に出てゝ居るでは無い乎、即ち佛國外相ピシヨン氏は昨年九月二十六日代議院に演說し下の如く述べて居る、曰く在露國佛蘭西兵は全部撤退せしむる筈である、目下アルハンケリスク佛國派遣兵一大隊は英軍の引揚げた爲め自分丈けで駐屯して居る譯には行かなくなつたと、本意か不本意かは別問題とせねばならぬが、兎も角英米佛三國が撤兵方針に出て居ることは、最早や疑ひも無い所であ

る、斯くても我日本のみで獨り大勢に逆行して對露干渉策を固持し、增兵を決行せねばならぬであらう乎。

言ふ迄も無く、露西亞は東部西伯利のみでは無いのである、面積八百萬方哩、人口一億七千萬の同國から言へば、東部西伯利は人體の左脚位ひにしか相應せぬのである、左脚の一端に微蟲を刺はせた程にない位ひの些細な軍兵を送つて、露西亞問題を解決するやうな心持を起すものあらば、其は愚物にあらずんば狂者であらう、徒らに世上の物笑ひとなるに違ひ無い、殊に西伯利の過激派の背後には多數の過激派が控へて居ることに考へ及ぶときは、英米佛等諸强と共にアルハンゲル、南露、裏海方面、西伯利等各方面から出兵してさへ功果無かつたものが、如何で我日本一國を以て成功し得やう、一波去るも一波來り、西伯利の騷亂は却つて長へに止まない如き悲しき經驗を見ずんば止まぬであらう。

三

次ぎに考へねばならぬことは、現在過激派軍に對抗しつゝある露西亞のデェキン、ユーデニツチ及びコルチヤツク等の反過激派軍が果して援助を値ゐする乎、果して之を信頼して成功を期し得る乎の一點である、或時期に於ては聯合國間にも幾分斯くの如き信用を置かんとする思潮もあつた、打ち明けて言へば、自身も餘りに過激派政府の暴虐殘酷に慊らぬ結果、自然反過激派軍を尊重せんと欲したこともあつた、併し最近發展の現象は明かに此信用を裏切つた感じがする、そは外でも無い、昨年に於ける過激派討伐作戰失敗が與ふる教訓其一である、其波蘭人芬蘭人、ウクライナ人、ドンコサツク人等との政治的交渉失敗が與ふる教訓其二である。

顧るに、反過激派軍は一昨年から昨年の始めにかけて、過激派軍打破、國內鎭撫の大計畫を抱いて大準備を敢てして居たのである、東部の方では、コルチヤツク提督が最高統帥權を占め、西伯利の軍制も整備して來た、西伯利鐵道の警備は聯合國軍隊之に當り、軍需品、彈藥類は續々浦潮斯德に陸揚げせられ、又新軍兵の訓練等も聯合國將校の手で十分に行はれて居た、斯くて昨年二月には愈々ペルムよりウラルに至る全正面で攻勢が執られ得可き程度に迄進み得たのであつた、他の方面も略ぼ同じ狀勢にあつたことは言ふ迄も無い、而して四月上旬になると、二月以來の作戰の結果反過激派軍の形勢は一時良好に見えた、北部ではチエツク軍のガイダ將軍はウスト、シエガルからオブピンスクの西を經てカマに至る線に依りてアルヘンゲルのハン・ギン將下反過激派軍の左翼と接觸を保ち得る程になり、過激派軍第五軍の如きは全然之に擊破せられ、大砲七十二門、機關銃

二百五十門、銃三千挺等反過激派軍の手に落ちたのである、而して欧洲のハンギン等反過激派軍も之に應じて前進し四月九日ベレベイを陥れ、同十九日ウファ鐵道のブグルマを陥れたのであつた、ガイダの軍も更らにサラプル、ウオトキンスク等を陥れ、四月上旬オムスク政府に報告せられた敵捕虜數は實に一萬六千に達したのである、併し乍ら悲しいかな此成功は不幸短命に終つたのである、四月下旬ハンギン軍がチストポル、セルギエフスク、ブグルスラン線を越へ且つ其左翼がブスルクを距る二十哩にあつた時、ガイダ軍の前進が一度止んだ時、過激派軍は猛然振ひ起つて反撃を行ひ始めた、其勢ひや殆んど壓倒的であつて、殆ど反過激派軍の無力を示したものであつた、過激派軍が熱情に燃え居るに反して反過激派軍には將校と兵士との間に意思一致が缺けて居ることを明かにした、四月二十九日コルチヤツク系の西軍大敗しハンギンの軍もブグスランに敗れ、五月六日ブグスランは過軍に歸し、五月十三日ブグルマも失はれた、過激派軍は又たカマに於ける西伯利軍の聯絡を脅威しガイダ麾下の軍隊をエラブガ及びサラプルに奔しらしめたのである、其後六月オサ及びオハンスク過激派に歸し、七月クンガル及びクラスノフイムスクも亦た陥落し爾後過激派軍續々前進し遂に過激派の威力西伯利を席捲し、昨秋オムスク陥り、イルクツク危うく、西伯利政府の移轉を見たことは世人の熟知する所であらう。

何が故に反過激派軍は斯くの如き醜態を演出したのである乎、之には種々の理由もあるけれども、反過激派軍の將帥、反過激派政府の中心人物コルチヤツクを始め領袖が部下の信頼を得て居無いことを忘れてはならぬ、蓋し其兵員には反動思想のものもあるけれども、進歩系のもの（社會革命派、民主派の人々）もある、コルチヤツクがハルチツク提督時代一九一七年の革命に反對しクロンスタツトに於て反動派の爲めに旗を擧げんとした歴史、其他黒海に移り次で莫斯科にも反動系の運動を試みた歴史は、進歩系の信頼を博し得ざる所である、其麾下の軍隊の大部が敗北毎に容易に過激派軍に降服すること、陰謀叛亂が過激派軍に於けるよりも、一層多きことは則ち之が爲めである、然かもこはコルチヤツクのみではない、デニキンでも、ハンギンでも一片の將帥であつて、政治思想ある人物ではない、從つて目下思想問題を本にして戰爭をさへ起して居る露西亞の首領としては何となく不足である、他人を心服せしむるに足らぬのである、勿論無識な兵士連に思想問題が分らう筈は無いと言ふ人もあらうが、彼等は分らぬなりに其幾分かを理解せぬまでも迷信し、此迷信から情熱を起して居ると言ふことを拒む譯には行かな

ぬ、是れ實に遺憾ながら過激派の强點とする所であらう。

更らに憂ふ可きことは、コルチヤツク、デェキン等が芬蘭人、波蘭人、リトアニア人、エストニア人、ウクライナ人、ドンコサツク人、羅馬尼人其他との政治的交渉を誤つた點である、否な此誤謬に依り、此失敗に依つて暴露された彼等の政治的拙腕是れである。

先きに聯合國側では露國の反過激派諸軍と共に波蘭、芬蘭、リトアニア、エストニア、羅馬尼以下諸國をも蹶起せしめ、此等の協力に依つて過激派政府を擊破せんと企てたことがあつた、而して此等諸國も過激派に快からぬ所から露國反過激派と協力する考へも皆無では無かつた、がそれには自然政治條件が加はらぬ譯には行か無かつた、蓋し波蘭と言ひ、芬蘭と言ひ、將たリトアニア、エストニア等と言ひ、今日では獨立國として聯合國に承認せられて居るけれども、露國自身は未だ之を承認し居無かつたのである、何となれば此等諸邦は皆な戰前露國の領土であつたものであるから、露人としてはそれ容易に拋棄し難いと言ふ感情もあらうが、又た現在の處では之を承認する權能ある政府も存在せ無い爲めである、是に於て乎波蘭、芬蘭、リトアニア、エストニア等は反過激派と協力以て過激派政府の打倒に努むる代りに、その報酬の一として反過激派が將來露國の政權を回復する場合、此等諸邦の獨立を承認せんことを要求したのであつた、又た羅馬尼國ではその同胞一千五百萬を保有する露領ベサラビアをも民族主義に基いて羅馬尼に還附せんことを要求したのであつた。所が反過激派諸政府は國權論に拿はれて居た爲め此等の條件に同意するを拒絕し、爲めに此等諸邦と協力して過激派掃蕩策を斷行する計畫は水泡に歸したのである。

予は此現象に對して如何に露國反過激派が政治的に無能力なるかに驚かぬ譯には行かぬ、試みに思へ、民族主義は已に今回講和のモツトーとなつたでは無い乎、否な講和會議では已に波蘭以下幾多獨立國の發生を承認したでは無い乎、此時に於て露國獨り頑張つても其取消を希望し得可きものとは思はれぬ、寧ろ淡泊に要求通りの獨立承認保障を與へて以て相共に過激派に當るの方策を講ずるこそ巧妙な政策ではなかつたらう乎、然かも彼等の頑迷な頭腦と拙劣な外交は今や波蘭以下を驅つて過激派政府と和せしめつゝあるでは無い乎。

斯く觀じて來ると、予は現在の反過激派政治軍事將領連に信頼して、之に多少の軍事的援助を與へたとしても、到底之に依つて過激派打倒、露國平治の方策が達成せらるゝものとは考へ得られぬのである、否な列强の最近撤兵を急ぐに至つた一因

も、此反過激派政府の無能力が闡明して居るではあるまい乎、然るに我日本獨り此間に於て猶ほ且つ兵力に依つて現在の反過激派政府を擁立せんとするも、そは果して成功を齎らすであら乎。

四

然り、我國の獨力で斯くの如き現在の反過激派を相手にして露國の平治などは思ひも及ばぬ所である、然らば則ち我國は何故に用兵を繼續するの乎、何故に撤兵を斷行せぬの乎。

一部論者は說明して言ふ、過激派に對岸地たる西伯利海岸を占めらるゝこととなり、若しくは朝鮮と國境相接する部分を占めらるゝこととなると、其思想は澎湃として我國に入り來り、之が防止が困難になるに違ひ無い、左れば之を防止する最上策は東部西伯利丈けでも善いから、我國の援助の下に鞏固なる反過激派政府を樹立し、以て之を過激思想に對する障壁とするが善いではない乎と。

一寸考へると、此意見は悧悧そうに想はるゝが、深く考察すると是れ世にも稀れな馬鹿々々しい提案である、外でも無い、コウ言ふ提案は一の思想に反抗する他の思想が隨分優勢であり、此思想を代表する勢力が一定の地域に於て前記の思想を代表する勢力に反抗して獨立國家若くは政府を維持する丈けの實力を有する場合に於てこそ適當であらう、換言すれば東部西伯利に於ける反過激分子が自ら過激派に對抗して政府を維持し得る丈けの根底を民心の上に有せる場合には、我國が多少の援助を之に與へて其成功を促進するも善いかも知れぬ、然かも現在の形勢で見ると、東部西伯利の反過激派分子は頗る少數で然かも其中にも私鬪紛々、軋轢是れ事とし、到底自立の力が無い、此場合に於ける日本の援助は單に援助たるに止ら無いで、寧ろ自ら主動者となるものではあるまい乎、主動者としての日本の活動は却つて過激派の勢力を助長するものと言はねばならぬ、何となれば日本人は外國人であり、過激派は同じく露西亞人である、內端では如何やうに爭つても外患一度び至れば結束するのが、孰れの國民にも共通な人情である、西伯利に於ても日本が主動的に働かねばならぬ以上、過激派以外の分子が國民的同情から反日本の過激派に與みす可きは、自然の勢正に然る可き所と言はねばならぬ、予を以て之を觀る、本來から思想と戰ふには思想を以てせねばならぬ、劍を以てしてはならぬ、此際我國の執る可き策は他人の國土に障壁を設くるよりも、寧ろ我國內の思想界を向上し、以て淺薄な缺點多き思想に侵されぬ丈けにすることではあるまい乎。

一部論者は又た曰ふ、日本は東洋の强國であつて、土地近接の

主義から西伯利に一種の利益關係を持つて居る、從つて形勢紛糾の今日、外にしては他國勢力侵入を防ぐ爲めに、內にしては隣國民の慘境を救濟するが爲めに、或る武力的經濟的干涉をなすこそ至當であらうと、予も此土地近接より生ずる利益關係を非認するものでは無い、又た勢力均衡と言ふやうな問題も、國際政治の發達遲々たる今日、全く無視する譯には行かぬことをも熟知して居る、併し乍ら今日諸外國は皆な撤兵に決定したのであるから、此際他國勢力侵入問題は一應消滅したものでは無い乎、次ぎに隣國民の慘境救濟と言ふのは、一見美擧したること疑ひ無いけれど、露人が如何に之を見つゝあるかをも考へねばならぬ、西伯利人の多數は米軍に對しても、チェック軍に對してもその退去を呼號し要求したことを考へねばならぬ、是れ十一、十二、一月諸電報やら通信やらに明かな所である、就中彼等は日本軍に對して、其領土侵略の野心を疑ふが爲め、一層反感を示して居るでは無い乎。

序でに指摘せねばならぬのは、幾多の西伯利住民の子弟が過激派軍に加はつて日本軍の手に殺傷せられた爲めに、其親族姻戚が日本軍を恨んで居ることである、元來西伯利は帝政時代盛んに政治犯人を流した所で、その血やら影響やらが殘り、民心は大體過激派化して居る、所謂過激派軍隊も、忽ちにして良民となり忽ちにして銃劍を提ぐると言ふ此等住民から出て居るのだから、我が干涉の長引くに連れて我れに對する惡感を加へ行くは止むを得無い所であらう、然らば一轉反過激派分子丈にでも日本に感謝して居るかと言ふと、是れも日本の侵略野心を恐れて、決して好感を有して居らぬ、是れでは、日本はその努力に對して將來經濟的發展の利益は愚か、何等の精神的報酬さへも得られやうとは思はれ無い、更らに轉じて日本軍活動に對する諸外國の態度はと言ふと、皆な日本の意思を疑ひ、帝國主義的陰謀視し居ること、外國新聞雜誌に見ゆる通りである、

吁嗟巨萬の資力を投じ、千百の兵員を殺し、誠意露人の爲めに努力し乍ら、却つて露人からは感謝せられないのみか、嫉惡せられ、諸外國からは馬鹿々々しい濡れ衣を着せらるゝ、世に斯くの如く割の合はぬ出兵があらう乎。

從つて予は西伯利形勢、露國大勢及び國際關係が現在の如くなる限り、ドウしても增兵に反對するは勿論、所謂「根本方針」たる撤兵が空名で無く急速に現實化せんことを希望せ無い譯には行かぬのである。

駐兵論の先決問題

法學博士 吉野作造

長い間問題になつて居つた西伯利駐兵の一件は、廟議增兵に決して一段落が着いた。增兵ではあるけれども其目的をチェツク救援と居留民の保護に置き、而して對露不干涉を根本策として、機を見て全部撤兵すべきの意思を表明した所を見ると、少くとも思想上に於ては出兵反對論が大いに顧慮された跡が伺はれる。それだけ今度の決定を見るまでには、世間には隨分出兵反對の聲が喧しかつた。吾々には出兵反對といふ事が殆ど爭ふべからざる輿論といふ位にさへ見えたのであつた。

尤も世上の反對論を仔細に觀察して見ると、必ずしも絕對に出兵が惡いといふのでもないらしい。何故なれば現在行つて居る兵隊を無事圓滿に歸還せしめようといふ方針に變つたとしてもが、技術上多少增兵して萬一の危險に備へるといふ理窟も立ち得るからである。それにも拘はらず世間の輿論が殆ど擧つて陸軍側の提議に反對したに就ては、其處に若干の理由が無くてはならぬ。予の觀る所に據れば、第一の理由は軍閥の盲目的侵略主義に對する疑である。第二には軍閥の提唱する增兵の敢行は、結局露國の民衆を敵とするに終るべきを考へたからである。露國の將來は如何に踠いても貴族官僚の手に還る氣遣ひは無い。よしんば過激思想が結局露國に於て確立し得ざるべしとするも、之に反對するの政策を飽くまで遂行せんとすることに依つて、過激派ならぬ民衆までも敵とする惧れはないか。少くとも西伯利に行つて居る軍事官憲は、過激派と反過激派との區別さへ十分に辨へて居ないやうだと云ふのが世間一般の疑惑である。其結果として第三に世間では增兵は勿論駐兵の現狀を維持することすら、日露關係の將來に取つては非常に不利益だと考へる。此等の理由に依つて增兵反對論が矢釜しく唱へられる。甚だしきは無條件撤兵論さへも相當力強く主張さるゝといふ有樣である。

けれども前にも述ぶるが如く、國民は必ずしも絕對に增兵を不可とするものではない。場合に依つては一時多少の增兵を行ふの必要もあらうとは、我々ですら考へて居る。唯此際我々の最も明白に知らんと欲するのは、其增兵の眞の理由と眞の目的とである。之れさへ明かになれば我々は固より軍閥の提議だからとて、一から十まで反對せんとするのではない。けれども當の提議者は唯增兵の必要を說いて、眞の理由と目的とを明かにして呉れない。偶々之を說いても全然我々の納得し得ざる

ものて、加之、時々又說が變はる。斯くして我々は政府當局者の誠意を信じて、之に滿腹の同意を與ふる事が出來なかつたのである。故に予輩一人の態度としては必ずしも增兵に絕對に反對する者ではないけれども、理由が分らないから贊成が出來ないといふ形になる。而して今度いよ〳〵閣議增兵に決したが、之に對しても依然賛否の決を明白にする事が出來ない。

唯今度の增兵が從來世間に唱へられて居つた所と異り、其目的を今尙ほ西伯利に駐屯して歸國の期を待ちつゝある數萬のチエツク兵を救援する事と、最近著るしく增加した日本居留民の生命財產の保護といふ事に限つた。之れ以外に目的が無いのだから、早晚之が達せられさへすれば我々は直ちに撤兵して、寧ろ他國の內事に干涉せざるの態度を明かにする事が必要になる。此目的を達する爲めに增兵が必要であるか何うかは技術上の問題であつて、一寸我々には解り難いが、唯之れからの運用方法さへ宜しきを得れば、蓋し我對西伯利政策は大いなる誤なしに進み得べきは明かである。そこで我々は一旦斯うと定まつた以上は、西伯利增兵の是非を論じても始らないから、唯之れが如何に運用せらるるかを監督する事が肝要であると思ふ。

之に就いて我々は先づ先決問題として、次の二點を十分に念頭に置く事が必要であると考へる。

第一は過激派を世界の公敵と視るのが正しいか否かをもつと冷靜に反省する事である。所謂過激派思想とは何ぞや、所謂過激派とは何ぞや、是等に就いて明瞭なる研究無しに直ちに之を敵視するのは輕率である。少くとも我々と反對の立場に在るものを、漫然過激派の惡名を以て呼ぶことはないか。過激思想は憎むべく、過激派は排斥すべしとするも、我々は過激派と然らざるものとを正當に區別し、直に敵とすべきもののみを敵として居るか何うか、此點を先づ考へて見る必要がある。

第二には西伯利に於ける所謂帝國の利權なるものに執着して對西伯利政策の大本を誤まらざらんことである。西伯利に於ける軍事官憲の保護の下に活動する所の幾多の商業家は、命に瀕して居る彼地反動政治家の口車に乘つて莫大の資本を投じて幾多の利權を得たと聞て居る。是等の利權が日本の將來の發達に取つて極めて有益なものである事はいふまでもないが、然し之を獲得するに就ての手段方法に誤りがあつたか爲めに、實は十分確實なものと成つて居ない。卽ち是等のものはコルチヤツクとかセミヨーノフとか、ああいふ連中が金に困まつた結果我々に呉れたものであるから、我々の所謂利權は是等の反動政治家が結局政界の主人公と成るといふ條件に於てのみ確實なものであつて、若し昨今の形勢のやうに西伯利の全權が民衆の手に歸

するといふ事になると、我々の是れまで獲得した利權の運命も亦知るべきである。卽ち民衆からそんなものは知らないと云はれても我々から特に之を强く主張することも出來ない。之れでは結構な利權を澤山得たいといふ希望の下に、コルチヤツクやセミヨーノフつに遣つた金は一文にもならない。之れを何うするかといふことが、實に二重の意味に於て相當に大きい問題だ。一つは原本の運命に就いて、又一つは利權の運命に就いて。けれども之れが惜しいからと云つて大勢に逆行し、何處までも頑むべからざるものを立てるといふのが、果して賢明な策略か何うか。金は惜しい、けれども之を惜んで誤つた政策を押通すのは、將來に向つて更に大いなる損害を我々に加ふるものである。

我々一般國民の冷靜なる客觀的見解に從へば、他國の内政に不當な干涉をするのは、何時如何なる場合に於ても正しくないから、結局に於て撤兵を敢行せねばならない、とは思ふが、唯目前の所、何時頃まで駐兵してゐなければならないか、又增兵の必要あるか何うか、是等の點は詳しい技術上の說明を聞かなけはれば解らない。唯我々の明白に斷定し得る點は、今日世間に行るる駐兵論並に增兵論の中には、國家永遠の利害よりも、官僚軍閥としての、又は實業家閥としての階級的利害の打算に基くものが少くないといふ事である。我々は軍人の體面や資本家の投じた金やを顧慮する前に、先づ軍閥財閥の意見に從つて西伯利問題を決定するのは眞に國家の爲めになるか何うかを考へねばならぬと思ふ。

西比利亞駐兵是非

杉森孝次郎

この問題を議するにあたつて、第一に注意せねばならない事は、過激思想の東漸を防ぐために駐兵すべしとか、增兵すべしとかいふ主張は、政策としても無益有害也といふ事である。過激思想とは何であるか。莫斯科政府の信條をいふのでないか。レーニンはマルクスの學說を實驗しつゝあるのだ。彼れの眞面目は疑ふべからず。私は、知る限りの彼れの思想には贊同しない。贊同する部分も無論ある。けれども、贊同しない部分が相當にある。最も遺憾なるは、眞實に、精確に、莫斯科中心の政情を知る便宜がない事だ。如何にも積極的判斷が下しかねる。唯だ一事の明白なるは、歐露の人民は、彼等自身の信ずる政治組織と國家制度を選擇する自由を、道德的に列國から承認されて當然であるといふ事である。民族自決を振り翳したる國々

からは殊にさうである。

思想の敵を制するには、思想を以てすべし。[illegible]撲法が危険思想に對する唯一の、また最有效の豫防方でもあれば、對治方でもある。二に二を加へれば四になるといふ事理を知る者に取つては、二に二を加へれば三になると信ずる人に遇ふ事は、自己の聰明に對する確信を増し、他の不聰明を教育する責任を發見する事である。現在の私は共産主義を信じない。私有財産全廢論をも信じない。しかし、言葉は内容の不完全なる表現である。二年間に亘つて、人心をます／＼鞏固に繋ぎつゝあるらしい莫斯科政府の原則實行とが、太だしく人情に反むいたものではあり得ない。善政があるに相違ない。多少の報告は、一昨年の暮頃から、自由公平なる個人と、新聞雜誌等とを通ほして、吾人の耳目に達してをる。知識なきロイド・ジョージなども、この頃からすこし知り始めたらしい。そしてプリンキツポ案ともなつたのであつた。

結論から先きに言ふならば、わが國は、この際遲れ馳せを恥ぢて、大々的に中央露西亞の政情の研究に着手すべし。出來る限りの方法を盡して、莫斯科政府が何をしてをるか、露路の國民がどういふ考へを持つてをるかを、精透に知悉すべし。わが國は露路に對して恩怨なし。ありとするも英佛の比にあらず。何となれば英佛は、レーニンの單獨講和のために、ヒドい目を視た。三月二十一日の西の二度目の攻勢戰が、その結果として可能にされ、巴里も、カレも、危急を告げ、ヘイグ將軍が、英國軍人の傳統的自尊心を脱いで悲鳴をあげ、ロイド・ジョージが急電をウイルソンに飛ばして救命を迫り乞ふた記憶は、レーニンを怨む機だけである。佛は戰前から、英は戰爭開始と共に、ザアとケレンスキーの露西亞に、旺んに投資したのを、レーニン政府が單純に棒を引くと宣言した歴史は、背恩者に對する憤怨と、欲の失望を醸した。邦人は、錢では感情を支配されない。軍器彈藥の供給か損となつた人もあるにきまつてゐるが、これは計算に入らない。即ち邦人は、革命の露西亞に對して恩怨ふたつながら無きに等し。さすれば、思想のほかに關心事はない事になる。共産主義がいけないといふのだらう。なぜなら、政治組織なら、亞米利加でも、佛蘭西でも、瑞西でも、支那でも、吾人は英國や伊國に對すると同樣に、これらの國々に對して不干渉主義を取つてをるでないか。革命が故障だとも言へない。ケレンスキーを認めたでないか。共産主義が即ち危險思想なのか。また危險制度なのか。けれども、吾人は意思と聰明とを有す。他の實驗を精察して、その非なる點をば勸告もし、警戒もし、友情と信とを發揮すべきである。列國に率先し、列國を指導して、莫斯科政府を承認するの擧に出づる事が帝國の

眞の活路と信ずる。

わが國は發展の必要を有す。西比利亞に伸びる事け、正當な方法の下に於ては善である。正當な方法の下に於てとは、自他の幸福と利益を增進するために必要な方法としてといふ事である。バイカル以東の住民の威信を買ひ得ないやうなら、駐兵の目的は達せられまい。チエク族が、現に五萬内外も流浪してをるらしい實狀である。チタ附近に於ては、汽車は、四日に一回位しか着發しないとかいふ。普通の目的にむかつてはだ。また歸還のための船舶もない。このチエク族を護送し了はるまでには、相當の時がいる。すくなくともその間、東淸、黑龍鐵道の守備と、チタ、ブラゴエスチエンスク、ハバロフカ等を要衝とする滿蒙近接及び直接地帶の治安を計る事は、政治的知見を含まぬでない。オムスク政府倒れて、イルクーツクは謂はゆる社會革命黨の手に落ちた。この社會革命黨は、比較的に恒產と恒心との所有者であるといふ。帝國の駐兵が、この黨を中心とする勢力を敵に廻はし、また後バイカル、黑龍、沿海諸州の土着定住の良民に德とされないやうでは、失敗に終る冒險だ。亞米利加が手を退くからといつて、總退却するには及ばない。地理的關係の差がある事がその第一理由だ。要するに、目下のところでは前記の鐵道及び要衝を、眞の治安と、秩序維持とを目的として、在住人民の必要とする助力を與ふる事が、駐兵の唯一の理由でなくてはならない。湖東地方などには、謂はゆる過激派の眞物などは餘にゐまい。ボルシエヰクスと名乘る無產無德の輩が多いだらう。一定の政治的理想に燃ゆる者ではあるまい。衣食に窮して公盜をはたらく連中が謂はゆる過激派の大部分なのではないか。これと中央露西亞の當局者とを同一種類視する事は曲解でなくば誤解でないか。中央露西亞の政府を討伐する名に於て、チタ邊の、馬賊の生來合ひに似た者共を追窮する事は、徒らに歐露の義憤を刺激するほかに、結果がなからう。

帝國の誇りにふさはしい方法は、歐露の實情を正直に研究し、その結果、恐らくはその友邦となるにある。わが國は、わが國の個性を保護し、主張しつつである。政治組織、經濟制度の異なる事は、友邦たる事を不可能にする必然性をば含まない。各國の自治に屬する問題だからだ。歐露及び西比利亞にも、消費組合と地方議會（ゼムストフオー）が普ねく發達してをるといふ。果して然らば直接にこの消費組合と結び、また地方議會と組んで、彼等の要求に、合法的に滿足を與ふる餘地あらば、與ふるがよい。歐露、イルクーツク、及び湖東住民の趨向を顧みずして、一セミヨーノフを柱と賴むが如きは誤りだ。文字通りに接壤地域たるハバ

ロフカ、ブラゴエスチエンスク、及び目下尙ほセミヨーノフの掌中にあるチタを中心として、名實共に治安を主目的とし、唯一目的として駐兵すべし。そして莫斯科及び歐露國民の實情に徹底し、全露の友邦たる誠意を以て進むべし。若しそれ、西比利亞を全然撤兵する事が、わが國が全露の益友たる目的に一致するならば、綺麗に撤兵すべし。

廢止すべき一事は、漫然として過激派呼ばはりする事だ。わが不聰明を曝らすに過ぎないからだ。況んやその過激派呼ばはりする當人が、頑冥者たる場合に於てをや。またその謂はゆる過激派が、誤解され、曲解されたる進步主義者たる場合に於てをや。コルチヤツクはすでに問題とならぬとしても、セミヨーノフにしても、その政見と社會觀とが、眞に援助に値ひするか、敎戒に値ひするかは、われに取つて決して閑問題でない。ロイド・ジョージは、無知識にして、ケレンスキーに離反したるコルニロッフに肩を入れて失敗し、またレーニンに反對したるカレヂンに勢援を與へて失敗した。成敗利鈍を唯一の目的として行動して、常に敗鈍方に與みするのは愚といふほかに呼びかたがない。國際的社會の進運に逆らふ政策は、時と共に凋落する時代に、吾人はすでに入つてをる。

國際的社會を組織しないならば、またその發達に努めないならば、日本の如きは、亞米利加にも、濠洲にも、支那にも、西比利亞にも、先方の主權の名に於て、その入國を拒絕されても、論理上文句は言へない。經濟的に侵入も、人口的に移民も出來ずとあれば、武力で土地を强奪するほかに、活路は無くなる。然るに、武力的帝國主義は、防禦としては尙ほ必要だが、攻取としては今後は成功しない。國民主義は必要だが、國際的社會を目的とする主義が、國民主義そのものの活路として必要なのだ。支那も、西比利亞も、土地廣く且つ豐かであるのに、しかも滿載されてすでに張りちぎれんばかりなる日本國民の企業心と經濟的必要とが、「お預り」を命ぜられた犬のやうになつてゐなくてはならんとは、何といふなさけない事であらう。私はこの機會にもまた世界に奉公する志を說かざるを得ない。聖雄主義の適用としてだ。

けれども、問題は具體的だ。そして切迫してをる。セミヨーノフを今更ら輕薄に置き去りにする事は不可である。彼れを敵とする多數民を壓迫する理由は、進步的でもなければ、公明正大でもあり得ない。大勢に逆行する意味もある。元來正義を目的とせば、成敗を問はざる餘地あらん。利害を主とせば、形勢に鑑みるところなかるべからず。米は、兵士の歸心矢の如し。那一に食物がわるい。佛も、クレマンソー去つて、親露とまで行

かずとも、露に對して寛容的にならう。英は、民心の緩むを待つて、即ち緊張せる怨露心の弛緩するを待つて、親露策に進まんとするが宰相の心算だらう。デニキン敗れて、莫斯科熱が印度に飛び移るを危惧しつつある昨今だ。埃及より印度に廣がる反英熱が、莫斯科から勢援される事をまのあたり氣遣ふ時となつた。第二のプリンキツポとなるか、歐露との經濟的取引の開始となるか、即ち莫斯科政府の承認となるか。もはやこれは時の問題に過ぎないのではないか。全露の國民的團結今日よりも顯著なるはなからんとす。ありさうな事だ。謂はゆる干渉列國の動機が、あまりにズウ〳〵しい、そして蟲のよいものであつたからだ。世界を理想の火中に投ぜんとする誠意ある國、そしてその火が莫斯科のそれよりも聰明である國が、對露策を知る國だ。

國際的社會の聰明と良心とに愬へる力のない政策は、國内からも敗れて來る。今後の國民と政治家は、これを知らなくてはならない。英國は大兵を動かすの力なし。それも一因だが、勞働黨の反對も撤兵の一大因であつた。良心と聰明に國境なし。内外の理想を把握しつゝ、自國の生存を確實にし、發達させる外政が必要だ。日本の在來の對露策は、極めて最近を言うのだが、即ち殊にオムスク政府承認あたりからを言ふのだが、小なる現實政治見のみ働いて、理想的方面があまりに空虚ではなかつたか。

多く言うて、何事をも意味しないのは無責任である。私は、全露の實情を、能ふ限り短時間に精査し、莫斯科が有望であると知れたら、國交を開始するの途に進むべし。駐兵は、上述の地帶に大體限つて、露西亞の中央政府との合法的、道徳的交際を樹立する目的のために、左右すべき問題であると考へる。

西伯利問題の根本義

文學博士　三宅雪嶺

西伯利出兵は最初から目的の明白を缺いて居る。當局者の間でも區々であり、同一の人も意見が變つて來て居る。兎も角も出兵するに一致して出兵に及んだが、今尚明白を缺く。外交調査會で初め多數が一應反對し、後に或る程度迄の出兵に同意することになつた。陸軍部内で之を成功と心得、當時の首相寺内伯は、平素言語を愼むに似ず、意見の通つたのを吹聽するを憚らなんだ。調査會で兵數を限つても、既に出兵した以上、必要次第であると稱した。寺内自ら何程の了簡であつたか、出兵說は青島への出兵からそろ〳〵起りかけて居る。陸軍部内で出

來る丈け出兵を望んで居り。唯何にしても獨逸との戰といふので、手の着けやうに困る。海軍は地中海まで出掛けても、陸軍で獨り遠方に行き難い。獨逸兵が佛國へ雪崩れ落ち、佛が受身になつた時、何國からでも援兵の來るを望み、日本からも何とか爲し得さうなものと思ひ、西伯利鐵道で露國へ來ても宜からうとはする。幾分か運動する者もあつて、日本でも之に應ずる者があり、陸軍部内でさう出來ぬ事もないと云ふのがある。何の爲の出兵かと云へば、獨逸と戰はふとするのであり、之と戰ふのは既に聯合國側に參加したからである。然し莫大な費用であり、何か之を償ふべき途を考へぬ譯に行かぬ。或は友邦の爲に犠牲を顧みてはならぬとも云ふが、さう無邪氣な事も出來ぬ。戰後に獨逸から償金を取るのも覺束ない。出兵しさへせば何うにかなると思ふ肚があり、其肚の中に沿海州及び北滿附近の地を目掛ける所もある。或は之を考へて出兵を是認したりする。米國からチエツク援助について申込み、之に贊成し、日米同數といふのを變じ、日本兵を多くしたのは、軍制の違ひで已を得むところもあり、場合によつて出兵を自由にする意を含む。何の爲めに兵數を多くするかとなれば、其言外に在るといふやうな事になる。

所が過激派政府が勢力を得、容易に屈せぬところから、之を敵として戰はふとするに傾いた。何時獨逸を敵とし、次いで之と單獨講和を敢てする過激派を敵とし、獨逸の捕虜を過激派を相手にする事になつた。過激派は獨逸と共にするから之を敵とするか、將た前帝政を亡ぼし、資本家の財産を沒收し、亂暴を極めるから之を敵とするか、或は過激派思想を世界に宣傳し、秩序を擾亂するの恐れあるから之を敵とするか。何れも幾分か理由の内に加はるが、假それで如何に戰ふべきかとなれば、出兵せねばならなくなる。成程過激派は亂暴する、物騷である。曾て日露協約を結び東洋の安寧を保持した露政府を叩き壞し、皇帝皇后等を殺戮し、資本家の財産を勝手に分配するなど、呆れた仕業であるが、要するに國内の革命であり、他から干渉すべきものであるか何うか。干渉も程度問題であり、全く出來ぬ事はない。日本でも多少の損害を蒙つて居る。露政府との關係ある利益を失ひ、貸金でも損になつて居る。強く要求することが出來ぬではない。然し之を要求する爲に戰ふのであるか、さうとも受け取られぬ。損失あるので或る土地を質に取らうといふやうな事を敢てしようとはせぬ。

過激派思想を宣傳するのは防禦すべきものであるか、之を防禦するには其嫌疑ある者を捕へるか放逐するか、其場合によつ

て處分すべきである。特別の運動によらぬ思想の傳播は、國民の判斷力を便よる外ない。我國民は世界に處して事を過らぬ丈けの判斷力を備へて居り、それで半世紀間に支那の一部と見られた所から五大國の一に進み得たのである。過激思想の如何なるものなるかを判斷する事が出來る。單に思想が傳播するので國民が惑はされ、騷ぎを起すようなものとするのは、國民を侮るのであるまいか。將た思想の傳播するのを防ぐが爲め、絶えず過激派政府と戰はねばならぬか、戰つて何を得やうとするか、過激派政府自ら顚覆せば格別、ウラルを越えて之を打滅ぼす事が望み得られるか、實は此邊のところ繆つた意見があるのでなく、唯世界戰役に加つた結果として今日に至つて居るのであらう。戰役の發端から結末まで、人の考へが幾度も變つた。意外の事が度々あり、一々之を豫想するは人力の能くする所でない。今日の狀態となつたのは、世界で何人も豫想して居らず、當局者が考へ違ひしたとても深く咎むべきでない。之れ位の間違はあらうと思はれる。いろ〳〵手出しして居る內、當る事もあり當らぬ事もあり、大體に於て多く違らねばそれで好い。餘り甚だしい誤りを仕さうもない。其處は國民の判斷力の確かなのを證明する。國民は分らぬやうで分つて居る。前に日露戰役に臨み彼の如く熱中し、後西伯利出兵に際し何分にも熱を缺く。西伯利で戰死する者、苦痛に堪ふる者に對して氣の毒であるが、若し出兵に熱中したならば、今頃如何になつて居るか分らぬ。或は善後策絕望といふ事にならぬと限らぬ。國民の熱せぬので取り止めたと云へる。

それならば如何にすべきか。全く撤兵すべきであるか何うか。之れ正に微妙なる問題に屬する。撤兵して了へば世話なしであるやうで、國際關係の事はさう無雜作に行かぬ。いろ〳〵差し響きがある。初め出兵してから目的の明白を缺き、或人が之を明白にしても、他の人は承知せぬ、別の意見を示さうとする。然し區々ながら幾許か出兵する事になつたのは、前から繼續し來つた國力の發展に伴つて居る。我日本民族は何處かに發展せねばならなくなつて居る。內地丈けで六千萬の人口、他へ出でずに何とするか。今尙ほ地球の陸地の面積は多くの人を容るゝに足り、十六七億で滿員になるのでなく、之を幾倍する事も出來る。

所が或る民族に於て廣大なる土地を限り、他の民族の入るのを制限し、殊に異人種を拒絕せうとする。何の權利を以つて斷かる事を敢てするか。曾て早く旗を上げたといふ位のものである。さういふ事で人類の住居を制限し得るであらうか。若し異人

種排斥の民族が尚ほ廣く土地を領有せば、異人種は地球に住居する事が出來なくなるでないか。地球は人類共同の物體であるべきであり、甲民族が甚だしく乙民族の妨げせぬ限り、乙民族が空いて居る地に住居し得る譯である。日本人は日本內地に安んずるよりも人口が多くなつた。人口の增加するのは自然を征服するの力を增すのであり、言ひ換れば文明を促進する事になる。所が米洲合衆國や英國植民地や、領土に繩張りして日本人の入るを許さぬ。日本人は他に全く土地なければ其繩張りを越ゆるの餘儀なきに至るが、近い所に空き地が隨分ある。滿蒙から掛けて西伯利大平原は、人の來つて開拓するのを待つ。彼の大平原は露國の領土として彼の民族に一任すべきでない。彼の民族丈けでは何時まで立つて開けるか分らぬ。他から助力せねばならぬ。日本では內地に人が餘り、而して他の土地を開くの力を備へて居る。滿蒙掛けて西伯利に及ぶの必要もあり、任務もある。露國民族の生活を妨げてはならぬが、彼の大平原に移植するとて何の妨げあるか。人に生存の權利あると稱する事になつて居る。之を否認する事は難しからう。人類悉く然るべきである。日本では歐米を後廻しとし、先づ近い處の空き地に幾何か住居するやうにならねばならぬ。西伯利出兵に贊成する者が少いと同時に、反對の聲も低いのは其邊からの事である。折角大平原が空き地になつて居るのに、足踏みしてならぬといふ事があるまい。適當の時機があれば、相當の事を爲たいと考へて居る。冬は甚だ寒く、我駐屯兵の難儀一方でなけれど、住み樣によつて相應に住まはれる。出兵の聲は移住の前提と聞いて差支へない。滿蒙から西伯利へ掛けて移住すれば可いでないかと、米國の排日連が時として云ふ所であり、ヒチコックの如きも其一人である。日本では別段土地を領有しなくとも可く、住居して職業に從事するの自由を得ればよい。現に兵を駐屯して居るのは、目的とする所、口に云ふ所さま〴〵であらうが、詮じつめれば日本人が何處ぞへ空き地を求め、之に移らうとして居るのである。今の所どう片が着くか判らぬ。今のまゝで撤兵して終ふのは餘り無意義になる。此邊に何とか取り極めを附けねばならぬ。

それには過激派政府と戰はなくてもよいではないかとの說が出る。戰はずに事が極まればそれで可い。只過激派政府が如何なるものであるか、今尙ほ理解せられて居らぬ。名前を聞いた許りで恐毛を振るう氣味がある。毛蟲のやうに毛嫌ひをする。亂暴狼藉憎むべきものであるかも知れぬが、噂の通りである事を保證し難い。或る報道によれば相應に見るべきものがある。

十八世紀の末佛國革命の起つた時、歐洲列國の政府で大騷ぎしたが、それで佛國人が惡魔になつたのでもない。當り前に智情を具へて文明に與つて居る。無闇なことをして長續きするものでなく、長續きするのはそれ相當の理由なくてならぬ。過激派政府が能く維持し得るものであるならば、多數民衆に有利なるによらう。多數民衆を虐げては、速からず滅亡するを免かれぬ。米國は正義人道を唱へ、立派な事を云ひながら、廣い土地を領有し、異人種の入るを拒む。黒人の雜居を許し、亞細亞人の入るを許さぬ。勝手次第此上も無い。露國の過激派政府は如何であるか。西伯利に他國人の來るを許さぬか、自國人同樣に住居させるか、或ひは其點で米國よりも文明の眞意を得てゐるやうなことありはせぬか。過激派政府とて頭から毛嫌ひせず、蟲を殺して經過を見、場合によつて談判を開くべきでないか。出兵後今に兵を駐めて居るのは日露協約後、戰後に附隨しての事であつて、玆で何とか結末を着けやうとするのである。領土を得やうとするのでなく、談判で相應の言分を立てやうとするのである。我政府で全く其邊に取掛らうとせねば、手脫りも甚だしい。機會を待つとも云はうが、注意せねば機會が通り過ぎてしまふ。兎角外交に手脫りがある。成るべく早く此邊に決定する所あつて然るべきでないか。

西伯利增兵は斷じて不可

「時事新報」主筆　石河幹明

私の考では西伯利は無論撤退すべきが最も得策と信ずる。けれども接壤の地であるから、實際の事情全部の撤兵は不可能であると云ふなら、少數の兵を或る地點に駐めて萬一を備へて置けば足りると思ふ。元來西伯利出兵はチエックの救援と、鐵道を管理する事とであつた。鐵道の管理は當時西伯利に露人の自治政府が設立されたので、主として日本と米國との兵を以つて鐵道を管理して、間接に其政府を守備援助する爲めであつた。所が事實に於てチエックの救援は目的を達したが、西伯利政府は其勢力が一向振はず、とうとう敗退して今では何うなつたか分らない狀態になつて終つたのである。そこで米國もいよ〳〵今度撤兵する事になつた。然るに日本が依然として兵を駐め、又更らに增兵したりして居ては、結局過激派を正面の敵として戰ふに事になる。過激派は今までも隨分我守備區域に出沒したが、然しそれは一概に過激派と云はれて居ても、本當の過激派ではなかつた。所が今度正面衝突をせねばならない過激派は、歐羅

巴に本據を有つて居り、相當の政治組織を具へ、其上優勢な兵力を有する實質の過激派政府の軍である。之れと衝突するのは露西亞と戰爭する事で、かうなると日本一國の兵を以つてしてはなか〳〵防ぎが附かなくなる。増兵に次ぐに増兵を以てして、結局大規模の出兵を見るやうになつたら、それこそ事態甚だ重大である。

成程過激派の主義は危險有害であるかも知れない。況して其危險な主義思想を西伯利へ宣傳されては、領土が近い丈け、他國に比べて日本の危險を感ずる程度は強い。けれども夫れは主義思想の問題である。怕むべしとするも精神上の事である。兵力を以て主義思想の感染を防禦するのは可笑しい、のみならず防禦の出來るものではない。何うしても之を防禦したいなら、露西亞全部に渡つて、過激主義者と云ふ過激主義者を一人殘らず捉まへて、悉く之を剿滅してでも終はなければ駄目だ。然しそんな事は實際出來るものではない。だから列國も其對露政策を變へて、傍觀的態度を取るやうになつたのである。即ち過激派も攻擊しない、が、反過激派も援けないといふのである。殊に米國も撤退して終つたのに、日本獨りが從來の方針を變へず、更に増兵して過激派と理由もない衝突をして、延いて露西亞全體の國民の無益な怨みを買はうとするのは抑も何の意であるか。

加之、啻さへ日本の領土的野心を云々して、兎角我行動に猜疑の眼を向けたるが列國に、列國は形勢傍觀、米國も亦撤兵と云ふ今日、日本のみが増兵を斷行したりしては、恰かも我國に領土的野心がある事を自ら證明する許りではないか。

更に翻つて國內の事を考へて見ても、日本の兵は有事の日、一旦緩急ある時に國家自衞の爲めに備へたものである。然るに其忠勇なる兵を僅かな名義もなしに、沍寒の今日西伯利に送つて、或は戰つて死傷させたり、或は寒氣に凍傷せしめたり、其悲慘な事は容易でない。國家の危急を救ふといふ場合ならば格別であるが、理由の明かで無い師を起して、忠勇なる我兵を戰場に損ふは大に考慮を要すべき事である。最近社會思想の動搖に伴れて、兵役に關する我國民の觀念も昔とは明かに違つて來た。名義も確かでない軍を出して、貴重な國民子弟の生命を徒らに損ずるやうに思はしむる事は、兵役に關する國民の思想を動搖せしめ、犧牲を拂はねばならぬ場合に惡影響を及ぼす事が無いとは限らない。其他財政の點から見ても増兵は斷じて不可である。既に列國の對露政策が變つた以上、日本も早く過つた對策を棄てなければ、終には進退に窮して醜い引込み方をしなければならなくなるだらう。



丹後の宮津

村松梢風

一

午前十時何分かに舞鶴を發した玩具のやうな聯絡列車が、重味の無い音を立てて一哩ばかりの鐵路を走ると直ぐ海舞鶴へ着いた。四五十人の旅客がドカドカと汽車から吐き出されたが、歩廊（プラットホーム）の砂利間を炒り付ける炎熱を恐れて、其處から見ると一段低くなつてゐる驛の建物の蔭を目掛けて皆遁げるやうにして集まつた。白の背廣を着て洋傘を携へたきりの身輕な私の姿も其の中に交つてゐた。

掲示板を看ると、宮津行の聯絡船の出るのは午前十一前と午後三時との二回だつた。間もなく着く筈の其の船に乘り移るつもりで旅客は落ちつかぬ容子で驛の時計ばかり見上げてゐた。然し、どうしたものか船は定刻を過ぎても港へ入つて來なかつた。十一時、十一時半、十二時。旅客は次第に不安と苛ら立たしさを募らせられてガヤガヤ騷ぎ出した。

驛の前の砂利を敷いた廣つぱには運送屋と茶店らしい粗雜な新らしい家が二三軒あるきりで、其の向うの埋め立て地のやうな處には一面に葦が生へてゐて、其の葉の茂みの上から、四五丁も彼方の山の根に吸ひ付いてゐるやうな漁師町の屋根だの入江に集まつてゐる漁船の帆柱などが見られた。港は、面白い松の木などが所々に生へてゐる岩石の山が思ひ切つて兩腕を突き伸ばした形で海中へ突出して、細長く深碧の水を抱へ込んでゐる天然の灣から出來てゐた。遙か港の口の方から、機罐にでも故障が出來たらしい發動機船が帆をかけた和船に曳かれながら、手

を負つた蟲のやうにのろのろと這入つて來た。平常は鐵道院の汽船が二隻で往復してゐるが、丁度其の一隻が修繕中なので假りに代用してゐる發動機船が今日は途中で故障をおこしたから定刻の出帆は出來ないと驛員が言つた。其だけの旅客は三時の汽船が這入つて來る迄待たなければならないことになつた。

私は中食をしたためながら船を待つことにしやうと思つて、驛前の埃つぽい往來を町の方へ歩いて行つた。町端れには板屋根の平べつたい家が續いてゐた。と町を横切つて流れてゐる河の橋向うに小綺麗な西洋料理店を見付けて私は這入つた。二階の客室も田舍の料理屋にしては割に落ち着いた感じを與へて、テーブル掛けなどもまつ白だつた。料理を誂へて置いて、私は上着を脱いで椅子を手摺の側迄持ち出した。直ぐ下には黄色く濁つた水が動きもなく澱んでゐた。河下の方には幾隻かの漁船が這入り込んでゐて、稍離れた向う岸の松林の中には朱塗りの社が建つてゐた。舞鶴灣全體を形造る附近の山山も、湖の様な蒼背の海も眺められた。椅子の凭れに頭を掛けてさうしてゐると、私は自ら旅人らしいゆつたりした氣分に浸されて行つた。

用を聞いたり料理を運んだりする女は一人であつたが、それは此家の主婦であることが分つた。彼女は丁度三十歳位で質朴な顔つきではあつたが、健康者らしい美しい血色と優しい地方訛りの言葉を有つてゐて、手摺の側へ來て私のために軍港や砲臺の所在地を指さして敎へて呉れたりした。其處から見ると一番左手に見える舞鶴富士と呼ぶ山なども私は覺えた。

風が凪いで、空には黒い雲が出て、蒸し暑さだけがねつとりと空氣を粘らせてゐた。すると間もなく雨が降つて來て、劇しい雷鳴が狹い山の間を走り始めた。橋の袂の柳の枝が、雨に打たれて髪の毛を振り亂したやうに激しく揺れ動いた。

二

午後の汽車で着いた旅客も加はつたために宮津行きの旅客は倍以上に達してゐた。船は「天橋丸」といふ小型の汽車であつた。「乘客は進行中一方の舷に片寄らざるやう注意あり度し」などといふ注意書きが貼り出されてゐた。甲板の幅は二間位いしかなかつた。乘客は大概船室へは降りずに、海上を吹いて來る雨後の風に浴しながら甲板の日覆ひの下に集まつてゐた。二等客の場所は後部にあつたが、然し船客の顔は可成り雜然たるものがあつた。商人體の者、百姓體の者、醫者、軍人、京阪附近から新規に抱へて來たらしい女を連れて居る宮津の茶屋の主、妓を作れてゐる外國の老紳士……。其でも天の橋立を見物に行くらしい旅人が一番多かつた。武者修業の自慢話こそ聞かれない

が、それは昔の旅と變りの無い長閑な船路の氣分を漂はしてゐた。

灣の深さは一里以上あつた。そして其の中には幾多の嶋や岬が藏されてゐて、海の景色を樣々に變化させて見せた。外海近くなると、海上は靜かでも岸邊には白い波が狂つて岩に卷き付いてゐた。ある處には、海の色よりも濃い綠の山の裾に遠い海原からでも打ち寄せられたやうに漁師の家が並んでゐた。

船がぐるりと進路を左へ向けたために、右舷の方へは急に暑い陽が差し込んで來た。そちら側に居た人達は思ひ〳〵に起つて陽を避けた。案内者(ガイド)を連れてゐる外國人の親子は私の側へ遣つて來たが、偶然私と顏を見合はせるなり「おう」と低い駭きの聲をあげた。意外にも其の親子の者と私とは初對面ではなかつた。きのふ――それは七月十七日であつた――京都で、四條高倉の大丸呉服店の三階から祇園祭りを見物した時私は其の人達と二時間餘りを隣り合つてゐたのであつた。其處にはホテルから案内されて來た外國人がほかにも澤山居たが、直ぐ私と並んで居て、そして鉾が來始めると恐ろし氣もなく高い窓の緣へ腰を掛けて手を叩いて喜んでゐた桃色の上着を着けた快活な娘と、それを叱りもせず莞爾々々しながら祭りを見てゐた半白の口鬚を貯へた上品な紳士、それが此の父子であつた。

「君に此處で廻り逢ふとは實に奇遇だつた」と老紳士は少し離れてゐた案内者を側へ呼んで私に話しかけた。娘も父の隣りに腰掛けてから首を前に差し出して美しい麥藁帽子の下から嫣然して見せた。

「君も天の橋立を見物に行くのか？」

「さうです」

すると彼は打ち解けた調子で、自分達は紐育の者だといふ事から、初めて日本へ觀光に來て既に東京と日光と箱根とで一と月以上の日子を費して來たが、是から關西地方を見物してしまつたらば支那へ渡るつもりだなぞと言つて話した。其から昨日の祇園祭の話が出ると、彼も娘も口を揃へて面白かつたと言つた。

「日本の祭り(フエスチヴアル)は皆あゝいふ物なのか？」と彼は私に訊ねた。

「否」と私は答へた。「祇園祭は日本のあらゆる祭りの中でも最も古典的な物の一つです。あれが本統に日本の千年昔の文明の象徴(シンボル)です。同じ日本でも東京の祭りはもつとずつと近代的でそして平民的です。京都の祭りが古雅で單調なのに比して、東京の祭りは非常に陽氣で浮かれたものです」

「君は其のどちらが好いと思ひますか」彼は穩やかな眼元に笑みを浮かべて言つた。

「どちらとも言へません。私は東國の人間ですから江戸の文明により多くの懐し味を有つてゐるのですが、然しきのふ初めて祇園祭を觀て非常に強く胸をうたれたのです。あの古雅な祇園囃子の音色、あの美しい花のやうな稚兒が鉾の上で舞ひ始めた時、私は思はず泪がこぼれたほどです」

此の空想的な言葉が娘の胸に不思議な感じを與へたと見えて彼女は大きく眼を瞪つて私の顔を見詰めてゐた。

沖では驅逐艦が五六隻入り亂れて驅け合はしてゐた。各艦の檣の上へスル／＼と旗が上つたり下ろされたりした。餘程離れて處から母艦らしい大きな軍艦がのろ／＼と煙を吐きながら其の練習を眺めてゐた。遠く越前岬の一邊が望まれた。海の眞正面には大島小島と呼ばれる二つの島が鯨のやうに横たはつてゐた。

一時間ばかり外海を走つてから船は大きく迂廻して船首を陸の方へ向け始めた。其處には與謝の海が柔かな寢床のやうな靜かな水を湛へてわれ／＼を迎へてゐた。海の靜けさに比べて其處らの山は目立つて高くそして嶮しい象をしてゐた。灣の中は奥へ進むほど廣くなつて行つた。右手に一番高く聳えてゐるのが西國二十八番の札所の成相山であると言つて側の人が私に教へて呉れた。軈て天の橋立が私達の眼界の物になつて來た。最初は模糊とした黒い線に過ぎなかつたのが、次第々々に海上に浮いてゐる松の形まではつきりと見えるやうになつて來た。それは成相山の麓から灣の一角を仕切つて一直線に架かつてゐた。空にはどす黒い雲があちらこちらに飛び散つてゐた。船は勇ましく汽笛を鳴らしながら灣の一番どん詰りに見えてゐる宮津をさしてまつしぐらに走つてゐた。

三

縁先きの石垣を波がザブザブ洗つてゐる。其處に舫つてある小舟が退屈さうに揺れてゐる。私の乘つて來た天橋丸は彼方の棧橋の際へ、一日の役目を了へて身動きもせずに停つてゐた。船着場の附近には幾軒かの遊女屋だの喰べ物屋などが海の方を向いて立ち並んでゐて、其の前通りの天幕張りの茶店では赤前垂の女達が頻りに客を呼んでゐた。其處らをぶら／＼歩いてゐる墮性らしい女の派手な浴衣姿などが、斯うした港に特有な自由な空氣を撒き散らしてゐる。

私は浴後の體を縁先きへ持ち出して飽かず眼の邊りの景色を眺めてゐた。遥々と遠國からやつて來たのだと思ふと、一種のかなしみとも言へる痛いやうな歎びで私の胸は一杯になつてゐた。天の橋立は私の眞正面に、其の濃い緑のかけ橋を海上に浮

かばせてゐた。

思つたより宿の設備の良い事と料理のうまいことだ私の心を一層樂しませた。私は幾杯か洋酒の洋盃を乾した。其處へ驟雨が遣つて來た。太い銀のやうな雨が劇しく海を叩いた。海も、山も、漁村も、一様に雲烟をあびて、橋立は宛ら水墨畫の趣きを現じた。其の雨の中を、簑も笠も無い漁師が安來節を唄ひながら沖の方から悠々と小舟を漕いで來た。

其昔流行つたやうな束髪に網を掛けた瘠せぎすな上品な顔立をしてゐる女が私の座敷の受持ちであつた。其の人が、天の橋立の景色を規模が小さいと言つて存外失望して歸る人も間々あると言つて私に話した。しかし私は左うは思はない。それには松島のやうな變化は見られないにしても、富士を添へた三保の松原ほどの雄大さは無いにしても、何の意匠も省畧も加へずして既に其の儘が一幅の繪である點に於て遙かに兩者を凌いでゐる。天の橋立は横物に畫いた氣品の高い南畫である。

四

雨が通り過ぎてしまつた時分には陽は灣の口の方へ沈んでゐた。紅い空も、籃色の水も、綠の山も、すべてが次第々々に浴け合つて最後には一樣に暗い鼠色に化して行つた。船着場の邊りには紅提燈を吊した家などもあつた。其の邊には既に夜のさざめき聲が起つてゐた。石垣に觸れる小波が間斷の無い饒舌を續けてゐた。

私は宿の浴衣を着て、低い足駄を突つ掛けて町の方へ出て行つた。宿の直ぐ側の魚市場の小屋の下を通り抜けると直ぐ海べに出る。腰掛茶屋は氷水を飲む客で繁昌してゐた。湯屋の暖簾を潜つて出て來る女が媚めかしい香りを撒き散らして行く。さうした女達を養つてある家が海岸最寄りの町に門並み並んでゐゐる。上方風の情味と落ちつきが町の隨所に流れてゐる。黑光りに光つてゐる千本格子、淺葱の細暖簾、舞子の下駄の鈴の音……二度と行くまい丹後の宮津縞の財布が空になる……此古い唄が自づと私の口に上つてくる。行きざりの旅の客のほしいままな慾望が私の胸にも蘇つてくる。私は一わたり町を歩いて、繪葉書など求めて再び宿の方へ戻つて來た。門先の牀几に腰を掛けて團扇を使つてゐる女があつた。雪のやうに白い顔と星のやうなまなざしが劇しく私の眼を惹いた。松嶋と書いてある暖簾を潜つて私は其の家の客になつて行つた。私は廣い表二階の座敷へ通された。間もなく其の女が私の側へ來た。女は縮みの浴衣を着て束髪に結つてゐた。

「おいでやす。ゑらう暑いことやおへんか」と女は嫣然笑つて

顔を見ながら優しい聲で言つた。外で見たより二つ三つ若く見えた。廿二三位であらう。

「旦那はん今日お着きだすか？」

「さうなんだ。今日夕方の船で着いたばかりなんだ」

「矢つ張り橋立見物に來やはりましたんだろなあ……どちらからお越しだつか？」

「京都から來たんだ」

「さうだつか。京都は嘸暑いこつておまつしやろ？」

女は斯んなことを言ひながらそれとなく私の顏色を見て

「旦那はん、麥酒でもお上りだつか？」

「飲まう」

すると女は敷島を啣えたままポン〳〵と手を鳴らして「お常はあん」と透きとほるやうな聲を出して呼んだ。

「お前の名は何んて言ふんだね？」

「わて、雲井だすへ」

「何處から來て居るんだね？」

「大阪だすへ」

大阪の新町で稼いでゐて去年の五月こちらへ鞍替へして來たのだと女は言つた。額が狹くて生へ際が非常に濃いために、新派の役者の舞臺顏のやうな感じがあつた。髱を長くした束髪に珊瑚の簪を差してゐるだけなのも好かつた。笑ふ度びに兩方の口元が一寸吊り上つて薄い唇が三日月形になるのが上方女らしい情味を殊更強く感じさせた。

仲居が麥酒などを持つて來た。斯うした場合に酒の弱い私は直ぐに醉つてしまふ。殊に自分は今丹後の宮津へ來てゐるのだと思ふと、さうした何んでもないやうな事のために著く空想的な氣分にされてしまふ癖を私は有つてゐる。

「旦那はんのお國何處だす？」

「東國は武藏の國の住人にて候」と私が大きな聲を發したので二人の女は吃驚したやうに笑つた。

「藝子はんでもお呼びやしたらどうどす？」と言つて仲居が勸めた。

「藝子は内にあるのか夫とも他から呼ぶのか」

「内にも居まへんが他から呼んでも宜ろしうございます。どれ一寸見て來まへう」と仲居は自分勝手に決めて下へ降りて行つた。

年増の藝子と舞子が一人其處へ來た。藝子の方は、見上げるばかりに勢が高くて、そして顏もそれに應じて駭く可く長かつた。其の鼻は鷲のやうで眼は梟に似てゐた。其の代り舞子の方は側に置けば[illegible]に食はれてしまひさうに可憐であつた。

藝子は三味線を取つて彈いた。そして私の注文に應じて安來節を歌つたり「天の橋立切れ戶の文珠中に切れ戶が無けりやよい」といふ宮津節を歌つたりしたが、天の成せる悪聲と其の調子外れが徒らに私の心を苛ら苛らさせるばかりであつた。其處へ又一人の舞子が來ると、兇暴な鷹は子雀を驅使するやうな態度で「泥鰌すくひ」やら「左官屋の六兵衞」やらを立て續けに踊らせた。

五

空は朝から曇つてゐた。私は宿で拵へて呉れた折詰めの辨當を携へて十時頃に文珠行きの發動機船へ乘つた。文珠迄は一里足らずの海上であつた。船は直きに切れ戶の南側へ着いた。切れ戶の幅は僅に三四十間位のものであつた。其處を小舟で渡ると初めて橋立の土を踏むのであた。

濕つた砂地へ下駄の齒がサク〳〵と心地よく感じた。小松を植えてある間を二三丁行くと陸地の幅が急に廣まつて來た。邊りの松は老いに老いて樣々に變つた形態を競つてゐた。橋立明神の祠の前に私は額突いた。其附近には「橋立や松は月日のこぼれ種」といふ蕪村の句を刻んだ碑があつたり、磯淸水と呼ぶ井戶があつたりした。「橋立や松の下なる磯淸水都なりせば君も汲まし」といふ古歌が立て札に書いてある。岩見重太郎仇討ちの舊蹟には古い石碑が建つてゐた。

幅の廣い砥のやうに平らな路が何處迄も眞直ぐに續いてゐた。兩側の松の樹や海の色に見惚れながら歩いてゐる私の後から荷を背負つた旅商人と見える親父が追ひ着いて來た。沼津の平作のやうな親父である。道伴れになつて訊くと丹波の筆屋だと言つた。

廿八町の橋立を歩き切つてしまつた處に村落があつた。漁師の家が主らしいが、往來へ沿つた處には宿屋だの茶店などがあつた。其の村落の背後から成相山へ登る急坂が始まつてゐた。私は攀し登つては木の根や岩角に腰を掛けて憩んだ。蟬が喧ましく鳴いてゐた。樹の間から碧い海がチラチラ見えた。制服の上に糸立を着込んだ學生連が威勢よく私を追ひ越して行つたり、都會の夫婦者が山駕籠に乘つて通つたりした。不意に頭の上から媚めかしい聲が聞こえて來たと思ふと、地方の小成金らしい男が宮津邊の茶屋女を幾人も引きつれて巫山戯ながら手を曳き合つて降りて來た。西國巡禮の夫婦者と一緒になつて、石に腰を掛けて煙草を喫みながら話しを聞いたりもした。其の巡禮はどちらも三十代で、容貌も野卑であつたが身なりも粗末で側へ寄ると堪へられない程汗臭い匂ひがした。

「實にゑらい坂ですなも。私等あ一番の那智山から始めて此の廿八番迄ずうつと廻つて來たが、こんな急な坂は初めてですがな」と、良人は鉈豆の煙管でスパ〳〵喫ひながら私の顔を見て言つた。

六丁登つた處に茶店があつた。其處には有名な笠松があつた。橋立を見るには此處からするのが一番佳いと昔から言はれてゐる。

今通つて來た村は直ぐ眞下に見えた。遠くには丹波の連山が見えた。其の中で最も峻しい形をした山が大江山であると言つて茶店の老婆が私に敎へて呉れた。天の橋立は此處から見ると稍斜かいに、海を二つに仕切つて伸びてゐた。濃い綠の色が海にまで溶けて流れ込んでゐた。

私は辨當をつかつて赤い毛布の上へ仰向けに寢轉んでゐた。

「君問はば見ずば知らずとこたへまし言の葉もなき天の橋立」

といふ烏丸光廣の歌が向うの建札に書いてあつた。

六

成相(なりあひ)寺迄は其處から十二丁あると道案内の木に書いてあつた。坂口は緩やかになつてゐた。茅ばかり茂つてゐる凹つこい山が奥へ奥へと重なり合つてゐた。急に山風がザハ〳〵と吹いて來た。

山門は殆んど大破して境内は何處も彼處も荒れ果ててゐた。茅屋根の本堂も遠い古の世を想はせる朽ちた建物であつた。本堂では先刻の巡禮夫婦が廊の上に座つて鉦を鳴らしながら御詠歌を上げてゐた。「波の音松のひびきもなりあひの風吹きわたすあまのはし立」と御詠歌を書いた額が眞黒く煤びた欄間に幾つも懸けられてあつた。側らの札賣場には駄菓子でも入れさうな箱の中へ御札や繪葉書を僅かばかりを並べて其の側で番人の男がいぎたなく睡り込んでゐた。繪葉書の中には昔頼光が大江山の夷賊退治の時此の寺の衆徒へ向けて加勢を促して來た下し文の寫眞などもあつた。

昔佛法を修業する一人の僧があつた。或る年の冬を唯一人の此の山寺へ籠つて暮らした。すると大雪が降つて來て、樹木も谷も雪に埋もれてしまつて里へ下りることが出來なくなつた。からして日數を過してゐるうちに僧は貯への糧を食ひ盡してしまつたが、里へ行く道が絶えてゐるのでどうすることも出來なくなつた。飢えは次第に加はつて來て僧は唯餓死するのを待つより外かに仕方がなかつた。僧は心細いこと限りなかつた。そして自ら死の覺悟を極めながらも佛前に座して一心に觀音を念じた。

「唯一度觀音の御名を唱ふるすら諸の願を滿せ給ふ、われ年ごろ觀音を憑み奉つて佛前にして饑え死なむ事こそ悲しけれ、高き官位を求め重き財寶を願はゞこそ難からめ、唯今日食して命を生く許の物を施し給へ」

すると堂の戌亥の角にあたつて大きな物音がした。僧がよろぼひ出て戸の破れから覗いて見ると、狼に噉れた猪が寺の緣先きへ來て死んで倒れてゐた。是こそ觀音の與へ給ふ物であらう、食べやうと思つたが、年來佛を憑む身でどうして生類の肉が食べられやう。僧は幾度びか思ひ返したが、何物も飢えの苦しみには勝てなかつた。僧は劍を拔いて猪の左右の腴の肉を屠り取つて鍋へ入れて煮て食べた。其の味はひの旨い事は比べる物も無い程で、飢えは忽ち止んで何んとも言へぬすが〳〵しい氣持になつた。然し直ぐ後から自身の犯した重罪に思ひあたると怖ろしくなつた。年來の修業も一朝にしてあだになつて、佛も菩薩も我身から遠ざかつてしまつたかと思ふと悲しくなつた。僧は經も讀まずに泣き臥してゐた。とかくするうち雪も止んだ。里人等は僧の身を案じて雪を分けて山へ登つて來た。

「此の寺に籠つてゐた僧はどうなつたであらう。雪は高くして人通りの跡もない。もう日數も過ぎてゐるから食べる物も無い筈だ。寺の内に人氣も無いのは大方死んだのであらう」

口々に斯う言聲が僧の耳に聞こえた。僧は先づどうにかして此猪を隱し度いと思つたが隱す場所が無かつた。自分の食べ殘した肉もまだ鍋の中にあつた。其處へ里人等は外から戸を明けて這入つて來たが、達者で生きてゐる僧の姿を見ると皆駭いて

「聖はいつたい今日迄どうして命をつないでゐたのか」と言つて不思議がつた。僧は恥じて答へをしなつた。人々は怪しんで寺の内を廻つて見ると鍋があつたから蓋を取つて見ると、其の中には檜の木の切れはしが入れて煮てあつた。

「如何に飢えたとは言ひながらよくも木を食つて生きて居られたものだ」

人々は斯う言つて頻りに哀れがつた。僧は駭いて自分も鍋を見ると、猪の肉と思つて食べてゐたのは里人の言つた通り檜の木の切れであつた。さてこそ誠に觀音の加護であつたかと僧は有難泪に咽びながら初めて仔細を物語つた。人々は駭き且つ尊く覺えて打ちつれて佛の御像の前に行つた。觀音の御像の兩の腴が生々しく切り取られてゐた。

此の咄は今昔物語に載せられてゐる。

七

元來た道を再び切れ戸迄戻つた。切れ戸の附近には樹が茂

てゐた。ちつとも流れない瑠璃色に澄んだ水中に鮒や鯵が幾らも泳いでゐた。

文珠堂は渡し場からは程近かつた。門前には宿屋だの名物を賣る店が立ち並んでゐた。山門も堂も古くて美事であつた。堂と共に保護建造物になつてゐる多寶塔は修繕中で、外圍ひがしてあるために見られなかつた。其境内には和泉式部の墓といふのもあつた。

門前には櫻や松が植えてあつて、宿屋なども相應に綺麗な家があつた。私は其處で名物のちゑの餅を食べた。其の店も古くて氣持が好かつた。

私は陸路を歩いて歸つた。文珠から二三丁來た處に涙ケ磯身投石といふ舊蹟があつた。「小松重盛の五男丹後守侍從忠房に仕へたる白拍子花松といへる者平家沒落の砌公子を敵の手に渡す事を悲み自ら抱いて此の淵に投ず時人憐んで其の跡を涙ケ磯と呼べり云々」と側らの建札に書いてあつた。淺い磯が往來の際迄入り込んでゐて、其の汀に水牛のやうな滑らかな石がだく〳〵した大きな皺を寄せて横たはつてゐる。石と石との隙き間から松の木が一本生えて低く這つた枝を水の上まで差し出してゐる。誰が植えたものか其の松の根方には一株の紫陽花が盛りの花をつけてゐた。向うの洲には一面に葦が茂つてゐて、其の上を赤い蜻蛉が群れて飛んでゐた。

往來から一寸這入つた處の山寄りの方に可成り大きな塚があつた。塚の上には石がごろ〳〵してゐて、大きな松の樹が幾本も立つてゐた。それは鷄塚と言つて、丹後守公基朝臣が和泉式部の眞蹟を埋めた塚であるといふ。それから尠し行つた處に一杯水と言ふ舊蹟がある。路ばたの山の岩間からタラ〳〵と清水が湧き出してゐて、其の側に延明地藏尊が安置してある。其れも同じく和泉式部に關する舊蹟で、彼女が小式部内侍を産み落した時此の清水を掬うて飲んだと傳へられてゐる。

和泉式部が丹後の守に任官した夫保昌に從つて此の國へ下つた時、娘の小式部内侍は都に殘つてゐた。或る時京に歌合せがあつて小式部内侍も其の仲間に加へられたが、其の時定頼の中納言といふ人が戯れに彼女に向つて「丹後へ遣はしける人は參りにたりや」と言つた。それは小式部の歌道に於ける手腕がまだ信用されてゐず、おうかた母が代作するのであらうと誤認されてゐたところから、「丹後の母君の許へ歌乞ひに遣はした使者は歸つたか」といふ意味でからかつたのであつた。すると小式部は御簾の中から半身乘り出して定頼の直衣の袖をひかへながら

大江山いく野の道の遠ければまだふみも見ずあまのはし立

とよみかけた。定頼の中納言は「こはいかに」とばかり返しにも及ばず顏を赤くして、袖を振り切つて其の場を遁げて行つた。それ以來小式部内侍の歌道に於ける天才が世に認められた。

小式部が丹後國で產れたものだとすると、此の名高い歌の意味と抵觸するやうである。然しそんな事は私の問題ではない。一個の歌人に過ぎぬ和泉式部が丹後國を飾る歴史の中で最も重要な人物にされてゐるのが私にとつては何より嬉しく思はれた。

宮津の町はもう直ぐ眼の前にあつた。

八

十二時頃から三味線の音が何處にも聞こえなくなつた。町の方はとうにひつそり靜まつてゐたが、海岸の邊りはまだ凉みの人が殘つてゐると見えて、時々甲高い女の笑ひ聲などが蒸暑く澱んでゐる空氣に響いて聞こえて來た。

裏通りの家の屋根と屋根との間から朧月に照らされて海が鉛のやうに薄白く光つて見える。漁り火か星かと思はれるやうな火がところ〴〵にチラホラ燃えてゐる。

裏二階の廊下に一脚だけ置いてある椅子に凭れて私は夜更けの凉味を貪つてゐた。重苦しい空合ひが私の胸に明日の天候を懸念させた。

「あすは降りだらうか？」と私は空を仰ぎながら半ば獨り言のやうに言つた。

雲井は手摺りに凭り掛つて輕く團扇を動かしてゐたが、矢張り空を見て

「さあ、どうやしらん？」斯う言つて今度は私の顏を上から見下ろしながら「若し雨やつたら、も一日お泊りやすへなあ」

「否、船さへ出るなら、雨が降らうと鎗か降らうと明日は發つ」

しかし、雨の中を行く船の旅の佗しさを私は考へた。女もそれきり默つてしまつた。私は新しく行く先きの土地を想像して見たりしてゐた。

軈て私は獨りで蚊帳の中へ這入つた。初めて晝の疲を身に覺えて、手足を踏み伸ばしてゐると何んにも思はない安息が其處にあつた。何處もかもう全く靜かになつてゐた。何か考へてでもゐるやうにいつ迄も手摺りに凭れて立つてゐる雲井の顏と、時々フハリフハリ動いてゐる團扇だけがほの白く私の眼に映つてゐた。

法界屋の月琴の音が海岸の方から段々近づいて此の横丁へ這入つて來た。其の浮かれたやうな調子を持つた響きが私を淺い

踊りから呼び醒ました。踊り子達の氣だるさうな足音が手に取るやうに聞えた。

「今晩は――」雲井は手摺りに摑まつて下を見ながら聲を掛けた。いたづらに流して來た月琴の音と足音がぱたりと止んだ。

「今晩は――えらう暑うおすなあ」と、往來から錆びのある男の聲で應へた。

「ほんまに暑うて寢られへん――あんたはん景氣はどうだす？」

「滅茶や。てんとあきまへんわ。斯うなればやけくそやな」そしてあたりを憚るやうに笑つた。

「ほんまにここは不景氣やさかい……」

其の後でまだ一と言二と言話してゐたが私の耳にはよく這入らなかつた。

「さいなら、おやすみ――」と下から言つた。

「さいなら――」

法界屋は無意味に月琴を鳴らしながら向うへ行つた。表通りへ出るとそれに拍子木を交へて急に騷がしい曲を彈き出した。

雲井は蚊帳の中へ這入つて來て直に火をつけて私に與れた。

「お前は今の法界屋を識つてるのかい？」

「識つてますへ。あの人大阪の人でしてなあ、新町に居つた時分よう懇意にしましたさかい」

「其の時分も矢つ張り法界屋をしてゐたんだね」

「いいえ、そやおまへんわ。あの人の兄弟は皆役者でしてなあ、玉造いふとこの芝居へ出てゐやはりましたが……それが先月うちの前で法界屋が來ましたさかい、見ると其の人やおへんか。先きでもわたいが此處へ來た事知りまへんよつて驚いてましたわ。芝居へ出て居ても儲からんよつて止めて今の商賣始めた言ふてゐやはりましたが、丁度惡い時來ましたさかい、踊り子を三人も連れて、旅へ來てこない不景氣では難儀な事だろ思ふてなあ」

雲井は一寸引き入れられるやうな調子で斯う言つた。

「すると、お前のもとの馴染みといふわけだね」

「阿呆らしい。あの人のお宅も新町やつたから識つてるだけやわ。」

と、雲井は何んだか汚らはしい事でも聞いたといふ風に大袈裟に顏を顰めて言つた。其の誇張された表情が反つて私に反對の事實を想像させた。私は無意識のうちに輕い嫉妬を心に感じながら、一方では自分の想像が事實であつて欲しいやうな氣持がしてゐた。

小芝居の役者から法界屋に零落して漂泊してゐる男の身の上に私は取り留めのない空想を走らせてゐた。月琴の音は遠くな

つて夜更けの空氣の中にすすり泣くやうに、微かに聞こえてゐた。

九

雲井は私に向つて何か紀念になる物を吳れと言つた。私は持ち合せの白扇に斯う書いて與へた。

たちかへりふたたび來とも君ゐずばさびしからまし天の橋立

宿へ歸つて遲い朝餉をしたためた。昨夜空模樣を案じたのは杞憂に了つて、朝から烈し過ぎる程の陽が海の上を照り付けてゐた。午後一時の出帆の時刻が迫つて來る迄私は宿の座敷に寢そべつてゐた。新たに行かうとする變つた土地に對する憧憬れと、一日でも二日でも暮らした此土地に對する執着と、其二つながら私の胸を領してゐた。「また來ることがあるだらうか?」私はさう思つて沁々と橋立を眺めた。

一昨日（をとゝひ）乘つて來た天橋丸が棧橋へ横着けになつてゐた。乘り場の邊りにはもう可成り人が見えた。私は手早く身支度をして宿を出た。

船の發着所のすこし手前の處で

「旦那はん」と、私は横合ひから不意に呼び留められた。

狹い横丁の僅かた日陰に身を寄せて雲井が佇んでゐた。白絣の着物に輕さうな帶をしめて白粉氣無しでゐるのが、夜眼とはまるで變つた素人らしい感じを與へた。

「わてさつきから待つてたのだつせ。あんたはんほんまに緩り構へてゐやはりまつさかい」

「送りに來てくれたのかい。それは濟まないな。さうと知つてりやもつと早く出て來るんだつた」私は眞實嬉しく感じて其の側へ寄つて行つた。

「もう時間おまへんやろな」

「なに、またすこしぐらゐ大丈夫だ」さう言ひながらも私は時計を出して見た。もう五分ぐらゐしか餘裕はなかつた。

「矢つ張り大社の方へ行かはりまつか?」

私は城の崎溫泉で一泊してあれから出雲の大社迄行く豫定であつた。然しこれ迄とても私の旅は滅多に豫定通りにいつたことはなかつた。此の時も既に、氣まぐれな私の計畫は動搖しかけてゐた。

「さあどうしやうかと思つて實は考へてるんだ。とにかく船に乘つて見た上で、舞鶴迄行く中に何んとか決めやうと思つてね」

「呑氣な事言うてやはる。それくらゐなら、いつそま一日此處へお泊りやすへなあ」

「それはいけない。此の上愚圖々々してゐて、歸るのが厭になつてしまふと大變だからなあ」

女はにつと笑つたばかりで其の上引き留めやうとはしなかつた。船からは「ポーポー」と合圖を鳴らし始めた。待合所にゐた旅客は一時に棧橋の方へ步き出した。

「それぢやいよ〳〵お別れだすなあ」と雲井は名殘りを惜しむといふ風に言つた。

私は默つて麥藁帽子に手を掛けた。

「さいなら。ようおいでやすや」

私は驅け足で棧橋へ行つた。もう旅客は悉く乘り移つてしまつた後で、水夫が忙しさうに碇綱を手繰つてゐた。

甲板の上に立つて私は陸の方を見た。波打際の石垣の上に雲井が立つてこちらを見てゐた。船は靜かに動き出した。

次號の說苑欄には、井箆節三氏の

私有財產制度の話

と云ふ百枚の長篇掲載せるべし

運動を通じて世界化しつゝある日本

黒頭巾

其一

●東京にては、此の春ほど、麗らかにして、のどかなる快晴の續きしことは、二三十年、極めて稀なりしなるべく、元旦より七草に至るの間、一夜の雨、半日の風ありしのみ、眞に、大平和の第一春の氣分を表はせり。

●福壽草は、暖日を慕ひて、うゐ〳〵しく咲く。初春の、晴れて風無き日に、日光の、軟和に照らすほど、快よきは無し。此の花に、幸あらしめよ。空には、美しき鳩舞ふ。

●此の麗らかなる春に、東京、羅馬間の大飛行の、壯擧が實施さるべきを聞く。若し、此壯擧にして、豫定の如く進行せしめば、一月の末には、羅馬の飛行機は吾が東京に達するなるべし。

●雄大なる戰鬪巡洋艦に駕して萬里の波濤を破るとも、東京より羅馬に到るは、蓋し輕々しき事にはあらず。それを、大鵬の如くに飛んで到るは、痛快ならずや。

●渡鳥は、その小さきものと雖、能く大海を踰えて南北に往く。然れども、渡鳥も未だ羅馬より東京に來らず。

●古、縮地の術ありて、諸葛孔明の如きは、これを能くせしと傳ふ。然れども、孔明の縮地の術といふは、僅に、支那の一部、蜀と魏との間に行はれしに過ぎず。これを羅馬、東京間の縮空の飛行に較ぶれば、固より言ふに足らざるなり。

●聖德太子は、天馬に跨りて、富士山、筑波山などと、飛びあるき玉ひしと傳へ、或は、弘法大師、入唐の際、飛んで靈鷲山に至りしなどとも傳うれども、その事實の眞僞を保せず。若し眞事實ならしむるとも、これを羅馬、東京間の飛行に比すれば、頗る短距離の飛行たるに過ぎず。

●水滸傳に、神行太保戴宗は、神秘なる法馬を腰に帶びて健行することと風の如くなりし事を載す。然れども、その長距離の健行といふも、一大陸を出でず。況んや、大海を踰え、高山を

え、東半球を飛過するをや。

●大阪の名所圖會に、近松の女腹切の舞臺たる長町の傘屋の少年が、大風起りて傘を飛ばすとき、その柄を執つてとどめんとしたるに、却つて、柄につかまり長風に送られて遙に南洋に到りし事を記す。若しこれを事實とすれば、此の如き、小さき偶成の飛行機によりて、長天を航空したるものは、東西に匹敵無かるべし。

●傘の柄につかまりて、大阪より南洋に到るは、精妙なる飛行機を操縦して、羅馬、東京間を航空するよりも、更に奇蹟なりとすべし。然れども此の事、夢の如し。夢は、再び同じ夢を見ることを期し難し。

●大阪、南洋間の傘の飛行の夢よりも、羅馬、東京間の航空の事實は、遙に大なり。古人の想像したる夢の世界よりも、今人の活きつつある事實の世界の大なるを見よ。

●「事實」を發光體とすれば、それより發する光線は則ち「理想」なり。文明の進歩といふは、發光體の膨大と、及び發光力の進展とを意味す。今人の、理想の世界は、日にひろがりつつあり。

其二

●羅馬より東京に航空し來るとせば、東京よりも、他日、羅馬に向つて答訪せずんばあらざるべし。それが出來ざるようにては、日本人は、天上に、面目を失ふものなり。

●飛行機の輸入は、確かに日本を世界化すべく、緊切に、一歩を進めたり。眼は地上に注ぐ。地、盡くれば海に注ぐ。今日本人の眼は、海を超えて、天空に注ぐ。

●陸軍の飛行機のみを見る頃には、飛行といふ事だけにも驚嘆したるは、小兒の始めて能く歩む時には、歩行するだけを喝采するが如くなりし。ナイルス、續いてスミスの來るに及んで、始めて、疾行、健驅する韋駄天を見たるなり。

●韋駄天、出現するの後、歩行はいふに足らず。たとへ能く韋駄天たらずとも、疾行、健驅するに非れば、人を滿足せしめず、自らも滿足せず。此に於て、遠距離の航空は始まる。

●今の吾が航空界は、これを歐米に比すれば、實力、懸絶す。試みに、その數を以てするも、彼のは、鷙鷹、長空を掩ふて群飛するが如く、吾のは、家禽の、樹下に逍遥するにも似たるべし。氣慨ありと雖、今、突然として、彼を凌駕せんこと容易に非ず。

●然れども、空界に於ても、吾、遂に、彼を凌駕せずして已む可らず。郵便飛行、可なり。還空飛行可なり。その數を增し、

その翼を健やかにし、群飛、長鳴して、吾が飛行機が歐洲の天に、姿をあらはすの日を待つ。

◉吾が地上の韋駄天は、今に於て、多く、碧眼兒に遜色無きに近し。天上には未だ健飛の鳥人出でず。鳥人出でよ。此の麗らかなる大空に、鳥人、出でよ。

◉アート、スミスが、飛行機と自働車との、空と、地上との競走を見せたるは、日本人の爲には、諷刺たらずんばあらざりき。日本に於ては、天上の鳥人、地上の韋駄天を追掛けつつあり。而して鳥人、未だ韋駄天に及ばざるなり。

◉今の飛行協會は、規模なほ甚だ小さし。日本が天空を征服する爲には、此の如き少數の鳥人のみにては足らず。

其三

◉將來、世界的大戰が天上に出現し、鴉合戰の、それの如く、折れたる翼、傷ける鳥人、紛々として高空より落下し來るの日あるべし。その大戰を記するの筆も亦た飛行機に於てせざる可らず。

◉兩棲動物あり、水に棲み、また能く地上に棲む。然れども、未來の人間は三棲動物たらずんばあらざるべし。則ち海上に、地上に、また併せて天上に棲むべく、民族の抗爭が、今、地上に行はれつつあるが如く、やがて、天上に於ける、民族の大抗爭起るなるべし。

◉詩も、音樂も、劍の光も、鳥人によつて天上に榮えるの時來らん。プルタークも、バイロンも、天上に輩出して、鳥人を傳ふべく、天上の觀戰も記されん。

◉今、幸に、眞に幸に、海外の飛行機、未だ日本に來らず。日本の空は、ペルリ渡來前の日本の海の如く。未だ世界的に開放されざるなり。羅馬よりダヌンチオ、若し吾が東京灣の大空に、その雄姿をあらはすことあらば、彼は『天上のペルリ』たらずんばあらず。

◉東京灣の防禦は、地上と、海上とに於て、金城鐵壁の如し。然れども、天界に向つて未だ防備の、人意を强くするに足るものにあらず。此の見地に於て、ダヌンチオ航空來の報は、日本人を寒心せしむるに足る。

◉ペルリがアメリカを出發するまでには、非常の準備を要し、それに對する議論も亦た紛起せり。然れども彼が一たび日本に來りしより、彼に倣ふ者、續々として出で、無數のペルリ日本に來れり。

◉ダヌンチオ、若し一たび日本に來らば、第二、第三のダヌンチオ、續いて來らん。かくの如くして、日本の空も亦た開國さ

れて、「世界的の空」、日本の地上に懸るべし。

●實に、ダヌンチオ來るべきやは、未だ確かならず。然れども、此の如き壯擧、既に、一たび決心されたる上は、ダヌンチオ來らずとも、彼に代はるべき第二のダヌンチオ必らず來るべし。

其四

●天上のダヌンチオを羨む。彼は、想を載せ、筆を載せて、天上に雄飛す。古來、天上、未だ此の如き壯圖無く、如の如き文豪無し。

●風雲に際會し、筆を執る手を以て、飛行機のハンドルを操縦す、既に男子の快心事とするに足る。彼が卒然として、空界に戰ひしを見れば、彼は航空に素養ありしを知るべし。

●彼は、南歐の代表的文豪なり。日本の文豪が機上に雄飛するの日ありとせば、そは、恐らくは遠き未來なるべし。

●歷山王、シイザルの夢の跡、ホーマーの詩の背景、釋迦の獅子吼の舞臺、孔子の國、立馬吳山第一峯の一句に壯心を寄せし山、すべてダヌンチオの機の翼の下に、遠く、小さく見ゆるならん。

●人間としては、彼の如き、冒險、敢爲の精神の發揮は、殊に、敬意を表するに足る。況んや、彼の年輩、閱歷、想思を有して、此の若々しき。壯圖を試むるに至つては、欽羨するに餘あり。彼が、雄々しく翼をひろげて、東海の天に來る頃、山、悉く笑ひ、花、悉く咲き、草木、悉く搖曳して、彼を歡迎せよ。

●彼が、翼を、大邱にやすめて、飛んで吾が本土に來るとき、吾輩、まさに海峽に淹留して、天上の雄姿を目送せんことを期す。彼は、高飛の鳥と同じく、その影を、遠く、麗らかに、地上に落しつつ來らん。而して彼の來る時、日本人の眼、一齊に、悉く、仰いで天上に向はん。

●歐洲戰のとき、佛、露の間を、獨逸の空を、高く越えて、飛過せし女流飛行家ありし。女にても、能く敵地の空を飛過すとせば、ダヌンチオの雄圖も、怪しむに足らず。

●彼、碧眼兒が、壯心を天上に逞しくするに至るは、必ずしも彼等が、日本人よりも勇悍なるにはあらず。彼等が、「運動の精神」旺盛にして、老に至つて衰へざるは、その一要因なりとすべし。冒險、敢爲の志のみにては足らず、體力、習性の、これに伴ふものあるに非れば能はず。

●今の天上界には、唯だ「白禍」ばかりにして、未だ「黃禍」無し。カイゼルの誇張せし「黃禍」は地上の事のみ。地上に、海上に、及び天上に、あらゆる方面に、日本人の運動の精神、磅礴するの後にあらざれば、天上に「黃禍」起らず。

●剛健にして活潑なる少年は、自ら運動慾の衝動を抑うる能はず、野外にあれ、室内にあれ、飛びまわり、跳ねまわりて已まず。日本の紳士の運動の趣味、此の如く徹底するに至るとき、文壇にもダヌンチオ始めて出現せん。ダヌンチオ、來る。日本人が羅馬に向つて一矢、能く相酬うるの日の遠からざらん事を冀う。

其五

●去年の晩秋、隅田川に於て、擧行されたる帝大と早大とのスライデイング、ボートの競漕は、近來の快心事なりし。時は、ボートの季節にてもあらざるに、墨堤の觀衆、十萬人。實に、滿都の耳目を集注す。此の事、啻に、運動上の一大事實として見るべきのみにあらず、吾が青年の趨勢の進運を徴するに足る。

●スライデイング、ボートの競漕の顯著なるものは、日本にては、これを以て嚆矢とす。而して此の時に用ひしボートは漕手六人、それを今年よりは八オールに改めて、その競漕距離を延長し、全く、ケンブリツヂ、オツクスフオルド二大學の競漕と、その內容を同じからしむべしといふ。

●日本の大學は、課程も進み、すでに歐米と交換教授も行はること數年。學課に於て、世界化せるも、その運動に於ては、なほ矮人模倣の態を脱する能はざりしなり。

●テニスが、軟球より硬球に進み、東京の第一流のマツチは、悉く硬球を以て行はるに至るべし。これテニスに於ける世界化なり。軟球は、寧ろ日本人に適すとの議論ありしも、それは便宜上の立論にして、硬球の、更に、興味深きに若かず。

●硬球に於て、熊谷、三神等が、米國にて選手として著聞せし事實は、日本人が硬球に於ける能率を代表せしものともいふべく、此の事、またテニスの硬球說を促がせる有力の一動機となりしを疑はず。

●然れども、硬球の利を知つて、改むる能はざりしは、專ら經費上の關係のみ。軟球は、やすくて、硬球は、たかし。今日の時勢となりては、その稍、たかきといふも驚くに足らざるものとなれり。

●日本にて、硬球は、先づ紳士より始まり、學校にては、慶大を先鞭とせしが、今や、俄然として硬球に、各、專門學校のコートを占領するに至れり。地方の中學などにては、なほ當分は、軟球を使用すべきも、テニス界の大勢は、既に、硬球に移れるなり。

●若き三神が、去年、不幸にして、海外に客死せるを以て、彼の知友は、一には、彼を記念すべき爲に、硬球の一大コートを

東京に造りて、テニスの進運に貢獻すべく、彼の遺産の一部も、その爲に提供せらるべしと聞く。

●野球の選手が、十數年前より早く、海外遠征を試みたるに、テニスが、外國と、その名を同じくしながら、外戰するを得ざりしは、大選手無きに非ず、彼は硬球、我は軟球にして、彼我、その實質を異にしたるに由る。

●テニスに於ける、軟球は、或意味に於ては、これを翻譯テニスなりともいふ可かりし。その趣味、その感覺に於て、譬へば西洋風の日本家を以て、洋館と見做すと、多く異なるところ無かりし。

●野球の外戰軍の記事が、青年を引く如くに、テニスの在外選手の名が、興味を惹かざりしは、硬球が、未だ一般的興味とならざりし故なり。

●硬球が、東京の青年を風靡するの後、數年ならずして、斯界の選手、續々として外戰を試むること、野球と同じかるべし。此の如くして、テニスに於ても全く世界の日本とならん。

●學校に於ける從來のフィックスド、ボートが、スライヂング、ボートに改めらるるは、軟球が硬球に改めらるるよりは、困難なるべし。然れども曙光は既に來れり。隅田川に、スライヂングボートの群が、その麗はしき姿を並べて浮ぶも、甚だ遠きにはあらざるべし。

其六

●「帝大」が、一般、學生運動の競爭圏に投じて、始めて早大と、競漕を試むるに至りたるは、帝大の爲に賀すべきのみにあらず。此の事、注目に値すべき社會的事實たらずんばあらざるなり。

●從來、帝大は、ボート。野球。テニス。ランニング、その他、運動の各方面に、錚々たる選手の多くを有しながら、毫も、一般の運動界に出動し來らず。ランニングに於て、オリンピック競走に、僅に二三人參加する外には、絕對に、超然主義の堅壘に籠城して、敢て、出でて戰はざりしは、大學の學風の爲に惜むべき事なりし。

●今や、帝大は、翻然として、その舊態を脫し、超然主義を擲ち、あらゆる方面に、出動し來らんとするは、偶、時運の反映たるを失はざるも、能く、今日の時宜を逸せず、進んで陣頭に立てるは多とするに足る。

●超然主義が、世界的進運の今日に持續せらる可らざるは明らかなり。政治上の超然主義が廢れしと共に、運動上の超然主義が廢せられたるも、また興味深き事實にあらずや。

●運動上の超然主義は、一面に於て、消極的なり。保守的なり。保守的、消極的の精神が、超然主義となれるなり。退いて守るは、進んで戰ふに若かず。如何なる「海中の堅礁」も、日夜、進撃して已むことなき海潮の勢力の爲に侵蝕せられざる能はず。頑として守ると雖、退守する者は、終に亡びん。

●帝大のテニス部を球戯部と名づけしは、超然主義のあらはれたるものなり。運動は、遊戯にあらず、青年の元氣を象徴す、併せて民族的精神を表現す。

●過去は多く語るを要せず、吾輩は、帝大が運動上に、超然主義を捨てたるを喜ぶ。而してその影響が、必ずや、内外、ともに好結果を齎らすべきを信じて疑はず。

其七

●東大が十四年前より、京大と、テニスに於て、對校マッチを始めたるは、斯界に於ける影響多き事實なりし。その理由は、斯道を練磨し、併せて東西兩大學の學生の親睦を圖るといふにありし。

●今日に於ては、帝大は、唯だ、東西の二京のみにあらず。宜しく全國に帝大を聯盟せしめて、一大マッチを擧行するを要す。

●帝大といへば、殆んど東大を目標とす。大學の對抗マッチが、唯だ東大、京大の二大學の間に限られたるも、もの足らず。對校マッチは、唯だ運動の伎術を爭ふにあらず、學生の元氣を鬪はす。

●學生の元氣といふは學風なり。對抗運動に於て、その勝敗如何に係らず、運動場の雰圍氣の中に、兩者の學風の抗爭するを見よ。

●對抗マッチは戰爭の如し。今の戰爭は、軍人の戰爭にあらずして、國民の戰爭なり。此の意味に於て、對抗マッチを觀るは、學風を觀る所以にして、何人にも興味あり。

●全國に散布せる幾多の帝大は、悉く、その超然主義を擲ち、東大と歩調を一にして、運動界に、出陣し來るべきを期待す。

●二京の大學のマッチは、對校抗爭とはいへども、元來、親類同志の競技にして、勝つも、負けるも、敵愾心少く、戰氣の緊張は足らざりし。超然主義と超然主義とのマッチにして、その戰跡は、世界的ならざりし。

●從來、テニスに於ては、二京の大學に、多くの優秀なる選手を有しながら、高校より大學に進むの後、多く、伎倆の向上を見ざりしは、這般の空氣の中に練習したりしが故なり。

●一高と三高とのボールのマッチが、斯界の呼物となれるは、

そのマツチが特殊の歴史を有するのみならず、彼等が一面に於て、つねに他流試合を爲し、その抗爭が超然的ならざればなり。

●革新の衢に立てる東大と、京大との、テニス、マツチも、戰氣、これより振はん。去年冬、此の二大學が始めて試みたる野球マツチは、十分に緊張したる好戰績を示せしといふにあらずや。

其八

●運動に於て、外戰を試みしは、早大を始とし、慶大、明大、すべて私立大學なりし。帝大は、僅に二大學間のテニス、マツチを積行せしに過ぎず。然れども、運動に於て、革新されたる帝大は、將來、必らずバツト、若しくはラケツトを提げて、海外に戰ふの日あるべし。

●米國の大學生の野球團が、嘗て東京に來り戰ひしとき、日本の紳士は、或は、彼等が嬉々として活潑に運動し、運動の爲に、外國に往くの、餘りに若々しきを思ひし者もあるべし。彼等が子供らしきに非ず、實は、帝大が、大人らし過ぎたるなり。

●超然主義を擲ちたる帝大は、選手を、海外に送るまでに至らざれば、革新の精神は徹底されたりといふ可らず。革新は徹底するを要す。

●世界的となれる日本人の民族的精神は、運動の選手が踏破せる足跡に由つて、世界に發表さるべきなり。

其九

●世界に乘出せる日本人の眼界は、五十年來、ますます擴大しつゝ、その精神は壯大となり、その事業に於ても、趣味に於ても、すべて規模の大仕掛なるものに非れば、滿足せしむるに足らざるに至れり。これ社會の各方面の現象に照らして明らかなる事實なり。

●青年時に於て、諸般の精神を涵養しつゝあるものは運動ならずんばあらず。學校、その他、身邊の事、一も、未だ世界的に、誇榮すべきものあらざるに、早く、既に、青年の精神を、世界的に導くものは、ひとり運動あり。

●今の陸上運動は、すべて記錄を主とす。記錄の標準とするものは世界的なり。藤井實が、棒飛に於て、金栗四三がマラソンに於て、ともに世界の記錄を破りたりといふようなる事實は、青年をして世界的たらしむ。

●陸上運動は、世界的に改良されつゝあれども、觀るだけの興味は、野球、またボートレースの如くに熱狂的ならず。今の陸上運動は、唯だ記錄を造るの興味といふも妨げず。

●然れども、その記録が、世界的に考へらるゝが故に、記録が靑年に及ぼす影響の大なるものあるは勿論なり。

●日清戰爭の頃までは、ランニングといふも、千メートルくらゐを長距離としたるに、マラソンの輸入されしより、二三十哩の大仕掛に及び、終に、七百哩、東京、下關の間の遠走を遂行するに至る。

●水泳も、大阪每日新聞社が、十哩の遠泳の競爭會を開きしより、連年、遠泳の傾向、諸方に波及しつゝあり。海に、陸に、運動の大仕掛を加へつゝあるは、その風潮なり。

●社會の進展は、數字の觀念にあらはる。今の運動は、數字を以て測り、その數字は世界的に考へらる。

●新世紀の人の頭は數字を離れず。而して雄健なる民族的精神の發揮と、精緻なる科學的思想の應用とを以て、靑年時代に數字を體得せしむるものは、運動なり。

●漕げばピッチの幾本。走れば一秒、一分、若干メートル。バットを執れば打擊率の若干といふ。今の運動は數字なり。數字の微妙なる差を爭ふが、即ち運動場裏の抗爭なり。

●若し、運動上の、極めて感興的なるマッチをあらはすに、數字を以てするを得ば、その結果は、直線的にあらずして、曲線的たるべく、コニック、セクションのパラボラ線を描き成すべし。

其十

●今、此稿を草するとき、極東訪問の第一機、一月八日を以て羅馬を出發したるを聞く。續いて第二機以下、第五機まで、順次、出發すべく、長途、恙無く、來らしめば、第一機は、一月三十日、東京に着すべしといふ。

●此の快報は、今更に、人の心胸を躍らしむ。則ち此の册子が、讀者に交付せらるゝ頃、羅馬の花の薫、まだ褪せざるプロペラの音、東京の空氣を震はすの時ならん。

●此の春より着手して、此の秋、初、八月の終頃までに完成すべき芝浦に於ける東京野球倶樂部のグラウンドは、日本の野球を世界化し、野球を國技として、日本人の民族的精神が野球を透して、國際的に表現せらるゝの檜舞臺たらずんばあらざるべし。

●野球は米國人の國技として知らる。然れども、吾輩は、野球が日本の國伎となるべく、また、これを國伎と爲すの趣味と能率とある事を確信す。今日までの趨勢に徵するも、日本の運動に對する社會的興味の中心は、やがて野球たるべきは疑無し。

●日米の深き連鎖は、野球にもあらはる。米國はペルリを送り

て、日本の門戸を開き、維新後には、野球を送つて、日本人の趣味を開けり。運動場に於て、社交の裝を脱して、運動シャツを著け、天眞爛熳たる精神的の握手に於て、日、米人の勇氣と友情とを交換するものは、野球なり。

◉歐洲人は野球を爲さず。米國人の到るところには、野球必らず伴ふ。日本武士の到るところに日本刀が伴ひたるが如し。日本刀は日本魂の寓するところ、バットは米國魂の磅礴するところ。

◉米國軍艦が横濱に來泊するとき、水兵の野球團が、東京、横濱に於て、吾が選手とマッチを試みしは、吾が野球の發達に、多くの刺激と、經驗とを與へたり。日本人が運動に於ける國際マッチは、米國の水兵にはじまる。

◉歐洲大戰の際、米國軍が戰場に留與したる趣味の記念は野球なり。西比利亞に、米國軍が派遣せられしときも、野球道具の多くが、本國より送られたり。大平和の今に至つて、佛國に、バットの響が聞かるゝに至る。恐らくは佛國人も、將來、野球に熱狂するの時來らん。

◉米國兵は、塹壕を出でゝキャッチ、ボールを樂しみ、時に、戰の隙には、マッチを試みしこともあるならん。若し、日本兵が、此の大戰爭に、大陸の塹壕生活を送りしとせば、野球に代はるに、果して、何の運動を爲したるべきや。

◉吾輩、つねに旅行を好んで、四方に遊歷するに、山村僻地の校庭に於ても、小學兒童が、ゴム球を以て、野球を樂しみつゝあるを見る。道路に於ても、往々、吾が俥、少年の野球仕合を横斷することあり。力士の野球團すら有り。

◉野球とダリアとは、海內に遍ねし。他日、日本の兵士も、寸暇を偸んで野球を樂しむの時、必らずや遠からずして來るべし。

其十一

◉野球の技術のみを見れば、日本人は甚だ巧なり。然れども、今日までの經過に徵すれば、打擊力と、打擊率と、遂に米國人に及ばず。投球の速力に於ても、彼に若かず。日本人には、直球に快速力を有する者あるも、曲球には速力緩む。彼の投手は、則ち快速力を有する曲球を、自由に送りて、吾が選手を壓倒す。

◉若し、それ捕手、壘手が投球のモーションを見れば、日本人をして垂涎せしむるに足るものあり。彼等は、送られたるボールをミットに收むるの刹那、直ちに、これを任意の方向に投ずるに、別に、準備のモーションを爲さず。日本の選手は、その

强肩を誇る者と雖、如何に素早くするにせよ、一先づ、投球の姿勢に移るの後にあらざれば、受取つたるボールを直ぐに投げるを得ず。

◉如上の事實は、日、米人の體格、體力の相違の問題にして、これによつて見れば、日本人は、根本的に、野球に於て、到底、米國人と比肩するを得るの見込無きやに見ゆ。

◉然れども、吾輩の所見を以てすれば、此の如きは、必ずしも、日本人の野球に於ける造詣を運命づくるものに非ず。將來、吾が野球の發達に隨ひ、魁偉、有力の選手、濟々として輩出するに至ること、力士の、それの如くなるべし。

◉西洋人より見れば、角力取りは、矮短なる日本人の中にて、別人種の如くに思はるべし。決して別人種にてはあらず、角力の發達の結果なり。

◉一面に於て、醫學の發達、今日の盛なるに際し、醫學上より野球を研究し、投球のモーションに對する筋骨の動作も、研究の一要目たるを得べく、啻に、技術の實地、練習のみに止めずして、根本的に科學の力を應用し、日本人が野球に對する徹底的研究の進捗する曉、堂々たる世界的選手が日本のグラウンドに生れ出るの日も、蓋し期し難きにあらず。

◉如上は、吾輩の空想にあらず。日本の、優秀なる選手も亦た此の事を自覺しつゝあり。野球は、單に、筋骨、體格の問題にてはあらず、精神、智識の力が、興味と精彩とを以て表現せらるゝ運動の方法なり。

其十二

◉新に創立されたる東京野球倶樂部のグラウンドは、芝浦埋立第一號地の中央に位し、芝橋より三丁。金杉橋、薩摩原、札の辻等の電車終點より十分間以内にて達するを得べく、院線の田町驛にも近接するを以て、交通の衝に當り、大體に於て、東京の、明かるき要地に在り。

◉輓近、東京に於ける注目すべき運動マッチには、郊外、近縣よりも來觀する者少からざるは、國技館の大角力のみにあらず、此の意味に於て、品川灣に面する此のグラウンドは形勝の地たるを失はず。

◉此のグラウンドの設計の大要は、正方形の敷地にして約一萬坪、四方、悉く道路に境し、競技場、觀覽席、その他附屬建物等を建設して、尙ほ多少の餘裕を存す。競技場の面積は約三千四百坪。

◉グラウンドの設計は完全ならん事を期し、雨後と雖、直ちに競技をなし得べき爲、內野、その他の主要なる部分に、盲下水

を設置して、排水を疏通す、冬期は、キャンバスを以て、地面を覆ひて、霜解けを防ぐ。

●觀覧席は、殊に、歐米各國の實例を參照したるものといふ。その坐席の收容人員は、約三萬人の程度とせるも、必要に應じて、約四萬人を收容し得べし。

●觀覧席の構造を語れば、メイン、スタンドは鐵筋コンクリートの建築にして、階段は四十八段、その最高部は地上四十尺、その總幅は百十餘尺、總長の外側に於て、約七百五十尺。一段の幅は二呎三吋。

●坐席は、その最下部に於て、競技場面より五尺五寸の高さを有し、中央に、貴賓席を設く。ボックス席は各、約一坪にして、六脚の椅子を備ふ。蓋し、輓近、野球の發達の趨勢を以て推せば、天覧、台覧を辱くするを得るの日、遠きにあらざるべし。

●吾號は、此の上、多くグラウンドを說明するの必要を有せず、唯だその設計が世界的なることを說明すれば足るべし。

●外國に於ける運動場の顯著なるもの丶中、エール大學のフツトボールのは全面積約二萬坪、その競技場は四千二百坪、七年前の建造に係り、最大收容の實例は三萬五千人と號す。野球の大舞臺として有名なる紐育のポローのグラウンドは、競技場の面積約四千坪吾が芝浦のより廣きこと六百坪。

●試みに、フリー、ノックを爲すも、球を飛ばすこと、通例五十間ばかりに過ぎず。三千坪のグラウンドは、大飛球を容るゝに足る。然れども、先年、三田のグラウンドに於ける國際マッチに、米國の一選手が、慶大の森を越えて、大飛球を送りし如きは、破格に屬し、此の如き非常の場合をも含める茫大なるグラウンドは米國にも無し。

其十三

●此の世界的グラウンドは、野球倶樂部に由つて經營せらるべく、その收入は入場料に依る。最近數年間、諸大學に於ける觀覧者の概算に徴すれば、收容三萬人の豫算は多しとするに足らず、最近に滿洲倶樂部が東京に轉戰したりときも、つねに數萬の觀覧人を收容したり。

●若し、從來の東京のグラウンドにも、觀覧の坐席の設備あらしめば、約定の椅子席あらしめば、紳士、淑女と雖、安んじて入場するを得べく、此のグラウンドが成立するの曉、入場者の激增すべきは、國技館を大きくしても、大きくしても尙ほ足らざるが如くなるべし。

●輓近、野球趣味の普及は驚くべきものあり、觀覧席に、老人

も來り、貴夫人、淑女來り、皓々たる白髯、ハイカラの洋傘、場に旁午するの奇觀を呈す。野球が青年の專有物たりし時代は既に過去に屬し、今や、野球は、日本の堅實なる智識階級、一般紳士の、新趣味としての大勢力となれるなり。

◉米國に於ては、大統領と雖、グラウンドに立つことあり。日本にては、未だ、グラウンドに立ち玉ひし、殿下は無しといへども、如何なる人も、野球のグラウンドに立たざるといふ事を以て、その身分、位地を誇り得る人は無きに至るべし。

◉東京にては、侯大隈は、その義脚を以て、早稻田のグラウンドに立ち、始球式を行ひし事あり。元老、貴人にして、萬人、環視の中に、野球のボールを投じたるは、彼を先鞭とす。大阪にては、新聞王と呼ばるゝ本山彦一が始球式を行ひしことあり。

◉他日、一世の名士、續々として始球式を飾るに至らん。原敬も出でよ、子加藤も出でよ、功名心と好奇心と並び燃ゆる、子供らしき鬚髯の後藤も出でよ。雄辯を以て青年を魅する咢堂も、一たびプレートに立てよ。時の總理大臣も、東京市長も、皆、プレートに、ボールの洗禮を受けよ。

◉趣味には、理窟も標準も無し。個人の自由なり。然れども非常の好天氣に、元氣の中年紳士が、一室に、謠曲を唸るは感心せず。此の如き好天氣、快晴、須らく浩然の氣を驅つて、グラウンドに來り觀よ。

◉東京には未だ公會堂もあらず。外國の名士を歡迎すべき好適の廣場も無し。芝浦のグラウンドは、平生、此の目的に向つて、利用するを得べしと思ふ。

其十四

◉運動の効能は此にいふまでも無し。假令、自ら手を下さざるまでも、壯快なる運動を見るだけにても、精神氣力を旺盛ならしめ、消化機能を昇進せしむるに足る。感興的なる野球マッチの一場を見れば、數時間の散歩に勝るの興味と、疲勞とを感ずべし。

◉血を若々することに於ては、運動の興味に勝るべき藥餌、未だ發見されず。日本人が早老、早衰を批難せらるるは、運動の興味、足らざればなり。

◉動もすれば、東洋の古趣味に籠城して、隱居的の生活を爲すは、新人物たる所以にあらず。時代の先頭に立つ者は、老練なる智慮と、精悍なる子供らしさとを兼ね備うるを要す。

◉新らしき運動の中にても、野球は、智慮と學問との、機微なる運用を見せて、而してその規模が大仕掛にして、勝負の進行

が壯快なる複雜味を示し、新らしき文明人の興味を滿足せしむるに足るものあり。

◉勝負のデリケートなるものは、此の如き壯觀を有せず。此の如き壯觀を有するものには、デリケートを備へ易からず。此の二者を兼ぬるものは野球とす。

◉將來の映畫を見れば、世界の進みつつある趣味を反映しつつあり。而して日本の觀衆が、それに向つて、憧憬しつつあるを以てすれば、新らしき日本人は、世界的興味に共鳴しつつあるならずんばあらず。

◉微妙き興味は、今の青年を導くに足らず。これ即ち世界的進運にあらずや。大袈裟にして、大規模にして、徹底的なる興味にあらざれば不可なり。西洋の映畫の傑作といふものは、皆、これならざるは無し。野球は、その興味を減し、勇氣を盛し、智術を倒し、敵に向つて大なる破壞を與へて、自ら大に建設するの精神を、尤もデリケートに、尤も力強く、觀衆の人心に深く印象せしむ。

◉實に、卓越せる野球團のマッチを見よ。その展開せるグラウンドの光景の雄々しさ、美くしさ。敵、味方のモーションが一人の心に出るが如く、神秘の手ありて、全軍を操縱しつつあるかと疑はるるくらゐ。極めてレファキンされたる文明の戰爭美を見するものは、野球にあらずや。

●野球のマッチは、白熱的に、戰氣の熱するほど高き感興あり。撰手は、極度の緊張を持して、悠として嫻めやかに、その紅くなれる頬に、寛やかなる餘裕を示しつつ、打ち揮ふバットに火花を散らす。それが國際的なるときに於て、滿場の興味の、沸騰するを見る。戰、終る、兩箇民族の撰手、一笑、握手す。

◉芝浦のグラウンドは、此の秋の野球季節までに完成すべく、秋風、人を健やかにする頃より、日、米の國際マッチを見るを得べきを期待す。此のグラウンドは、日本の各種運動の最大舞臺たるべきは固よりの事。東洋に於ける野球の代表的競場として、米國に對して、その權威を維持すべきなり。

◉吾輩は、此に附記す。極めて空地に渇しつつある此の東京に、これほどの廣大なる地面が、此の明かるき形勝の地に放在されて、未だ何人の手に渡らざりしは奇蹟といふべく、それが、圖らずも倶樂部の創立者に由つて、發見されたるも、天佑たるを失はず。蓋し、天意、野球の爲に、運動を通じて世界化しつつある日本の機運の爲に、眷愛するものといふべし。

其十五

◉野球倶樂部の規則に、その目的を標榜して、國民精神を練磨

ずるの一助たらしめんことを期すと、特筆せるは甚だ可し。斯道の研究、發達を期するものは尋常の事、野球に、國民精神を寓することを明記せるは、此に始まる。

●此の見地に於て、吾輩は、野球倶樂部の設立に同感を表す。現在、將來、運動を通じて世界化しつつある日本人の精神は、此の如くして、練磨せらるべし。

●日米の國際關係より見ても、日本人は、グラウンドに於て、西半球の覇者と、握手し、切磋し、輝やく操手の目を以て、吾が民族的精神、勇氣、智力、體力友誼すべての、頼みある男性的の交情を、互に渾然として溶け合ふべし。

●此の如くして、バットを揮つて、米國人に面する日本人は、吾が民族の精神的代表者なり。彼等がすべての意味に於て、畏敬すべく、愛慕すべき、崇高にして、眞摯なる態度を執るあらん事を、吾が國民は、期待せずんばあらざるべし。

●吾が海軍の水兵の中には、野球を練習せる者、少からず。軍艦の中に野球道具を藏し、到處、上陸地に於て、ボールを樂しむものあり。

●彼等の中には、學校にてボールを習ひ覺えたるものあるべしと雖、その多くは、米國人との接觸に由つて、その興味を養ひ得たるもの爲るべし。彼等は、日本を離れて、南洋に、西半球に、旭日の軍艦旗の到るところに、ボールを樂しむこと、米國の水兵の如くなるべし。

●他日、吾が野球の、大に發達するありせば、米國に向つて、日本より野球團を送る外に、時々、軍艦の野球團が上陸して、彼のアマチュア倶樂部と戰ふなど、從來、米國より日本に對して爲せると同じ事を、吾より彼に爲する至るべし。

●海軍は、海によつて、文明の潮流に浮び、世界化しつつあるの早きは、野球にもあらはれたるを見る。實に、野球の、おもしろきは、如何なる傑作の映畫にもまされり。映畫は、なほ剝製たるを失はず。これは則ち活物なり、血あり、精神あり。

其十六

●野球を以て、體育と爲すの舊說は、既に、廢墟に埋められたり。野球には、民族的精神を寓すること、むかしの武士道に於て、劍道に武士道を寓したるが如くなり。

●むかしの日本の性命は武士道に存し、武士道を練磨するに擊劍を以てせり。むかし劍道は體育にあらず、精神にあらず、精神鍛錬なり、民族的敎育ならずんばあらざりき。

●世界化しつつある日本に於て、世界的進運に適應する運動の一として、野球は、その適者たるを失はず。野球は集團的運動

なり。今の世界は集團の世界なり。

●野球の要諦は、選手の九人が、精神に一人となるの動作を爲すこと、人の指を動かすが如くなるを第一義とす。野球は、その全體の結合的動作を以て戰ふものにして、部分を以て戰ふものにあらず。その中に、如何に、傑出したる一人の勇者あればとて、大勢を左右すること能はず。

●集團體勝負の氣分は、社會の全般は漲る。大角力に、優勝旗を設けたるも、時代精神の產物たるを失はず。太刀山の勇ありと雖、優勝旗を西軍に收むる能はざりしを見よ。然れども、野球は、大角力と異なり、一人、一人、對場するにあらずして、徹頭徹尾、複雜なる集團の全部を以て、戰ふものなり。

●日本の古るき野球に於ては、箇人的技術は、熱心に研究されたるも、集團としての統一、連鎖したるテーム、ウオークは發達せず。それは早大の外征軍が齎らし歸れるみやげは、テーム、ウオークなりし。新らしき野球に於ては、箇人的の巧妙よりも、集團的の動作を專途とす。

●此の意味に於て、昔の劍道と、野球とは、その形を異にす。然れども、全テームを一箇の單位人と見做すときは、則ち、一箇の劍に武士道の性命を托したる修練と、一箇の單位人たるテームのバットの磅礴せる民族的意氣の發揮とは相異なること無し。

內國が、國際的となり、武士道が民族的精神となりたる今日、バットに國民の意氣を托して、世界に行け。三千年來、劍によつて立ちたる日本人の意氣と、修練とは、ます〱盛なるべし。

●吾輩は、運動を通じて世界化しつつある日本を見る。日本人は、運動の興味によつて、身心ともに堅實に、ます〱若やぐべきを思ふ。日本民族の柱となるべきもの、グラウンドより出でよ。

●學問、思想ともに、運動と融合せよ。今、飛行機上に、極東に來るべき文豪ダヌンチオ、年すでに五十八。若々しきかな。その壯心と、健軀と。

一月十七日、暮色、暗に湖く。飛行機上の極東訪問の安全を祈る。

黑頭巾再記

二月夜話

田中貢太郎

日金地獄

日本國中到る所に地獄があつて、一世の人心を支配し、現世で數多い罪業を犯した者は、死後その地獄に哀れな姿をあらはして、牛頭馬頭の鬼の呵責を受けてゐる頃の事であつた。それは天正十年師走二十一日の事である。朝比奈彌太郎は數人の供を伴れて、湯河原から日金越にとかゝつた。彼は濱松の徳川家から小田原の北條家へ使にやられてゐた者で、その先月、若御子の對陣に北條家と徳川家との和睦が出來ると、その月の上旬、小田原から濱松へ、祝儀として使に添へて十種十荷の進物を贈つて來たので、濱松からもその返禮として、朝比奈に十種十荷の贈物を齎して行かした所であつた。

路は山の背になつて平坦になつてゐた。湯河原では、白く泡立つた豆相の海に夕陽の射したのを見たが、もう暮れてしまつて、寒い風に吹かれてゐる裸木の梢に、星が氣味惡く光つてゐた。朝比奈は馬に乘つてゐた。彼は剛勇で、單純で、武士として好い徳を備へてゐた。もと今川家の譜代であつたが、天正三年、長篠の戰の際、今川氏眞の使として徳川の陣へ見舞に行つてゐて、甲州方の侍大將馬場美濃守を斃したので、家康から懇望せられて徳川家に仕へた者であつた。

日金の人家の火が見えた。其所には日金堂と呼ばれてゐる地藏堂があつた。大きな石地藏の前に、これも石でこしらへた閻魔と三途川の婆とが並んでゐるが、二つとも奇怪な形相をした物で、閻魔は凄い大きな口を開け、婆は虎の蹲つたやうにしてゐた。その日金も地獄の一つとなつてゐた。朝比奈はその前に行くと、笠の縁に片手をかけて俯向いて通つた。

數軒あつた日金の人家は、直ぐ後になつて、眞黑な路がおり坂になつて來た。雪雲のやうな鼠色の雲が星の面を暗くした。一行は默り合つて落葉を踏んで歩いた。右斜におりて行つた路が、左に折れ曲つた所で、火の光りが見えた。松明を灯した巽

形の者が路ぶちに立つてゐた。背の高い、顔の赤黒い大入道で、それが片手に金撮棒(かなさいぼう)のやうな物を杖にしてゐた。

『その方は何者だ。』

と、朝比奈は叱り付けるやうに云つた。彼の片手はもう刀にかゝつてゐた。馬はぴつたりと停まつた。

『私はこの山の上に住んでゐる者ぢや。』

と、異形の者は濁りのある聲で叱るやうに云つた。

『其所で何をしてをるのぢや、』

と、朝比奈はそれでも油斷をしなかつた。

『待つてをる者がある、』

異形の者はかう云つて、朝比奈に引添うてゐる供の一人の方に向いて、

『下から女の子がやつて來る、若し逢つたら、此所に待つてをる者があると云つてをくれ、』

供の者は頷いた。馬は步を出した。朝比奈は振返つて異形の者を今一度見た。金撮棒のやうな物を持つた大入道は、どうしてもこの世の物ではなかつた。

『おい、甚六、』

と、朝比奈が云つた。異形の者から傳言を托されてゐる男が返事をした。

『あれや何んだらうな、』

『おかしな奴でございますな、』

『何んだらう、』

『さあ、』

『どうもおかしな奴だな、』

二人の話はそれで切れた。落葉を踏む蹄の音と人の足音とが、がさがさと音を立てた。と、闇に慣れた朝比奈の眼に、下から來た白い薄すらした物の影が見えた。暗い穴のやうな岩蔭からひよろひよろと出て、赤土が崩れて崖のやうに高まつた所へ來て立つた。馬は物におびえたやうに嘶いた。

『甚六、』

と、朝比奈が云つた。彼はその物の影が確に異形の者の待つてゐる者だらうと思つた。

白い物の影は、飛んでゐた物がひつかゝつた樣になつてゐた。

『お前さんだらう、上の方で何人かが待つてゐたよ、』

と、甚六が云ふと、物の影は何か云つたが、はつきりとしなかつた。

『あれやお前さんのお父さんかな、』

その返事も矢張りはつきりしなかつた。そして物の影は、馬の傍をひよろひよろと通り過ぎた。十五六歳に見える女の子で

あつた。

『甚六、』

と、朝比奈は又供の男を呼びかけて、

『お前はどう思ふのぢや、』

『へい、』

『おかしな奴ぢやな、』

『へい、』

『どう思ふのぢや、お前は、』

『へい、』

甚六は返事をするのがたまらなく苦しいと云ふやうな聲であつた。朝比奈はもう何も云はなかつた。一行は其所に立つてゐた。と、路の上の方で女の悲鳴が起つた。朝比奈は只事でない、と思つて、きき耳を立てた。悲鳴は三聲四聲したが、その後から物を打つ音が凄まじく響いた。

(叫んだ女は、今の女だ。その女を責め苛(さいな)む者は、彼の金撮棒だ。親や親類の者であれば、あんなに子供を酷たらしく打ち毆きはしない……)

朝比奈の頭に閃く物があつた。彼はもう何も云はずに馬を進めた。供の者は咳きへしなかつた。

亥刻(よつ)過ぎになつて山の裾になつた玉澤へとおりた。路の左側にでつぱつた丘の岬さを廻ると、直ぐその中腹の所に、村の者が集まつて、火を焼きながら何かやつてゐるのが見えた。

『何かあるかな、』

朝比奈はその方に眼をやつた。その丘から降りて來たらしい頬冠をした村の男が二人、ひよいと馬の横に來て立つた。朝比奈は馬を控へた。

『何かあるか、何をやつてをるのぢや、』

『佛があつて、それを火葬にした所でありました。』

と、一人の男が頬冠をとりとり云つた。朝比奈は若しや、と思つた。

『その佛は何者ぢや、』

『半田様のお娘子でございます。』

『年は何幾じや、』

『十七歳でございます。』

果して山の中の女は、この世の人ではなかつた。朝比奈は甚六を顧みた。

『甚六、彼の金撮棒を持つてをつた者を、何んと思ふのじや、』

『私もさうじやないかと思ひました。』

と、甚六は聲を顫はした。

『何かにお逢ひなされましたか』

と、村の男が不審さうに聞いた。

『その半田の娘子と云ふ女子の亡魂と、鬼に逢つたのぢや、』

朝比奈は勝ち誇つたやうに云つた。彼は己の思つてゐた事が事實となつて現はれたと思つて、非常に滿足した。

『へえ、』

と、村の男は吃驚したやうに云つて、それから背後に立つてゐる伴の男の方を見て、

『そんぢや、やつぱり、親御が邪慳な人ぢやから、お娘子が地獄へ落ちたと見えるな、』

と、云つて、その後で念佛を二度ばかり唱へた。

朝比奈が日金地獄で鬼と女の亡魂に逢つたと云ふ噂は、伊豆、相模、駿河の諸國に傳つて非常に有名なものとなつた。

朝比奈の噂を聞いた一人の旅人は、ある時、日金地藏へ參詣して、堂守の所で茶を貰つて飲みながら、朝比奈の事をたしかめるつもりで、その話をしはじめると、堂守は顏をかゝへて笑ひ出した。

『お前さんも朝比奈の口地獄に落ちたのか、おれや、鬼でもなんでもないよ、おれや、私さ、私の娘が下の村へ行つてゝ歸りが遲いもんぢやで、棒を持つて迎ひに行つてをると、其所へ朝比奈が通りかかつたのぢや、娘も朝比奈と擦れ違つて路の半町と來れない中に、狼が出て來て、娘を喫はふとしたから、娘が驚いて大聲を立てる、私が走つて行つて、打ち殺したと云ふもんぢや。所で、丁度、その晩、麓で半田と云ふ箱根の關所のお役人の娘子が死んで、それを火葬にしてをつたから、それと一所にしたもんじや。それに、さ、半田は、ちと因業であつたから、村の衆も娘子が地獄へ落ちたとでも思つたらう、それにしても、家の娘とその娘子とは、おない年じや、可哀さうな事ぢや、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、』

地獄の使

葬儀が濟むと、老婆は裏の畑から野菊や紫苑などを一束持つて來た。彼はその花束を持つて、お爺さんの墓參に行かうとしてゐる所であつた。お爺さんはこの間亡くなつたばかりで、寺の墓地になつた小松の下の土饅頭には、まだ鍬目が崩れずに立つてゐた。

老婆はその花束を裏の椽側へ置いて、やつとこしよと上へあがり、他所行の布子に着換へ、幅を狹く絎けた黑繻子の帯を結びながら出て來た所で、人の足音がした。表門の方から來て、家

の横を廻はつて來る靜な足音であつた。
（話が長くなると、お墓參りがおくれるがなあ）
老婆は氣がねの入る人が來たではないか、と思つて、ちよつと困つた。家の隅になつた赤い實の見える柿の木の下へ嬰兒を負つた婦がやつて來た。それは孫娘であつた。
『ああ、お前か、私は又何人かと思つたよ。』
孫娘は片手に手籠を持つてゐた。彼は老婆と顏を見合はすと、につと口元に笑つたが、老婆の著換へをしてゐるのを見ると、『お墓參り。』
老婆は、もう緣側に出てゐた。
『昨日も一昨日も、雨で行かれざつたから、今日は行かうと思てな。』
と云つて、孫娘の背に負つてゐる嬰兒を見たが、嬰兒は睡つてゐた。
『おお・おお、睡つてゐるな、可愛い可愛い顏をして。』
『今、睡つたばかりよ。』
と、孫娘は手籠を緣側に落とすように置いて、
『今日は芋を堀りましたから、すこし持つて來ました。』
老婆は籠の中を覗いた。綺麗に洗つた里芋の新芋が八分目ばかり盛つてあつた。
『これは有難い、晩には煮て、お爺さんにもあげやう、籠を借りて置いても構はないかな。』
『構ひませんよ、この次に貰つて行きますから。』
と、孫娘は緣側に腰をかけて、
『お婆さんは、出足だけれど、ちよつと話しがありますが。』
『どんな話しだよ、構はない、話しがあるなら話してみな。』
老婆は孫娘の身に何か心配事でも起つたではあるまいか、と、思つて、緣側に蹲んで、孫娘の顏を覗き込むやうにした。
『私の事ぢやない、お婆さんの事ぢやが、お婆さんが我家に來ないもんぢやから、我家の作造が心配して、お婆さんは何か私に氣に入らない事があつて、それで來ないかも分らん、よくお婆さんの腹を聞いて來てくれ、私の到らん所は直すと云ふて、心配してをりますよ、お婆さんは何故我家へ來ません。』
『なに行くとも、どうせお前等二人に世話にならうと思うてをるが、四十九日の間は、魂魄が家の棟を離れないと云ふ事ぢやからな、四十九日でも濟んで、その上でと思うてゐる所ぢや、作造さんになんの氣に入らん事があるものか。』
『そんなら、四十九日が濟んだら、我家へ來るの。』
『四十九日でも濟んだらな、その上で定めやうと思うてをるが、まだお婆さんは、この通り體が達者なから、當分一人で氣

藥にかうしてをつても好い。』

『お婆さんは氣樂で好むかも知れんが、お婆さん一人を置いておくは、私等が心配でならん、それに第一要心が悪いぢやないか、』

『なに大事な物は、本家に預けてあるし、病に罹りや直ぐ目と鼻との間じや、近所の衆が一走りに知らしてくれるし、心配はないよ、』

『それは、さうでも、お婆さんを無人の家へ一人置く事は、世間の手前もありますから、四十九日が濟んだら我家へ來たらどう、』

『行ても好い、私はべつにどうと云ふ事はないしな、』

『それでは、來て貰ひますよ、』

と、孫娘はだめを押して、

『私は歸ります。お婆さんと其所まで一所にしませう、』

老婆はお爺さんの墓までの可成ある距離を浮べて、早く行かないと歸りが遲くなる、と、思つた。彼は花束を持つて、そゝくさと下におりた。

夕方になつてと婆は墓參りから歸つて來た。この五六日、水氣の來たやうな殘暑のあつた右の足の脚の筋が、歩いてゐる内に張つて來たので、老婆はすこし跛を引くやうにしてゐた。彼はお茶を一杯飲んでちよと休み、それから夕飯の拵へにかからうと思つて、勝手の庭から這入り、上にあがらうとすると、椀へ入れた黍の餅が眼に注いた。揃うた餅の數は五つばかりあつた。

(これは何處から持つて來てくれたらう、)

老婆は餅の贈り主を考へてみた。本家の嫁、向ふ隣の小作人の女房、家から西になつた門口に大きな榎のある家の老婆、そんな人達の事が浮んだ。

(大榎の婆さんには、さつき逢つたし、本家は昨日團子をくれたばかりぢやから、又今日くれる事もなからう、それでは向ふの馬吉の家か……)

向ふ隣の小作人の家らしくもあつたが、其所の多忙で餅なぞをこしらへてゐる餘裕のない事を知つてゐる老婆は、どうも其所と思ふ事も出來なかつた。

(まア、いゝ、いづれ分らうから、分つた時に禮を云ふとして、お爺さんにあげて置いて、後で戴くとしよう、)

老婆はあがつて、餅の椀を持つて次の室へ行き、其所の佛壇に供へて、勝手の竈の前へ戻り、肥つた體を横坐りにして、茶釜から冷たい茶を吸んで飲んだ。腓の張りは何時の間にか忘れ

てゐた。彼は小半時も其所に坐つてから、やつと夕飯の仕度にかかつた。薄暗くなつた竈の下には、火がちよろちよろと燃えた。

里芋が煮え、茶が沸いた。老婆は里芋を皿へ盛つて佛壇の傍へ行き、これをさつきの餅と並べて供へ、その並びの棚から油壺を取つて、瓦盃に注ぎ、それから火打石でこつこつと火を出して燈明をあげ、それが濟むと、前に坐つて念佛をはじ　た。

老婆の前には、黄濁色の顔をしたお爺さんが來て立つてゐた。そして、お勤めが濟むと、老婆の心は餅に行つた。彼は餅も喫ひたかつたが、初物の里芋も喫つてみたかつた。

(餅は殘しなに喫はふ、今、喫つては芋が旨くないから。)

老婆は勝手へ戻つて、行燈を點け、その火で夕飯の箸を取つた。そして、飯が濟むと、膳を片付けて、室の隅から績つた麻と、小さな桶とを持つて來て、麻を紡みはじめた。小さくへいで捻り合はせた麻糸は、順々にその桶の中へ手繰り込まれた。老婆は時々おりて、裏にある便所へ行つた。暗い中に蟲の聲が聞えてゐた。うすら寒い風が襟元を撫でて淋しかつた。彼は何時の間にかお爺さんの事を思ひ出してゐた。

お爺さんは亡くなる日まで、何かと云へば、口癖のやうに離縁する離縁すると云つてゐた。その言葉がお婆さんの耳に蘇生つてゐた。

何時かも自分の里に紛擾が起つたので、それへ行つてゐて、夜になつて歸へつて來ると、膳先の酒を一人で飲んでゐたお爺さんが、

『どちらへお出でになつてをりました。』

と、嘲けるやうに云ふ。老婆が默つてゐると、

『云へなからう、云へないて、俺の家へ嫁入して來たからには、俺の家の者ぢや、幾等身内に何があらうとも、一應俺の許しを受けてから行くが順當ぢや、默つて行くと云ふ法はない。』

と、お爺さんは、兩手を一杯に張つて見せる。

『花嫁で耻かしいから、云はざつたわよ。』

と、老婆が嘲り返へす。お爺さんは憤つて、膳の上の茶碗を投げつけて、

『汝のやうな奴は、もうこそ許さん、今日限り離縁する。』

老婆はお爺さんの事を思ひ出し思ひ出ししてゐた。そして、今度便所に行つた時に見ると、三つ星がもう裏の籔の上へ傾いてゐた。で、老婆は寢る事にして、戸締をし、押入から蒲團を出してゐる内に、又餅の事を思ひ出したが、腹が一杯で何も喫つてみる氣がない。

(明日の朝にしよう。もう腐るやうな事はない。)

老婆は佛壇の明をしめして來て、行燈の火を直し、それから床に這入らうとすると、表の戸を叩く音がした。

『頼まう、頼まう。』

それは言葉の使ひ方からして、村の人の聲ではなかつた。お上の御用を扱ふてゐる侍衆ではないかと思つた。老婆は行燈を提げて行つた。

『頼まう、頼まう、』

『はい、はい』

老婆は表の入口の端になつた雨戸を一枚開けた。暗い中にがさがさと物音をさして、行燈の火のしよぼしよぼした光の中へ這入つて來た。それは青い錦の道服を著た者と、赤い錦の道服を著た者とであつた。二個の手にはぴかぴか光る鋒があつた。老婆はびつくりして其顔を見た。青い道服を著た方の顔は、繪にあるやうな青い鬼で、赤い道服を著た方の顔に、赤い鬼であつた。老婆はつくばつてしまつた。

『怖る事にない。俺達は此所の爺さんに頼まれて來た者じや、』

と、赤鬼が云つた。

『此所では話しができん、内へ這入つて話さふ、』

と、青鬼が云つた。青鬼はもう片足を敷居に踏みかけてゐた。

老婆はふらふらと起ちあがつて、顫ふ手に行燈を持つた。青鬼と赤鬼の二疋は、胴を屈めるやうにしてあがつた。老婆は鬼に近寄られないやうにと背後向きに引きさがつた。そして、佛壇の間まで行くと、老婆はぺたりと坐つてしまつた。二疋の鬼もその傍の所へ衝立つた。

『おい婆さん、俺達は地獄から此所の爺さんに頼まれてやつて來た者じやが、此所な爺さんは、この世に在る時に、あまり因業であつたから、閻魔王の前で夜も晝も呵責を受けて、その苦しむ容が、如何な俺達にも傍で見てゐられない。閻魔王に願ふてみると、許しがたい奴じやが、五十兩出せば呵責を許しても好いと仰せられるから、それを爺さんに話してみると、我家へ行つて婆さんに話せば、それ位の金は出來ると云ふから、それで二人で來てやつたが、直ぐその金が出來るのか、他と違つて地獄から來た者じや、ぺんぺんと長くは待たれない、直ぐ出來るなら持つて行つてやつても好い、』

と、青鬼が云つた。老婆はもう涙を滴して口をもぐもぐさしてゐた。

『出來ます、出來ます。手許にはないが、親類にあづけてありますから。直ぐ取つて來ます。どうぞちよつと待つてくだされ、』

『直ぐ取つて來るなら待つてやつても好いが、遲くはないだらうな、』

と、青鬼が念を押した。老婆は氣がうはずつたやうになつてゐた。

『ど、ど、して、遲くなりますものか、小半時もかゝりません。どうぞ、ちよつと待つてくだされ、お爺さんがいとしい。』

『併し婆さん、俺達は地獄の使じや、こんな事を他の人に話したりすると、俺達も此所にかうしてゐられない事になる。そんな事は云はずに、金を持つて來んといかんぜ、』

と、赤鬼が云つた。老婆は話の中から頷付いてゐた。

『これは、もう。そんな事をなにしに申しませう。默つて取つて來ますから、どうぞ待つてくだされ、』

『そんなら好い、待つてやる。』

と、青鬼が云ふと、老婆は急いで表の方へ出て行つた。青鬼と赤鬼とはその後を見送つて、耳を澄ますやうにしてゐた。

老婆の雨戸を締めて出て行く音がした。青鬼は手にした餅を襖に立てかけた。

『旨くいつたな、』

『うむ、旨くいつた。』

と、赤鬼も餅を襖に立てかけた。

『すこし休まうか、』

と、赤鬼が又云つた。

『よからう、』

と、青鬼が同意した。そして二疋の鬼は其所へ胡座を搔いた。

『脫いでも好いだらう、』

『さうぢや、脫いでも好いな、』

二疋は首の周圍に手をやつて、何かかさかさとやつてゐたが、やがて赤鬼から先に鬼の顏を除つてしまつた。皆鬼の面を著てゐた者であつた。赤鬼の面を著てゐたのは、若い色の白い男で、青鬼の面を著てゐたのは、頰髯の濃い角顏の男であつた。

『旨くいつたな、』

『大丈夫じや、』

青鬼の方の男は、行燈の火で、佛壇に供へてある餅に眼をつけた。

『好い物があるぞ、』

と、彼は起つて、佛壇に手をやり、二つの餅を取つて來て、一つを赤鬼の男にやつて、その一つを口に入れた。

寢てゐた本家を起して、すこし都合があるからと、預けてあつた金の中から五十兩を無理から貰つて、急いで我家へ歸つて來た老婆は、佛壇の間へ這入ると共に、驚きの聲を立てた。老婆の擧動に不審を抱いて、この後から尾行して來た本家の主人は、その聲を聞くと家の內へ飛び込んで來た。其所には神樂の衣裳を著た二人の男が、俯向になつて血を吐いて死んでゐた。その傍には赤鬼と靑鬼との面もあつた。

血を吐いて死んでゐた者は、その附近に出沒する博徒であつた。二人は老婆から金を騙取する目的で、村の鎭守の神庫を破つて、其所から神樂の裝束を持ち出したものであつた。そして、その二人を殺した餅も、矢張り老婆の金に眼をつけた村の無賴の所爲であつたが、その惡漢も日ならず村はづれの松並木の下で、磔殺せられた。

老婆はその夜の中に、孫婿の許へ引移つた。

怨靈

善作は日が暮れない中にと思つて、馬を急がしてゐた。西の空を限つた黑く煙つたやうな遠山の、畝りの緩い頂近くなつてゐる陽は、馬の影と、乘つてゐる人の影とを、細長く左側の桑畑の中に落してゐた。路の右側には黃ろになりかけた麥の穗が搖れてゐた。

善作は朝早くから十五六里の路を來てゐた。彼はとつたばかりの春蠶の絲を町の問屋へ賣り、その町に住んでゐる叔父の家を訪うて、其所へ一泊する事にしてゐた。その町までは、まだ一里位はあつた。

小さな村落がまたやつて來た。道路に面して、駄菓子店があり、御支度所と書いた茶店兼業の木賃宿もあつた。その木賃宿の門口には、大きな樗の木があつて、紫色の粉のやうな花が咲いてゐた。二人の行商人らしい男が、樗の根元に据ゑた腰掛に腰をかけて、强飯のやうな物を撮んでゐた。二三人の女が集まつて、機を織つてゐる所もあつた。

人家は直ぐ無くなつた。路の右側は桑畑になつて、それを越すと、屋敷跡らしい空地があつた。草の間から礎らしい石が覗き、いぢけた二本の柳もあつた。空地の先は桑畑になつて、その先には四五軒の草屋根があつた。その人家の方から來たのか、一人の男が空地を歩いて柳の傍まで來た。素肌に紺袷を一枚著た遊人風をした者であつた。その男は顏をあげて、ぎよりろととした眼で善作の方を見た。酒を飲んでゐるのか赤黑い顏の色

がてかてかと光つてゐた。

(眞面目な稼人ぢやないな、)

善作は侮蔑した眼で、それを見返しながら馬に鞭を當てた。

と、同時に、人の叫ぶ聲がした。空地を歩いて來た男が、前へのめるやうになつた體を非常な努力で取り止めやうとするやうな風をしながらみるみる草中へ消えてしまつた。善作はびつくりして、續けさまに馬に鞭を加へた。

(おかしいぞ、どうしたと云ふのだらう、あすこには人の體の隱れるやうな草はなかつたぞ、)

善作は不意に體を消した男の、奇怪な光景を思ひ出した。

(穴か何んかがあつたらうか、あすこは屋敷跡らしかつたぞ、)

二本のいぢけた柳が浮んで來た。

(井戸じやなかつたらうか、井戸であつたら大變じや、)

善作ははつとした。馬は早足に歩いてゐた。

(井戸へ陷ちた者を、そのまゝにして置いては大變じや、)

善作は馬の手綱を引き絞つて、馬を止めやうとした。馬は口をあげ齒をむき出して、止まるまいとした。馬は體を振つた。

(しかし、待てよ、風體の宜しくない、何處の馬の骨とも分らない者にかゝりあひになつて、迷惑をするやうな事があつてもならんぞ、)

馬は體を振つて止まらうとしなかつた。

(だが、俺が行つてやらないと、他に知つた者もなからうから、どんな事になるかも分らない。行つてやらねばならんぞ、)

馬がやつと止まつた。馬は竿立つて嘶いた。

(だが、待てよ、俺は心切にあげてやらうとしてゐても、若し、あれが死んででもゐるやうな事があると、俺がつき落して殺したやうな疑はれないとも限らない。あれには氣の毒じやが、矢張りかゝりあひにならない方が好いな、さうだ、かゝりあひにあらない方が好い、)

善作は馬の首を背後に向けやうとした手を控へた。夕陽の光が顏にかゝつた。

(それに、ぐずぐずしてゐては日が暮れる、絲を賣るには秤の目が見える時でないといかん。)

水の中に悶掻いてゐる顏の赤黑い男の容が見える。

(矢張り行つてやらう、可哀さうじや。行つて救けてやらう、)

馬は背後向きになつて歩いた。

(こんな事をしてゐては、絲を賣るのが遲くなるな、困つたな、今日絲を賣つて、明日は早く歸らうと思つてをるに、今日絲が賣れないとなると、明日になるから、自然と歸りが遲くなるで、困つたな、やめようか、やめよう、俺さへ默つてをれば、

ん所の事じや、何人も俺が救けてやらなかつたから、不人情だと云ふ者もなからう、やめよう、面倒だ。》

善作は又馬の手綱を引き絞つて、馬の向きを變へやうとした。

《それに、案外淺い井戸であつて、あの男は、もうとうにゐないかも分らない。そんな事があつたら、阿房らしい事じや、》

馬はくるりと廻はつて歩き出した。善作は鞭を加へた。馬の足は早くなつた。

《どんな事があらうとも、俺さへ默つてをれば、何人も知らない事じや、默つてをらう、默つてをれば好い。》

前のめりになつた體を取り止めやうとした男の、手を悶搔いた容が浮んで來る。

《どうしたかなア、淺い井戸なら、何の事もなからうが、深い深い井戸であつたら、困つてをるだらう、石井戸なら縋るには縋れるだらうが、人を呼んだ所で、傍を通つてゐる者がないと、とても聞えないだらうから、その中に凍えるだらう、それでも石井戸ならまだしもであるが、これがたゞの井戸であつたら、手をかける所もないから、直ぐ溺れるだらう、》

路は丘と丘との間を爪先登りに登りかけた。

《いつそ何人かに話して、その人に救けに行つて貰はふか、それでも好いな、話さうか、》

善作は顔をあげて向ふの方を見た。鍬を肩にした老人が向ふの方からやつて來た。

《あの老人に話さうか、しかし、それが、旨く救けられるなら好いが、もし、死んででもをると、怪しい男が知らして通つたが、どうも、あの男が怪しい、ついすると、あの男がつき落して置いて、あんな事を云つて通つたかも分らん、と、云ふ事になつて、俺に嫌疑がかゝり、明日俺の歸りを待つてゐて、取り押へやうとするかも分らない。これは、矢張り、知らん顔をしてをるが一番好いぞ、》

善作は澄ました顔をして老人を見て通つた。小さな峠が來て、一軒の茶店があつた。茶店の老婆は、庭の隅のへツついで鍋の火を焚いてゐた。

《しかし、どうか云ふ事があると、あの男は、俺を怨むだらうな、確に俺の顔を見たぞ、》

赤黑いてかてか光る顔に附いた、ぎよろりとした眼が見える。

《しまつた、すぐ救けてやればよかつた。かゝりあひになるのが厭さに、逃げるやうにして來たものの、どうも、すこし、邪慳であつたな、それでも馬をあつちへ向けた時に行けば、まだ

間に逢つたであらうが、どうだらう、もう遲いな、遲くても行つてみやうか、）

峠は直ぐおり坂になつた。善作の行つてゐる町の人家が夕陽の下に見えてゐた。

（もう、遲い、仕方がない。用事が遲くなつては困る。眼をつぶつて行かう、）

何處からぎよろとした眼が覗いてゐた。

（俺を怨むだらうか、）

ぎよりとした眼は除かない。

（子供の川に流れてゐるのを見殺しにした婆さんが、路を歩かうとすると、下駄の下に子供がをり、米を搗かうとすると、臼の中に子供がをり、飯を食はうとすると、茶碗の中に子供がをつた、と、和尚さんが云つた事があるぞ、）

善作は、背筋が寒かつた。馬は丘の蔭を歩いてゐた。

（もしもの事があつたら、俺を怨むかも分からんぞ、）

善作は背後の方へふいと顔をやつた。丘の曲り角に絹袷をきた男が立つてゐた。善作は顔の色を變へた。そして、再び眼をやつた時には、もう何人の姿も見えなかつた。彼は無茶苦茶に鞭を揮つた。馬は丘の間を離れて走つた。

善作は問屋へ絲を賣り、それから叔父の家へ行つて、裏庭の物置の横にある樫の木へ馬を繋いで、それに草をやつてゐた。日が入つて四邊は薄暗くなつてゐた。

（俺は鬼であつた、何故、あの時、救けなかつたらう、あれが怨むのも無理はない。困つた事になつたものだ、）

善作は馬から離れやうとしたが、恐らしいので背後の方を更る更る振返つた。

（あれは、どうも氣の迷ひだらう、）

馬が何かに怯へたやうに、前肢で二三度地べたを叩くやうにして首をあげた。善作はびつくりして前の方を見た。素肌に絹袷を著た、顏の赤黑い、眼のぎよろりとした男が立つてゐた。

『どうか免して下され、免して下され』

善作はさう云ひながら氣絶してしまつた。

叔父の家の中の間に擔ぎ込まれた善作は、その夜半から酷い熱病になつた。

『俺がわるかつた免してくれ、』

『免して下され、免して下され、』

善作は手を合はして哀願するやうにしたり、蒲團を引冠つて恐ろしい者に見られまいとでもするやうな容をしてゐた。

そして、善作が自分で氣が付いた時には、一人の老僧が來て、枕もとでお經を讀んでゐた。

老僧のお經は五日ばかりも續いた。善作は自分で、豪い和尚さんがお經をあげてくれるなら、どんな怨靈でも退散すると思つた。

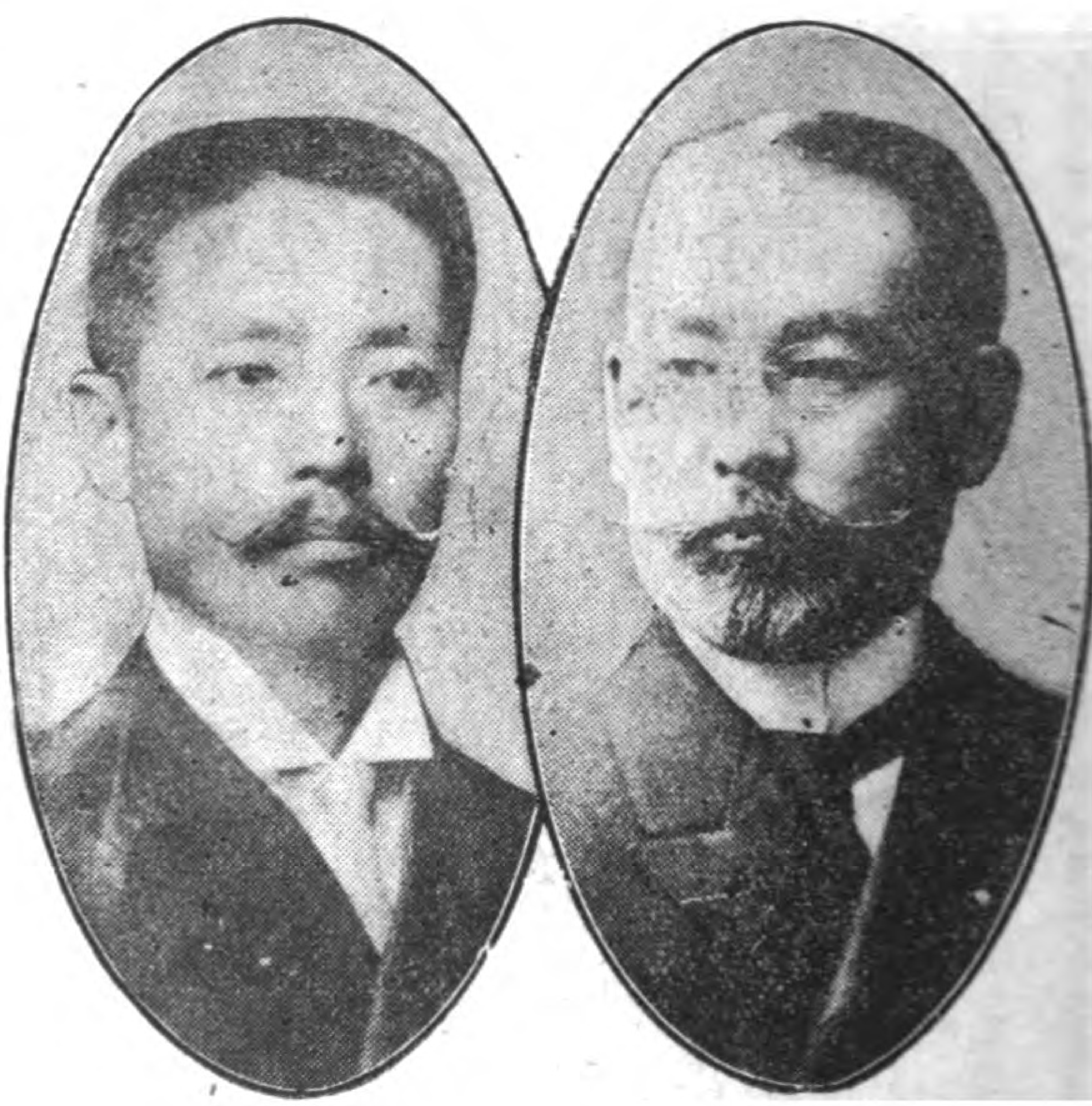
十四五日すると、善作の體はすつかり好くなつた。彼は我家から看病に來てゐた母親と一所に歸つて行つた。

そして、丘の下まで行つた時、法棒を小脇にした警官に追つたてられて、背手に　られた一人の罪人が、とぼとぼと坂路をおりて來るのに行き　つた。それは見覺のある絹給を素肌に著た、顏の赤黑い男であつた。



外遊歸國後

口を緘してゐる後藤男
と
長廣舌を揮ひつゝある尾崎氏



▽尾崎と後藤

室伏高信

□

外遊から歸つた後藤男は一切口を緘してゐる。口を緘してゐることが彼れのために利益であ

ると彼れの周圍の策士または彼れ自身が考へたからである。しかし外遊から歸つて平常多辯なる彼れが一切口を緘することに利益を感じてゐることは何事よりも雄辯に彼れの政治上の立場を物語つてゐるものである。

彼れは前内閣の外務大臣であつた。その人が世界外交の最も重大なる時機に外遊した。しかし私はこの人から外交上の如何なる意見をも聽くことを期待してはゐなかつた。世間もまた恐らくはさうであつたらうと思ふ。それには少くとも三つの意味がある。彼れは所謂現内閣の外交を批評することを不利益と感じてゐるのであらうと推定したことが一つ、前内閣の外交失敗は彼れの外遊によつて明白に彼れに印象されたために一切の外交問題に語るとを欲しないであらうといふ推定が二つ、その三はわれ／＼が彼れのごとく外交上の知識の欠乏してゐる政治家から外交論を聽くことをも欲しないといふこと、この三つの意味からであつた。從つて彼れが外交上の問題について緘默を採ふことはわれ／＼最初から少しも關知しなかつたところであつた。それに外交問題が政治上の最も重大な問題として取扱はれ、外務大臣が内閣に要位を占める時代は既に過ぎつゝある。この時代に當つて他を排斥してまでも外務大臣たらんとしまたは外務大臣たることに得意を感ずる人々はそれだけで彼れが時代に遲れた人であることを證據立てゝゐるものである。後藤男はこうした時代後れの政治家であることは私の指摘するまでもないことである。しかし同じく時代後れの政治家の間にあつても彼れが特色ある人物であることは一般に認められてゐるところである。少くとも彼れには新らしがる癖がある。また新らしがる欲望がある。この癖と欲望とは彼れの外遊欲をもそそるし、また書物を著し、或は書物を翻譯出版することに得意を思はしめる。彼れは既に數種の書物を著作または翻譯してゐる。無論それは彼れ自身の勞作ではない。彼れの門下の勞作である。それ等の著述または翻譯は、何れも彼れの名聲と信用とを高めるものではなくして彼れの人物の價値、彼れの實力の如何を赤裸々に語つてゐるものである。しかし死灰のごとき官僚の間にあつては兎も角も書物を著し、書物を翻譯することに得意を感ずる後藤男は一種の異色ある人物として目せられるのは當然である。特に彼れは各種の方面に交友をもつてゐる。黄金が政治的または社會的生活の最高勢力である現代においては、黄金を動かすことの勢力ある政治家または自ら黄金を所持する政治家の周圍には各方面の人々の圍繞することが自然の數である。後藤男の周圍には政客もあり奸商もあり官僚もあり政黨員もあり御用學者もありまた多くの出入新聞記者がある。こういふ立場に

あるものは今日の官僚の間にあつてはたゞ一人の後藤男があるのみであらう。こゝに後藤男の政治家としての强味があり、また彼れが官僚の間にあつて異色を放つてゐる所以である。彼れは決して尋常一様の官僚とは目されてゐない。また彼れのごとくに野心滿々たる政治家、彼れのごとくに精力に滿ちた政治家は、尋常一樣のモノトナスな官僚生活は到底堪えられるものではないであらう。然り、野心家とモノトニイとは決して一致することのできるものではない。私は後藤男においてその最もよき實例を見出してゐるものである。彼れは客と對坐して談論してゐる時にも、一瞬間と雖もヂツトしてゐることはできない。あらゆる不作法な態度を示すのが彼れの平常である。室内にある彼れは動物園の野獸のごとくである。しかくエナージチツクである。理性の伴はないエナーヂーはそれが久しく同一方面または同一事件に集中されてゐることができない。私の眼に映じた後藤男はこの種の性格の持主である。それだけに彼れの反對者は彼れをもつて出鱈目な政治家であるとして非難する。この非難は決して非難のための非難ではない。しかしまたこの點からして彼れの同情者または同情者たることに利益を感ずる人々は彼れが何ごとかをなす政治家であると思つてゐる。思つてゐないまでもさうした吹聽をする。そこで外遊から歸つた後藤男に對しても色々な注文、色々な期待が行はれ或は吹聽されるわけである。さういふ立場から世間には後藤男の歸國を迎えたものが少くなかつたように思ふ。しかし歸つた後藤男はたゞ口を緘してゐた。尋常一樣の官僚が歸國したごとくに歸國した。

□

安達謙藏氏が歸國した時に彼れは普通選擧が年來の『持論』であると演說してわれ〳〵を驚かした。政治家の『持論』は何時出てくるか分らないものである。後藤男の勞働黨組織もさうした意味の『持論』であるかもしれない。少くともさういふ興味をもつて彼れを迎えた人もあつたようである。しかし國權黨の安達謙藏は矢張り國權黨の安達謙藏であつたがごとく、官僚育ちの後藤男は矢張り官僚として立つべく運命付けられてゐるのであらう。彼れは外遊中においても決して勞働問題の研究者ではなかつたさうである。また半年や一年の外遊によつて勞働問題の研究ができるものと思ふことが既に非常識である。政治家の生活は簡單に方向轉換の行はれるものではない。彼等の將來を決定するものは主として彼等の過去である。後藤男は多年公生涯に立つてきたが、彼れの公生涯は極めて短い間を除いては最初から最後まで官僚生活であつた。彼れが同志會を脫會した當時

『余は政界の破産者である』と歎じたことがあつたがその後彼れは着々官僚者の間に地歩を固めた。次の官僚内閣が組織される時に首班たるべき人は後藤男であらうといふ説は所謂玄人の間に行はれてゐる説である。或はそんなこともあるかも知れない。官僚内閣も『特殊國』の日本にはまだ最後の一度や二度は組織されるかも知れない。産業上の『特殊國』としての日本は政治上においても『特殊國』であるからである。その官僚としての最後の機會を握るものは、若しあるものとすればそれが後藤男であるかもしれない。後藤男にはこういふ希望がある。この希望が彼れの一切の行動とさうして總てその運命をも決定する。

□

彼れの今日までの政治上の立場は凡て反動的の立場であつた。彼れの言論文章によつて發表されたものはみな反動的な思想であつた。彼れが内においても外においても軍閥主義を振り廻したのはわれ等の記憶に新らたなるところである。日本の對外的侵略主義は彼れ及び彼れの一派によつて最も鮮かに世界の表面に描き出された。もとより日本の侵略主義は決して彼れまたは彼れの一派が擁するだけではなしに歴代の内閣がみなこれを奉じてきた。軍閥的官僚も資本的政黨もこの點には何の異るところもなかつたのである。しかし後藤男を副宰相としての寺内内閣においてわれ等はその最も代表的なものを見た。内においても、日本の若き民主主義を虐げるものも、また決して官僚政治家だけではなしに凡ての資本主義的政黨政治家がみなこの側に立つてゐることは勿論ではあるが、これまた寺内内閣においてその最も代表的なものを見た。後藤男の立場は外においては侵略主義の主張者である。内においては民主主義の抑壓者である。こうした政治家の未來に光輝があつたとしたらそれは恐らく世界の奇蹟であらう。

□

私は次に尾崎氏について語らなくてはならない。私はありていにいへば歸朝後の尾崎氏の態度には失望したものの一人である。尾崎氏は兼てから普通選擧の主張者であつた。その尾崎氏が普通選擧論の喧しい今日に歸國して普通選擧を主張するであらうといふことは恐らく何人も期待したところであらう。それにもかゝわらず尾崎氏は普通選擧の反對者として歸つた。勿論口には普通選擧の主張者だといつてゐる。しかしその口の下から戸主選擧を主張してゐるではないか。尾崎氏が新聞記者に語つたところによれば一、戸主に選擧權を與へるとともに二、中等教育をうけたるもの三、兵役の義務を終つたものに選擧權を與へる考であるらしい。しかしこの新聞記事にして誤りなしと

すればかくのごとく愚劣なる意見はわれ等の初めて聴くところである。これ等のものはみな特權的の思想から生れてきたものである。兵役の義務を終つたものに選權を與へて然るべきものとすれば納税の義務を終つたものにも選擧權を與へて然るべきではないか。尾崎氏が資本的特權々排して體格的または軍國的特權を建設しようとする理由のない限り兵役選擧論は何等の合理的根據をも見出すことはできないであらう。また中等教育を終了したものに選擧權を與へようとする考へは嘗つてヂスレリーの考へ出したものであり、その當時『滑稽な選擧權』として葬り去られたものであつた。（このことは昨年二月ある雜誌で述べた）それは普通選擧の主義のうへに立つものではなくしてその反對に新らたに特權階級を創造せんとするものである。即ち知識階級の特權を新に政治上に確立せんとするものである。かくのごとき主張は、社會主義は獨逸産であるといつて濟ましてゐることのできたほど目先きの見えなかつたグラッドストーンでさへ反對した愚案であつたのである。今日尾崎氏によつてかくのごとき愚案が維持されるものとは信じられなかつた。戸主選擧論に至つては或は尾崎氏の創見であらう。しかしかくのごとき創見は上杉愼吉君あたりから聽きたかつた創見である。私は今日まで尾崎氏が家族制度の維持者であるとは知らなかつた。われ等は今日の强大な戸主の權力が家庭内における一切の自由の禍根であることを思はないわけにはゆかない。その私法上においての强大な權力の持主としての戸主にのみ選擧權を與へようとすることはこれによつて家庭の暴君を製造する以外に何等かの善き效果があるであらうか。尾崎氏はいふ、女戸主にも選擧權を與へると。しかし女戸主が如何に少數のものであるかは尾崎氏のよく承知してゐるところであらう。われ等の求めるところは家庭に自由を與へることである。即ち家族の解放である。尾崎氏の求めるところは家庭專制であり、家族の壓迫である。若しこの尾崎氏の意見にして一時の出來心から出たものでないとすればそれとわれ等の意見との間には根本的の相違がある筈である。それは恐らく憲政會の幹部案と稱せられるもの即ち獨立生計を營むものに選擧權を與へることよりも愚劣である。獨立の生計を營むものに選擧權を與へることの例は世界に幾多の實例があつた。改正前即ち一九一八年までの英國の選擧法が大體これであつた。しかしそれは昨日の英國のことである。普通選擧とならざりし前の英國のことである。

□

戸主選擧または獨立生計者選擧は何れも普通選擧ではない。それは何れも特權選擧または制限選擧である。かくのごとくに

法律上または經濟上に特別の地位を享有する者を保護するの案を立てゝこれを普通選擧と稱することは欺瞞である。かくのごとき欺瞞は決して進歩した民衆の前には許さるべきものではないのである。私は尾崎氏がこうした欺瞞的立場をとつてゐることを尾崎氏のために悲しむものである。

□

尾崎氏は最初は決して急進主義の政治家ではなかつた。彼れがヂスレリー崇拜者であつたことがこの事實を證明してゐるものである。ヂスレリーは貴族主義並に侵略主義の政治家であつた。勿論ヂスレリーはチヤーチストに接近したこともないではなかつたが、チヤーチストは彼れの策略を知つてゐた。このヂスレリーを崇拜した尾崎氏の青年時代が決して急進主義の主張者でなかつたことは何人にも直に想像しえられるところであるが、尾崎氏は恐らくヂスレリーから最も悪しきものを學んだであらう。その悪しきものが容易に拔きとることのできなかつたために、尾崎氏はその真實の尾崎氏を常に發揚することができないではないであらうか。

□

私の承知してゐる範圍では今日の尾崎氏は極めて急進的な性格の持主である。尾崎氏の性格は如何なる程度の急進論にも共鳴することができるであらう。彼れの周圍を圍繞する人々の間にあつて最も急進的な性格は尾崎氏その人である。尾崎氏外遊の途に上らうとする時、送別の小宴の席上で幹部の一人が『あまり急進して下さるな』と註文したことが尤もらしく聞えたほど彼れと彼れの周圍との間には隔りがある。こうした周圍の人々も憲政會全體としては所謂急進派の人々である。新聞紙の所謂急進派の人々である。こう考へて見ると尾崎氏が今の政治家の間にあつて危險思想家のごとくに思はれてゐるのも無理のないことである。原、加藤、後藤、犬養などの政治家の間にあつては彼れは慥に極左派の政治家であらう。彼れは青年時代にも急進主義ではなく今日も普通選擧に徹底することができぬほどであるにもかゝわらず、その天性において急進的素質をもつてゐる。彼れは支那問題については常に南方派であつた。英國に遊んでは必ずスマイリーの同情者であつたであらう。彼れは到るところに左翼を見出さんとする政治家である。左翼のうちに眞理を見出ださんとする自然的の傾向をもつてゐる。こゝに眞實なる尾崎行雄の生命が存在する。

□

尾崎氏は支那問題については常に南方派であつた。加藤子去つて後の大隈内閣の外交問題は尾崎氏の獨舞臺であつた。し

かしこうした時にもヂスレリーからうけた病はついて廻つてゐたようである。彼れはその天性において急進的政治家でありながら、それを組織的に且つありのまゝに働かせることはできなかつた。彼れが働かせなかつたといふよりは周圍の事情か彼れを働かせなかつたともいふことができる。こうした環境のうちに立つた尾崎氏はヂスレリー傳來の權略を弄することを避けることができなかつた。尾崎氏はそれを實行的であると考へてゐるらしい。

□

彼れの所論の不徹底は彼れ自身の不徹底のためではなしに、環境の壓迫が彼れをしてこゝに至らしめてゐるといふべきであらう。彼れは屢々その政敵から亂臣賊子のごとくに評された。それは彼れには可成りの傷手であつた。その傷手に乘ずることが反對派の策士であつた。その苦境から逃れるために彼れは其自然の傾向に裏切つたのである。彼れの妥協的態度はかくのごとくにして作られた。またこうした妥的態度が政治家的であると考へてきたのであらう。

□

しかし環境の壓迫のために彼れの天賦の傾向を伸ばすことのできなかつた尾崎氏は今やその環境によつて解放せらるべき時がきたように思ふ。尾崎氏が社會改造に對してどれだけの準備のあるかは私の疑をもつてゐるところであるが、他の一切のものよりもこの自然的急進性こそ社會改造期における寶である。この意味からいつて尾崎氏の政治家としての前途は決して悲觀するを用ゐないと思ふ。この時において私の尾崎氏に希望することは所謂『實行的』政治家となることではない。尾崎氏には、世間の評判とは反對に、あまりに『實行的』たらんとする僻がある。ヂスレリーからうけた病であらう。しかし『實行家』としては尾崎氏は既に原敬に劣り、加藤子に劣り、後藤男に劣り、或は犬養毅にも劣つてることを證據立てた。それゆえに尾崎氏の將來をこの『實行的』であることに求めることはできないであらう。否、われ等はあまりに多く實行的政治家の多いことに苦しんできた。この政界の現狀を打破するために私は尾崎氏に相當の期待をもつてゐる。しかし戸主選擧を主張してゐる程度では心細いように感ずる。

▽政界の兩惑星

鵜崎鷺城

一

今更後藤と尾崎が政界の問題になつて、其の一擧一動を注目されると云ふ事は、如何に日本の政界が固定して登場する役者の顔觸れに變化のないことを事實に示して居る。厳格なる時代眼から見れば後藤も尾崎も最早過去の人で、或る程度まで發展する丈け發展し、若くは失敗する丈け失敗し、假りに此の兩人を失ふても、政界は格別の痛痒利害を感じない。大正も九年になつて時勢は物質的にも思想的にも變化して、新人物の崛起が世界の趨勢にならんとしつゝある今日、鼻に突いた舊人物を大層に云ふたり或は之れに期待を置くようでは、迚も改造の大機運に追隨して行くことが出來ぬ。他の方面は大なり小なり變化し、若くは變化しつゝあるが、政治部面に至つては何物よりも後れて、今猶ほ守舊傳統の風に囚はれて居る。後藤や尾崎が西洋から歸つて來ると、之れが爲めに大なる波動を政界に與へる如く思ひ、或は政治的葬式を濟ませた大石正巳の遺骸を引出して再び政界に躍らせる運動をしたりするのは、行詰つた政界を展開する所以の道で無い。先づ是れだけの前提を置いて後藤と尾崎を論じようと思ふ。

後藤と尾崎は相前後して西歐の遊を賦し、又た相前後して歸朝したが、現に角外遊政治家中の大物と云ふので、自然いろく噂に上つたのであらう。後藤は何年西洋を持ずり廻つても金に困らぬが、貧乏で通つた尾崎の洋行費については出所を疑はれた。多分誰れかゞ工面したので、自分の懐を痛めたので無いだけは事實である。兩人とも自由汗漫の旅行と云ふ點に變ないが、共に表面口に言へぬ理由があつたのである。先づ後藤について云へば自分等の内閣は政友會の手に渡つた爲めに、政局の中心から外れて閑に苦む身になつた。彼は善く云へば活動家、惡く云へば一種の煩悶家で、一日もジツとして居れぬ。外相として自ら一手柄したいと思つた講和事業を他の内閣に遣らるゝを見ては胸中の修羅が燃えたさりとて政友會は前内閣の與黨であつた關係もあり、特に原が安全辯の意味で彼を外洋にまで引入れたから、勢ひ鋒鋩を收めて時節到來を待つの外は無い。それには手持無沙汰で居るよりも戰後の形勢を見て來るに如くはないと、煩悶避けやら色揚げの目的やらで、外遊を思立つたと見るべきだらう。少くも彼の心理狀態は此の邊にありはしなかつたか。

尾崎の外遊は畢竟政界に行詰つた結果である。司法大臣になつて加藤の與黨と行動を共にした行掛上餘儀なく憲政會に投じ、又た當時彼の立場としては此の以外に行くべき道がなかつたけれども、元來加藤と反が合はぬから、總務の位置にありな

から黨の義務に與らず、何時も除物にされたので、彼も心中平かならぬものがあつた。それ故に前議會の初めに總務を辭し、普通選擧問題では黨議と相容れぬ結果になつた爲め、專ら院外を驅廻つて一度も議會に顏を出さなかつた。然し普通選擧の宣傳も選擧法改正案が通過して大勢が定つた後は自然賣れが遠くなつたし、彼が居なければ憲政會で困ると云ふ譯ではなかつたし、實は政界に用の無い體であつたから、洗濯かた〴〵暫く氣を換へに出掛けたのである。

後藤と尾崎は種々の點に於て類型を異にした政治家であるけれども、何處かに多少共通點がある。先づ稚氣と衒氣に滿ち、共に辯を好んで而も脫線性を帶びて居る。前者に誇大妄想癖があれば、後者に空想癖がある。後藤は豪放、尾崎は樂天家の如く見えて、其の實案外神經家で、共に神經家で無いらしく裝ふ所も似て居る。兩人とも鼻ッ柱可なり強い。一方が鼻眼鏡を掛けて氣取る如く、一方は言語や態容の上に乙う澄し切つて居る。唯だ尾崎は寸法違ひをして平氣で居るだけに可愛氣があるけれども、後藤は決して無邪氣な男でない。

二

歸朝後の後藤尾崎に對しては、外遊中から種々雜多な觀測が行はれ、中には本人等の承知せぬことを世間が定めて居るのもあつて、本人も窃に苦笑を禁じ得なんだであらう。中にも眞實しやかに傳へられたのは勞働黨組織云々である。是れは戰後勞働運動が盛んに歐洲に起り、日本にも勞働問題が大分面倒になつた際だから、兩人とも必ず此の問題に關して相當の知識を得て歸るに相違ないと云ふ豫測と、後藤は自己の政治的立場に新轉機を劃する爲め、又た尾崎は復活の途を開く爲めに新しい試を勞働問題に求めるだらうとの想像に胚胎したものらしく、其の以外に是れと云ふ根據も無かつたようである。それ故に頻りに勞働黨の說が傳つた時、觀察が少し突飛であるのみならず、兩人とも勞働運動の指導者たるには役柄が不向きであると思つたが、後藤にさる計畫のありさうな氣配が見えぬのみならず、尾崎も本人の承知せぬ事だと云つて公然打消すと共に、自分にそんな力も無いと正直に告白して居る。そこで勞働黨云々の問題は先づ消滅したとして、然らば兩人は此の先き如何なる筋書を以て政界に處せんとするかゞ問題で、特に『歸朝後』と云ふ時代を區劃した意味から云ふも、兩人の後來如何は多少興味を惹くところである。

既に曲りなりにも政治に於て一家を爲し、今後も政治家として立たんとする限りは、萬更空々寂々唯だ成るようにしかならぬと云ふような棄鉢的な頭で居ないだらうと思ふ。尾崎は頭本

粗笨だから充分纏つた工夫は附いて居ないかも知らぬが、少くも後藤は多少料簡を定めて掛つて居りはせぬか。駄法螺吹きの彼が西洋から歸つて以來、言動を愼み、直ぐにも政界に風雲を捲起しさうに待ち設けたものを失望させたのも、其處に何等かの機略が潛んで居るのかも知れぬ。一體世間では後藤の爲人を履き違へて居る。アブノーマルのようでもチヤンと常識がある。向ふ見ずのようで案外細心な打算家である。脱線性を帶びても常に足元に注意して行くから、尾崎のようにレールを踏み外したが最後、何處へ飛んで行くか分らぬと云ふ危險が無い。或は尾崎の方が馬鹿度胸に富んで、後藤は悧巧だけに臆病かも知れぬ。

後藤は一定の政治的軌道を歩んで來た男で無い。政黨に關係したかと思へば政黨以外の勢力に奇縁し、官僚系と云つても寄生虫の方である。然らば全然非政黨非官僚の圏外家かと云ふに、政黨に對して或る程度の理解も持つて居れば、散漫ながらも後藤系と云ふものがあつて、マカリ違へば表面に立つて一派のボツスになり得る男である。先づ官僚と政黨の間の子と云ふ所がある。尾崎は初めから政黨主義で通したが、是れもグラチヤラして刻銘に一つの軌道を定めて來た方で無い。進歩黨を抜けてからは諸方の政黨を渡り歩き、政友會の如きは二度も出たり入つたりして居る。今の領袖級の政治家で彼のように節に缺けたものは無く、端に云へば政界の放浪者である。從來彼は元老を憲政の賊と罵りながら、實際に於ては必ずしも元老を敵としなかつた。現に司法大臣になる前後は、屢々山縣や井上に行つて諒解を求めたのは公然の事實であつた。それ故に後藤と尾崎は立場をこそ異にしたれ、一定の軌道が無い點に於て、共に一種の惑星と見るべきではあるまいか。

三

歸朝後の兩人は政治上の分水嶺に立つて、孰れの道を進むかを定むべき必要がある。少くも後藤は其の點に於て多少考慮の跡が見える。彼は周圍からいろ／＼誘惑もあり、又た本人も沈默中で通すのは、彼の性質として苦肉の感があるけれども、自己の立場や後來の損得を考へれば、此の際周圍の煽てに乘つてジタバタすべきで無い。ウツカリ新運動に手を出すと飛んだ失敗をして立場を失ふ危險がある。

後藤は惑星ながらも、原、加藤、犬養等の間に一種面白い位置を占めて居る。政黨以外の勢力は寺内の歿後中心の偶像を失つた形で、若し次の内閣が政友會以外の勢力に依つて組織されるとすれば、先づ問題になりさうな人物は後藤である。伊東、犬養、後藤の間に三角同盟がある如く傳へられたが、是れは全

然贍である。又た最近大石再起の噂に連れて大石、後藤、犬養の提携說が政界の一角に唱へられたが、是れも一部策士の夢想談に過ぎぬ。が、兎に角後藤は政友會内閣が國民に倦かれて餘り長續きせぬを見越し、一物を立てゝ居るのは事實である。已に遞信、内務、外務に歷任し、前内閣の副總理格であつた所から云へば、首相の閲歷に不足は無いとして居る。然るに一方には加藤も原の後を狙つて取らぬ狸の皮算用をして居る。唯だ問題は現内閣瓦解後の政局が如何に收拾されるかの問題であるが、果して加藤の手に渡るか否かは疑問である。單なる理義から云へば、憲政會が取つて代るべき順序ながら、日本の政治は理義通りに行かぬことになつて居る。加藤を毛嫌ひして是れに政權を渡すのを好まぬものが多い。特に理義よりも現實の利害に重きを置く原は、適當な名義さへあれば解散でもして黨務を張らうとして居る位だから、憲政會の天下にしてオベコベに此方の不利になる事を避けんとして居る。次の場合に備へる上から云ふも、若くは次の内閣にも得べくんば割込もうと云ふ點から云ふも、加藤に渡したく無い。寧ろ後藤を後に据ゑる方が便利だと云ふ頭があるかも知れぬ。特に憲政會と後藤とは睨み合つた仲だから、自分が出ぬまでも、内々政友會に共鳴して加藤排斥の手傳をしないとも限らぬ。

原は官僚系に對して安全瓣を張るに汲々とし、少しでもアバレさうなものは務めて敵に廻さぬようにして居る。田を臺灣總督にしたのも陰謀除のお禁厭に外ならぬ。新政會や無所屬中には歸朝後の後藤を擁して局面展開を計らうとするものがあり、後藤も内閣を倒したいが、自分で下手人になりたくないと云ふ腹がある。原は後藤の色氣を見て、それと無く諒解を求めて居るかも知れぬ。

そこは後藤も智恵があるから、誤解や猜疑を招いでは損だと思つて手放しに抱負を語らず、何方にも當り障りのない事を言つて居る。或は東洋協會の歡迎會席上で、日本の前途を思へば、區々たる政爭に沒頭して内輪の爭ひに時間を空費すべき時で無いといひ、或は最近福澤翁記念會で、民本主義の丸呑みを警め、改造事業の第一義は科學の上に國家社會を導くにあるを說き、勞働問題の解決と衛生の關係を講釋するなど、言ふことが勞働黨組織の噂を立てられた人のように無い。斯くして當分は安全第一を工夫、近い中に支那漫遊をすると云ふ說もある。自重よ汝の名は白紙主義也。彼は白紙主義に閉ぢ籠つて形勢を觀望し、何でも悧巧な方へ廻るに如かずと云ふのが歸朝後の心理狀態で、いざと云ふ場合に彼を押立てようとする取卷中にも、此の際成べく瘵物にしたく無いと思つて鎭靜劑を服ませたものも

あるらしい。加藤も一時は熟柿主義を學んで日和見をして居たが、當時は餘儀なくされたか、自分が足痺を切らしたか、今では政局展開の旗幟物を掲ぐるに至つた。今度は後藤が熟柿主義と洒落込み、大分原の宗旨が流行するが、首尾よく熟柿を拾ひ中てるか、拾ひ損ねたとすれば如何なる仕組で行くか、其所は一つの謎として留保し、早晩謎の解ける時期が來るだらう、

四

尾崎も歸つてから餘り振はぬ。氣焰家に似合はず大人しく控へて居る。彼も憲政會に居る以上は、新活路を見出すことは困難かも知れぬ。何となれば彼の憲政會に於ける位置は無力である。それ故に何日までも憲政會に腰を据ゑて加藤の節度に服するか何うかを疑はれたが、又た一面から考へれば今まで一顆闘閥と云ふ關係を歩いたから、今更政友會に三度目の復黨も出來ぬし、さりとて國民黨にも行けぬ。新政會や無所屬に燻つて存在を認められぬのも忍ぶ能はざる所である。一部の策士が夢想する如く、諸方から掻き集めて一つの團體でも出來たならば、彼は其の時に立場を形造ることが出來るかも知れぬが、今の所ではソンナ物が出現すると云ふプロバビリテーは少い。さすれば餘儀なく憲政會に神輿を据ゑる外はあるまい。

彼の歸朝が注意された理由の一つは、丁度普通選擧で、憲政會が幹部派と急進派に別れて擦つた揉んだの騷ぎを一ツ始めた時であつたから、之れに對して如何なる態度を執るかと云ふ切迫した問題に面した點にあつた。彼は洋行前普通選擧のパロパガンダをして廻り、普選とデモクラシイは自分の專賣のような顔をした關係から云へば、幹部派の保守論と急進派の即時實行論とに對し、其のいづれに與みするかは問ふまでも無い事である。然るに初めは明言を避けて煮え切らぬ態度を示した爲めに、彼の心事を疑ふものがあつた。一説には歸朝匆々幹部反對派に油を注ぐような議論をされては黨の平和上困るから、當分ハッキリした事を云はぬようにと、一部のものが無線電信で因果を含めた結果だと云ふが、實は洞ヶ峠を極込んで何方の景氣が好いかを觀望して居たのではあるまいか。然るに後に至つて兩派の爭點となれる實施期については急進派の即時施行論に傾いた。是れは尾崎として當然の態度である。普選問題では國民黨が先手を打つて最も進んだ案を出して居るのに、それよりも制限的の性質を帶びた案で憲政會が騷いでも到底追ひ附かぬし、特に之れが爲めに黨内の破綻を暴露するのも見苦しいから、結局大火事にならずして妥協に終るものと思はれるが、萬一今までの議論で相爭ふとして急進論が破れた場合に、尾崎は如何なる進退をするかと云ふ問題に對し、假りに自説が容れられ無かつた

からとて、他に幾多の重大問題があるのに之れが爲めに進退を賭する意志はないと、案外大きく出て居る。昨年彼が普選の旗印を掲げて黨議——加藤は大會に於て普選尚早論を發表した——と相容れなかつた時、本來ならば脱黨して男らしい所を見せるべきであるのに、脱黨もせねば黨議にも服せず、別に黨議に背かぬ範圍で行動すると云ふ中ハンチクな理由を發明した位だから、實際進退の事は問題にして居ないのであらう。是等が尾崎式を發揮した所である。

然し彼の流儀から云へば政黨を飛出す位は朝飯前で、進退の節を重んずる爲めに憲政會に居ると思ふと大間違である。從來の出處行藏の跡を見るに、説よりも一身の利害から割出した場合が多い。それ故に説では動かぬけれども、若し犬養と大石と兩人で説得したならば、一日仕事で憲政會を脱けさすことが出來る。自分からは行き難いが、原が來いと云へば或は政友會へも行かぬとは限らぬ。無拘泥無頓着な點は流石に徹底して居る。唯だ尾崎に必要が無いから誰も誘ひ出さない迄である。

五

後藤の周圍には人が集ると云ふが、是等は彼に感服して居るからでなく、金を目標にするものが多い。然し兎に角政界に若干の手下を有ち又た造り得る力がある。尾崎には忠實な味方が無い。適ゝ彼に接近するものは借金の上前を刎ねるか、煽て揚げて何かに利用しようと云ふ質の善くない連中である。それを尾崎は平氣で近けて周圍の思惑を顧みない。夫れに昔から自分以外のものには極めて冷淡であるから、事を共にするものは頼もしく思はない。それ故に後藤は周圍の力を利用することが出來るが、尾崎は何處までも孤立である。其の證據には前年進歩黨を出た時、尤もらしい人間は一人も進退を共にしなかつた。政友會を出た時は二度とも彼と心中したものは無い。舊中正會でも中心の偶像になり得なんだ。憲政會で幅が利かぬのも獨りぼツちであるからである。兎に角好い參謀を有たぬことは彼の不幸で、毎度の軌道外れも之れが元である。

後藤の金力、尾崎の貧乏——此の對照も面白いが、智惠の分量や實際の働に於ても役者の段が違ふ。尾崎は智慧も無ければ守る所も無い。唯だ一つの取柄は口で、謂はゞ一種の演説成金である。其の代り彼の演説は其の日限り其の場限りで平仄が合つて居ない。以前は演説の信者があつたけれども、今日は眞面目に信用して聞くものが少くなつた。後藤を善人とするのは餘りに縁遠いが、尾崎は何處までも善人である。若し彼が性來心術の惡い男ならば、何年以前に政界から葬られたであらう。唯だ善人であるが故に、二重人格でも變説改論でも、今まで命を

保つたのである。

後藤は野心家で己惚れが强い。尾崎は幻想家にして抱負が大きい。前者は多少實行的であるが、後者は言ふだけで實行は何うでも好い。それ故に大臣になつても自分の主張を斯うしようと云ふ考へが無く、伴食で納つて居るから面倒が無い。見す／＼行詰つても自分ではさうと思はずに居る所や、又た自分一流の理窟を造つてそれを一番好いと思ひ、顧みられなかつた場合は世皆濁つて我れ獨り淸めりと豪語して居る所は樂天的で罪が無い。後藤は天下取りを夢み、尾崎は近頃大臣になりたがつて居るさうだが、何方も政治家としては大した代物で無い。特に尾崎に至つては政界の畸形兒である。

▽尾崎君にはまだ少し脈がある

堺利彦

後藤、尾崎兩君と私個人との關係について、私は幾度も批評文を書いた事がある。然し社會の形勢は刻々に進展しつゝある。兩君はもはや殆んど問題にならなくなつてゐる。後藤君が次の內閣の大將になるか否かなどいふ事は、我々に取つて大した意味のある事ではない。只尾崎君にはまだ少し脉がある。若し尾崎君が憲政會の普選問題の態度を進步的に決定させるに有効な實力を示すならば、尾崎君の晚年にまだ多少の望みがある。若し尾崎君がそれをやり得ないならば、矢張り十把一とからげの舊政治家、老政治家の範疇に入れられるより外はない。島田三郎君すら多少の返り咲を試みようとしてゐる。尾崎君たる者、此際グズグズしてゐては見上げもない。伴食大臣を二度も三度も務めるのは決して名譽でない。

▽後藤男と尾崎氏

前田蓮山

將來の首相と云ふ問題に對する時、後藤男は必ず其の候補者の一人として數へらるゝ。理由如何を問へば、多くは唯だ漠然たる直覺に過ぎないで、何んだか然んな氣がすると云ふに止まる。而かも是れが實は決して馬鹿にならぬ。何の氣もない男女が浮名を立てられた爲めに眞實の戀に落つると云ふこともある。群衆心理は無より有を望み出すこともあるものだ。

解剖的に後藤男を觀察すると、悲觀の材料もあれば樂觀の材

料もある。第一に彼は後藤出でずんば國家を如何せんと云ふ人傑であるか。最も高く評價しても、彼は原や加藤の上に出づる人物ではない。現在原內閣に不滿である者でも、後藤が出れば安心だと思ふ者は、新政會其の他少數の彼の家の子郎等より外には全く無いと言つても可からう。イヤ其の新政會すらも、彼を押し立てゝ政權に近かうと云ふ野心あるのみで、眞に[illegible]相として國家を泰山の安きに置く人物だとは信じて居まい。

然らば彼が總理大臣としての可能性は何處にあるか。明治十八年以來內閣の交迭したる事十九回、其の間政黨を基礎とした大隈內閣二回、西園寺內閣二回、及び現在の原內閣を除けば、悉く藩閥出身者內閣であつた。官僚閥として清浦が推薦されたことがあるけれども、山縣は之に多くの熱心なく、遂に流產して了つたのである。平田の勢力を以てして尙ほ且つ今日まで總理大臣たる機會を得なかつた。山縣は武官にも文官も廣く人材を登用して、今日の軍閥と官僚閥を作つたが、其の首腦は必ず長閥出身を以て之に充てたのである。藩閥は亡びたと言つても、山縣がある限りは、長閥の軍閥、長閥の官僚閥だ。

後藤男は藩閥でもなく、官僚閥としても傍系に屬する。彼は兒玉源太郎から引き立てられたものであるが、其兒玉は山縣よりは寧ろ伊藤に近かつた。其の死する前には頗る山縣と惡しく、之が爲めに憤死したのであると云ふ風說さへ起つた位である。兒玉の死後、彼は桂に寄りかゝつて行つたが、其の桂も山縣と仲違ひになつて死んだ。寺內は兒玉の乾分であつたと云ふ關係があるので、頗る彼を重用したけれども、之れ亦彼が眞の充分に延びない前に死んで了つた官僚閥の幹部とも言ふべき清浦でさへ猜疑の臭ひをかいだゞけで、平田は臭ひさへかゞないのに、彼が官僚閥を基礎として內閣を組織すると云ふことは思ひも寄らぬ話である。殊に寺內の死んだ後の山縣は平田一人のものと言つても可い。而して平田は後藤を信用して居ない。彼が山縣の袖に縋ることは容易の業ではあるまいと思ふ。

彼は到底官僚閥を基礎として內閣を組織することは出來ない。官僚閥を基礎として將來の內閣が組織され得るものならば、必ず清浦が出るに違ひないのだ。併し今日の時代、超然內閣が成功し得やうとは思ひも寄らぬ。他に首相たり得る人物が絕對に無いとすれば兎も角、強ち然らざる以上、元老が清浦などを推薦する如き無理なことはしまいと思はれる。然らば他に誰[illegible]があるか。

後繼內閣の首相は現內閣の倒れやう如何によつて變ずるだらうと思ふ。故に現內閣が何時如何にして倒れるか、先づ此の事から推測して見たければ後繼首相の誰れなるかは想像し得られ

ない。純理から言へば立憲政治に於ては、政府が如何なる政策を行ふとも、議會を通過し得れば國民の承認を得たるものと見るべきであるから、議會の多數に支持さるゝ内閣は失政はないと言はねばならぬ。或者は現内閣は本年の秋頃は失政百出、外交行詰りで倒れるだらうと言ふが、之は頓んと解からぬ話である。言ふ者は超然内閣時代の慣習に囚はれて居るのではないか。超然内閣時代には、衆議院の多數は常に反對であつたから、其の反對の度が激しくなれば内閣を交迭して一時之を緩和し、其の内閣が段々失政が重なつて反對の度が増し來ると、又た交迭して之を緩和すると云ふやり方であつた。桂などが民心をして倦まさらしむと言つたのは此の呼吸を言つたのだ。併し政黨内閣では、多數の續く限り、民心が倦んで居らぬ證據であつて、故らに内閣を交迭して天下の耳目を一新するなど云ふ必要はない。民心が政府に倦めば議會が之を支持せず、耳目一新を迫るのだ。

唯だ日本に於ては議會に多數の支持者を有すとも、陛下の御信任を失へば辭職しなければならぬ道理であるが、未だ曾て斯の如き例はない。現内閣は現在の所、衆議院に絶對多數を有しないけれども、解散すれば必ず絶對多數か或は現在よりモツト確實な基礎を作ることが出來るに違ひない。難關は唯だ貴族院であるが、是れが何時彈劾的態度に出るか、貴族院から彈劾を受けるなら多分サツサツと罷めるだらう、貴族院の反對に合つた場合、衆議院を解散して民意に向ふといふやうな事は敢てしまいと信ずるが、貴族院の反對なき以上は決して辭職しないと云ふことは斷言するに憚らない。

併し問題は寧ろ貴族院が公然と彈劾する以前、彈劾するやうな態度を示した時に、辭職して衝突を避けるか否やである。吾輩の察する所に依れば、原首相が内心失敗を悟り、貴族院の反對に一理ありと思ふ時には衝突前に辭職するだらうが、貴族院の爲す所が政權爭奪か或は感情に傾き、甚だ無理であると信ずる際には、堂々と議會で衝突した上で進退を決するに違ひない。

後の場合に於ては、權兵衛内閣の後に大隈内閣が出現したやうに、結局加藤内閣に落ち行くだらうと想像されるが、前の場合か本年の秋に來るとすれば、政友會の諒解を得た内閣、恰かも寺内々閣の如きものが現はれるに違ひない。そこで清浦なども問題に上るだらうが、政友會が清浦の超然内閣を援助すると云ふことは黨内の事情が許さない。清浦自身も亦强いて出やうとはしまいと思ふ。

是に於て最も有力な候補者は牧野伸顯と伊東巳代治である牧

野に對しては政友會は滿腹の同情を寄するに違ひない。併し彼は如何なる内閣を作るか、强いて作らうとすれば貴族院の研究會、交友俱樂部を基礎とし、國民黨の犬養、新政會を率ゐる後藤も入閣しまいとは限らないけれども、是には多くの無理がある。結局物にならぬと見る方が近いだらう。

伊東は牧野より可能性が多い。例の三角同盟――伊東、犬養、後藤――は今でも繼續して居るから、衆議院に於ては憲政會に匹敵し得る勢力を有し、政友會も好意的中立の態度に出る。すると寺内々閣よりも形が變つて居り基礎も堅い内閣が出來るわけである。所が伊東先生に其の勇氣があるか何うか。衆議院に相當の勢力を得ることが出來ると言つても、其の勢力を把持して行かうには非常な努力を要する。樞密院で内閣いびりをして居るやうなわけには行かぬ。彼は名よりも實を取る人である。寧ろ後藤を表面に出して、後ろから自由自在にあやつらうと云ふヅルイ態度に出はしないか。其處に多少の疑問がある。

後藤男の順番は、淸浦、牧野、伊東の問題が解決した後でなければ廻はつて來ない、唯だ後藤には不思議な人氣がある。此の點は前三人と比べものにならぬ。結局彼に落ち付くまいものでもない。若し夫れ現内閣が次の總選擧まで繼續するなら形勢恐く一變するだらう。三角同盟などはコツパミジンだ。

尾崎氏に就ては言ふべきことは殆んどない。彼が歸朝後の態度は世間の豫期と甚だ異つて居るが、吾輩に初めから彼を問題にして居なかつた。後藤と提携して勞働黨を作るなどゝの風說もあつたが、吾輩は世間の風說の馬鹿〳〵しさを笑つて居た。果然後藤は次の首相たるべく野心勃々で、元老の信川を得んとするに汲々たる許りである。尾崎氏は何んとしても今更憲政會を離れることは出來ぬ。離れては不利益だと云ふことを自ら知つて居る。彼は普通選擧や勞働問題には餘り興味を有して居らぬ。夫れには多少山縣迎合卽熟柿主義もあるが、西洋の實際を見て感じたこともあるだらう。今次の議會では外交問題に就て大演說をやるだらうと思ふが、演說は上手に出來ても、其れが大なる勢力となつて現れやうとは期待されない。大隈内閣に入つて司法大臣となり、憲政會に入つて加藤の下に屈したのが彼の行詰りだ。彼は牛尾とならんよりは雞口となるに適して居る。大臣にもなりたく虛名も得たいと云ふのが彼の禍だ。犬養は國民黨を小さくしたが、彼れ一個人は反對に大きくなつた。尾崎氏は大政黨の領袖となり大臣にはなつたが、彼れ一個人は反對に小さくなつたのである。

▽兩人共先づ或意味の千兩役者

文學博士　三宅雪嶺

▽

後藤男と尾崎氏とが相並んで世間の噂に上るとは、二人の豫期しなかつた所であり、世間も豫期しなかつたのである。六十の聲を聞いて一幅對に見立てられるなど、不思議の事と云へぬではない。特別に理由なく、誠に偶然に屬するが、偶然中に何等かの因緣があらう。昨年まで一幅對にならうなど夢にも思はれなんだとて、今となつて見れば何處か肖通つた所がある。容貌さへ全く種類を異にして居らぬ。若し人を別ち、身裝りを構ふ者と構はぬ者とにすれば、二人共に前者に屬する。顏がのつぺりして居り、氣取るとなしに氣取ると見える。趣味は簡單であつても、出來るならば貴族的に傾かうとする。贅澤の爲たくない方でなく、出來れば途轍も無い事をせぬと限らぬ。それで平民的の事を好まぬでなく、何人とも打寛ろいで話さうとし、必要とあれば印半纏を羽織るであらう。何處かに芝居氣があり、時として實世間と演劇とを混同する。貴族的趣味を帶ぶるのも芝居氣を混へて居り、平民と共にするのも芝居氣を混へて居る。實世間を演劇で渡るやうに生れた跡形がある。演劇の心得でなく、至極眞面目であつて、其眞面目な態度が演劇となる。共に或る舞臺で嵌り役となり、見物人の注意を惹く。自ら芝居を仕組む方でなく、俳優として舞臺に登場する方であり、豫め何といふ役好みせず、當りさへせば可いのである。適當の舞臺が無ければ、一向見榮えが無く、何とも仕方が無いやうであつて、或る機會(はずみ)で適當の舞臺に上れば、無くてならぬ人物となる。之れを舞臺に立たせる者から見れば、好加減の人物を好加減に使ふのと思ふけれども、他人と取代へる譯に行かぬ。他人では何處か物足らず感ずる。何といふても或る芝居を打つに無くてならぬ素質を具へて居る。

▽

何の能力があるかとなれば、疑問を免かれぬが、兎も角も斯かる點で普通に優つた所がある。褒めても貶しても或る舞臺に立たせて置ける。立てば入りがあるといふ斷定になる。當人は其場に懸命に働き、車輪とも大車輪とも、何とでも形容すべきであり、而して以前に演じた藝當と何の關係あるかは全く問ふ所でない。成功の秘訣が全力の集中に在りとすれば、二人は或る舞臺に全力を集中して成功するものである。場當りの妙所を得

て居る。自ら場當りと思はず、或は場當りを非難しつゝ、場當りに於て此上もない事になる。前に斯くしたから今回は斯くせねばならぬとの遠慮なく、前は前、今は今、其場限りで出來る丈けの事を爲ようとする。そこで場當り此上も無くなる。考へて見れば甚だしく前後矛盾し、滑稽であつても、其場だけは感心せずに居れぬ。千兩役者と云ひ度くなる。

▽

所で二人共に背て居るけれども、各々特色がある。性質からか境遇からか、何れにしても後藤は貴族富豪の間に力を認め、其力を藉らうとし、尾崎は群衆の間に力を認め、其力を藉らうとする。之れとて程度上の事であり、後藤が貴族富豪の力を藉りつゝ、群衆と共にする事を忘れず、尾崎は群衆に割つて入り、大向ふを唸らせるに専らなやうであつて、貴族富豪の力を藉らぬでなく、必要とあれば獅噛み着かうとする。凸面から凹面に向ふと、凹面から凸面に向ふとの差であつて、中味は外面から見た程の違ひは無い。然し外面に於て大いに違ひ、寧ろ正反對と見える。後藤も物好き半分群衆を煽り立てる意が無いではないが、尾崎程割り込んで行つて煽り立てようとせず、又煽り立てる事が出來ぬ。本氣でも本氣でなくても　尾崎群が衆に割り込んで行き、之を煽り立てる事、往々天下一品と稱せられる。

後藤に何うしても夫れ程の藝當が出來ぬ。自らは出來ないのでなく、氣恥しくて爲る氣にならぬと云はうが、氣恥かしく感ずるのは、尾崎から見て卑怯であり、臆病である。尾崎は群衆が歡迎しさへせば、何處まで乘つて出るか知れぬ。何とでも叫び廻はるを辭せぬ。

尾崎の力の最も顯はれる所は大なる群衆が大いなる動搖を起すに在る。群衆の動搖は尾崎の政治的生命を形造くる。後藤は之れと違ひ、背後に或る有力者を得れば、其有力者の力が大いなるだけ自身の力を大にし、活動を盛んにする。兒玉とか桂とかいふ有力者が援護して呉れると信ずれば、縦横無盡に切り捲くり、何處までも伸びて行くが、背後に有力者が無いとあつては、から意氣地なくなり、何事をも爲す事が出來ぬ。寺内内閣で内相となり、轉じて外相となり、何れも十分に腕を振ひ得べき役柄でありながら、何等見るべきものが無く、殊に外相として餘りに無能を示した。之と云ふも寺内が兒玉程の力無く、桂程の力無かつたのに由る。寺内は或る點に於て桂兒玉に優るにせよ、後藤を働かすが如き點に於て遙かに劣る。働かして呉れる者が居らねば、後藤は居つても居らぬと異ならぬ。

▽

斯く後藤と尾崎と相背て居り、相違つて居り、而して世界戰

役の影響を受けた新舞臺に顯はれる事に成り來つたと知られる。尾崎は大隈內閣が倒れて行詰り、後藤は寺內內閣が倒れて行き詰り、行き詰つた所で世界に大騷動が起らうとし、何か面白い役をもがなど考へて出掛けて行つた。世界の問題に國際聯盟と勞資關係を主なものとする。國際聯盟は他國の思惑があり、一國の思ふやうに行かず、況して一個人で何を爲る事も出來ぬ。一個人で力を顯し得るのは勞資關係の方面に在る。勞働組合及び其聯合で著大なる活動を演ずるのを見る。今後の活舞臺は此邊に在ると考へざるを得ぬ。後藤も尾崎も勞働者と肌合ひが違ひ、昔ならば殿樣顏して下賤の者共を頤で遇らひ度い方であるが、一種の茶目氣性を以て生れて來て居り、勞働者と膝を額して話すのが面白さうにも思へる。長く勞働者と共に住居するなど思ひもよらぬ事であるけれども、暫くならば肌を脫ぐ氣になる。勞働者のわい〳〵云うて熱狂するのを聞き、惡い氣はせぬ。勞働黨の首領も面白さうであるとも思ふ。然し何としても貴族的趣味が勝たうとし、身を打込んで勞働黨を組織しようとする譯に行かぬ。

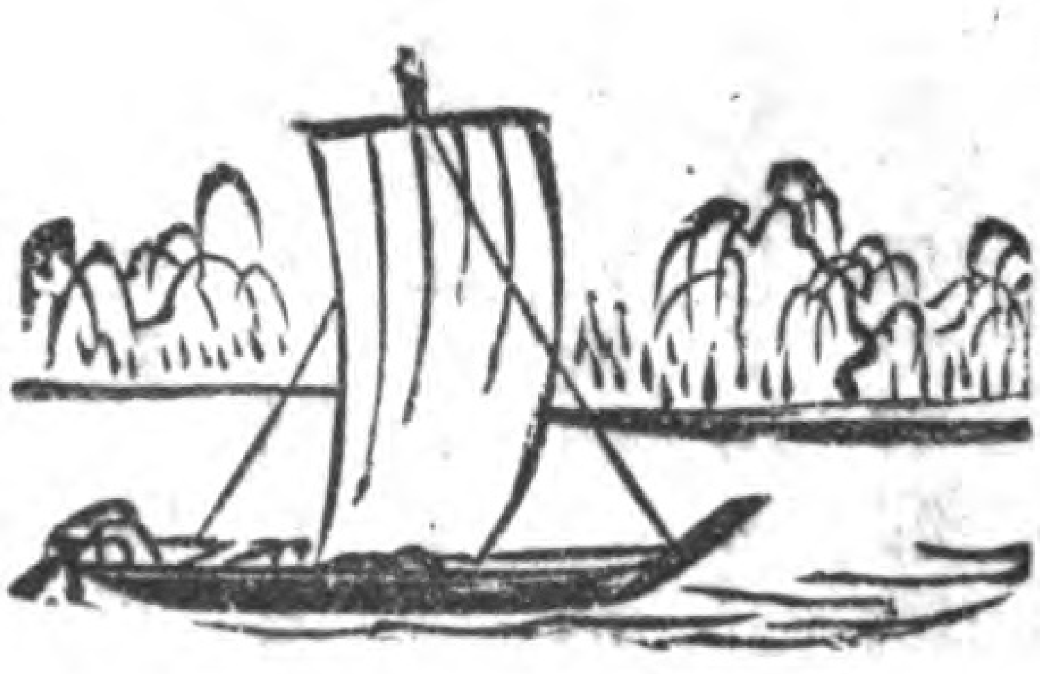
▽

後藤も尾崎も富貴に執着する方でなく、富貴なんか知れたものであるとし、自分を夫れ以上に置かうともするが、富貴に成れば富貴の氣持ちに成るのである。後藤は既に男爵であり、何時か陞爵する希望もある。而して自ら金儲けに心掛けなくても、多く御用商人を助けた結果金が自由になり、延いて富豪相似の生活を送らうともする。之が後藤に取つて得か損かと分らぬ。金が自由でなくては働けぬかも知れぬが、自由になつた爲めに働きが鈍る所ないとせぬ。尾崎は後藤程金の事を考へず、金儲けの道に迂いけれども、絕えず或る資本家との關係がある。自ら貧乏して忍耐しようとせず、成る可く上流者らしい生活を送り度く、金が無くてもあると同樣の生活振りせねば氣が濟まぬ。そこで思ひ切つて資本家と離れ、勞働者と共にする事が出來ぬ。群衆の歡迎を受ける事が好きなので勞働者と共にしたりするが、勞働者の權利を何うしようと云ふ事は特別に考へぬ。其時々に機を合せば可いとする。然し後藤よりも自由である。後藤は何にしても資本家に手足を縛られ、之を脫する事が出來ぬ。精々で勞資協調位の所である。曾て相馬事件で入獄した割で云へば、富貴に關係ない方が、本來の性格を發揮するに適して居るとも思へるが、今は最早や拔き差しが出來ぬ。其上出處進退何人か献立せねばならなくなつて居る。何人か後藤を捉(つか)まへ、斯く働くべきであるとし動かしたならば働くであらうが、左も無ければ、之れぞと云ふ事を爲し得ない。其邊になれば原氏

は上は手である。外の事は分らぬにしても、人扱ひの骨を心得て居り、後藤を大抵にして形着けようとする。前寺内内閣關係者は、寺内の後に後藤を推さうとするのがあり、何や彼や後繼内閣は貴族院を主にし、政友會で援助しようとする筋書を造るのがあり、後藤は其方に引取られ、之れを待つて居る次第である。斯くて失望するかせぬかは、新外題で幕が開かねば分らぬ。尾崎の方は急に入閣の見込みなく、群衆に歡迎され、所屬政黨憲政會の幹部を脅して暫く滿足するであらう。

▽

二人は何處か肖て居り何處か違つて居る。雄辯家と云へば東洋で蘇秦張儀等は專ら君主に說き、西洋でデモステネス、キケロ等は主として群衆に說くの違ひがある。之れを持ち出すのは後藤尾崎を偉くし過ぎるけれども共に何時でも何か偉くならうとしつゝ、一方が或る有力者に依らうとし、他の一方が群衆に據らうとする所が此關係ないではない。藝妓でいへば、一方は成金の妾にならうとし、一方は看板畫で賣らうとする、然し判然區別するのでなく、違つて居るやうで似て居る。先づ二人共に大抵の所まで働いて行かう。



時論

法學博士　吉野作造

支那學生運動の新傾向

去年の春以來我々を惱ました支那の日貨排斥運動は、純然たる學生の運動である事は隱れもない事實である。學生が此種の運動に沒頭して其本分を忘るるのは固より褒めた事ではないが、然し彼等が此褒むべからざる運動に沒頭せねばならなかつた事に就ては、大いに諒とすべき理由がある。然るに世上には或は之を根據なき一時の輕燥盲動と看做し、或は外國の煽動に由る淺薄な運動だなどゝ云ふ者もあつたが、是等は事の眞相を誤るの謬見たるのみならず、斯かる謬見に基く對策に因つて被る損害の測るべからざるものある事は、吾人の已に繰返して主張せる所であつた。先月央ばの「大正日々新聞」に表はれた清水安三氏の所說は此點に於て大いに見るべきものがある。其頃同紙の社說に表はれた日貨排斥對應策も亦、吾々の大いに同感を禁じ得ざる所であつた。

何れにしても吾々は彼等學生の運動を以て相當に根柢あるものと觀る。從つて之が解決に就ては吾々に於ても亦大いに愼重の態度を執らねばならぬ事を主張するものである。然るに彼等の所謂日貨排斥運動は昨今漸次鎭靜に歸せんとしつゝあるやうに見える。尤も去年の秋已に此傾向が見えたが、圖らずも福州事件の爲めに勢を盛り返した。けれども此頃に在つて又再び段々鎭靜に歸せんとするの色が見える。尤も局部局部には尙ほ猛烈な運動の行はれて居る事は新聞の電報にも明かである。それでも餘程劇烈の程度を減じて居る。そこで一部の人は彼等學生ももう此運動に飽きた、早晩有耶無耶に消滅して終ふだらうと云ふ。併し乍ら之れ果して事の眞相を捕へた見解であらうか。學生の運動の昨今の形勢は之れ程安心すべきものであらうか。

此事は前にも屢々種々な機會に於て述べた所であるが、今度のボイコットを昔のボイコットと同視してはならない。昔のボイコットは、例へば辰丸事件の問題にしても、日本政府との外交の掛引上、政府側が内々に煽動する所の運動であつた。支那の

從來の外交家は、外交談判に於て理を以つて爭ふ事をせず、種々な方法を利用して我意を通さうといふのが慣用手段であつた。時としては外國の勢力を利用する事もあつた。最も好んで利用した者は即ち民衆の勢力であつた。ボイコットは其中で最も好んで利用された者である。同じ樣な事は商務總會のやうな商賣人の團體が行つた。凡て昔のボイコットは國民の自發的のものでない。であるから外交談判が相當に纏が着き、當局の方でも此上其必要が無いといふ事になれば、ボイコットは即ち有耶無耶の間に忽ち閉熄して終ふ。然らざるも民衆は固より自發的の決心で深い確信を根據として行るのでないから、餘り長く續けば飽きて來る。然し之れ皆自發的のボイコットでない爲めに外ならない。而して今度のボイコットは全然之れとは意味が違ふ。故に從來のボイコットに對する經驗を以て今度のボイコットを判斷するのは大いに謬りである。果せる哉、最近の排貨運動の外觀的閉熄は彼等の運動の倦怠的中止を意味するものでなくして、運動の方向が他の方面に轉換したものに外ならない。然らば彼等學生の運動が排貨運動から何ふいふ方向に轉換して行つたのか。曰く、思想宣傳即ち之れである。此頃支那の新聞を見ると、夜學校若くは學術講演會の廣告が夥しく眼に着く。歷史・地理・博物・衛生・法律・經濟と云つたやうな、種々な學術を短期の間に簡易平明を旨として教へる。月謝は殆ど云ふに足らぬ程の小額にして、學生並に少壯の教授が其講義の任に當る。聽講者の資格はと云へば、例へば十四歲以上六十歲以下の人は誰でも可いといふやうなのが普通の形式である。即ち前に排斥運動に憂身を窶した學生は、今や一轉して國民の社會教育の爲めに熱中しようといふ態度を執るに至つた。斯う云へば事は甚だ簡單であるけれども、吾々は此處に排日思想が更に此機關を通じて大いに國民に教へらるる事はあるまいかと、懸念する理由を見るものである。

尤も是等の夜學校の計畫は、專ら排日思想の宣傳に利用する爲めに作られたものではあるまい。排日運動をやつた先生方が直ぐに之をやつたと聞くと、直ちに吾々は之を彼等が排日の目的に利用するのだらうといふ風に邪推する。無論之もあらう。然しそれ計りではあるまい。何故なれば日貨排斥ももと〳〵國家の自主獨立の發達といふ所に根據し、此同一の根據は亦一轉して民衆の開發といふ事に興味を持たしめ得るからである。少くとも彼等の内の本當に心ある者は、ボイコットなどといふ枝節の事よりも、國民其者を啓發するのが急務だといふやうな考から夜學校を初めた者もあらう。それ丈け彼等の思想は更に一段の進步を加へたものであるが、唯此方法が今後矢張り事毎に

排日思想の宣傳に利用されるといふ事になれば、之れは日支關係の將來に取つては眼前の排貨問題以上に非常に重大な影響を吾々に與へるものである。從て吾々はボイコットの下火になつたといふ事を以て安心は出來ない。今後ますく愼重なる研究を傾ける事が必要だと思ふ。

近來、學生の運動が排貨の實際より思想の宣傳に轉向したといふ事は一大進歩である。然るに更らに賞讃すべき傾向は、彼等の運動がもう一歩を進めて教育界の根本的改善をして居る事である。最近北京の教職員の總ストライキを手初めに各地方に學校騷動が行はれて居るが、之は何が原因かと云へば、皆教育の改善といふ問題に歸する。具體的に爭はれる所には種々の細目があるが、全體を通じて略ぼ一貫する所の思想は、教育事業を俗吏の手から奪はうとする事に在るようだが、支那のやうな官僚專制の國に於て、官僚的支配の廢滅の聲が先づ教育界から起つたと云ふ事は、頗る注目に値する現象と云はざるを得ない。

支那の今日の教育者諸君が、行政家の監督と干渉とを排斥するに成功して、後の始末を立派に成し遂げ得るや否やは自ら別問題である。先の勢力を驅逐する事は出來たが後の始末に更に成功しないと云ふのでは、折角の改善も何の効は無い。斯くして不成功に終れば、彼等は結局自ら治むるの能力無しと罵らるるの外は無いが、若し幸にして之に成功すると、此處に始めて支那民族の建設的能力は世界の承認する所となる譯だ。何にしても學界教育界の傾向が斯ういふ新らしい途を取らんとして居る事は、最も注意すべき現象である。日本に於ては今尚ほ教育界が行政官府の俗吏に兎や角支配されて居る際、支那が率先して俗吏よりの解放を主張して居るといふ事は、一寸皮肉にも響く。

國際問題に對する米國の態度の矛盾

講和會議に於ける國際聯盟の提案は、もともと主として米國の提唱に繋かるものたるに拘らず、米國自ら其成案の批准を拒まんとして居る事は、或る方面からは遺憾とせられ、或る方面からは激しく非難されても居る。而して批准拒絶の理由は種々あるけれども、主として問題となるのは第十條である。第十條は「聯盟國は聯盟各國の領土保全及び現在の政治的獨立を尊重し、且つ外部の侵略に對し之を擁護することを約」し、之を犯すものある時は聯盟理事會が本條の義務を履行すべき手段を講

するとある。そこで例へば歐羅巴の眞中に本條の除外せるが如き事件が突發し、聯盟理事會が之に對する手段として亞米利加や其他に出兵を要求したとする、其場合に亞米利加が直ちに其請求に應じて出兵せねばならぬといふ義務を負ひ度くないと云ふのが批准反對論者の言分である。そこで之に對する種々の修正案があるが、其中尤も勢力ある說は、其際に出兵すべきや否やの最後の決定權は之を議會に留保しようといふ說である。而して此際にモンロー主義といふのが盛んに論客の話頭に上つた。即ち米國は米大陸の事に歐洲諸國の干渉を排斥すると同時に、歐洲の事には全然傍觀の態度を執るといふ事を依然國是として守り度いと云ふのである。

講和會議に於て米國がモンロー主義承認の一項を挿入せしめんとした時、吾々は之を以て米大陸に於ける合衆國の獨占權を主張する利己的提案なりとして大いに非難せんとしたのであるが、成程モンロー主義には確かに此一面もあるけれども、他方には他國の事には干渉しないといふ極めて消極的な一面もあるので、而かも合衆國の之を主張したる理由は此消極的方面であつた事は、後に會議の議事錄等を見て明白になつた事であつた。米國が如何にモンロー主義の此消極的方面の確守に熱中して居るかは、土耳古の委任統治を斷然峻拒した事に於ても明白であらう。委任統治だらうが何だらうが少しでも他人の事に手を出し度いといふ當節柄、遣らうといふ者まで拒まうといふ所に、吾々は米國の特異なる立場を見てやらなければならない。

然らば他人は他人、俺は俺といふのが合衆國の一貫した立場かと云ふに、必ずしもさうではない。現に合衆國は他所の國の事に昨今隨分干渉して居る。其最も著るしいのは山東問題に關する事實上の干渉であらう。此點に就ては隨分日本の國論をも沸騰せしめた。殊に支那に味方して日本を抑へるといふ態度に出た丈け、吾々は大いに之を憤慨したのであるが、然し又亞米利加の立場に成つて考へて見れば、事柄の善惡は兎も角として、之は唯一種の排日的感情の自然の發露とのみ觀るべからざる理由がある。之も山東問題に關する彼國識者の所說を冷靜に讀めば分る。彼等の考ふる所に據れば、昔はいざ知らず是からは他所の國の事を他所の國の勝手として放任する譯には行かない。此世界全體を住み心地の好いものとする爲めには、物騷な事をする隣人の生活に干渉するといふ事は妨げない。隣りに火藥を取扱ふ商人があれば、火事を免がれんが爲めに吾々は其隣人の爲すがまゝに傍觀し得ないと同樣に、軍國主義などを振舞はす者があれば、吾々は全體の安寧の爲めに之を何とか處分するの必要を思ふ。斯ういふ所から世界の平和を念とする是れか

らの國際生活に於ては、新に一種の干渉權を認めなければならない事になる。獨立國家は互に干渉すべからずといふ原則は、戰爭以前の國際法の認めし所であつたが、戰後の新國際法に於ては必ずしも之に拘泥すべきではない。斯ういふ考は別に意識的に學界の新原則として承認されるといふ譯ではないが、自然の趨勢として今日之が輿論の中に活きて働いて居る事は事實疑を容れない。此原則の適用として山東問題に干渉するのは正しいか正しくないかは姑く別問題として、兎角米國が外國の事に文句を言ふ事其自身は決して彼等の理性に根據の無い者ではない。之を一時の感情に基く過失と見るのは大いなる誤りである。

さうすると玆に最近の國際問題に對する態度は明白に二つの互に相容れざる思想に動いて居る事を認めなければならない。即ち一方には世界の新形勢に應じて新形勢に動きながら、他の一面に於ては舊き因習を固執して、新國際關係に對する特殊の地位を要求せんとして居ることである。此矛盾は如何に之を解釋すべきものであらうか。

之に就てまづ考の内に容れて置かなければならないのは、米國には現に此二つの相容れざる思想が今日十分調和されずして現存して居るといふ事である。即ち一方にモンロー主義といふ因襲に固執する舊い思想があり、又他方に一切の舊慣に拘らず新形勢を作り又は之を指導して行かうといふ新しい傾向と、此二つが思想的に戰ひつゝある事を認めなければならない。諸て其上に更に考ふべきは、此二つの傾向の何れが今日最も強く民衆を支配して居るかといふ事である。此點に關して予が最近米國の一般論調を靜かに觀察して得たる感想に據れば、新しい傾向即ち世界全體を我が事として、英吉利の事であらうが支那の事であらうが、世界中の凡ての出來事に興味と責任を有つといふ方の思想が根本の基調を成すと考へる。從つて山東問題に就て大いに他國の事に干渉するといふ態度が、此根本基調の當然の顯はれであると觀なければならない。

然らば玆に問題となるのは、獨り國際聯盟の問題に就て、何故に米國が極端な消極的態度に出でたか。而かも之が保守的思想家より特に主張さるゝに止まらずして、他の所謂新思想家と認むべきものの中にも相當に強い反對がある。此點は餘程愼重なる攻究を要する所であるが、予の觀る所に據れば、米國民の此態度は米國の民衆が國際聯盟の本當の精神に觸れて居るといふ所に求むべきものであらうと思ふ。言葉を換へて云へば、國際聯盟の本當の精神を了解し、又之を實現せんとして居るが故に、現在の國際聯盟に反對するのであると思ふ。今之を反對の側から説いて視ると、國際聯盟の成立に最も熱心なる佛蘭西など

は、米國側から見ると眞に聯盟の精神に忠實なるものではない。聯盟に對する佛蘭西の立場は、獨逸の復讐に對する有力な防波堤として聯盟の力を利用せんとする所に在る。獨逸に對して佛蘭西は今日尚ほ飽くまで喧嘩腰で、敵を信じ己を捨てるといふ淡白な態度に出で得ない。之も無理もない點はあるが、然し餘りに此點に執着して居るといふ事は、あれ丈けの聯盟規約に對してすら英、米、佛の同盟條約を得て初めて同意した事に據つても分る。それ程猜疑の眼を以て隣邦を見て居るのだから、彼が國際聯盟の成立を冀ふのも、畢竟之を利用せんが爲めである。之れ眞に聯盟の精神を解するものに非ず、從つて亦之を忠實に運用するか何うか分らない。此點は或る點まで英吉利に就ても云へる、之を米國は覩て居るのである。卽ち誠意無き連中に運用さるる聯盟に加入し、英佛の利用する所となつて出兵の責任を荷ふといふ譯には行かないと云ふのが米國の立場である。さういふ所から國際平和に誠意の無い英佛が國際聯盟論者に成り、之に誠意のある米國が反對の側に立つといふ奇觀を呈するに至つたのである。

斯くして米國は今日の聯盟に其儘加入する事が出來ない。少くとも理事會の決定に一から十まで盲從する譯には行かない。そこで之に反對するが爲めに見出した口實がモンロー主義である。或は舊式のモンロー主義者が茲に好機會を得て飛び出したのかも知れない。何れにしても吾々は此國際聯盟に對する特異な態度の內に、米國の國際聯盟の主義精神に對する、當初より一貫した志向を看取する事が出來る。吾々は國際聯盟に對する現在の態度を基として、山東問題に對する彼等の態度の矛盾を指摘せんとならば、之れ一見我國に取つて好都合のように見えるけれども、之れでは更に彼等の急所には當らない。寧ろ山東問題に對する彼等の態度を諒として、更に此精神を基いて國際聯盟の完成に努力せん事を促すべきである。

國際聯盟と民衆の輿論

ウイルソンの骨折つて作つた國際聯盟規約に對し、米國市民を代表する多數の議員が批准を拒まんとするの形勢を見て、あの世界的自由平等を標榜する米國でも、いざとなれば所謂民族主義の城壁內に立籠ると觀る人がある。此觀察の謬りなる事は前段にも說いたが、概して國際聯盟の本當の精神を實現せしめよう、所謂國際的正義を有效に確立しようとする傾向は、啻に米國に於て之を見る許りでなく、歐洲一般に於ても吾々は明白に之を見る事が出來る。最近歐米諸國に頻繁に起る所のストラ

イキが何に原因するかを冷靜に研究せば、蓋し思半ばに過ぐるものがあらう。或時は獨逸に對する講和條件の過酷に失するを理由としてストライキを行つた事もある。最も頻繁なる原因は對露干渉の否認である事は最早隱れもない。ブールジョア政府がレーニン政府を世界共同の敵として戰はんとして居るのに、民衆は飽くまで之を不法として遂に撤兵を斷行するの已むべからざるに至らしめた事は、既に英國に於て之を見、又最近米國に於て之を見た。歐米の民衆がレーニン政府に對して斯くの如き態度に出づる事の可否如何の問題は姑く別として、吾々は先づ此明白なる事實の存在を正視せねばならぬ。而して民衆が斯くの如き態度に出づる所以のものは、其適用に誤ありや否やは別問題として、兎に角國際的正義の實現に對する確信と熱情とに出づる事は疑を容れない。

此新たなる民衆的精神が發して對露干渉の否認となり、對獨講和條件大緩和の要求となるのであるが、之が又同時に國際聯盟を支持し發達せしむる根本條件でなければならない。而して一般民衆は世界を通じて略ぼ此共通なる新精神の發現を見たのに反し、片足を一步舊世界に踏込んで居るブールジョアジイ階級の政治家は、今尙ほ人と人と爭ひ、國と國と爭ふ必要上團體生活は爲すものの、一刻も油斷は出來ないといふ猜疑不信の社會觀を離れない。であるから國際聯盟の根本原則を承服しながら、尙ほ其間に種々利己的主張の貫徹を求めて聯盟の精神を不徹底にする。所謂國民主義の橫行なるもの卽ち之れである。而して我國の論者は多く此現象を見て、國際平和の實現は前途遼遠なりと稱して、舊時代と同樣な利己的防備の必要を國民に警告して居る。他の問題に於て最もデモクラチックな、從つて歐米民衆の新精神に了解があるべき人々までが、一旦國際問題になると彼の地ブールジョアジイ階級の見識を其儘自分の見識とするのは、實に不思議に堪へないけれども事實だから致方が無い。尤も歐米の政界は今日尙ほブールジョアジイの支配する所である。故に國際平和の肝腎なる實現を、彼等の勢力に一任する事も出來ないのは勿論である。けれども之も暫くの間の話で、到底滔々たる民衆的精神に抵抗は出來ないから、此懷疑的社會觀は民衆の人道的社會觀に打克たるるであらう。人と人と並びに國と國との社會生活に對して見方の二つある事は疑の無い事實であるが、吾々は今日其何れの見方が正しきを爲して居るかと云ふよりも、寧ろ何れの見方が近き將來を支配するかを見なければならない。吾々が民衆的見識に左袒する所以は主として此處に在る。ブールジョアジイ的見識を排斥する所以は、事實の觀察を誤つて居るといふ點よりも、寧ろ正義と平和の實現を

幾分擁護するからである。

無論吾々は國際的正義とか世界的平和とかを主張するに急にして、健全なる國民主義を否認する者ではない。吾々の否認せんとするのは、國際關係に於ける自家の正當なる地位を顧慮する事なくして徒らに其發展膨脹を圖る所の利己主義である。國際關係に於ける吾々の國體の沂を維持し、且つ之を相當に發展せしめん事は固より吾々の全力を盡くして努むる所である。若し之をしも破壞し去らんとする極端なる國際主義といふものがあるならば、吾々は固より之に反對する。此點に於て最近米國政府が過激主義のクーデターを未然に發見して嚴重に處分した事を不當とは思はない。唯所謂國際主義にも善惡の兩種ある事、恰も國民主義に善惡の二種あるが如くである。吾々は健全なる國際主義の發達を害するといふ點に於て極端なる國民主義を排斥するが、又健全なる國民主義を擁護せんが爲めに、謬つた國際主義を否認せんとする者である。

之を要するに國際聯盟乃至國際關係の問題に對する歐米の報道を見る時には、それが民衆の輿論から出たものか、ブージョアジイから出たものかを甄別する事が必要である。我國のデモクラットが歐米の國民も亦國際聯盟に冷淡なりなど云ふは、之れ正に知らずして歐米の官僚に裏書きし、以て世界の民衆を敵とするものである。さう云ふと、何も世界の大勢に盲從するの必要は無いなど丶云ふ人もあるが、所謂自主的とは内面的省慮無しに唯頑強に衆と相反いて異を樹てるといふ事ではない。

選舉權に關する積極原則主義と消極原則主義

今度議會で出來るにしても出來ないにしても、普通選擧は今や輿論の歸する所であり、之が成立を見るのは唯時の問題となつた。從て今や普通選擧は宜しくないの、未だ早いのといふ議論はとんと其姿を沒し、今日は婦人にも與るか、年齡を何う定めるかといふやうな細目の問題に議論の花を咲かして居る。年齡の定め方も重大な問題であるが、婦人參政權の問題は一層重大である。予輩は豫ねて今日直ちに婦人にも選擧權を與ふべき者といふ宿論を持つて居るが、之は他日更めて論ずるとして、此際には之れも昨今問題となつて居る戶主に限るとか、獨立の生計を營む者に限るとかいふ點に就いて、一言論評を加へて置かう。

普通選擧は國家構成分子の全部に選擧權者たるの地位を認むべしといふ根據に立脚するものであるけれとも、事實絶對に凡ての人に選擧權を與ふべしといふのではない。子供を除くとか、

犯罪人を除くとか、特別の官吏を除くとか、之れは何處の國でも認むる所の一般的除外例であつて、其項目も略ぼ一致して居る。唯婦人にも選擧權を認むべきや否やは、實際上重大なる差違を生ずる點であるけれども、之は昨今特別の問題として取扱はれて居るから、今日通俗に選擧といふ時は、先づ此問題には觸れないと見ていゝ。そこで問題は右述べた一般的除外例を去つた以上、更らに其上に尙ほ制限を認むべきや否やといふ所に、制限選擧と普通選擧との兩制度が岐れる。

兩制度共選擧權を國民の資格に伴ふ特殊の權利なりと觀る點に於ては同一だ。只之は國家の公務に關する重要なる權利であるが故に、之に適當な能力を有する者でなければ與へられない、從て實際上の問題としては、國民中相當の能力を有する者に限り之を與ふべしといふ議論が生ずる。制限選擧は卽ち此考へ方の上に立つのである。之に反して成程選擧權は國家の公務に關はる重要な權利ではあるが、然し今日のやうな開明の世の中に於ては、相當の年齢に達すれば皆適當に選擧權を行使する丈けの能力は具備して居る。稀に具備せざる者はあらうが、之は更に列擧して除いてもいゝが、其外は凡ての者に之を賦與するといふものが選擧權の性質にも叶ひ、且つ今日の民衆開發の程度にも應ずると見る事が出來る。普通選擧は卽ち此考の上に立つものである。

斯くして制限選擧制は特に能力ありと認むる者に限り選擧權を與へ、一般には之を與へないといふのが原則となつて居るから、予輩は之を消極原則主義と云ふ。普通選擧の方は一般に之を與へ、特に列擧する者に限つて之を與へないとするから、前者に對して之を積極原則主義と云つても差支へはあるまい。

今日の開明の世の中に於て、今尙ほ消極原則主義を取るのは道理上之を支持すべき何の根據も無いといふ所に、制限選擧制の重大な弱點が在る。只從來の支配階級は種々の理由で普通選擧の施行を不便としたけれども、遉の日本でも到頭之が抑へ切れなくなつた。殊に制限選擧制が常に揭ぐる所の財產上の要件が、必ずしも能力の有無を判ずべき適當な標準ではなく、而して選擧權を制限する唯一の合理的根據は、能力の有無ならざるべからずとする思想のます〳〵明かになつた今日の時勢に於て、制限選擧制の到底維持すべからざるは極めて明白の道理である。斯くして我國でも遂に普通選擧制に移らんとして居るのであるが、唯此變遷は、繰返して云ふが如く、從來の支配階級の最も不便とする所なるが故に、彼等は理に於て反對するを避けつゝ、實際に於ては凡ゆる智慧を絞つて、何とかして普通選擧の趣意の徹底を妨げんとする。此處に吾々は大いに警戒して

不徹底なる普通選擧制の實行を避け、之より來たる幾多の弊害より免るる方法を講ずる事が必要である。

普通選擧制は前に述べた如く、教育の進歩國民の開發を前提とする必然の要求であつて、所謂積極原則主義を取るものであるから、一般除外例を取去つた以上は、國民の全部に選擧權を賦與する原則を貫かねばならぬ。若し國民の一部に尙ほ遽かに選擧權を與ふべからざる者があるとするなら、それは相當の理由を掲げて一般除外例の範圍を擴張すればよい。此點は主義の問題としても初めから明白にして置くの必要がある。

そこで問題はかの所謂戸主のみに選擧權を與へんとするもの、獨立生計者に限つて選擧權を與へんとするの說が、政界の一部に相當勢力を有つて居るやうであるが、之は斷じて普通選擧でない事を、吾々は明かにして置かなければならない。同じ事でも戸主に非ざる者を除くとか、獨立の生計を營まざる者を除くとかいふ風に規定して、原則としては一般に之を與ふるといふのならまだいゝ。それを一般には與へない、唯戸主たる者若しくは獨立生計を營む者に限つて之を與へるといふのなら、之は全然制限選擧制と同じではないか。直接國稅三圓以上を納むる者と云ふ代りに、戸主とか獨立生計とかいふ文字を書いたまでの事である。故に若し今日一部の人が說くやうな形に選擧法が改正されるのなら、之は主義として斷じて普通選擧でないのみならず、事實に於て普通選擧の期待するものより遥かに遠い結果を生ずる事にならう。

普通選擧制は積極原則主義に立つ。獨立生計若しくは戸主といふやうな條件を掲ぐるのは、斷じて羊頭を掲げて狗肉を賣るの類である。選擧權に關する財產的條件を撤廢して、戸主又は獨立生計といふ條件を之に代ふる事の利害得失は又別問題であるけれども、(此點に就ても予輩は條件全部撤回論者である) 苟しくも普通選擧といふ以上は、そんな條件を掲ぐべきものではない。之れは普通選擧の據つて以つて立つ所の主義の上に於て許されないといふ事を一言したまでゞある。

小題小言五則

▽デシヤネルの當選 佛國大統領の改選に際し、誰しもクレマンソウが其選に當るだらうと豫期して居つたに反し、デシヤネルの當選を見たといふ事は、少くとも我國に於ては意外の感を以て迎へられた。けれども佛蘭西としては之は決して不思議な現象ではない。何故なれば、下院議長といふ地位は大統領の榮冠を荷ふ階段として佛國の不文律が之を認めて居

つたからである。抑も佛國に於ける下院議長の職は、英國の其れ程ではないが、餘程德望の高い公平な人物でなければ勤まらないとされて居る。丁度大統領として要求せらるゝやうな性格が、即ち下院議長に求めらるゝ道德的資格なので、そこで下院議長の地位から大統領になるといふ自然の慣例が開かれたのである。而してデシャネルは既に永い間下院議長を勤めて居るのみならず、現に此前の選擧の時には彼を候補者に推すといふ說は餘程有力であつた、と云ふよりも、彼を先づ第一に候補者に推すのは當然の順序で、他の人を推さうといふなら何故デシャネルでいけないかを說明せねばならぬといふ程の有樣であつた。之れ予の親しく巴里に居つて見聞した所であつた。夫れにも拘らず、デシャネルが遂に多數の擧ぐる所と爲らず、自らも機會至らずとして辭せねばならなかつた所以は何かと云ふに、之れ當時の佛國市民が歐洲國際關係の極めて緊張せる形勢に際み、佛國の國際的地位の確立する爲めには特別の手腕を大統領に求めねばならぬといふ、謂はゞ一種の戰時氣分とでも云つたやうな狀態に在つたからである。換言すれば大統領として適當なる資格條件を平時とは違つた方面に求めた。そこで平時に於て大統領に適する人物は、今日に於て適當と認むる譯に行かないのだから、即ちデシャネルを他日に廻はして、衆望は歸せずして外交と財政に手腕を認められた、遙かに後輩のポアン・カレーに集まつたのである。斯う云ふ特別の理由に依つて前回に候補の員から退いたのだから、今度改めてデシャネルが擧げられたといふ事は何も不思議な現象ではない。唯此際吾々の一つ何うしても注目を排る能はざる點は、七年前に戰時氣分に醉つた佛蘭西の民心が、今日已に早く平和氣分の常態に復つた事である。平和條約が出來ても佛蘭西の當局者は獨逸に對する警戒を怠らない、未だ／＼戰時氣分から醒めないやうであつたから、或る意味に於てポアン・カレーと同型なクレマンソウが矢張り大統領に擧げらるゝだらうと思はれたのに、表面の形勢一轉して、デシャネルの當選を見たといふ報道に接し、予輩は佛國に於ても亦民衆と官僚との距離の斯く迄で遠かつたのに驚くものである。

▽ラツセルは偉いか偉くないか

パル

トランド・ラツセルの本は本誌に於ても種々の人から問題にされたから、改めて說くの必要はない。而して一時我學界に於けるラツセルの勢は非常なもので、彼の說を取り容れなかつた事、否彼を危險人物視して大いに迫害した事によつて我國の政府並に識者階級の蒙昧を罵るといふ風であつた。然るに此頃になつてラツセルも外に着いて來たのか、だん／＼罵倒の聲

が聞え初める。中にもラッセルがどんなに騒いだつて彼の議論の一端だに行はれて居ないではないか、英國の實際界は殆ど彼の提説を顧みないと言つて、彼の思想を冷笑する者がある。ラッセルは偉いのか偉くないのか、吾々は大いに迷はざるを得ない。予輩自身にも此判斷は着き難いが、然しラッセルの説を容れないからと云つて英國を罵倒する説と、ラッセルの説が實際に行はれないからと云つて其思想上の價値を輕んずるの説と、兩々相並んで行はしむる我國の批評界が餘り偉くないといふ事丈けは疑を容れない。同じ様な批評はウイルソンに就ても云はれる。講和會議がウイルソンの説を十分に容れなかつたと云つて各國全權委員の利己的態度を罵倒した同じ人が、彼の理想が十分に行はれなかつたと云つて彼を空想家呼はりし、甚だしきは彼に僞善者の悪名をすら附して顧みない、更に斯ういふ外國の問題になると、吾々は動もすると外形的な輕卒な判斷を爲し易く、徹底的な一貫した批評的態度を失ひ易い。此狀態を先づ改むるに非ざれば、吾々は到底今後の世界を何うするかといふ重大な積極的職分を十分に盡くす事は出來ない。

▽内的改造と外的緊張　此頃改造といふ事が矢釜しい。改造は主として内的の問題であるが、其結果一時團體生活に多少の弛頽を見るは免かれない。而して一時の弛頽は更に他日のより大いなる緊張を來す所以であつて、進歩の道程に於ては已むを得ないものであるけれども、然し是等の團體的各單位の間に殺伐なる競爭の行はれて居る間は、他日の利便の爲めに、一時的とは云へ、今日を犧牲にする譯には行かない。今日を犧牲にする事は他日のより大いなる發達の階梯ともなり得るが、又其期待したる結果の來ない内に他の團體の悪辣なる侵略に乘ずべき好箇の機會を提供するの恐れもあるからである。故に改造は必要ではあるが、之を實行するに時を選ばなければならない。否、場合に依つては寧ろ外的緊張を專らとして、内的缺陥を一層大にする事をも甘んじなければならないといふやうな事がある。斯ういふ見地に立つて觀ると、戰前の國際社會は確かに外的緊張を計るに急にして、内的改造を顧みるに遑なかつた時代である。然るに戰後の今日に於ては、轉じて内的改造を要求するの聲が極めて喧しいが、之に對して又今日之を決行するの頗る憂ふべきを説く者がある。此處に於て今日の場合は、戰前と同じく依然外的緊張を專念すべき時代か、又は内的改造に轉向しても可い時代かといふ事が問題となる。此問題に對して答案の分るる所は、戰後の國際關係に就いて樂觀説を取るか悲觀説を取るかに在る。而して予輩は相當に極端な樂觀論者である事は本誌の讀者の既に知らるる所であらうと思ふ

が、最近の歐米諸國の形勢を按ずるに、彼地に於ても多數民衆は已に樂觀說を信じて疑はず、獨り少數の官僚のみが悲觀說を脫却し切れずに居る事が分つた。吾々は民衆の勢力を信じ、又新しき民衆精神の道義的影響をも信じて疑はざるが故に、今日は已に內的改造に專念して差支へないと考へて居る。唯今日尚ほ此點に關する官僚的見解に囚へられて居るものは、戰前の殺伐なる國際狀態にのみ囚へられて居るから、吾々の議論を以て非常な亡國思想と考へるのは怪しむに足らない。併し乍ら彼等の專念とする所の外面緊張主義は、之れ實は變に處する權宜の手段にして、之を永遠に繼續するは却つて國民の生命を滅亡に導くものなる事を知らなければならない。今や世界の民衆が共に信仰を一轉して新文明の誕生を期待しつゝあるの時に際し、何故に吾々のみが獨り官僚思想に囚へられて、內部的生命の一大改新を怠らねばならないのか。

▽委任統治に關する日本の主張に就て

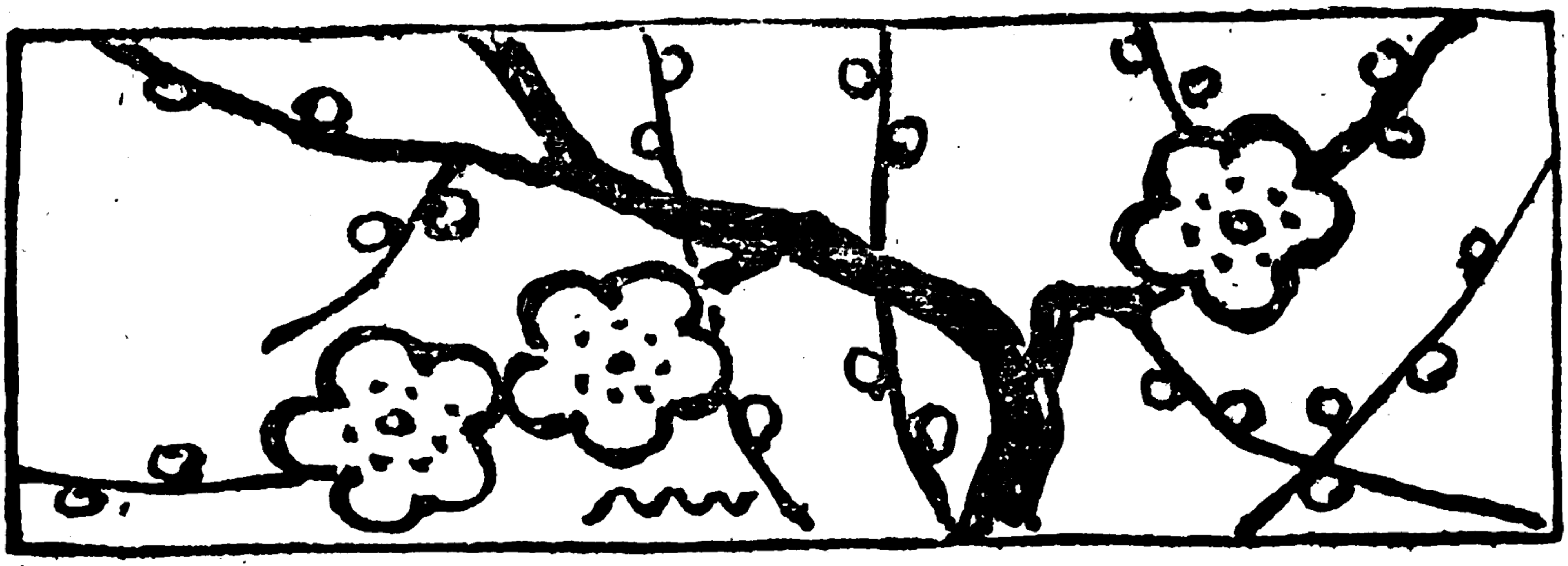
一月初めの西電に據れば、日本は巴里聯合國總會議に對し、次の項目の下に委任統治權の同等を主張せんとして居るといふ事である、(一)國際聯盟と各加入國間の被統治地に於ける移民權に關し差別を許す可からざる事 (二)統治權を委任せられたる如何なる國家も聯盟に加入せる他の國家の利益を侵害するが如き法規を制定す可からざる事、(三)統治權は單に聯盟に據り寄托せられたるものなるを以て講和會議に於て統治國の法規は直ちに被統治地に適用せらるべきを規定せる精神は決して無制限なる可からざる事。之は如何にも正當なる主張である。殊に委任統治は其根本に於て國際聯盟の寄托に繫かるものであり、而して土民の精神的並びに物質的開發を計るの目的を有するものであるから、此目的を達するが爲めに必要なる規則は何でも之を作り得る譯であるけれども、國際聯盟全體の利益を之が爲めに侵害する事は許されない筈である。唯實際問題としては聯盟加入國全體の權利利益を侵害してはいけないといふ事(例へば移民權に關し差別を認めてはいけないといふが如き)と、專ら己の見る所に從つて土民の利益幸福を計るといふ事と時々矛盾する事は有り得る。例へば日本にしても加入國の平等の權利を侵害する譯には行かないが、排日的感情に昂奮して居る支那人の大擧移住を南洋占領地に認むる事が得策であるか何うかといふ問題が起り得る。移民權の自由平等の主張は單純の利害の打算からすれば、或る方面には日本の利益であり、或る方面には日本の不利益になる、此間の關係を當局は何うしようと云ふのであるか。若し日本の利益になる方

面のみを眼中に置いて、表面正々堂々の陣を張りながら、不利益の方面に遭遇して之を引込ますなどは醜態の極である。斯ういふ場合に吾々は先づ第一に吾々の立場を理論的に定めて掛り度い。移民權の自由平等が理に於て正しいなら正々堂々と主張する、其上に種々不便不利益が起るなら、更めて之を始末する方法を考へ度い。予の考ふる所に據れば、移民權の自由平等を主張する以上は、此事自身已に自由なる國際交通といふ根據に立つて居るのだから、其自由交通の國際間に互に相批判し相要求する自由を認むる事にせねばなるまいと思ふ。即ち例へば支那の移民も自由に入れる、其代り排日思想といふ事に就ては移住し來る所の移民は固より、支那其物にも文句を云ふ。濠洲にも自由に移入する、其代り日本人の生活に關する濠洲側の種々の文句を相當に聞いてやる義務がある。廣く云へば一種の干渉を認むるといふ所まで來なければならない。飽くまで偏狹な國家的獨立を唱ふるのなら、移民權の自由平等は之と兩立しない。移民權の自由平等を認める、國際生活の秩序的發達の爲めに、國際間に或る種の干渉をも認むる、斯くて茲に一個の世界的精神を造り上げるといふのが、國際聯盟の精神であらうと思ふ。此根據まで來るのでなければ、移民權平等の主張の道義的理由が薄弱であると思ふ。

▽臺灣に於ける共學の實施　植民地の教育制度が内地人と土人とを別々の學校に於て別々の教育を授けて居つたといふ事が不合理の甚だしいものであるといふ事は、豫ね〳〵吾々の主張する所である。朝鮮に於ても臺灣に於ても、之れと反對の方針が行はれて居つた事は、吾々の非常に遺憾とする所であつた。無論實際問題としては種々の不便もあらうけれども、根本の原則として之を許さない。或は表面之を許しても、而かも實際之に大いなる不便を與へて居るといふ事は、とんでもない間違であつたと思ふ。然し植民地に於ける子弟は、其植民地に於て土人と事を共にして、國家社會の發達に貢獻すべき使命を有つて居るものである。此使命を完うする爲めには、自ら相當の方法を以て土人に接しなればならぬ。而して此考は大事な教育時代に於て受くべきが當然である。然るを學校に於て子供が全然土人と隔離されて居るといふ事は、内地人に向つては植民地住民としての最も大切な資格の訓練を拒まるる事であり、土人に向つては内地人を理解し内地人と提携するの訓練から絶對に遠ざかけらるる事である、双方に向つて最も必要な資格を奪ひ、最も其境遇に不適當な人間を作る結果になる。そこで植民地の教育方針は、少くとも其根本方針に於ては、共學主義でなければならない。それを從來の植民地統治者が全然實

行しなかつた許りでなく、却つて其反對の傾向を取つて居つたのは、官僚的專制思想より來るとんでもない謬りである。然るに新聞の報道する所に據れば、最近臺灣に於て共學の制度の一部實行を見るに至つたと聞くのは、吾々の大いに欣ぶ所である。即ち内地人が臺灣人の學校に入る事も、臺灣人が内地人の學校に入る事にも道が拓けたのである。唯少しく遺憾とするのは、之に就いて種々面倒な條件がある事である。吾々は之を手始めに更に共學自由の範圍が擴張し、尙ほ一歩を進めて全然同一の制度の下に統一せられん事を希望する。少くとも主義に於ては完全なる一視同仁を教育上に實現すべきであると考へる。此事は朝鮮に就ても同樣である。





結婚者の手記

あるひは「宇宙の一部」

室生犀星

妻は國で結婚式をあげてから恰度一週間目に、さき廻りをして家を借りたり、道具を買ひあつめたりしてゐる私どもの家に着いたのは、どこか春の氣のこもつた温かい二月のある午後であつた。私はあはてて門まで出迎へると、車から降りやうとする彼女の裾のはうに、ぴんと耳の立つた黒漆な日本犬が、ほとんど彼女と一しよに下車するのを見た。私はすぐに腹のなかで微笑んだ。それは、私どもが結婚の交渉中のある日、歸國してゐて、彼女の住む家のあたりを逍遥いてゐて、ふいに吠えられたことがあつたからである。

彼女の家を仲人から聞いて行つて見ると、静かな武士町で幾日も降りつづいた雪が、家々の垣根から庭から門まで埋めて、ただ、一筋の細い雪道がやつと歩けるやうな下駄のあとに依つて示されるだけであつた。私は一軒一軒表札を覗いてあるくうちに、とうとう或る路次の奥に黒い門構えのある一軒を見つけた。番地も合つてゐるらしかつた。私はその路次へともかく這入つて行つて、彼女[illegible]いものを見たいと思つて曲ると、いままで氣が附かなかつた地上の雪と平[illegible]根の上に、一疋の黒い日本犬が現はれたのを見た。ぴんとつつ立つ[illegible]、ぴつたりと私の

方に向けられ、そのやや三角形に尖がつた顔のなかに、雪國特有の鋭い猛々疑ひ深さうに私を熟視した。それが何時でも吠える用意のやうにも見え、また、すぐにでも嚙みつはれたので、出先を挫かれて私はぢつと犬を見つめた。

彼女の門の内庭の樹はみな雪におさへられて、地上の雪と一しよにつつ伏してゐた。けさあたり屋根の雪をおろしたらしいのが、庭一杯に積まれてあつた。すべての屋根々々が雪に覆はれてゐる灰だみた世界に、ことに小歇みになつた蒼つたゆきぞらを背景にして立つてゐる日本犬は、門の上に立つてゐるさへ奇怪であるのに、わけて一點の可愛らしさをもつてゐない獰猛な、荒い毛並を立てて、こんどは突然に吠えはじめたのであつた。私はとても路次へ一歩もすすむこともできず、此處ところにぶらついてゐるのを見られるのも氣になつたので、心怖く犬を見ながら引き返した。

私はすぐその日のことを思ひ合して、そしておもはず知らず微笑した。妻は、

「犬もおしやつたとほりに連れてまゐりました。ずゐぶんコワイ顔をしてゐるでせう。」

と、私の氣にいるかいらないかを氣づかふやうに言つた。

「ずゐぶん年寄りらしい。ね。いくつ位ゐなんだらう。」

「ことしで最う十年もゐるんですから、かなりなお婆さんです。ごらんなさいまし、こんなに眉が白くなつてゐるんですもの。」

と、彼女は犬のあたまを撫でた。かれは一日一渋夜、汽車でゆすられた上に、小さい檻に入れられて來たので、ひどく疲れてぐつたりしてゐた。あの雪の日の故郷で見たやうな精悍な猛々しいところがなく、どこか、から物忘れしたやうにきよろきよろした慌てた目つきで、もの珍らしさうに庭のうちを見廻したり、ものの匂ひを嗅がうとしたりしては、はじめて來た土地の不安さを時々妻のからだの匂ひによつて慰さめたり、やや少しばかりの落ち着きを得たりしてゐた。

「クロと云ふんだつたね。」

「ええ。」

「クロー　こちらへ來い。」
と言つても、ちよつと振りかへつて、味もなく妻の膝にあたまをすりよせた。それがいかにも、そつ氣ない冷淡なところがあつた。
「これからね。おまへはここの家のものになるんですよ。さあ。おじぎをしなさい。」
と、妻は、犬の白いブチになつてゐる手をとつておじぎのまねをさせた。
私はまづ彼女に家のまはりに、かなりにゆとりのある地面を見せて、板塀を作らなければならないこと、玄關から座敷へ通じるところに、小さい柴折戸を拵へることなどを話した。妻は、その何よりも庭のゆつくりしてゐることを喜んだ。
「柴折戸のところに萩を植えませうね。わたし、萩がたいへん好きでございますから。」
と、妻は、夢のやうな喜ばしい生活の開けられてゆく包みきれない愉しさに、春は山吹が咲くやうにもしたいと、まだ、汽車に揺られてゐるやうな氣のする、ふらふらする足であちこちと庭をあるいた。
うしろの庭の空地をひつくり返して、去年の秋に蒔いた小松菜が、嚴しい降霜にいためられながらも短かく厚くきりつと肥つて、強い鮮綠の葉をひろげて幾畝かが作られてあつた。それは恰度二月頃彼女が私のところに來るまでに、毎朝、新しい食膳に用ゐるために、家主の百姓に敎へられて作つたのであつた。
妻は、田舍でもあまり見なかつたこの小さい畑を喜んだ。
「まあ、これをおつくりになつて——いきいきして本當に美事にふとつてゐますわ。わたしもお手傳ひしてこれからいろんな野菜をつくりませうね。」
と、その葉をきゆつきゆつと揉むやうにすると、新しい靴革のやうに鳴るのであつた。そして彼女は夫がかういふところにも趣味をもつてゐることを喜んだ。私はひと一番な空想に驅り立てられて、秋も晩いころの午後、この小さい畑を耕すために街へ行つて、鍬を購つてきた日のことをおもひ出した。「春になれば菜の花になるし、ちやうど畑さんのい

らつしやる頃には毎朝摘んでおみをつけにお入れになるといゝんですよ。種をあげますからお蒔きなさい」と家主のちいさんが言つてくれた。私はそれから畑をならして種を蒔いた。秋の日のあたたかい肌懐しい日ざしのなかに、私は間もなくやつてくる妻が、赤い襷がけの朝のすがらしい姿をして毎朝菜つ葉を摘んでゐることなど、まざまざと目に描いて、鍬をふりあげては畝をつくつた。——その日のこともいま思ひ出されてきた。

「春になると菜の花が咲くといいね。葉をむしつても花はつくさうだよ。」

「ほんとにいろいろありがたうございます。」

と、妻はこころから感謝した。その目にはすぐ泪さへうかんだ。私はそれを氣づかないやうな様子をして目をそらしたが、柔らかな純粋な感情の湧くことを感じた。

私どもの家は、やつと二間しかなかつた。八疊と四疊半と、それに緣側を加へても、見るからに小さく狭い家であつた、が、家はきれいだつたのが、せめてもの取得であつた。それに、家主の大椎に抱かれてゐるやうな位置になつてゐて、表の通りの足音などが聞えなかつた。路次の奥の植木畑の中にただ一軒建つた離れで、靜かさもこれ以上求められなかつた。

私達は家のなかに這入つた。いはゆる「可愛らしい」この小さな家庭は、ひと間は私の勉強部屋になつてゐた。父の死後、銅の瓶掛は、もう私の机のそばに据えられて、父のゐるところのやうに茶の釜鳴りはしなかつたが、しかし私はいつでもそれを心で感じられるやうな氣がした。

北窓から冷たく透明な冬の光がさし込んで、八ツ手の清浄な花が玉をつづつてゐるのが、いかにも美しいものの核心をあらはしたやうに見られる。その窓のきわと床の間との三ツの書籍の棚が置かれた反對に、父からもらつた陶器をおさめた棚があつた。それから彫刻や油繪の額など、田舍でそだつた彼女にはみな珍らしいものづくめで、何よりも此處に生活をすることを喜んだらしかつた。

「本當にきれいになつてゐますわね。こちらはもう一年もゐなすつて？」

「去年の秋のはじめだつたから、半年になるね。」
妻はすぐ臺所へ出て行つた。そして、すぐに驚いたやうな顔をして、
「もうこんなに揃つたんですか。」
と言つた。その食器類の大半は、國から持つてきたものが多かつた。
「みな國から貰つて來たのさ。間に合うものは使つた方がいい。無いものは買へばいいんだから。」
妻はそれから
「まあ立派な甕だこと！ バケツもあるし、大概のものがありますわねえ。」
そのとき、勝手口によせかけてあつた洗濯竿を見つけたとき、彼女は、なにから何まで細かに氣のつく夫を、ややすこし呆れて見たが、ずぐに感謝した。
「よくお氣がおつきでしたのね。よく磨かれてゐますのね。」
と、彼女はちよつと指をふれた。私はそのとき、あまりに整へ過ぎたので、男が然ういふ細心に働くものでないといふことを考へてはゐはすまいかと、妻の目を見たが、別に特にさういふことを感じてゐないらしかつたので、ほつとした。「三十過ぎてから妻君をもらふと、妻君が困るさうだよ。何でもみな夫の方が知りすぎてゐるからね。」と言つた友人の言葉がふいと考へ出された。
いつも勝手の道具をあつめに出かけるとき、Fと一しよにでかけた。私が荒物屋にあれもこれもと買つてゐると、Fは
「奥さんが來てから買ふものがなくなつちまつては、奥さんがさびしいでせう。たらひなんかあとにしたらいいでせう。」
と、好く注意した。
「さうだね。さうしませうね。しかし、たらひを買はなくちや家をもつた氣がしませんね。」

と、買つたものか買はないでよさうかと、やきもきと私は立竦んだ。

「それよりも十能や火箸をおかひなさい。さしあたり必要でせうから。」

「君のいふ通りだ。十能、火箸、手拭掛、……それから……」

と、私はその品々を求めた。

「あなたは氣がつくやうで、つかないところがあるね。」

と、Fが言つた。さう言はれると、さういふ氣もした。二人は家へ買物を屆けさして置いて、夜の街燈の間をあるいた。そして、いつも酒をのんだ。そのたびにFは

「あなたがお嫁さんを貰ふんでなくて、自分が貰ふ氣がする。」

とも言つたりしたことを思ひ出した。

私は妻に足りないものを書きとめて今夜かひにゆかうと話した。

妻はすぐに着物を脱ぎ換へて、もう勝手から井戸の方へ出て行つた。そして食事の用意にかかつた。

「路次を出てすこしゆくと八百屋がある。またすこし行くと肉屋がある。」

と、私は玄關へ出て、井戸端の妻に大きな聲で言つた。妻はびつくりしたやうに、あまりに私の聲の大きなのに叱られでもしたやうに、私のかほを見たが、すぐ微笑した。「さう仰しやらなくともぞんじてゐますわ。なんて面白いひとだらう。」と感じてゐるやうに、おかしさをこらへた。私は私で、こんな大聲を出したことと、いはなくともいいことを言つたやうな氣がしたので、すぐ笑ひ出して座敷へ引返さうとしたが、しかしまだ何か言はなければならないやうな氣がした。

「そこの敷石がガタピシしてゐるから氣をつけないとあぶないよ。」

と、つけ加へた。

「ええ。」

と、彼女はつるべをあげながら、こちら向いて微笑した。「實際あの敷石はなほさなければいけない。」と、私は眞面目に然う心でつぶやいた。「もしもあれが彼處で打倒れたりするとよくないから」とまたつけ加へて考へた。井戸端まで五六間あつた。ガタガタな敷石をわたると、ことにバケツなどを持つて足にちからがはいると、のめりさうで危なかつた。

夜、私どもは家の戸をみな閉めて買ひものに出かけた。クロは玄關に入れた。一しよにそとへ出たがつてくんくん鼻をならした。

「ちやんとお留守をしてゐらしやい。」

と、妻は言つてなだめた。

白山へ出ると凍りついたやうな街燈のかげを私どもはいろいろなものを買ひあつめた。私は何となく氣がさして二三歩あとから歩いたり、さきに歩いたりして、私よりなりの高い彼女をすかして見たりした。かうして色々な人込みのなかにゐると、私はもう一人でないことを感じた。この女が私の妻であるといふ事實が、この群衆のなかで明らかに決定するために、何か特殊なことが、いつの間にか私だちの上に覆ひかぶさつてゐるやうな氣もした。それほど人々は私だちに注意を向けなかつた。私だちがずつと以前から夫婦であるやうに人々は馴れた目をして見た。妻は、いくらか恥かしさうに、しかし時々思ひ切つて私によりそふたりして歩いた。

電車に乘つた。

私だちは隣り合つてゐて坐つた。ここでは遠慮のない粗野な視線が縱横に私や妻にそそがれた。あらはなぴしぴしした視線が、妻の胸から形よく腰かけをなだらかに折れた足のさきまで、その盛りあがつたひざの着物を透して內部まで掻きさぐるやうな狡猾さをもつて、まるで彼等のためにかうして妻が坐らせられたやうに、殆んど言ひ合したやうな目つきが注がれることを私はイヤな氣で見かへした。それと同時によく獨身のときに、ひと妻らしい美しいひとを見ると、私もああした目つきをしてゐたことを考へ、良人とつれだつた女のひとをあまりあらはに見るものではない、すくなくとも卑しい餓えたやうな目を向けるものでないと感じた。妻はだまつて俯向いてゐた。あまりに烈しい視線と、突

然に明るい車中に腰かけたためとで、もちもちと手を揉むやうに膝の上でかさねてゐた。

廣小路でいろいろなものを購つた。鉋のついた鰹節を削るもの、小さな笊、そのほか殆んど私がこれまで買ひあつめた倍以上の品數になつたので、はじめて女でなければ解らない買物があるといふことを知つた。

縁日のところで、妻はすぐ私のそでを引いた。そこには犬の首輪や鎖や名札や胴輪などが、美しいニツケルのやうな光を街燈にかがやかしながら、それぞれ配置されて飾られてあつた。

「クロさんにも一つかつてやつてくださいな。」

と低い聲で言つた。私もそれを買はうと思つてゐた矢さきだつたので

「どれでも撰りなさい。なるべく丈夫なやつがいい。」

首輪のほかに鎖をも一くさり購つた。露店の賣子は小さな鑿のやうなのの上から金槌をはたいて、巧みに私達の町と、名前とをかいて、「飼犬クロ」とつけ加へた。妻は、かういふ便利なもののあるのを感心して見て、どうしてああいふ鑿で文字がかけるのだらうと不思議に思つて、私にたづねた。私もああいふことは一切判らなかつた。

「どうしてやるのかな。うまく書くぢやないか。」

と、話しながら店をはなれた。

「東京はいつでもこんなに人出なんですか。」

とたづねた。

「うん。いつでもだ。用のない人もあるだらうが……。」

妻はあちこち見て、その眩ゆい裝飾と自分の田舍めいた姿とをくらべた。そしていかにも田舍もののやうな氣がして少し悲しかつた。それは着付とか襟とか髮とかといふところに、殆んど見わけのつかない纎細な急所に都會人のきやしやな風俗が現はれてゐた。だんだん東京になれれば自分でなほしてゆくにちがひない、こんなことを餘り言つてはいけないと思つた。

その通りに一軒の名代な「おしるこ」のうまい店があつた。そこで、いつか若い夫婦づれのひと組が、さもむつまじさうにおしるこをたべてゐたのを私はすぐおもひ出した。あんなにしておしるこをたべたら甘いなと思つて、そのちいさい赤い唇を見たことがあつた。あのときも、じつに圖々しい目をして見てゐたやうだ。

「しるこを一つどうかな。たいへんうまいのがある。」

といふと、國ではめつたに女が通りの店でたべものをたべるといふことがないので、彼女はどうしたものだらうと思つた。良人と一しよにはいるのなれば、すこし恥かしくても、良人がゐるからかまはないともおもつた。

「ええ。」

とあやふやに妻は微笑した。私はすぐなかへはいつた。客はすくなかつた。

「も一つやんなさい。」

といふと妻もすきならしかつた。つつましさうにおつゆを吸つてゐるさまが、いつかの女をおもはせた。ひとが見てゐると仕合せに見えるにちがひないと感じた。そとは寒かつたが賑やかであつた。深々と黒い毛皮の襟卷をあたたかさうに、ほそい頸にうづめてゐる彼女は、その私よりも一寸ほど高いせなかをすこしまげてゐた。やつと氣がつくと帶の工合で高まつてゐることがわかつた。男同士の荒い散歩ばかりしてゐた私には、こんなことまでいちいち珍らしかつた。ただ、私は「何事もゆめのやうに」と心でいつも呟いた。

二

朝、目をさますと勝手の方で、ぱちぱちと薪の燃えはじく音がした。ときには、やや大きいぱちイといふ音がするかとおもふと、こんどは三つも四つも一しよに彈くらしい火花が、目にありありとうすぐらい勝手ぐちの夜あけを描かせた。しかも、これまでこの家のなかで聞くことのなかつた薪の音は、どこか勇ましい元氣な、明るい愉快な生活のはじまりを告げるやうであり、いかにも、いそがしさうできびきびした妻のたちはたらきの敏捷さをも想像させた。こども

のとき、よく母に早起きされてあとを追つて行つてみると、母はかまどの前でにこにこして私を抱きあげた。何かしらこの世で最も清淨な氣のする火の燃えやうや、その美しい底のある金色のうづまきや、また微塵にくだけた火の子の美しさ清さすがすがしさは、もうそのこどもの時分から私のあたまのなかに殘つてゐた。——今、妻がかまどの前で、すべて私の直覺のでき得る範圍内で、極めてつつましく立働いてゐることは、ちやうど私だちの取るに足らない微弱な生活を靜かにこの世の隅の方で囁いてゐるやうな誠實さをもつゐるのであつた。

雨戸から日光が漏れないところから見ると、まだよほど早いやうにおもはれた。音といふものは薪のもえはじくだけで、田甫のはうで鷄が遠くなくのもいつものやうに聞えなかつた。ぢつと目をとぢてゐると、まだ、まだらに空には星が煌めいてゐるらしく、しかもそれがだんだん一つ一つ光をおさめ、すがたを次第に消してゆくやうであつた。それと同時にだんだん世間が明るくなり、地上のすみずみまで日光がゆき亘つてゆくことが、それからそれと大きな地球全體を見晴かせられるやうな、はればれしい心のうちに波うつて想像されるのであつた。

私は間もなく起きて庭へでた。庭の土はみな凍てあがつて、きびしいかみそりのやうな降霜が、屋根や、門のひさしや、もつこくの木の葉の上に研ぎ澄したやうに光つてゐた。空氣も荒々しい寒さをふくんで、今まであたたかに床のなかにゐた私の肌を緊めつけた。そらはよく晴れあがつて、人家の屋根々々の遠くから朝焼けのいさぎよい新鮮な日の出が、ぱつと空をいろどりはじめた。雀もおきはじめた。

妻は井戸端へゆこうとして、もう起きた私が庭に出てゐるのを見ておどろいた。

「もうおめざめになつたんですか。まだ、よほど早うございますわ。」

「ねてゐるのほしくなつて起きてしまつた。六時ころかね。」

「え。そんなものでせうね。」

「いま、すぐお部屋をおそうじいたしますから。おさむくありませんか。」

「いや、さむくはない——。」

犬小屋のそばへゆくと、やはり、默つて氣むづかしさうに熟視しながら、馴れやうともしなかつた。私はそつとあたまをなでてやつても、尾もふらず煩ささうにしてゐた。二百里もはなれた北國から來た疲れや、また、多人數の家族にちやほやされながら賑やかにくらしたこの老犬にとつて、妻ひとりが知つたひとであるほかは皆未知な顔ばかりであつた。私にしろ隣のひとにしろ、また、ときどきやつてくる同族の赤犬なども、このクロにとつては新しい見知らない顔ばかりであつた。かれは何か一つ自分の知つた顔や、行きなれた道路などを嗅ぎあてやうと、いかにも、としよりらしく、時々垣のあなから道路の方へふらふらと誘はれるやうに出てゆくことがあつても、間もなく寂しさうに尻の毛をぼうぼうと風に吹かれながら、絶望的なあしどりでかへつて來た。どの小路にも、道路にも、または近所の勝手口のそばにも、自分の記憶にのこつたものがないばかりか、凡ての匂ひが身にそはない、珍らしいものばかりであつた。あそんでゐる子供等のかほにも覺えがなかつた。ことに一様にあのゆつくりした北國地方の訛あるなだらかな言葉は、此處では聽くことが出來ないばかりか、めちに刺々して老い衰へた驚きやすい彼の神經を刺戟した。かれはあまり外へ出な日かつた。妻のはきものを嗅ぎ樂しむやうに、ぢつと其處にうづくまつたりした。そして私をよく見つめた。その疑ひ深い本犬に特有なずるい野生そつくりな暗い目のそこの、やや茶いろした瞳のひかりは、いつも私が妻の何ものであるかといふこと、妻とも一しよに生活してゐることを彼の心一抔に理解しやうとしてゐるらしかつた。

雪の日は屋根の上で遊んだかれは、ここでは却つて毛をあらす霜のつめたさ嚴しさをかんじた。

「クロ、いいかげんに仲よしになれ。お手をおかし。」

と言つても、むつつりして手を出す素振りもなかつた。妻が出て來て

「お手を出しませんか。――クロさん！　お手をおかし。」

と妻がいふと、かれは嬉しさうに習慣的にそのブチの手を出した。いつころからといふことなく、いつも、然うしさへすれば愛撫されることをよく嚥み込んでゐたかれは、からだを妻にすりよせた。

「まだ馴れないんだね。としよりだから疑ひ深いんだな。」

と私がいふと、妻は犬がなれないのを自分のつみのやうに感じられてか、しきりに私の方へ犬をおすやうにして
「お手をおかしつておつしやつたら、わたしにするやうにして出すんですよ。ね。おりこうさんだから。」
と言つて聞かせたが、やはり私のそばからのこのこ妻の方へ行つた。私はそれを見てゐると、この老犬の殊に畜生の心がわからないだけ、たまらなく寂しい氣がした。
「いまに馴れるよ。きつと。」
「さうでせうね。」
私は裏の畑へ行つた。つまは私にすまないやうに、もの佗しい心で、何か考へながら鰹節をけづりはじめた。その音ががりがりしてゐたが、妙に抵抗力のすくない、底のない音であつた。ああいふ小さなことからつまらなく神經質になつてはこまると、私はぼんやりそのことばかり考へてゐた。妻のつみでもなければ私のつみでも、もちろん犬のつみでもない。まだ心が通じきらないのだ。おたがひがよく解らないのだ。妻の心にしてもまだよくわからない。――私だちは結婚前に手紙はとりやりしてゐたけれど會つたことがなかつた。
私の著書を讀む一人の女性として、彼女は私と同じい故郷のまちに住んでゐた。てがみはいつも眞面目に決して早計な女性として私にはうつらなかつた。私どもは半年のうちに、おたがひ顔もしらずにくらした。父の死後、私は從兄を通じて彼女にあつた。そしてもう結婚期にある私は、ぐずぐずしてゐられなかつたので、從兄の仲人で彼女をもらふことにした。
その單純のうちに私は私の生活が、決してらくなものではなく、むしろ恐ろしい受難と絶え間ない窮乏のうちに營まなければならないことを知つてゐた。彼女とあつたとき、何よりもゆつくりとした落ちついたもの腰しと、あまりこせこせしないところが、よかつた。何かしら直覺的に、ほんとに直覺的にこのひとは妻にしていいと感じた。なれるひとだとも思つた。私は理屈なしに直覺力を信じた。――
私は青々と霜の中の菜の精悍ないろを眺めながら、ふとHの妻君があるとき、「おくさんをお貰ひになつたら、朝、顔

をあらつたらバケツに二杯くらゐづつ水をくんでおあげなさいよ。それだけでも、おくさんにとつては大變な助かりですからね。」と言つたことを、私は突然にあたまのなかでおもひ出した。いつの間にかそれを忘れてゐたので、急にさうしたければならないやうな、また、して見たいやうな氣がした。

私はすぐ勝手へ行つて、あいた深いバケツを出させて水を汲みにゆかうとすると、妻はあはてて

「恐れ入ります。わたし、いま汲みにまゐりますから。」

と言つたが、私はもう井戸端へ出て行つた。井戸は淺かつたが、竿の片側にはうつすりと霜が置かれて、妻のらしい手のあとが、そこに殘つてゐた。私はそれをていねいに見たが、親指だけの痕がはつきりしてゐて、あとは濡れて消えてしまつてゐた。私はそつと親指のあとへ自分の指をあてるやうにして竿を握つた。霜荒れのしたつるべ竿はとげとげと妻の手には痛からうと思ひながら二三度汲んだ。妻はとくに感謝らしい言葉をいはなかつた。たいして感謝されると不快だとおもつたが、べつに水汲みがどうといふ喜ばしさを與へないことを物足りなくかんじた。しかし、あれだけのことなれば、それが彼女の手助になるなれば、毎朝汲んでやつてもいいと思つた。男のくせにこせこせしてゐるやうに思はれはしないかと、それもやがて氣になり出した。妻のすることにひと言もいふまいと心で思ひながらも、つい言つてしまふ隱しきれない性分をどうすることもできなかつた。「知つてゐても默つてゐるんだね。ことに君のやうに何一つして來ないといふことのない人の妻君はたまらないよ。君は三十年かかつて食ふことを心配したんだし、こんど來る細君はやつと君の序幕にとつつくんだからね。」と言つたある友人のことばをも思ひ出した。あらゆる暗黒な放蕩、飲酒、缺乏のすべてをつくした私には、何一つと言つて見えないものがないやうに、きつと妻のほうでも氣が利きすぎればこまるだらうし、またうつちやつて置けばなほたよりなく思ふだらうと考へながら、私は縁側にあたつた日光のなかにうづくまつてゐた。もう木こくの葉の上や、日のあたつた屋根の霜はとけはじめて、それが筧にしとしとと垂れる音がした。

隣の家はやつと今起きたらしく、カタコトと雨戸を繰る音がした。私に二タ月ばかり遅れて越して來た會社員で、やはり最近に結婚した人であつた。

妻は井戸端でとなりの妻君と朝のあいさつをしてゐるのが、こちらから見えた。東京ものらしい脊高いことと、ひくい妻のことゝがそこでしてゐた。私はその二人をじつと見てゐるうちに、二人ともひと妻らしい匿しきれない何かしら處女時代とはずつとかけ離れたところに、寂しい禮節のなかにも話りをつづけてゐるのをゆめのやうに見てゐた。わづかのうちに烈しい肉體の纒まりかたをしたところなども見えた。

間もなく私どもは朝の食事をはじめた。私はそのとき、また、ふいとくちを辷らした。

「朝、水を汲むとおまへの方の仕事がすこし位ゐらくになるかね。」

といふと、あまり突然だつたので、叱られでもしたやうに彼女はちよつと顏をあかめたが

「え。たいへん都合がよござゐますわ。でも、あんなにしてくださらなくてもようござゐますわ。」

「ぢや、これから汲んであげても、おれいをいはないで默つて使つておくれ。」

「ええ。」

と、ふたりとも默つてしまつた。なにか言はなければならないとおもひながら、食事が終つた。

私は自分の机のところに來て、やりかけた仕事をはじめたが、勝手で何かことこと音がしたりして、かの女がいま何をしてゐるだらうかといふことが氣になりだした。茶碗やよごれものを洗つてゐるのだ。ちやぶちやぶ水の音がしてゐる。茶碗が水の中に沈んで蒼白い明りを放ちながら、ぐるぐる廻されながら、きゆつきゆつと彼女の手に洗はれてゐる。それだけだがまたしても氣になり出した。パツチリと林檎を裂くやうに割れでもしたら、割れる不安をどういふ風にかんじてゐるのだらう。割れることなど氣にしないかもしれない。

私はペンをとめて懸耳を立てた。冬の朝はしんとして寒さを加へた。私はそのとき、本箱のひきだしのそばへ行つて、そつと音のしないやうに開けた。寫眞、ノオト、紙などの下敷から一枚の封筒をそつとぬき出した。封を見るとよごれても破つたあともなかつたので、やや落ちついて封をきつた。きれた細長い封の紙片を左のゆびさきでくるくると丸めて火鉢に入れた。それからほそながい小さな帳面をすーとぬき出した。私はそのガンピ特有のつるつるした感つた

ひかりを見ると、すぐさま父のかほをおもひ出した。長い葬送の行列が野にむかつて行つた晴れた秋の故郷の市街が白々しい屋根をならべて、目の前にあらはれて來た。そこを草鞋をはいてうつむきながらお供をしてひつぎに連れ立つた私自身が、その白の衣に白の袴をはいだ姿まではつきりと浮きあがるやうに、非常に遠くを歩いてゐるもののやうになつて見えた。

あの時、私はひそかに結婚のことを考へながら、もしや群衆のなかに妻になる彼女がゐはしないかと、それとなく人垣の間に目をとめながら行つたが、それらしい影がなかつた。「あの日も妻は學校で、ちやうど今ごろお葬ひのでるころだと思つて、妻はピアノから離れて窓ぎわに行つて、あなたのおうちのほうを眺めてゐました。あの日が音樂の時間だつたことも悲しいことの一つでした。私はおもひついて十分すぎたあとで、あとで、さんびかの第三百三十一番をひきながら、ぢつと自分で涙をこらへこらへてゐました。校窓から人家の屋根越しにいろいろな秋づいた柿やすももの葉さへも、いまもありありと心にうつつてまゐります……。」と彼女はあとで手紙をくれた。

私はその小さな帳面をそつと心でおし戴くやうにして、妻を呼んだ。妻はもう茶の間にゐた。

「ここへお坐り。」

と、私はあらたまるやうな窮屈な氣のするのを自分でまぎらせて

「これは來年の二月まで、一年間の生活費だ。できるだけ険約にしておくれ。かねはもう僕にはこれだけしかない。これはお父さんからいただいたのだから大切にしてね。」

と私は妻の前にそれを置いた。

「承知いたしました。できるだけ……あの……。」

と云ひなやんで、目をくもらした。

「この金がなくなると……。」……と言ひかかつて「食へなくなるかもしれない。」と私は腹のなかで呟いた。ひとりでさへも、多くの暗黒時代を泳ぎ餓えた私が、妻をもつてくへなくなることを考へるだけでも、ぞつとした。そして私はま

た附け加いた。

「金のなくならない内に働くは働くが、お前も知つてゐるとほり中々たいへんだ。お前もしつかりしてゐてくれなければ……。」

「ええ。」

と、うつむいてゐた。その黒髪の煙つたあたまを私はじつと見た。あの永い孤獨でいためられた私のかたはらにも、恁うして選れた一人がいま靜かにこの世のあるかぎりな誠實でうなだれてゐる。これは決してゆめやうつつではない。正しく美しい運命のそこから湧き出た二人だ。

「子供だけに食事をさせて自分達は何もたべないでゐたといふ友達もある。僕らもきつと貧乏する。そのひどい穴に墮ちない前に二人ともまじめに生活するのだ。――わかつたら帳面をお前のほうに收つて置きなさい。」

「わかりました。ぢやいただいて置きます。」

と彼女は帳面を大切そうに手にとつた。そしてまだ何か話しがあるやうな氣がしたのか、ちつとうつむいて、堅くなつて坐つて居た。私は何もしらない妻にあまり言ひすぎたやうな氣がしたので

「それでいいから、あつちへ行つて用事をしなさい。」

といふと、妻はしづかに隣の間へさがつて行つた。ああいふことを言つて惡いことはない。隱してゐても知れるときには知れるのだ。――私は然う思ひながら机に向つた。そして此頃に出すある感想集を一冊にまとめるためにペンをとつた。ふと私は耳もとで、いつか聞いた座談が風に吹かれたやうに不意にあたまのなかに浮んだ。――(Sの細君がね。とうたう着換えまで無くしてしまつたのさ。夏のことだつたので、ひるまは洗濯ができないので夜になるとやつたものだ。そして自分はそれが夜風に吹かれて朝乾くまで、いつも裸體で縫物をしてゐたさうだ)――私はこの話を何氣なく聞いてゐたが、今日はなぜかひしひし心にひびいた。そしてその細君はどういふものかSと一しよに食事をしなかつた。一しよに食べたらいいだらうと言つても、いつもあとですると言つてきかなかた。それが二三週間もつづくとSも

妻に思はれてきたので、あるとき、細君の食事のときこつそりと襖のすきから見てゐたら、細君は白い飯の上に食鹽をぱらぱらと撒いて食べてゐた。それを見たときSは襖のそとで思はず二つの手を合して拜んださうだ。——私はこの話をも妻にしやうと思つたが、これはあまりに酷く佗びしい氣がして却つて、このために彼女の世なれない小さな魂を脅すやうなものだと思つて話さなかつた。

私はこのごろになつて、ことに妻をもつてから人人からきかされた話が、その當時、なんでもなく思はれてゐたことまで皆生きてくることを感じた。一つとして今は私にとつて不必要な言葉は存在しなかつた。（お前が世帶をもつとき私のいふことが皆わかつて來る。そうしてお前は袴を裂いたり着物を投げつけたりしてゐるが、お前が世の中へ出るとみなお前のいましたことが惡い事だといふことがわかる。）と言つた義母の言葉も、やはり今はあたまにしつかりと所びきこえ初めた。

「働けそれがお前の一切だ。」とも、自らに向つて私はつぶやいた。「お前は學問もなければ才能もない。お前の一生は努力だ。やりきれないところで、やり貫いてゆくにはお前は人一倍に苦しみ働き、そして勉强することだ。その外になにがあらう。」——と、私はしづかに仕事をはじめた。いまは名もない、みじみな仕事をしてゐても、いまに立派な仕事をして見せる。そこまで行かなければ眞に生きられない。もう二三年だ。この間に生れて出てゆくのだ。永い苦しみを携げて——忍耐をしろ。私はしつかり机に胸をあてた。そして仕事のなかに魂を燃しはじめた。仕事は私を力づけた。

ある日妻が買物にでかけた留守に、私はそつと妻の室へ忍び込むやうにして這入つた。そして鏡臺、簞笥、長火鉢、などの曳出しを一々ていねいに調べた。何かしら結婚前に彼女がよその人から貰つた手紙らしいもの、もしくは、結婚前の生活をもの語るやうなものがないかと、着物は一枚一枚の袂々の、ひいやりとする絹物の冷たいなかを搜つたけれど、それらしいものが見えなかつた。それから彼女が國から持つて來た小さな手文庫をもとり出した。新聞の切抜きに料理法をかいたものや、小さな零瓜などを見つけたが、一つとして私の搜すものがなかつた。私は心の奥で私の目的と

するものが、どうかして無ければいいといふ考へがあつた。見るのが苦しい、誰でもその處女時代には男から手紙の一本や二本はもらふものだ。貰はないやうな女があれば、それは華やかな處女時代をただ無意味に、美しい誇りがましい人生を知らずに通つた寂しい女だ。でなければ非常な醜婦にちがひないと思つた。私は結婚の翌晩彼女にかう言つて微笑した。「東京へ來るときに、過去の一切のてがみは皆燒きすてて來てくれ。それはお前にも樣々な意味で男と手紙の交換くらゐはしただらう、しかし私はそれを掘じくらない。掘ればあとかたもないことでも苦しみだ。だから、そんなものは私と一しよに生活をはじめるまでに、皆燒きすてて仕舞つてくれ。」と、私はすこし苦しい心地で言つた。彼女はうつむいて、小さな低い聲で返辭した。

「それから私は今後ときどきお前にきつと結婚前にどんな男と手紙をやりとりしてゐたかと、たづねるにちがひない。そんなときは絶對に無かつたと言つてくれればいい。どういふ場合にも言つてはならない。もしお前がそんなとき口を辷らせると、私はむちやくちやになつてしまふ。そして私はその男を掘じることばかりを仕事にするやうな不幸な生活をしなければならない。」

と、私はその晩國を發つて、あとから來る彼女にしつかり言ひふくめて置いた。それは處女時代に、ただほんの無邪氣一方でやつたことや、無理に押しつけられた手紙や、ある年月の關係で永く交際してゐた男などのことで、どれだけ人妻になつて苦しむ女性が多いかわからない。あとかたもないことが、自分の妻として肉體も精神もともにすぐれな生活をすればするほど、妻の些細なことに心が苦しむことが多いのだ。それは孤獨でどうにもならなかつたりするときに、つい手紙をかいて女性にわたさうと考へることが、ただ、そのときは簡單に行はれるのであるが、あとにそのひとが結婚したときに苦しみになつて報ひられてくるのであつた。

「僕は決して清淨なからだではない。汚れ切つてゐることはお前も知つてゐて貰ひたい。ただ、言つて置きたいことはまだ一人の處女をも知らないことだ。」

とも言つた。私は暗い街裏のじめじめした一室に、私は私の肉體を汚らすやうな賣婦を求めて行つた。私のひどい飲

酒や、烈しい都會の生活はいつも私をさういふ街裏に惹きつけ、そこで私は汚れはててしまつた。しかしその一時期の後は私はあまりそこへは行かなかつた。故郷を遠くにもつた關係や、または絶へず自分の容貌を氣にしてゐたことや、ことに毎時も苦しみ趁はれてゐた生活は、混濁の巷に私を近づけても、ただ一人の清い女性をラバアに持つことができなかつた。

「だから私はは決して人を責めるだけ、自分の清純さを持つてゐない。それだけ反對に私は清純なものがほしい。」

とも言つたことを思ひ出した。

——私はそれから手文庫の曳出しを一々しらべたけれど、さういふ過去の生活をかたみにするものが一つも見當らなかつた。一つは失望したやうな氣もしたが、また、私の心で願つてゐるやうに結局無い方がよかつた。

其處へ妻が歸つて來たので、私はあはてて手文庫をしまつた。しかし妻はすぐに感づいた。

「何かお搜しになつて——。」と、私をじつと見た。

「うん。お前のきものの袂から手紙の古いやつを一本見つけた。」

といふと心持ち顏色を變化たが、すぐ私は自分で言つておきながら自分で卑しく疑つたり、妻の留守に妻の所有品を勝手にさがしたことを淋しくあさましく感じた。

「うそだ。實はさがしたことは探したけれど見つからなかつた。」

と、私は自分の辯解を不快にかんじながらいふと、妻は手文庫をちよいと見て、

「これから搜さないで下さいましな。なんにもないんですから。」

と聲を低く落していふ。そして俯向いて涙ぐんだ。私は自分でつまらないことをしたとおもひながら座をはずした。

三

だんだん日が經つてゆくにつれて、クロは私にややなじみ出した。これまで、疑ひ深く私の顏ばかり見守つてゐたの

が、次第にからだの匂ひを知覺するやうになつて、クロ、クロ、と呼ぶと匂をかいでから、すこしづつ、私のそばに寄つて來るのであつた。しかし、それはまだ特別な歡喜のために飛び廻るとか、私のからだに自分のからだをすりよせるとかといふ種類のものではなく、唯、何となく遠縁の知己のやうな稀薄なしたしみを持つてゐるだけに止まつてゐた。たとへば、私がクロのあたまを撫でてゐても、そこへ妻が出てくれば、もう私のはうを忘れてしまつたやうに妻の方へとゆくのであつた。そんなとき、やや叱責するやうな烈しさを含んだ聲音で

「クロー　こちらへおいで。」

と呼んでも、ちよつと振りかへるだけで、そつ氣なく妻のひざにもたれることが多い。妻はそんなとき、やはり自分がよけいに犬から慕はれてゐるといふことが、何となく賴もしく親密な氣を起させるらしかつた。それはどういふ些細な愛情にでも女性特有のしつこさが含まれてゐるやうだつた。

ときには烈しく怒りをふくんだ聲でクロを呼びつけると、しかたなしに、さも煩ささうに義務的に私の方にやつてくることがあつたが、それがいかにものろのろした足どりに詮方ない厭々しいところが仄見えた。それとは反對にこんどは妻が呼ぶと、いきほひ好く小鳥のやうに飛んで行くのであつた。妻はそんなとき非常に嬉しさうにして、兩手で犬のあたまをはさんで自分の紅い頰にこすりつけるのであつた。良人に早く馴れなければ何となく濟まない氣でゐた彼女もだんだん良人が犬を手なづけてゆくところに女らしい淋しさを感じてゐるやうなことが、ときをり、私と犬とおもしろく遊んでゐるときに起るらしかつた。

「クロさん。こちイいらしやい。クロ、クロ、ロ、ロ、ロ」と、舌のさきを小さく圓めたやうな聲で、すぐに犬を自分のそばに惹きつけねばならないやうに、よくやや輕い感情的な聲で呼び立てるのであつた。クロはクロで、十年も飼はれてゐた主人の聲をきき分けられる聰しい心を羽ばたいて、すぐに彼女の高い胸をめがけて飛びついて行かうとするのであつた。しかし、私は好くそんなとき、わざとクロのからだをしつかりつかまへて離さなかつた。言葉であらはすまでもない小さな反感が、いつのまにか、苛立たしい毛並をつかんだ掌に力を加へつて行つて、やや強い意地わるい指さ

へやうをして、なかなか離さうとしなかつた。

「クロ、こい、こい、こい、こい、こい。」

と妻もやや感情的な、どうしても自分の愛やちからで引きつけなければ置かないやうな、やや執拗にちかい聲音で呼ぶのだ。そんなとき、きまつて目をほそめるやうにして、わざと優しさをたたへるやうにして、膝をぱたぱたと小さく細くはたたいて、ここへ來いといふやうに暗示するのであつた。けれども私はなかなか離さなかつた。ちいさい憎しみといふほどでもほい反抗的なねたみや、特殊な興味的な感覺が私をすつかり意地わるくするのであつた。

「離してやつてくださいな。あんなに來たがつてゐるぢやありませんか。」

「だつて本當にお前のところへ行きたければ僕の手に嚙みついても行かずには置かないよ。けれどもあまりに行きたくないらしいんだ。な。クロ!」

と、私は妻が怨めしさうにいふのに答へて微笑した。

「どんなことをしたつて食ひつくことなんかしませんわ。あまり可愛さうですわ。ちよいと放してごらんなさいまし、きつとわたのはうへ飛んできますから……」

妻と私とはちやうど五六間離れてゐた。そしてしきりに犬の心を誘ひ出すやうに、まるまるした膝がしらをはたいて見せた。重いにくたいの音がそのたびごとに、うちはの音のやうにして來た。

私は離せばきつと妻のはうへ行くにきまつてゐる。それが目に見えて負けるやうな氣がしてならなかつた。犬は四肢にちからを込めて、しまひにはくんくんと鼻さきで泣き出した。

「放してやつて下さい。ごしやうですから。」

としまひには泣くやうな聲で、いひ出した。私は妻がクロをそばへよせたがつてゐるのと、犬が妻の方へ行きたがつてゐるとの二つの心が、兩方で火を放ち合ふやうにぴつたりと張りきつてゐるのを見ると、もう抵抗しがたい詮らめをかんじ出した。そして、手をはなすといきなり犬は妻の方へ飛んで行つた。妻はすぐにかれを抱きあげしめつけ、その

上、頬ずりしたりした。それらの犬のからだの取扱ひは、まるで荒々しく粗暴のやうに見えて、しかも殆んど想像のできないほどやさしく柔らかでていねいであつた。クロはクロでまるで、餅のやうに柔らかく、そのからだを妻に自由にさせて、しかも聲高い愛慕の切ない唸りや叫びをあげるのであつた。

私はそれを見てゐて、また、いちどもクロがああした歡喜の聲をあげて私にとびついてきたことを經驗しないので、ものにはぐれたやうな寂しい氣がした。妻だけの生きもののやうに、いつまでも深く立ち入つて愛することのできないやうに思はれた。

妻は買物にでかけるとき、よくクロをつれて行つた。いつのまにか田端の近郊の道をおぼえてしまつたかれは、いつも妻のさきを小きざみに走つては、はぐれはしないかと振り顧へつて見るのであつた。そのなによりクロを驚かせたものは、電車と自働車の駛驅でありその音響であつた。かれは生れてはじめて見たそれらの怪物にたいして、はじめは尾をまいて妻の裾のはうにかくれた。そして吠えたけつたが、だんだんに慣れると、ちよつと注視して不思議さうに見るだけで、もうあまりに珍らしがらなかつた。

「子供や小僧さんまでが狐犬だなんて言ひますの。奥さんらしいひとまでが、私にきこえがしに然う言ふんですもの。」

と言つて、よく使ひから歸つてくやしがつた。その耳をつつ立てたところや、全體が黒い毛並で相貌の野性じみてゐるのなど、どうしても狐によく似てゐた。私のところに客があると皆珍らしさうに、「支那の犬みたいですね。」と言つたり、「これは橇を曳く犬だ。ジヤク・ロンドンの犬みたいだ。」などと言はれた。そのたびごとに、妻は隣室で聴耳を立ててゐた。

「そりやね、お前は十年もこの犬を見なれてゐるから容貌などが氣にならないだらうが、東京にはこんな犬はすくないよ。狐犬だと云はれても仕様がないさ。」

「でもね。ずいぶんあてつけがましく言ふんですもの。」

「言ふひとは言はしておくさ。」

と、私は妻をなだめた。妻はしまひには默つてよく晩など特別にごちそうを食はさせてゐたりした。

そのうち私はクロをつれて、よく散歩にでかけた。かれはいつの間にか、どこに飼犬がゐるかといふことを知るやうになつてゐた。ことに犬と犬とが通り合すとき、私は喧嘩しないかといつも心配した。あるとき、ためして見てゐると、クロは、いつも直覺的に自分が組み合つて勝てる見込みをつく奴を見ると、すぐ飛びついて下敷にしていじめたが、とても勝てさうもない大きいやつと出會すと、すぐ私の影の方にきた。そして大きいやつが通りすぎると、にはかに圖々しく、大きな顏をして道のまん中を歩いた。その卑劣な、動物の一番利巧で一地イヤなところを私はいつもいまいましく眺めた。ことに不快なのは、自分より小さな奴をいぢめることであつた。自分と同性であれば、よちよちとやつと歩けるやうなやつをも酷い目に合せた。

私はこの話をよく妻に話した。妻は

「わたしも小さいのを連れて歩いてゐらしやる方にすまないと思ふことが澤山ありますの。」

「どうかしてそのイヤな癖をなほせないものかね。」

「さうね。でも畜生ですから仕樣がありませんわ。」

妻はいつも畜生だからとあきらめて、さういふのだつた。

ある夕方、私達は夕食の卓にむかふと、妻の方の分には野菜だけがついてゐて、さかながついてゐなかつた。私がいつも食事はどういふ場合にも二人とも同じ質と量とを、同等に攝取することを決めてゐたので、ふしぎになつて

「お前におさかながついてゐないぢやないか。」

と言ふと

「わたし、けふはほしくないですの。だからようござんすわ。」

と、すこし急いだやうな調子で言つた。

「ほしくなければいいが、しかしおさいはいつも同じほどにしたはうがいいよ。いつもさう言つてあるぢやないか。」

「あしたまたいただきますわ。ほんとにほしかないんです。」

と言つた。これまで、こんなことはいちどもなかつたし、さかなや肉類の豐富な故郷をもつてゐる彼女は自然野菜よりも、肉るゐを好んでゐたので、今日に限つて變なことをするとふしぎに思つた。

食事を終えて庭へでると、間もなく春になるらしい萠さしが、靜かに土のなかにこもつてゐることが感じられた。うらへ廻ると、茶にはもう薹が立ちはじめ、莖と葉とのわかれ目には強い新芽めいたものが、こんもりとふくれあがつて、いまもう十日も經つと其處から小枝がそだつて、きいろい菜種の花が咲きさうにおもはれた。

そのとき、このしづかな夕暮のなかに、がりがりとものを嚙むやうな、あたたかい食物をすするやうな音がした。よくきくと、なにか固いものを嚙むために、齒と齒とが、がりがり鳴るやうな音であつた。私はそつとふりかへると、クロがいま皿のなかのものを目をほそめながら、畜生らしく、ゆつくりと味ひながら嚙んでゐるのであつた。なほよく見ると、それは夕食に私がたべたと同じやうな、紅いひれをもつた一疋のさかなであつた。しかもそれはあたまも頭もそろつた立派な一疋としての形をそなへてゐた。私はハツとした。いつも妻が魚屋から犬のために取よせてゐる魚肉は、貧しい町はづれの家々の立派な夕食に副へられるものであることをも知つてゐたが、私は默つてゐた。ときには人間にはたべられないものもあつたが、犬にやるには勿體ないやうなものもあつた。魚のやすい故郷の多人數のなかに生れた彼女は、さういふことは當然のやうに思ひ、また、國のしきたりから言つても別にぜいたくではなかつた。しかし東京はちがふ。けふのやうに自分のものまで犬にやらなくともよい。ほしくなければ買はなくともよいのだ。しかし、こんなことを言ふのはけちけちしていやだ。けれども私はなぜか良心にせめられた。これは惡いことではないが注意しなければならないことだ。

私はいろいろ考へ込んで、じつと犬を見つめた。結婚前に彼女の門のところをぶらついて、しまひに吠えたてた犬が、いまかうして私のうちに生きてゐる。それが非常にありさうもないことのやうに思へた。ふしぎな因緣のまつはりをひらいて今私に感じしめてくる。

私は妻をよんだ。そして、犬にはぜいたくをさせるなといふと、かの女はたいへん悪かつたと佗びた。佗びられてみると特にとがめ立てするほどのこともなかつた。

「僕はね。いまから七八年前は殆んど食ふや食はずで、その日を暮したことがある。まるで一斤のパンと水とだけで毎日やつてゐたものだ。そのころ僕の考へてゐたことはどうかして人並みに食つてゐたいと思つてたことだ。せめて食ふものだけは食べたいと、誰にも話されないことを毎日あたまの中で考へ通したものだ。これはお前に言つてもしやうのないことなんだが、そんなこともお前の良人がして來たといふことだけは覺えてゐてくれ。だから僕の根性にはまだまだ溝のやうに汚ないものがある――。」

私は妙に神經衰弱のやうな、よはよはしい病みやすい心で恁う妻にいふと、妻はうつむいた。言はなくともよかつたかも知れない。しかし、いちどは然う言つて置いたはうがよいと思つた。

「僕のして來たことは決してはづかしいことではない。それより外にできなかつたのだ。お前は女だし然ういふ極端な苦しみ方をしないだらうが、併し一度然ういふ食ふや食はずの恐ろしい目にあつたものは、生涯その苦しい時代を忘れることができないものだ。それは人によつて惡るくもするし善くもする。僕の場合では何時もそのくるしみが僕を謙譲にもするし大概のことを我慢させてくれる。これは人の前で自慢することでは決してない。まだまだ僕の苦しんだより以上に悶しんだ人もある。だから唯それをいつも心で新しく感じてゐればいいのだ。決してぜいたくはするな。しかも無益なことはやめてくれ。」

私はさう言ひながら、自分のちからでどうにもならなかつた日のことを考へた。屋根裏のやうな煤ばんだ空に多くの冬や、あつい夏の日を送つたことを考へた。私は書物をかかへて本郷の白い街道をよく行つては金にかへた。きらきらと空に反射した埃つぽい白い街道はいつも私の魂を脅かすばかりではなく、からだのすみずみにまで炎熱の苦しみを刻みつけときにふらふらと目まひをかんじしめて來たりした。そのときも、いまこの苦しみを嘗めてゐて、それが將來私のために何を報ひてくれるかといふことを、よく考へた。報ひることも報ひられることも、それすら抵抗できない必然

な運命であつた。さうしなければ、どうにもならなかつたのだ。しかし、私の心の奥底には靜かに立ちのぼる蒼白な吐息のまにまに、いまにこの正しい苦しみが、きつと私を善く導き、よい人間の素質にかなふやうにすると思つた。きつと私も上へ上へと昇つてゆくにちがひないと感じた。昇らずにおかないと強く決心をした。

私は額に流れる汗を拭くひまもなく、汚れた幾冊かの書物をふところから出したとき、電車道から煽られてくる暑い日光をせなかにかんじた。まるでかまどの前に坐つたやうな暑さは私の目まひをもつとひどくした。古本屋の番頭の青さめたひしやけた顔を、見まい見まいとしながら、恵まれるやうに投げ出されたきたない裂けた紙幣をにぎつたとき、私は露西亞の小説のなかにあつた淫賣婦が、冬の街頭に裸にさせられて、雪で白い肌を十度叩かしてもらつて五ループルの金をつかんだときの喜びを私は記憶からよび醒ましてきた。彼女はよろ〳〵しながら、虹いろのループル札をつかんでカフエへ飛び込んで行つた。そのあとには嚴しい極地の降雪が、腹伏せに運はさせられた彼女のはだかの形をはつきりと雪の上に印してゐた。

その日の私は彼女とはどれだけもちがつてゐないほど、私は謙譲な心になり下つてゐた。そして私は日がくれかけると、いつも中毒性症の必らず一回は執らなければならない飲酒の習の上に、ちいさい喜びをかんじながら、居睡りと疲勞とをとりまぜて杯をなめてゐるのであつた。妙に飲酒家にありがちな腫れぼつたい眼の端のたかまりや、ややあさぐろく蒼ざめた皮膚はますます私の相貌をさびしく歪めた。ときには硫黄のやうな感じのする皮膚の混濁は、頬のあたりをげつそりと削ぎとられたあとに、うすくらい陰影をつくつた。それは死と生とのあひだをふらついてゐるやうな相貌であつた。あらゆる心持ちはみな目に向つて光を放つた。目を凶惡にあくどい光にたたみ込んで、小さな女の子供はすぐ私を見ると泣き出した。それから美しい婦人らもみな私を一目見ると、その全體に非常な危險な毒素を包含してゐるもののやうに、あるものは恐れて逃げるやうに、通り合せてつた。私が十年の暗黒的生活に、一人の戀人を見つけ得なかつたのは、あまりに自分の容貌の峻酷であるためと、私自らがそれを知覺してゐるためとであつた。――私はそれらの苦しみが今たへまなく心に往來してきて、一つ一つ私の耳にささやくことをかんじた。

「獸のやうなもののところへ來たお前はほんとに氣の毒だ。」
と私はひとり言のやうに言つた。妻はあはてて
「勿體ないことをお仰らないで下さいまし。わたし、もう出來るだけのことをしておあげしますわ。」
と持ち前の明るい言葉で言つた。一人が暗くても一人が明るければいいのだ。私は何事もゆめのやうにといつも心で言つたが、ゆめのやうにいかなかつた。一つ一つに冷やかな理智的な批判がしぶとく附きまとふとて、私の前になり後になりして私の言葉を斷ち切らせた。

四

上野廣小路から黒門町の方へ曲らうとする右側の、うす暗い路次のかどに一軒の西洋料理店があつた。そこの二階へ通じる階段が、すぐ路次の方を向けて作られてあつた。鍵形に曲つた階段はともすると頭を打つほど低いかはり、どこか街裏のレストランらしい汚れたところと狹苦しさとを、却つて、面白く馴染み易く思はせた。階段をあがると、その兩方に室があつて、左側の室は小さかつたが、小ぢんまりとして、窓からは街衢の屋根の埃や、裏二階の一部などが見えた。

その室に一臺の古いガタガタな鍵盤の合はないピアノが、それでもどつしりとピアノらしく據えられてあつた。その室へ一週間にいちど位ゐ私どもは飯をたべながら、よく散歩のついでには寄つたりした。それは、二人ともぼんやりと外部のもの音に觸れたかつたり、所在ない寂しさを感じ合ふときなど、つい廣小路へ出てゆくのであつた。何といふこともなく唯情愛そのものからくる倦怠、またはよく夫婦間に起きがちな際のある、それはほんとにやりきれない掾りどころない寂しさに、ぴつたりと蹉させられたときなど、私どもはよくそこに坐つてゐた。そこに行つてゐても特に原因のない寂しさを埋めあはすことができるわけでもなかつたが、その室のうす暗いところや窓々が人家にふさがれてゐるのや、何かしら私の心持によく合つた汚なさのなかに、ある長閑な時間を見出すことができるので、自分勝手にいろい

ろなことを考へるに都合がよかつた。

ドアを閉ぢてしまふと、次の室の客の聲もきこえないし、その室ばかりがひつそりとしてゐて好かつた。ことに階段の反對にかけられた大きな鏡は、ドアの硝子戸越しから、つぎの室のありさまがみな寫されてゐるのが、私どもの腰かけてゐるところから見えた。客は三人の西洋人きりで、それが皆獨逸人らしい一こくな、ときとすると怜悧な顔のひともあつた。かれらはみなビールをのんで、聲高く何か饒舌つてゐた。

彼女はそのころ小松玉巖氏や弘田龍太郎氏の作曲してくれた私の小曲を練習するために、熱心にガタガタなピアノを彈いてゐた。もとより貧しい私だちはピアノどころか、一臺のオーガンさへも求めることができなかつたので、どこへ行つてもピアノを借りて彈くことはできても、いろいろな氣兼ねがあつたりして彈けなかつた。ここのピアノなれば、いくらか女中に心づけをやつて、しばらく位ゐなら彈いてもよいらしかつた。

小松氏の「砂丘の上」の曲は、おとなしいしみな、それでゐて人人の心の上を強く印象してゆく氏の永い音樂家としての道のりを、そのまま物語つたやうな人格的な優しい曲であつた。それにひきかへ弘田氏の「霜」は新しい果實の皮をむくやうに、だんだん唱はれてゆくうちに、強い味ひが深まつてゆくやうな心持ちと、または好く詩の精神に深徹した新穎的な曲であつた。私は私の詩が作曲され唱はれ彈かれるときに感じるのは、いつも小曲には音樂の背景があつて、はじめてその詩の美しさ、うまさが現はれるやうな氣がするのであつた。それは作曲の場合、曲のつきやすい詩といふ目安が私だち詩作者を困らせるけれども、やはり音樂的に完全されて、それをじつと聞いてゐる心持は、二倍に創作當時の心境をよみがへらせて來て快よい幸福をかんじしめるのであつた。

それはまるで自分で書いたものとしては、よすぎるほどの感激を、その詩からも音樂からも今はしきりに呼びさまされるのであつた。いつも人間のすぐれた魂を慰さめるには、必らず最上の美しいもの粹いもの味ひと匂ひとの高いものが必要であるやうに、音樂はよく人人の心のそこふかくつたはつて、じつと美しい肉體に抱かれ包まれるやうなうつとりした一瞬を、あらゆるデテエールにゆき亘つた歡喜や悲哀の美しさを、どこまでもていねいに囁きつくすのであ

つた。

私がかうして妻とふたりで、ここに坐るとき何かしら一種の嘲笑的な幻惑をよくかんじるごとに、いつゝゆめのやうにといふつぶやきを腹の中でした。それは暫らくでも自分の烈しい内外の生活をあたためたい根本の願と、また私自らの魂にとつて祭らるべき苦しみ悶えた日の償ひをするためにも、ときをり、總ての萬人がもち、萬人が愉しむところの愛すべき脊き空想をそのままに打棄てることの物惜しさを、いつも痛々しく感じながらひつそりと此處の街裏にやつてくるのであつた。それらは峻酷な生活者にとつて實にたはいもない、さげすんだ嘲笑に終らうとも、私はやはりかうしてゐる方が、何よりも自分らしく思はれるのであつた。

私はそのとき、隣室にゐる獨逸人がしきりに私の室の方を指さいて、何か囁き合してゐるのを見た。一日一日と本國を向つて歸つて行つたなかに殘つた最後の三人のやうに、寂しく身すぶらしく、またいやしげに醉つてゐる彼等を見ると、そのエゴイズムのしびれ切つたやうな顔立ちのなかに、異邦人としての寂しさ遣りきれなさが、めいめいの顔にそれとなく表はれてゐた。私はなにかしら世界を向ふに廻してあらゆる科學や人力をもつて、惡辣に深刻に、できるだけの力をもつて戰つてゐる彼等の國の君主をいつも尊敬に近い心持ちで見てゐた。しかもその國の人々が寂しい一杯のどールに、いろいろな困難な立退きの命令を受けたりすることを考へて、自分も外國に行つてああいふ風な目にあつたら、どんなに寂しいだらうと考へた。

私はそつと妻にささやいた。

「獨逸の國歌を一つ弾いて見ないか、あのひと達はきつと喜ぶよ。」

「ええ。でも時節柄わるいぢやありませんか。」

と、妻はすこし心配した。

「大丈夫だ。音樂だもの。それを制限できるものかね。」

妻はしばらくして弾き出した。私はかれらがどういふ風に喜ぶか、また彼等がきつといろいろなことを考へ合せて、

一つの慰さめを搜りあてるかもしれないと思ふた。そのとき、鏡のなかの三人の獨逸人は、みるみるうちに烈しい歡喜にみな一様に本物らしいバスで唱ひはじめた。かういふ敵國人のなかにはさまりながら、しかも名もない貧しいレストランの二階で、本國の都會の廣場やカフエでよくうたはれる國歌を聞かうとは、ほんとに夢にも思はなかつたのであらう。三人の同じい蒼白な頬にはみな若い紅いものがのぼつた。そして此處がどこであらうが然ういふことはもう目の前になかつた、かれらは、ただ、高い聲でひりひりと硝子窓にひびくのも氣にしないで唱ひ出すのであつた。

私はその殆んど狂喜したやうな歌をききながら、まじめに良人の言ひつけどほりに、まるい彈奏椅子に腰かけたお太鼓にむすんだ帶のたかまりや、無雜作に結つた髮がときどき揺れるのなどを靜かに眺めた。または、白い鍵盤のうへを烈しく踊つてゐるやうに、内實やはらかくつつましいタッチをこころみてゐる手つきは、ただ、靜かにかろくおどつてゐるやうであつた。――彈奏が終ると一人の若い獨逸人が立つて私だちの室へ來さうに見えた。私はハツとしたが、そのときもう彼れは私だちの室のドアを、最上の禮儀をもつて靜かにノックした。私は妻と顔を見合せたが、妻は別にあはてたやうにもしなかつた。

私は妻にそつと「開けた方がいいかね。」といふと「それが禮儀でせうね。」と言つた。私は

「おはいりなさい。」と言つた。

若い獨逸人はいきなり這入つてくると、すぐに妻に握手で禮しやうとしたが、日本の習慣を知つてゐるらしい彼れは、その手をひつ込めてあいさつをした。そして私のはうを向いて達者な日本語で

「ただいまはありがとうございました。」

と、また頭をさげた。私は面喰つたやうに「どうしまして。」と言つた。

「あなたは音樂學校へ行つてゐらしやるのですか。こんなところで本國のうたを聞かうとは思ひませんでした。」

と言つた。妻はすぐに彼れに私を自分の良人であることを素早く紹介した。郷里で永い間西洋人のところへ絶えず出入してゐた彼れは、かういふことが私よりずつとうまかつた。持ち前の落ちついた調子も、へいぜいはあまりぼんやり

だと思つてゐたが、かへつてそれが落ちつきを見せた。

獨逸人はすぐに私に握手を求めた。

「あなたの奥さんでしたか、ありがとうございました。」

と手を振つた。

そこへあとの二人がどやどやと這入つてきて、妻をとりかこんだ。そしてもう一度彈いてくれるやうに、しつこく、こんどは私にまで賴んだ。

妻はそれでもじつと私のはうを向いて

「どうしたらいいでせう。」

と言つた。――私はそのとき、何故か急に不快な氣がした。止めろといふこともいひにくかつたし、また彈けばきつと私のこの室で唱ひ出すにちがひないと、どちらつかずな、不愉快な氣がした。醉つてゐても外國人にはさうひどい間違ひはないとおもひながらも、なぜか此處を出てゆきたいやうな氣もした。

「ぢやも一つ彈きなさい。そして歸らう。」

「ええ。」

と彼女は彈き出した。斷はることもできず私はその瞬間しなくともいいことをしたやうな氣がした。

ピアノにつれて彼らはみな唱ひ出した。それは明らかに正しい三部合唱で、美事な、しかりした壯厳さをも持つてゐた。そして今すこし前まで反感とも、どつちつかずの妬みをかんじてゐた私は、つい引入れられてこの寂しい獨逸人の群れをながめた。かれらはみな立つて胸を張つてゐた。しらずしらず私のからだにも勇敢な、うしほのやうな力の湧くことをかんじた。

彈き終ると一人が高い獨逸語で何かいふとさつきの若い方が

「今晩はほんとに幸福でした。ぜひお名前をおしへて下さい。」

と言つて、自分の名刺を出した。ニコライに關係のあるらしい人であつた。
「私どもこのつぎの船で歸國しなければならないんです。日本で本國のうたをきいてかへるのが何よりも紀念です。」
と、酒ずき特有の人の善い顏を微笑させた。かうして話してゐると、ふしぎに利己的な、堅苦しいやうな表情が見えなくなつて、何かしら優しいところをさへ見出すことができるのであつた。
かれらは一齊に挨拶をすると出て行つた。私はほつとした。
「お前はばかに落ちついてゐたね。」
といふと
「でも私、どうしやうかと心であはてたんだすけれど、見苦しいだらうとじつとしてゐたんだすの。」
と、いふ彼れもまた息をはずませてゐた。女は落ちつくと、とても男のやうに外部に出すまいとするのが、ことにたくみなやうな氣がした。
「あなたが國歌を彈けとお仰つたときに、わたしきつとあの人達がうたひ出すだらうと思つて、おことはりしやうかと思つてゐたんですの。」
「それや人情から言つても然うだらうね。しかしいいことをしたやうな氣がする。」
間もなく私だちはかへりかかつた。すると一樣に獨逸人はみな階段のところへ來て、日本式に見送つてくれた。
「さよなら。」
と、獨逸なまりな、どこか子供らしい含み聲でたくみに言つた。
私もそれにこたへた。
かれらは一人の女性があつたといふ事實に興味をもつたにしても、みな、さわやかな幸福らしい感謝をその目にあらはしてゐた。そして階段の下までも來た。
私達は華やかな街頭へ出た。何かしらよいことをしたやうな朗らかな心になりながら、春の埃のふく夜をあるいて行

つた。

「あの西洋人の方にもみた奥さんがあるのでせうか。」

と彼女はふいと問ふた。

「かなりな年の人がゐたね。あのひとなどはあるんだらうな。しかしあの若い方はないかもしれない」

と私はこたへた。さう言ひながらも、今夜のことはまるでゆめのやうだとも思つた。向ふのひとも、こつちも寂しかつたのだ。それがまるで打つかり合つたやうになつたのだとも思へた。

「あの人達はみな戰爭に出るのでせうか。」

「出るんだらうね。このつぎの船でかへると言つてゐたからね。なんだか皆戰死しさうだね。」

と、私は言つて、ふいと彼らが間もなく恐ろしい巷にさしてゆくことや、なにかしら戰死しさうな、かげのうすい或る豫覺をかんじ出した。ああいふ立派な大きなひとが、みな小鳥のやうにばたばたやられる。——さう考へつめると、いままで話したひとだちは、かげのない亡靈のやうな蒼白いもののやうに、私の目に描かれて行つた。

五

春とはいへ烈しい降霜の晩、私は室のなかを火であたためながら讀書してゐて、ときどき、あまりの靜かさに耳を立てたりしてゐた。となりの室では時計がカチカチなつてゐて、縫物してゐるらしい妻のけはいが、ときには小さな咳になつたりしてきこえた。それは殆んど何者も、この私だちの平和な心持ちを破壞することのできないやうな晩であつた。

私はそのとき表の門のところで、かさこそと人の通るらしい草履の音らしいものを、ふと聞いたので、じつと耳をすました。あるかないかの音だつたので、私はとなりの室へ聲をかけた。

「オイ、誰か來たやうぢやないか。草履の音がするやうだぜ。」

といふと、うつむいてゐたらしい、すこし鼻にかかつた聲で
「さうですか。どなたでせう。お友だちならすぐおはいりでせうに。」
と、妻もふしぎさうに、外の音をききあらためるやうにした。
そとで、やはりかそこそ音がした。人通りと言つては絶對にない小路の奥に音のするときは、私の家か隣をたづねるより外にはないのだ。いまごろ誰だらうとおもつて、いまにも門があくかと待つてゐた。
そのときクロが劇しく吠えた。間もなく表の門があいた。そして玄關さきで
「室生さんてのおたくでせうか。」
と言ふのがきこえた。妻はすぐ出て行つた。さつきから何かしら不安な豫覺があつたので、私は息をのんで、妻の室へ入つてくるのを待つてゐた。
「何んだかコワイ方ですよ。そして此手紙をあなたにあげてくれつて――。」
と、一通の手紙を出して見せた。さきのちびた墨筆で私の名前が書かれてあつた。
「どんな人だい。これまで一度か來たことのある人かね。」
と、うら書を見ても、きいたことのない人であつた。
「いいえ。初めてのひとですよ。うつむいて私の顏を見ないで手紙をさし出したんです。」
「何の用事かな。」
と、私は不安な思ひにみたされながら封を切ると、二枚の半紙にいつぱいに大きな四角な字でかいてあつた。――私は濟生會にもゐたが、もう肺病も三期に入つてゐるので、そこをも出され、新聞の賣子もやつたけれど、とても勤まらなかつた。もう歸國するより外に途がないから少しでもいいから惠んでほしいといふ意味であつた。そして又今自分は一宿一食にもこと缺いてゐると書き添えてあつた。もう一枚のはうには濟生會の證明書があつた。この病氣について當會にも世話ができないといふことが書いてあつた。

手紙を讀みながらも何故か欺かれてゐるやうな氣が、ふいと心の隅で感じ出された。こんなことを言つては、その日その日を暮してゐる最も狡猾な漂泊者ではないかと思はれた。それに、妻の顔をも見ないで手紙を出したといふことがその腹のそこの汚なさを考へさせる。

「ねえ。あなたが出て下さいな。わたし、ほんとにコワイいんです。」

「これ位ゐのことに恐がつてたまるものか。ともかく會つて見やう。」

と、私は玄關へ出て行つた。

彼はまだ二十四五ほどだつた。その蒼白い顔はうだ腫れて夜目にも消耗性のはげしい赤い斑點が頬に浮いてゐるのが見えた。袷一枚きりでしかも素足だ。きものから胸があいて瘠せたのがいたいたしく見えた。私はそのとき、すぐにこれは本當に困つてゐるのだ。この寒さでこのうす着はたまらないと思つた。

「君は國へかへるつて本當ですか。能登の何處ですか。」

「能登の珠州郡です。××村の生れですが一日も早くかへりたいと思ひましてお願しに出たのでございます。」

私はすぐよこに震へてゐる妻に、能登にそんな村があるかとたづねると、たしかあるらしいと言つた。私もどうやらあつたやうな氣がした。ともかく、どうにかしてやらなければならないと思つた。苦しんだものの常として、こんな場合にはわけなく昂奮をさへ感じるものだ。自分の急所を衝かれてゐるやうな、見るに耐えない不快さを自分のためにもどうにかしなければならない氣がするのだ。

「君はうそをつかないな。」

と、私は思はず言つたが、かれはそのとき、ひよいと上目をして私を見た。それまでは俯向いてゐたのだ。その上目はなぜかずるさうに見えた。

「本當にこまつてゐるんです。」

と、かれは啖入つた。それも本ものの結核性のそこのない咳であつた。私は可愛想になつた。だますならだまして見

ろ、決していいことはないぞと言ふ氣もちと、だまされたつて今は見るに耐へない自分の心持を救ふやうなものだといふ氣とがした。

「綿入を一枚出しなさい。それから手拭と帽子と――。」

妻はあはてて押入をあけてガタピシやつて捜してゐた。不意の不幸なむごたらしい客來におびえた彼女は、何とかしてあげたいといふ心持ちでいつぱいになつてゐた。

妻は綿入れと、茶のソフトと、それに足袋と手拭とをもつて出て來た。

「綿入れは着て行きたまへ。寒いから、」

「何から何までありがたうございます。これで私も助かります。」

と、かれは今着てゐる袷の上へ羽織のやうに引かけた。そのときシャツも着てゐない蒼白い力ない腕があらはにしなびた大根のやうに、袖を通すときに見られた。

妻は簞笥の前で小さな紙包をつくつてゐたが、それを彼れに渡した。

「ほんの少しですけれど。」

と、おそるおそる言つた。

「いただきます。」

と言つて彼れはそれを内懷中にしまつた。私は

「帽子をかむつて見たまへ。似合ふかどうか。」

と云ふと、かれはそれを冠つて見せた。四五年前に丸善で買つた帽子で、あのころ茶はたいへんに流行つたものだ。

と私は腹の中で思つた。

「さあこれで君も溫かくなつたから行きたまへ。からだを大切にしたまへ。あ、ちよつと待ちたまへ。」

と、私は二三日前國から來た餅のことを考へて、あれをわけてやつたらと妻にいふと、それがいいと言ふので、妻は紙

に餅をくるんだ。そしてこんどは砂糖の壺を出して、それをも分けやうとしたので
「砂糖はいいさ。」
「さう。」
と妻は不本意さうに言つた。
「大變御厄介になりまして濟みませんでした。では失禮します。」
と言つて、いくどもお禮を言つた。
「足袋もはいたらどうかね。」
と、いふと
「電車のなかではきますから。」
と、せかせかして出て行つた。
私は門の鍵をおろしに出ると、髮の毛のやうに鋭い寒さが、すーすーと襟元へながれ込んだ。星はみな青くきらきらと、いつの季節にも見ることのできない鋭どさをもつて光つてゐた。もし彼れが私と同縣のよしみをもつてわざと私を欺いたにしても、もう目的が達せられた快心と、二三日だけは安逸な生活ができるだらう。そして又た次ぎから次ぎへと私にしたやうな手段をくりかへすにちがひない。さうすれば私はいやな彼れのためにならない例を餘計に作つたも同じだ。間もなくきつと何處かで發見されるにちがひない。しかし私はあれより外にできなかつたのだ。とても嘘とは思へなかつたのだ――さう考へながら這入ると妻は
「可愛想な人もあるものですね。わたし、あなたのお部室へ行かして下さいな。なんだか目に見えるやうで、コワくてしやうがないんです。」
と、ほんとに今も玄關に佇つてゐさうに、コワがつた。
「來たつていいよ。しかし此手紙を燒いてしまつたらいいね。肺病のむしがついてゐやしないか。」

「え。燒いてしまひませう。」

と、火鉢に入れてマッチを摺つた。すぐに燃えた。妻はその紙質の燃えるときに起る青い輝きをコワさうに見た。私もそのとき、蒼白た腫れたやうな彼れのおもかげを目にするやうなあやしい氣がした。二人は言ひ合したやうなある氣味わるさと、人間の苦しさがどこか幻影的なところのあるものだといふことを感じ出した。

私はふと思ひ出したやうに言つた。

「あした起きたら門の前に燐寸のともし殼が落ちてゐるかを見てごらん。犬がしばらく吠えないでゐて、突然吠えたところから見ると、あの男はきつと燐寸で表札を見たものらしい。」

妻は

「さうかもしれませんね。今夜はきみのわるい晩ね。」

と、寒さうに肩をすぼめた。霜はめしめし降るやうな寒い晩であつた。

翌朝、妻はマッチの殼のあつたことを告げた。そして

「足袋を片方だけ門のところに落してありましたよ。なんだか變な氣がしましたわ。いまに取りに來るでせうか。」

と、その足袋に彼の男の執念でも遺つてゐるやうに言つた。

「もう來はしないだらうよ。足袋の片方ぐらゐにはね。」

私は庭のところに霜の白くつもつた足袋が、きみわるく落されてあることを想像すると、ある不吉なことがあるやうな氣がしてしかたがなかつた。妻も妻だ。朝からいやなことを言つたものだと、やつと私は起きて出て行つた。外はあかるく溫かく晴れあがつて、地上はゆたかに春のけはひを示した。何一つ不幸のないやうな明るさは私を元氣にした。

私は食事がすむと素足になつて土を耕しはじめた。ぽかぽかした溫かい土が、素足にあたるごとに快よい觸りをかんじさせた。掘つても掘つても絕えないふさふさした土で、小さな畝を一つ一つに作つて行つた。

「オイ、種箱を持つて來てくれ。」

と、私は大きく呼んだ。

種箱のなかから千日紅、鷄頭、ダアリヤ、百合、ひめ日廻りなどをとり取した。それからフラン菜や茄子の種をもとり取した。

私は小さな種床を作つた。こまかい美しいつちをならして、行儀よく順々に種を植えこんで行つた。やはらかい土はすぐにでも一つ一つの種を抱いてくれるさうな氣で——一つ一つていねいに殊に珠根は深く植えこんだ。畝や種床の土は、すぐ白く日光に乾いてゆくのが、ちらちらする陽炎のひまひまに目に見えて早かつた。

「お茶を一つもつてきてくれ。」

と、私はやや咽のほせることをかんじた。手も足も快よく泥にまみれて、からだにはしつとりしたあせをかんじ、どこか少年期のやうな元氣さに充ちてゐることを喜ばしく思つた。茶をのみながら見てゐると、春から夏へかけてきつと色々な花がさく樂さが思ひやられた。去年ある音樂家が「草花など手をかけてやるとすなほに育つものですね。人間よりもどれだけすなほだか知れませんね。」と言つたことを思ひ出した。

私は山吹のかげにかなり深い穴を掘つた。そして私は思はず微笑んだ。そしてすぐ人が見ても判らないやうに植木鉢で覆ふた。

「お前はさつきお湯に行くつて言つてゐたが今のあいだに行つてきたらどうだい。」

「でも、あなたのはうに御用があるでせう。あとでもいいんです。」

「用事はもうないんだ。行つて來たらいい。」

「ぢや行つてきませうかしら。」

と、彼女はちらと私の穴を見た。そして

「何かお植えになるの。」

「うん。これから植えるんだ。」
妻は湯にもちゐる道具をもつて
「すぐかへりますから。」
と出て行つた。
私はその姿が見えなくなると、泥足だつたので四ツ這ひになつて坐敷へはひあがつた。そして本箱のなかから一と束の手紙をとり出した。そしてまた庭へ下りると、れいの穴のところで烟しはじめた。いつか燃やしてしまうとおもつてゐて、つい燃しそこなつてゐたのだ。それはみなまるで子供らしい美しい、たはいもない手紙であつた。
手紙はどんどん燃えた。そのときをりに感激してよんだ手紙が、ありありと燃えてゆくのを見ながら再度手にする氣にならなかつた、おれもかはつたなと思ひながら、その煙が茅生えた山吹の根にそつて、ゆるゆると風もない日のそらに消えて行つた。だれでも結婚すると、ひとりのときのやうな崇高な感情で女を讃美できなくなる。その肉ばかりが目に立つほど荒く深い感情になる。おれにももう心臟の止るやうな心で、慌しく女のてがみを見ることがなくなりかけたのだなと思つた。
手紙は黑々と皺だらけに縮んで、ときどき、ひくい音でかさこそと崩れた。その上から靜かにそつと土をかけた。かさこそと音がした。すつかり埋めてしまふと、私は輕い心で、ゆつくりと空をながめて煙草をすふた。
それから井戸端でからだを拭いた。つめたい水はつかれた私を凛とさせた。あたかも健康の輝きがすさまじい勢ひで加はつてくるやうであつた。
湯から歸つた妻は身じまひをすますと、すぐ縁側へ出たが、
「しつ！ クロ、いけないよ。そんなところを掘つては！」
と叱つてゐたが、高い聲で
「あなた、あそこへ何かお植えになつたんですか、クロがほじくつてゐますよ。」

と言つた。私はその瞬間まづいことになつたものだ。掘られるといけないと思つて、庭へ下りてクロを追つた。クロはふさけながらすぐに逃げて行つた。私はそのあとを堅く踏んでおいた。

「何を植えなすつたの。」

と言つたから、すぐ何氣なく

「ダリアの珠根を植えたのさ。一度埋めてから掘りかへすと珠根がだめになるんだ。クロを氣をつけないといけない。」

「さう。そこより最つと日光のあたるところがいいちやありませんか。」

「此處がいいんだ。ちやうど僕が机に座つてゐるところから見える位置なんだ。」

「さう――。」

と、妻は別にうさんくさそうにしなかつた。わかるものかとおもひながら、ひよいと見るとクロが此方を向いて又やつて來さうに思はれた。

「いたづらめ！　しつ！」

と叱ると又飛んで行つた。何んだか妻が犬に敎へて掘にくらせてゐるやうな氣がした。妻は妻で、如露をもつて種床に水をやりながら、こんどは例の手紙を燒いた穴のうへも撒きながら

「紅い花ですか、白ですか。」

とたづねた。

「うん。しつかり覺えないが紅い方だつたと思ふが……」

と、私は一種の皮肉な氣がした。妻はていねいに水をやりながら

「いつころ咲くでせうか。」

と言つた。

「夏だね。もつと早く咲くかもしれない。」
とひやひやしながら私は言つた。あれの留守の間に本物のダリアを植えて置かないと、ばれる恐れがあると心で思つた。

六

ある日、妻は買物からかへつてきて
「あなた、猫を飼つたらどう。通りのお菓子屋にそりやきれいな猫がゐますの。ねづみも出ないしぜひ飼つてくださいな。」
と、息せきして言つた。
「きれいな猫ならいいね。くれるのかい。」
「ゑ。喜んでくれますわ。三毛でずゐぶん大きくなつてゐますの。ぢや私行つてもらつてきますわ。」
と、もう表へ出て行つて、袂のなかをふくらかして歸つてきた。
「いい猫でせう。」
と袂から出した。一疋の三毛猫で、かなり大きい利巧さうな顔をしてゐた。その目のまるいのや、形の小さいのが、いかにも可愛げな姿をしてゐた。兩手の掌におさまるほど、まだほんの子供であつた。
妻はどこからか砂をもつてきて、ふん箱をこさへたり、ちりめんの紅い布片で首玉をつくつたり、ち、ち、ち、と鳴る鈴をつけたりした。それがいかにも飼猫らしい優しさ賑やかさを加へて、そこらを飛んであるいた。
「犬と喧嘩しないかな。」
といふと
「わたし、よくならしますわ。」
と言つて、その小さい奴を抱いて、クロのねてゐるところへ持つて行つた。そしてクロの深い毛並で温まつた腹のと

ころへ猫をうまく抱かせた。クロはすぐ異種の動物の匂ひをかぐと唸り出したのを妻はあたまを叩いた。猫はまだ子供だつたので、ふしぎさうにクロの匂ひをかいでゐたが、しまひにはクロの尾にちやれついた。
「毎日一ぺんづつかうしてやると、しまひに仲よくなりますよ。」
と、妻は必然的に仲よしになるもののやうに信じてゐるらしい口調で言つた。
これから毎日、妻は小猫を犬に抱かせたり、背にのせたり、何かひとりごとを言ひながら、この異種の動物を近づけ親しませてゐた。日が經つにつれて、クロはもう唸らなかつたばかりではなく、平氣で猫を自分の胸のところで抱いてはねむつてゐた。一つは黑い大きいからだであるにくらべて、一つは小さく三毛だつたので、それらがよく抱き合つてねむつてゐるのを見ると、まるで親子のやうでもあつた。
私どもはちびちびと猫をよんでゐた。妻が縫物などをしてゐる膝の上で、いつも、ゆつくりとあたたかさうに睡つてゐた。
「おれの方へも少しよこせ。自分ばかり持つてゐるのはわるい。」
と、いひながら、よく私は膝の上から猫を奪つて机のそばへもつてきたが、その取扱ひが荒々しいのか、すぐに妻のそばへ行つた。そんなとき私はいきなりあたまをなぐつてやつた。
「そんなことをなさるから、あなたのそばをいやがるんですよ。」
と、妻は猫を辯護するやうに言つた。
「ちび！ こい！」
と言つてもやはり來なかつた。腹が立つので私はまたなぐるまねをした。
「いけない人ですね。恐い恐いしなさい。」
と言ひながら彼女は庭へ猫を抱いて逃がれることがあつた。
夜はいつも妻のひだりの腕をまくらにして、その上へあたまをのせて睡てゐた。私はいつの間にか、すつかり猫と仲

がわるくなつてゐて、私が抱かうとすると、すぐ爪をいからした。ときには私の手首を血のでるほど、するどく引掻くことがあつた。

「やつたな。ちび！」

と、わざと飛びかかるやうにして見せると、かれの目はすぐに怒りに燃えた。尾の毛が逆立つて、白い髭が一本づつツ立つた。それが犬にも見ることのできない祖先に猛獸の血統をひいた彼れの本當のすがたであつた。しかも紅い口をひらいて、ふうふうと唸るとき、私はよく動物園の檻の中の虎を思ひ出した。かれは充分な威を示したあとで、だんだん後退さりしながらすぐ妻の方へ行つた。

それでも朝起きると、私は猫の姿を見ないと氣がすまなかつた。椽側にも居なかつたりすると

「ちびはどうした。見えないぢやないか。」

と妻にいふと

「どこへか遊びに行つたんでせう。」

と言つてゐた。私はそんなとき、あの柔らかい毛並や、ぐなぐなな肉體を手の中で揉むやうにこする快よい感覺をむさぼれないことを不滿足に思ひながら、こんどは庭へ出て行つてクロのからだをつかんだり、耳にそつと爪を立てたりしてきやんきやん啼かせた。さうした不思議な動物にたいするいらいらしい、愛撫の極度な發作を示したやうな私を妻はすぐ見つけた。

「まあ可愛相ぢやありませんか。どうしてあなたはそんなに酷い目にばかりあはせるんです。」

と、すぐ彼女はくつてかかつた。

「一種のこれも愛撫の方法なんだ。しかしお前にはわからないよ。」

「だつて酷い目にあはしながら可愛がるつてことはありませんわ。あなたのは虐待よ。

「ばかを云へ。」

と私はやはり犬をきやんきやん云はせた。さうすればするほど、私の内部にある野蠻な動物的な感覺がだんだん滿足されてゆくのであつた。痛々しいもののなかに快よい氣持ちがあるのだ。手の指を切つたりすると、その痛さのなかに優しいかゆいやうな快よさがあるやうな氣のするのと同じだ。

「あなたがね。そして犬を泣かせなさいますと、わたし拚せるやうな氣がするの。どんなところが面白いんでせう。」

「くちでは言へない氣持なんだ。」

私はそれきり默つて犬のそばをはなれた。まるで非常な寂しい目にあはせられたやうに、庭をぶらぶら歩いた。

妻はいつも買ひものに出かけると、きつと猫の姿が見えなかつた。どこへ行つたのだらうと思はせることが多かつた。しかし彼女が歸つてくると、何處からとなく、ちびはやさしい聲でなきながら出て來た。私はふしぎに思つて、いつたい何處に隱れてゐるのだらうと氣をつけてゐても判らなかつた。

ところが妻があるとき外出するとき、庭にあそんでゐた猫をれいの畜生の心をとろまかすやうな聲で呼んでゐた。

「ちび、ちび、ちび……」

と、その聲に猫はすぐ泣いて、妻の手に抱かれたらしかつたが、それきり猫の姿が見えなかつた。そして妻は町へ買ひものにでかけた。それは私がいつも猫を面白半分泣かせるからである。出かけに私は

「ちびはどこにゐるのか。」

「知りません。どこへかまた遊びに行つたのでせう。」

と、そしらぬ振りで言つた。もしも懷中にでも入れてゐはしないかと見たが、そんなところにもゐなかつた。

私は猫のゐさうなところを殘らず見てあるいたが、やはり見へない。私はふと考へ出して、妻の聲をまねて呼んで見た。

「ちび、ちび、ちび、……」

と、すると押入れのなかかゝ泣く聲がした。あけて見ると、ちやうど猫のねむりよささうに幾枚も累ねた座布團の上

で、かれは長々とさもゆつくりと睡つたらしい、ぼんやりした目で私を見て、妻でなかつた失望をありありと其顔に現はしながら、あかい猛獸を思はせるやうな口をあけと欠伸をした。それがいかにも安逸に慣れ愛に馴れすぎてゐるやうで、すこしにくらしく思つた。私はかれの手を引いて、押入からそとへ引摺り出して無意識であたまを二つ三つ叩いた。何といふこともない輕いにくらしさが然うさせたのだ。ちびは、すぐ逃げ出した。追ふと庭へ出て前足をぐつと伸ばして、からだを反らして脊のびをした。それがいかにものんきさうで、私をばかにしてゐるやうであつた。

間もなく妻が歸つてきた。どうするだらうと見てゐると私に目立たぬやうに押入れを細目にあけて、ちび、ちび、と呼んだけれど、出て行つたちびの居さうな筈がなかつた。妻は瞬間的にちらと私を見たが、私はすぐ本の上に目をおとした。

「ちびはどうしたんでせう。この邊にゐませんでしたか。」

「知らない。」

と、私は冷淡にふりむきもしなかつた。妻はたまりかねて押入をあけて見たが、そこにもゐなかつた。間もなく勝手へ出て行つたが、すぐちび、ちび、ちび、と呼ぶこゑがした。木のしたにでもゐて妻のかへりを待つてゐたらしい猫は、庭の方で泣いて妻はこたへた。

「どこへ行つてゐたの……」

といふ妻の聲と、猫のふざけて泣くこゑとがした。あんなに可愛いものだらうかと、私はすこし恐ろしいやうな氣で、何か猫をあいてに獨り言をいつてゐる聲をきいてゐた。

どうかすると犬がさきに飯をくつてしまふと、ちびは、いきなり犬の口のところへ鼻をもつていつて嗅いでから、すぐ妻に食事をねだることがあつた。「犬がとくにたべてゐるのに、私はまだたべない」とでもいふやうに、忙しい妻を勝手中につきまとつて、火のやうに泣き立てるのであつた。妻はしかたなしに何か食べさせると、クロがこんどはクンクンと食事をねだり出す。自分がたべてもやはりネダるのだ。妻はさういふ中にありながら、犬と猫とをかけりばんこに叱つた

り、なだめたりして、いろいろな用事をしてゐる有様が、目の廻るやうな忙しい思ひをさせた。

七

花が咲いて慌しく散りはじめた或る靜かな午後、私達ちは椽側に出て茶をのんだり果實をたべたりしながら、春らしい曇りを帶びた空を見てゐた。上野あたりは大變な人出だらうといふ事を考へながら、ぞくぞく芽を吹いてくる花壇をたのしく見つめてゐた。總ての這ふもの動くものが皆生活しはじめた。

垣のそとは幾疋となく犬が往來した。あるものは火のやうになつて、地上にある匂ひをかぎあてると何處までも衝きとめるやうに走つて行つたり、あるものは幾日も一と處にぢつと座つて、クロの來るのを待つてゐた。また、あるものは、二時間くらゐづつの間に、必らず一度か二度づつやつてきて垣のそとからクロを覗いた。ときには雄犬同士が劇しい組み打ちをやつたり、吠え合つたりした。むき出しな本能そのものに命令されたやうな動物らは、ただ、一疋のクロを遠くとりまいてゐた。

クロはクロで長い赤い舌を出して、からだから湧き出るやうな本能的な、いつも熱に浮かされてゐるやうな荒い顏をしてゐた。そのくせ雄犬が近づくと唸り出した。そのたびに雄犬はおとなしく彼れの身邊をはなれて行つた。

「さかりらしいな。」

「ええ。」

と、私たちはぼんやり夢のやうに話しながら、春の空氣の濃い密なのに醉はされてゐるやうに、うつとりとしながら居た。それは殆んど疲れたといふほどのこともない、ただ、ぼんやりとした感覺のもとに（春になるとそれが誰にでも起るやうに）一つのものを凝視するといふほど定まらない視線を、ばらばらに離して、地を見たり芽生えを見たり、すぐ敷石のところにゐるクロを見たりした。さういふとき、私はうすぼんやりした寫眞でも見るやうに、春の季節を毎年どこに送つて、どういふ風にくらしたかと、一年三年と順繰りに逆に考へて行つたが、どれもこれも不分明な印象のも

とに、ただ、ぱつと花の咲いてゐるやうな平凡なことしか浮んで來なかつた。しかも、みな東京で送つた春は苦しかつた。

ある年の春、私は醉つて上野の通りをあるいて行つた。家々の窓は明るく華やかな內部の賑やかさを思はせるほど、ときには、若い女性らしい聲音で、高く艶透な笑ひ聲がきこえたりした。それがいかにも幸福さうであつた。總ての道はあかるかつた。自分のかげが身搾らしく寂しく唯一人きりで、いつまでも華やかな美しい生活につくことが出きないやうに思はれた。眞實にただの一と晩でも、溫かな明るい室に座つてゐたいと、心はそればかり求めた。どちら向いても私のゆくところは、暗い濕けた屋根裏だつた。――私はいろいろ考へ出してあの晩はさびしかつたなと思つた。

妻もぼんやりして空をながめてゐて、濃い空氣にあたまを壓せられるやうな切ない顔をしてゐた。誰でも想像のできないほど無意識的なぼんやりした時を送ることがあるものだ。それが病的だと思はれるほど憂鬱に永い間つづくのだ。自分でぼんやりしてゐながらもそれを意識してゐて、しやんとできない。うつとりした霧につつまれてゐるやうな狀態は、ことに、いろいろな過去や、飛んでもない事實や、ふいと考へ出した用事のために暫くは破られても、やはり依然としてうつうつした幻感的な心持を續けてゆくのであつた。私はいま幸福であらうかといふ想念が、やや遠いところで問題になりかかつても、つぎの瞬間には、もうあとかたもなく消えて行つてしまふのであつた。あまりに肉體がつかれすぎてゐるのではあるまいか、あまりに急激な吾々の同棲生活が、その激しい肉體の內に變化を加へたのであるまいかと私はしづかに自分の內部を熟視するやうな心で、深い想念を辿つて行つた。妻がときをり訴へる輕い併ししつこい頭痛や、私自らのからだにも何時も感じてゐる疲勞も、いまははつきり判るやうな氣がした。肉に墜ちてゆくなと魂はいつもそれにつながれながらも、地にまみれた肉體はただ苦しい反省のうちに墜ちて行くのであつた。それは、どうしても總ゆる同棲者が逃れやうとしながら引づられて行くところだ。それらを厭へば厭ふほど、はじめて動物らしい自分を見ることのできる、どうにもならない苦しみ惱みであり、また、とても勝つことのできない極めて正しい自然の現はれでもあつた。何人がこの恐ろしい絕對者の前に勝ちえたであらう。すべてはみな地にまみれるのだ。美しい淸い少

女らもみなこの道へ急いでゐるのだ。私はさう思ひながら、やみがたい力を目の前に見るやうな氣がした。その絶對者は私を嘲笑した。私に恥を知れと。しかし私は少しもはづかしいことはなかつた。匿しても匿しきれない偉きな力の前に征服させられるのは當り前だ。しかし私はもつと自分の世界が、この一點で停止されることを厭ふた。この疲れから破つて出たく感じた。まるで霧のやうなものの中からはつきり自分を露き出しにしたいのだ。

私はそつと妻にいつた。

「お前しばらく休んだらどうか。病氣にでもなるらしい顏をしてゐるぢやないか。」

「べつに何んでもないんです。氣候のかげんでせう。」

「休むほどでもなければ、どうでもいいが併し遠慮しない方がいいよ。」

「ええ。あなたもぼんやりしてゐらしやるのね。」

と、妻が言つたのに答へないで、私は悲しげにかれを見た。かれと私につながる不思議な運命の引き合せが、いま、突然に私の心の中に浮んだ。

私達ちはなほ茫然とそこに座つてゐた。一定の時がこなければ回復できないやうな、うつとりした時がつづいた。空はあついほど温かい日光にみなぎつてぱつとした明るさが永い日のなかにつづいた。

垣のそとには、やはり、犬が行つたり來たりしてゐた。みな長い舌を垂れて、つやつやしい毛並を靡かせ、あるものは悲しげな長鳴きをして、むづがゆい肉體にあふれる交尾期の悶えをめす犬に告げた。その聲は、海岸の町の眞晝のやうに明るい午後の風のない四邊にひびいた。するとまた、あちこちの小路や塀や植木畑のなかから同様な悲しげな聲がつづいて、たがひにみな通じ合ふらしい苦しい言葉が、人間の豫測できない微妙な瞬間に、とり交されてゐるやうであつた。

私はクロをじつと見てゐた。かれは先刻からしきりに荒々しく鼻で唸つたり、ときにはじつと私をみつめたりしてゐたが、それが何時も暴風の來る前に必然と現はす表情であることが、すぐ判然と讀み分けることができた。毛並は寒さ

うに逆立つてゐて、何かしら宇宙の脈搏と通じ合ふらしい靈的な豫感が、いまこの小さな動物が地上にぴつたりと、つつ立ちながら、かすかに搖れる靑桐の梢にでも潜んでゐるやうな暴風を自分でそれと知覺できるやうに、私どもの顏と空の曇つた工合や、あまりに靜謐すぎるあたりを見廻したりしてゐた。

「どうも風らしいな。クロを見なさい。實に荒い顏をしてゐる。ことにあの湛ひ深い目の底が燃えるやうになつてゐるぢやないか。この間もあんな目をしたとき暴風が來たぢやないか。」

と、私は妻にいつた。妻は

「さうね。雨のふる前は妙にものの陰へばかり寢てゐますよ。」

と言つてクロを見つめた。クロは悲しげに私たちを見た。言葉であらはすことのできない種々な感情のあらはれが、目の底にしづかに意味深く湛えられ、そして私たちに注がれた。

靑桐の梢はひと時のあいだ不動としてゐるかと思ふと、きうに、さらさらと一齊の葉擦れがして、ややすこし動いた。とおもうとまた寂然とした靜かにかへつてしまふやうなことが、たへまなく繰りかへされた。どの犬もみなあちこちで鳴いた。あるものは錆びた太い聲で、あるものは法螺貝のやうに奥深い聲で、それらがみな暴風の豫感のために、はげしく靈魂を顫はせるやうであつた。

「人間の中でも百姓とか漁師とかいふものは、いつも直接に天候を豫測する力をもつてゐるらしいが、私どものやうな都會にゐるものにはそれが出來ない——。」

と、私はひとりごとのやうに言つた。何かしら空なら空からつたはつてくる感覺の種類によつてそれが直感できるのだ。

空は花時の徐々重い惱ましい曇りを其底から次第に膨ますやうにして、どんよりと低く蒸しあつく地上を掩ふて行つた。それがもう額にまで感じられるやうな重さ惱ましさであつた。

「わたし少しやすましていただきます。なんだか目まひがしますの。」

と、蒼い顫へるやうな顔をして、立つて柱にもたれた。それはまるで一本の燐寸の棒のやうに蒼白い瘠せたもののやうに目にうつつた。いつもあまりに大きすぎると思つてゐた彼女は、まるで細々とやつれてゐるやうであつた。

「寢た方がいい。だいぶ青い顔をしてゐるから……」

と言ふと、彼女は隣の間へ行つた。そこで靜かによこになつてゐるらしいけはひがするかと思ふと、また、一時に靜かさが動かないで、私をひしひしとりまいた。しかも明るすぎるこの春晝のすべての靜寂さは、やや恐ろしいほど私を孤獨にした。

私はただ椽側でじつとうづくまりながら、自分でも息をのみこんでゐるやうにしてゐた。けれども餘りに明るかつた。私はそつと妻に聲をかけた。ものを言はなければ立つても居てもゐられないほど私はさびしさに襲はれたのだ。

「よほど惡いかい。ええ。」

と低い聲で言つても返辭がなかつた。もうねむつたものと思はれた。

そのとき、私はふと氣がつくと今まで庭の敷石にゐたクロが見えなかつた。どこへ行つたのだらうと、目をやつて見ると井戸端の植木の下で、じつと私の方を向いて悲しげな顔をして見詰めてゐた。そのうしろには、反對の方を向いてもう一疋の赤い洋犬が、しづかに交尾してゐた。ある一定の時間のくるまで、ああしてじつと彼等は自然に離れるときを待つてゐるのだ。その顔は笑ふやうな又悲しむやうな曖昧な表情をして、ときどき、ほそい笛のやうな鼻が鳴つてゐた。

私はすぐ目を伏せた。そしてその陰をうごくなと思つた。決して邪魔をしてはならないやうな氣がした。

私は時計を見てゐた。四十五分で彼らは靜かに離れた。喜びに輝いた悲鳴で二疋の犬は飛びあるいた。クロは私のとこへも飛んで來た。そして切なささうに苦しさうに、吠えた。かれがいま親しげに私に報告してゐることが、はつきり感じられた。私は久しぶりでかれのあたまをなでてやつた。

「あつちへ行つてねむれ。」

と、押しやると木のかげで深々とうづくまつた。垣のそとの犬はと見ると、もう一疋もゐなかつた。そして私は妻が

見なかつたのはよかつたと思つた。それは餘りに譯はな、餘りに正しい律法によつて行はれたやうなものであつた。――私の目には、はつきりとその熱病のやうに長い舌を垂れながら喘えでゐるさまが、しかも、あかるい日光のなかに織り出されてゐるのが目に永く殘つた。

「どれだけも私達ちとは異つてゐない。まるで總ての人間のかくれたところを彼奴らが露き出しにしてゐるやうだ。あれを見て決して笑へない。笑つてもあとで人人は苦しいだらう。」

と、私は考へながら室にはいつた。私はじつと机に座つた。そのとき、戸障子が一度にガタガタ鳴り出した。もう風が來たなと思つた。青桐の葉がばさばさ鳴りはじめた。

八

ある朝、私は机に向つて仕事をしやうとするところへ、慌しく友人のOがやつて來た。午前は決つて仕事をしてゐるので、親しい友だちでも自然遠慮してくれてゐたが、いまごろOが何の用でやつて來たのかと思つた。そのとき、この間Oに會つたとき、Oがしきりに頼んでゐた或る一件を思ひ出した。

「お上んなさい。たいへん早いぢやありませんか。」

「すこしおたのみがあつたものですから……。」

と、慌てたさまを取り繕ふやうにして、しきりに門の方を氣にしてゐた。唯か待たせてでもあるのか、少し物を言つては門の方を注視してゐた。よほど急いできたものらしく、息切れさへしてゐた。

「どんな用事なんです。例の一件はうまくゆきましたか。」

「それに就いてやつて來たんです。アイスがどうしても貴方の印章ばかりではいけないつて言ふんです。あなたのお宅へ上つて見ないと、家を持つてゐらしやるかどうかが確かに判らないといふんです。」

「そりや困つたね。僕は君さへしつかりしてゐて呉れれば、連帶債務だつて關ひはしないんだ。ただアイスに會ふこ

……いいんです。ことに家に來られるのは不快だ。それ以外なら印を捺しますよ。」

と言つた。Oは大學へ行つてゐたが、高利貸から金を借りるために印を捺してくれるやうに托んでゐたとき、最近に知つた友達ではあつたが近しくしてゐたので、簡單に受け合つて置いた。しかしアイスは一軒の家をもつてゐる人の連帶の必要があると言つて、しかも、そこの家で證書を作成しなければ承知をしなかつた。

私はアイスが自分の室にまでやつてきて、今から仕事にかからうとする心持を壞されるのをいやに思つたので、私の家で調印しない條件でOに承諾しておいたのだ。

「ともかく、ちよつと會つてやつくれませんか。本當に濟まないんですけれど……。」

と、また門のところを見た。

そのとき、いきなり門をあけて、頭髮を五分刈りにした、よごれた背廣を着た男が這入つてきた。クロは吠えた。いやな奴が來たなと思つたOもOだ。こんな奴を引ぱつてまで朝からやつてくるといふことが、私を腹立たしくした。Oは

「外で待つてゐて呉れと言つたのに、君はなぜ這入つて來たんです。」

と、Oらしい性急な激しい口調で言つた。いま金を借りやうとする男に、何んといふつけつけ物を言つたものだと思つた。高利貸から言ふと、かへつて機嫌を取り直したり御馳走したりするひとより、がみがみ言ふ學生は育ちもいいし金離れもいいさうだ。

高利貸は、いきなり鳥打帽をとつて

「待つてゐたけれども話しが永引くやうだと困りますから、やつて來たんです。十時までに裁判所まで行かねばならん用事があるものですから。」

と言つて、こんどは私に向つて、

「初めてお目にかかります。實は此處にゐられるO君の連帶債務のことで、ちよつとお伺ひしたんです。」

と、もう用談にかかつた。それが如何にも自然に迅速な挨拶であつた。私はその男の小さいけれど能く働く目が、皆

棚や陶器の棚や、さては隣室までをはしこく物色してゐるさまが、ことに不快であつた。

「だつて今お話してゐる最中なんだ。もうすこし待つてゐてくれゝばいいのに。」

と、Oは持前の充血したやうな目で、男を叱責するやうにした。

「いや、こんな話は突然にきまるものなんです——」と言つて、私に改つた調子で

「O君からお聞でせうが、一つ印章を捺していただけるでせうか。つまり連帶債務と云つても、責任はO君にあのです。O君がお拂でなければ、あなたのところへ相談にあがるわけです。つまり相談だけなんです。しかし法律上連帶債務なんですけれど、これは名義だけなんです。」

と、殆んど疊みかけるやうに衝き込んで言つてしまふと、こんどは、國から持つてきた銅の大きな火鉢をつるりと撫でて

「これは立派なものですな。お國からお持ちになつたのでせう。時價百圓は大丈夫でせうね。」

と、よく拭きこんだ火鉢の腹をなでさすつた。私は何んだか馬鹿にされたやうな、しかも火鉢に泥足をかけられたやうな氣がした。私は

「つまらないものですよ——。」と答へておいて、Oに向つて

「あまり突然で考へる餘地がないやうで困るが、君がこんな場合に私のやうな位置に立たされても少し考へるだらうと思ふが……」

と、私はさもしい心と、腹立たしさとで慄ふいふと、Oは

「全くです。誰でもアイスなんかは堪らないものです。」

といふと、アイスは

「本人を目の前に置いて、アイス、アイスつて言ふもんぢやありませんよ。」

と、厚かましい惡どい微笑をした。顔ぢうにひゞが入つたやうな荒んだ歪んだ表情をした。

そこへ妻が茶をもつて出た。かれは、いきなり、妻の面を撫でるやうに見たが、すぐ茶碗を取り上げて
「いや結構なお茶です。なるほど、手ごろなお碗茶ですな。九谷でせうな。」
と、本當に茶の好きならしい飲み方をした。妻は微笑しながらあやふやな返事をしながら出て行つた。
私はOに
「茶を一つやりたまへ。」
といふと、Oは「ありがたう。」と言つて、ぐつと一と息にのむと、いきなり叩きつけるやうに、
「君、一と足さきに僕の下宿で待つてゐてくれたまへ。君のやうな野人はこの室に不調和だ。」
と嗤ひながら言ふと、男は
「あまり時間をとられると困るよ。先刻言つたやうに十時までには裁判所へ行かねばならないんだから。」
と同じことを又た言つて「どうも失禮しました。いづれ話がきまれば又たお伺ひしますから。」と言つて、靴をはいて出て行つたが、急にふりむいて
「犬はつないでありますな。」
「え。大丈夫です。」
といふと、彼れは安心をして吠えられながら出て行つた。人があまりに惡ずれしすぎて、却つて人の善ささうなところがあるやうな氣がした。
「不愉快でしたらう。彼奴にかかつちや往生です。ひつぱたいてやらうと彼奴の顔を見るたびごとに思ふんです。」
と、Oも人の善ささうな學生らしい怒りをかんじながら言つた。私は、
「何んだかあの男に會つたので、すつかり厭になつてしまつた。あんな男にかかはるだけでも汚されたやうな氣がするね。」
「今朝、しつこく這入つてくれるなと言つておいたんですが、しかし私も何んだかイヤになりました。断はります

旅費を借して下さい、國へ行つて都合しますから。」

と、Oは私のいらいらしい蒼白い顏のなかに、不安と腹立しさとを讀みわけると、かう言つた。それがいかにも一本氣なOらしい無邪氣と元氣さとに充ちてゐた。

「さうしたまへ。それにさきに借りてある分がまだ濟まないぢやありませんか。」

「え。片附けやうと思ひながら駄目なんです。ぢや、これから歸つて彼奴を追拂ひませう。そして一寸歸國します。」

と、かれは庭に立ちながら言つた。

「その方がいいよ。歸京したら來たまへ。」

と言ふと、かれは元氣になつて出て行つた。

かれらが歸ると寂しい氣がした。そして頭が非常に疲れてゐるやうに、ふらふらした。妻が出て來て、

「妙な方ですね。あんな人が高利貸なんですか。」

「學生專門のやつなんだ。Oもあいつに借りないでよかつたよ。アイスつて不快なもんだね。」

と、私はその金壺眼をありありと目にうかべた。

「でも、あの人が來なかつたらOさんに印を捺してあげるつもりだつたの。」

「さうはしてやらなければならないだらうよ。しかしアイスが來たので皆打ちこはしてしまつた。却つていいことだつたかもしれなかつた。」

と私は思つた。

「Fさんもあの高利貸さんに、かりがあるんでせう。」

「うん。」

「Fさんはいつ私の羽織をかへして下さるんでせう。」

「かねができれば返してくれるだらう。もうしばらく借してあげておくさ。」

と言ひながら、Fがいつも私と一しよに妻のこない前に世帶道具をかひあつめて歩いてくれたことを考へた。それを話しながら私はいつもああいふよい友だちはすくないと妻に話した。

——此間上野の花を見にゆこうとして、私は妻に縮緬の羽織をきてゆくやうに言つた。すると

「もうお忘れになつたんですか、Fさんが持つてゐらしつたんぢやありませんか、」

と言つたので、私ははつとした。Fは一晩のうちに百圓作らなければならないと言つて、私に三分の一ほど作つてくれと言つたが、手元にあるのと妻の羽織とをかした。そのため花見にはそれを着てゆくことが出來なかつたのだ。

「Fさんでも〇さんでも、人がよすぎるんでせうね。」

「そういふ點もあるな。」

と、私は寂びしく微笑した。

「貧乏人のお互ひ同士ほど苦しいものはない。」と言つた友だちの言葉が考へ出された。

「高利貸さんはまたやつて來ないでせうか。」

と、妻は心配さうに言つた。

「あれから〇が歸つて追つ拂ふに決つてゐるよ。あの男ならそれだけのことをやりかねないな。」

と、私は机に向ふ氣もしないで、じつと何か考へさせられるやうな氣がした。まとまりのない不安な氣がするのだ。

「室を掃きなほしませう。」

と、妻ははたきをかけはじめた。時遲れのはたきの音は、よく飲み屋か何かの朝のやうに、さびしくだらけたところがあつた。

午後になつてから、〇がやつて來た。そして

「借りないことにしました。本當に今日は不快でしたらう。」

と、正直ものらしく慰めるやうに、また、非常に濟まいやうな窮屈な顔をした。

「一つ一つ言ふことが餘りに野暮すぎるね。さきの借りを返したら、もう關係しないんだね。」

「僕もさう思つてゐるんです。今日も足も腰を立たないほど撲ぐり飛ばしたいと思ひましたよ。それによく裁判所を口にするんです。」

と、Oは荒々しい息をついた。私は少しばかり用達しをすると、かれはそれで、ちよいと歸國してくると言つて歸つて行つた。

妻も氣の毒さうに見送りながら、

「どうかしてあげれば、ようございましたがね。」

と言つた。

「額が多過ぎて駄目だ。何でも親父の掛物を質入れしてあるのださうだ。時價何百圓するか分らないものなんだ。それを質屋で知つてゐて流さうとするんださうだ。」

と、いつも金さへあれば、わつと騒いで飲んで歩くOの切つぱ詰つた時の顔を目にうかべた。金さへあればカフェエの女中だちに頭をそろへて五十錢づつ呉れてやつて、狂氣のやうになつて飲んで歩く男であつた。併したいがい然うした一と晩を送ると、一月分の下宿料はあとかたもなく費ひはたされて、いつも淋しさうに下宿で一人で座つてゐるのが、かれの生活の全部でもあつた。かねのないときは、いつも眞面目に學校へ行つてゐた。私はOのことを考へると、自分の六七年前の生活が顧られて、暗いいたましい氣がしてならなかつた。

九

詩人のHが結婚してから、私を訪ねたのは一月ほど後で、いきなり門をあけて入りかけると、友のうしろに若い女性がすらりと若木のやうに立つてゐるのを見た。あれが奥さんだなと思ふ間もなく

「や、けふちよいと東京へやつて來たもんだからお寄りした。ずいぶん御無沙汰してしまつた。」

と、せかせかと氣短さうに言つて、門のところにもぢもぢしてゐる細君のはうを見て

「這入んなさい。遠慮のいらないところなんだから。」

と、ほほ笑みながら言ふと、やはり妻君は門のところを動かなかつた。私はそつとＨに

「細君かい。」

「うん。」

と答へて、こんどは門のそばへ行つて

「這入んなさい。立つてゐても仕樣がないから。」

と言ひながら友は袂を引ぱるやうにして椽側へつれて來た。Ｈは座敷へあがると、すぐ上着を脱いで無雜作に疊の上へ投げ出して

「ばかに暑いな。まだ紹介しなかつたな。これは妻で、あれが室生君の奧さん――。」

と、出て來た妻を紹介した。

「はじめまして――。」

と口のうちで言ひながら、女同士はあいさつをとり交した。Ｈの細君の何より大きい澄んだ目が初々しい輝きをもつてゐるのが、私にはきもちがよかつた。

「結婚してからばかに忙しかつた。何んだかいろんな用事ができてしまつてね、」

と言つて、おみやの萬年筆を机の上に置いた。友の趣味はいつもおみやのなかにも伺はれた。

妻はすぐ細君と何か話しをしてゐた。そして妻が細君を裏庭へあんないしながら立つたあとで

「若くていいな。よいお嫁さんだ。」

と私が言ふと、Ｈは幸福さうに

「だつて君ののも中々いいぢやないか。奢れ。奢れ。」

と言つて笑ひ出した。

私だち二人は根津の旅館で、永い間同棲してゐて、三年ほど毎晩飲んであるいた。かれは由緒正しい家に生れて、まるで子供らしく育つた。しかもHと私とはその性格や生活が正反對であるに拘はず、詩人仲間からはいつも兄弟のやうに、あるときはふた兒だなんと言はれたほど仲が善かつた。私だちは更けた街路をよく醉ひしれて步いたり、朝など、机をならべて詩作をしたものであつた。「一體どつちがさきに細君をもらふかしら。」とHはよく言つた。私は「そりや無論君さ。第一君の家はいつまでも獨身で置きはしないよ。僕は經濟的に妻帶はとても駄目だ。」と言ふのをHはおさへるやうにして「でも苦勞した奴はどうしてもさきに貰ふもんだぜ。」などと言つた。

Hは私の故鄕金澤へも、詩でばかり見てゐては分らないと言つて、私のゐた古い寺院や犀川や海岸を見に來たこともあつた。私は私でかれの住む利根川のほとりをも訪ねた。かれの家は土地でも舊い醫者であつた。――かれが東京にゐるうちに私の學費の貧弱なことや、意外にも私が苦しんでゐることを知つたので、友の家へゆくと、いつも家族的な優遇をうけたものであつた。しかし私はいつも旅館に泊つて其處からHを訪つたり訪はれたりしてゐた。旅館の方が窮屈でなくてよかつたからだ。しかしHは「旅館の拂ひはおれの方でさせてくれ。おれの家が窮屈でいやだつて云ふんだから當り前ぢやないか。」と言つて、發つてくるとき每時も拂ひをさきに濟ましてあつたりした。その他、滯在してゐるとき朝など、新しい下駄をつつかけてゆくと、もう午後はHもあたらしいのをはいてゐた。それほど、Hのお母さんは氣のきくひとで、卅近いHを子供のやうに可愛がるのであつた。

私が結婚してから、その通知をすると、どういふものかHからは手紙さへも來なくなつた。Hの豫期どほりに私がさきに結婚したからだ。Hはきつと寂しいにちがひない。戀の詩はたくさん書いたが餘りそんな艷めいたことのないHのことを考へると、私は自分ばかり結婚したことをすまないやうに思つた。しかし私の結婚は色々な意味で、私の生活の整理が含まれてあつたし、第一の原因は父の亡くなつたのが動機であつた。どうしても結婚に據らなければ救はれない

事情も含まれてゐたのだ。私はHについ手紙を出すのも控えるやうになつた。それが今年の春の終るころになつて、近々結婚するので今大磯の海岸にゐる。酒も當分のまないで、ひたすら肉體的にも精神的にも精進してゐる。却つてかうした清淨な思ひで聽て自分は結婚するかと思ふと、からだも淸まる思ひがする。しかし結婚前とは何といふ苛々しい心持になるものだらう。自分はかういふ重くて明るく、惱ましくて美しい空想に驅られたことを曾つて經驗したことがない。……などと手紙をよこした。私はこれを讀むと、すぐに結婚前のやりきれない、堪らない氣持ちがすぐわかるやうな氣がした。ときとすると、神經衰弱にでもなりはしないかと思はれるほどの烈しい空想は、毎日々々かつての私をも責め立てたものであつた。そののち夏の初めになつてHは結婚した。結婚してから彼はいつも幸福らしく「今までに知ることのできない喜びを發見した。この神秘に近い喜びは僕を元氣にする。」などとかいて來た。

「ビールを飮むかい。やるなら出すが。」

と私がいふと

「晝間だから少しやらうよ。おたがひのお祝ひだ。」

とHも言つた。

妻は果物をむきながら、自分より年下な、友の妻にすすめた。

「おあがりなさいましな。」

と言ふと、やや馴れたやうに

「ぢや、いただきますわ。」

と言ひながら友の妻は小さい紅いくちへ、くだものを少しづつはこんでゐた。Hはときどき、それを見ては私に微笑して見せた。「僕らと同じやうに仲がよくていい。いいあんばいだ。」と私は考へた。かうして放縱な生活をした二人の目の前に、おのおの妻がひとりづつ、しかも微妙な因緣のまつはりを開いて見せてゐるのを私はときどき珍らしいもののやうに眺めた。

「今日は田端から發たうと思ふんだ。まだ二時間くらゐあるから、少し歩かうぢやないか。」

とHが言つた。私どもは、女は女同士あとからぶらぶら歩いて來るのを時々ふりかへつて見た。

私だちは複雑な、腹のそこからさらけ出したやうな話をした。

「君は結婚前に女から來た手紙なぞは、どうしたんだ。」

「みんな燒いてしまつた。結婚後はすこしも感動しないからね。君もあつたら燒きたまへ。」

「うん。」

「それからあまり過ごすな。倦怠の時期がある。恐ろしい時期だからな。この點はトルストイのいふやうに、女性からの要求があつた後だ。」

「でも女はあらはに表現しないぢやないか。」

とHが言ふ。

「しかしそれも理解できるやうになる。すくなくとも然ういふ場合に直覺的にわかるんだ。」

「さうかな。」

とHは考へ深さうに、すこし俯向きかげんに歩いてゐる。ちやうど高臺の青い土手の上へ私だちは出かかつた。土手のすその方に若い二人の女性が、まるで私だちと關係のないもののやうに、おのおの良人にむかひながら微笑をうかべながら、ゆつくり歩いてやつて來た。それがしつとりした青い土手の上を色どつて見えた。わけても友の妻の帶の紅いのが、夕暮近いけれどもかなりに強い光に、ぱつと明るく見えた。

「結婚生活の味は半年や一年にはわからないね。五年十年と經つてゆくうちに、だんだん味のでてくるものだね。お互ひがよく解り合ふところに、結びつけられた仕合がわかつてくるんだね。」

と私は言つた。

「でも一二年はゆめのやうだといふぢやないか。」

「新しさから云へば其樂ことが言はれるが、ほんとに兩方の心に確かなお互ひを掴み合ふのは、ずつと年月を經た後だ。町などで好く老年期に近い夫妻が散歩してゐるのを見るぢやないか。それが一樣に何も彼も仕耋して、平和さうにむしろ淸淨な氣を起させるぢやないか。僕はあそこまで人間も行きつかないと美しさが見えないやうに思ふ。例をいへば君のお父さんやお母さんにとつてもいい。すつかり理解し合つて、本統の人間のきれいさに達してゐるやうだ。」

「それも然うだな。」

と、Hは自分の家庭の平和を考へてゐるらしかつた。私は

「そのかはり結婚すると、ほんとの孤獨がわかつてくるね。それがすぐに掻き消されて行つてしまふけれど……。」

と言ふと、Hはすぐに

「獨身者よりもつと酷い孤獨だらうな。」

と言つた。

「だから僕は、しやくしやすると、ひとりで居たらなあと思ふことがあるよ。そんなとき人間の心理とは妙なもんで、向ふでもひとりでゐたときの氣樂な時代のことを考へてゐるらしい。そんなとき、夫婦間でも目と目がぶつかり合つて、窮屈な感情に責められてくることがある——君は人一倍神經質だからいろいろな事を考へるだらう。」

と私達は丘の上のやうなところへ出た。そこは三河島一帶の見える崖になつてゐた。あとから來たふたりは、いつの間にか自由な散歩や、あたりの景色などからすつかり氣がゆるみ合つて、永い友達のやうに話しながら來た。

「わたし子供のときにここいらへ好く歩きにまゐりましたの。まだ、こんなに家なんか建つてゐませんでしたわ。」

と、本郷の眞中にそだつた友の妻は、私の妻にかう言つて、夫のかほをも見た。

「ずゐぶん變つたんでせうね。わたしが初めて去年こちらへ參つたときに田甫だつたのがもう立派な町になりましたからね。」

と、ふたりは話してゐた。

私どもは停車場のはうへ、折から二三粒こぼれた雨を氣づかひながら、少し早足であるいた。

「性慾を離れて夫婦の存在が、あるものだらうか。」

とHが言つた。

「殆んど無いと言つていいだらうね。根本にそれがあるね。しかしだんだん年をとると性慾と同じい第一義的な、必要な情愛が深まつてゆくだらうよ。それは性慾と正反對に神聖なものなんだ。それでゐて性慾と同じい位ゐな力をもつてゐるものだらうね。」

「一種の性慾だね。」

「そう言へば然うだね。」

私だちは停車場の階廊から、プラツトフオムへ出た。女連は待合室の腰掛に坐つて何か話しながら夢中になつてゐて、次の妻君の肩さきにかかつてゐたうすものが、そつと肩からすべつて、その長い一端がアスフアルトに落ちかかつてゐるのも知らなかつた。するとHはそれを見て、ちいさな聲で注意したが聽えなかつたらしかつた。

「しばらく會へないね。」

「秋まではね。」

「子供はまだ早いよ。僕んところもまだだから。」

と私が言ふと

「當分つくらないつもりだ。」と言ひながら、しきりにうすものを氣にしてゐた。ステツキのさきでこんこんと地べたを叩いたりしたが、やはり妻君が氣がつかなかつたらしかつた。私だちは顔を見合せて笑つた。

汽車がきた。

「では秋にでもなつたらいらして下さいまし。」

と、妻はH夫婦に言つた。吾々は別れた。

妻は田端の坂を上りながら

「おつとりしたいい方ね。」

と囁いた。

「あの目が大きくていい。いいお嫁さんだ。」

と言ひながら坂を上つた。

十

酒屋が來て、犬と猫と抱き合つてゐるのを見て、びつくりしたやうな顔をして

「よく馴れたものですね。食ひものにも喧嘩しませんか。」

と言つて感心してゐた。

「小さいときから抱きつこさせてあつたものですから。」

と、妻はいくらか自分が馴らしたのを内心誇るらしい顔をして言つた。

それほど彼等はなれ合つてゐて、たいがい食事のときは犬の方が控え目にしてゐた。家の中を自由に横行してゐる猫は、いつの間にか犬よりも權威を見せてゐたばかりではなく、犬の方でも何かしら猫が一段高いところにゐることを知つてゐた。

ある日、妻が

「經師屋さんにね。猫と白鼠とを飼つてあつて、それが二疋で遊んでゐましたよ。猫と鼠とは妙ですね。どうして惡麼に仲がいいんだつて問ふと、兩方とも子供のときにやはり仲よく同じい箱で寢させたんですつて——それでゐて黑い鼠は捕るさうですよ。」

と言つて、感に堪えないやうな顔をした。

　私もふしぎに思つてゐたが、あるとき、通りすがりに氣をつけて見ると、いろいろな玩具や襖をよせかけた隙で、一疋の純白な鼠が猫と背中合せで、總ての古い習慣的怨恨を忘れはてたもののやうに仲よく寢てゐるのを見ると、いとこらのやうに馴致されやすい動物の善良さをかんじた。ことに子供のときから育てられると、人間と同じいやうに兄弟關係にでもなるやうな氣がするにちがひないと思つた。

　ことにクロは、よその猫さへ見れば追ひかけて吠えついた。猫はまたその反對に、よその犬がまぎれて垣の穴から庭へはいつてくると、背中をつツ立てて怒つた。二つの動物が言ひ合したやうに絶えず外敵を追ひ拂ふことに、殆んど美しい一致した力をもち合つて、いつも不自然な親子のやうな形をしながら、日あたりのよい椽側や、木のかげに抱き合つてねむつてゐた。――クロはそのころ、もう、そとから見ても重さうな大きいお腹をして、暑がつて水ばかり飲んでゐた。自然、胎兒の關係上、非常に氣が荒くなつて客來のあるごとに吠え猛つたり、あるひは飛びついたりした。炭屋が炭を切つてゐるうしろから飛びついたり、洗濯屋のおかみさんに噛りついたりした。

「ともかく犬猫病院へ行つて診察してもらつた方がいいね。でないと、もしも狂犬だつたりすると惡るいから。」

「いつも子供のできるころになると、あゝして氣が荒くなつて、よく人に噛みついたりするんですよ。」

と言つて、犬をつれて病院へでかけて行つた。永い書きものなどをしてゐるとき、激しい聲で吠えられたりすると、茶碗のかち合ふ音にさへびくりとする創作中のことゆゑ、いつも脅やかされたやうになつて、吃驚して考へたことを根こそぎ持つてゆかれたやうな氣にさへなるのであつた。どうしても、こんどは鎖につないで置かないと、あぶないやうな氣がした。

そこへ妻が歸つてきて

「狂犬でも何でもないんですつて。やはり子供のできる時分だから氣が荒くなるんださうです。」

と言つて、狂犬なぞになるものですかといふやうな顔をした。

「そうか。しかし繋いで置かなくちや……。」
と、鎖でつないだ。
妻は洗濯屋や、炭屋の男などにビスケツトをてみやげにして、狂犬でないから安心してくれるやうにと言つて謝ししてあるいた。
ある朝、クロは二疋の子を生んだ。行つて見ると椽側のしたで、まだ目のあかない小さな動物は、むづむづとうごめいては、乳房にしがみついてゐた。腹から出るとすぐに乳を要求する烈しい欲求に驚かされた。親犬は三日四日もよこになつたきりで、子をなめ廻したりしてゐた。——客來があるとすぐに吠えた、そして椽側から飛び出して來客にとびついた。
Fなどはよく 門をあける前に
「奥さん。クロはつないでありますか。大丈夫ですか。」
と聲をかけた。たいがい鎖で繋いであるので、鎖をがちやがちや嚙み鳴らした。その容貌などもすつかり變化つてしまつて、妙に瘠せ込んで、頰から口へかけて三角形の鋭い深刻な線が際立つたばかりではなく、たへず眼が充血してぎらぎら光つてゐた。
「隨分獰猛になりましたね。」
と、Fは犬きらひらしく座敷から恐る恐るクロを見た。
「夜など遲く歸へると、犬に吠えられるのは耐りませんね。僕が君主なら日本中の犬を屠つてしまひますが。—
と、言つて妻の方を見た。
「ぢや、さしあたりクロさんもやられんでせうね。」
と、妻が微笑しながら言ふと
「まあ平等にやつつけますね。」

と笑つてゐたが、すぐ私の方を向いて

「學校はとうだう甘く行きました。だめだらうと見にゆかなかつたら、友達ちが掲示を見てきてくれたのです。」

と、元氣さうに子供らしく肥えた圓い顏で言つた。

「そりや、よござんしたわ。何かおごんなさいましな。」

と妻がいふと

「これから借金を始末しなけりやならないんです。隨分いそがしいんですよ。」

「しかしよかつたな。三日かかつて卒業論文をかいて、それで文學士になれるなんて、君くらゐでせうね。」

「みんながね。あいつは駄目だらうと思つてゐたらしいんだ。いい加減なものですね。」

と、Fはいくらか安心したらしい調子で言つた。

私はFに

「けふは妻さんにごちそうをしやうぢやないか。」

といふと

「え。さうしませう。このつぎはFさんにしていただくんですよ。」

と、いふとFは

「こんどはしますよ。しかし濟みませんね。」

とも言つた。

その時、犬がまた突然に吠えた。

「オイ、誰か來たんぢやないか。」

と妻に注意すると誰もこないやうであつた。するとFが、

「此間北里研究所へ行つて友人が見て來た話ですが、狂犬の唾液を兎などに注射すると、すぐにもう狂ひ出すさうで

す。そして自分の手や足の肉をがりがり果物のやうにたべてゐるさうですよ。毎日何十疋となく注射しては、その氣の狂つた兎の腦漿を採るんださうです。それを狂犬病の豫防に用ゐるんだと言ひますが、注射された兎は見るも恐ろしい骨と皮になつてゐるさうですよ。」

と言つた。私はこの話をきくと急に肌に寒さをかんじた。妻は一種の戰慄に青ざめながら

「ぢや、人間が嚙みつかれると、やはり然うなるんでせうか。」

「早いのは二日位ゐで死ぬさうです。恐水病になるらしいんです。犬のやうに這つて吠える眞似などするさうです。」

私はふと洗濯屋のおばさんのことや、炭屋の男のことを考へた。あのひと達にもしものことがあると、私のうちの犬が疑はれると思つた。あのひとだちに濟まないやうな氣がした。Fに私は

「狂犬でなければいいんでせう。家のやつは犬の醫者に見せたんだから。」

「クロは大丈夫でせう。醫者が見たから。」

と言つた。私はいいことを言つてもらつたやうに安心した。そして訊ねた。

「潜伏期は二十年だつて本當かね。」

「然う言つてゐますね。十日位ゐで發病するのもあるさうです。」

と、Fは言つてゐた。そして

「田舍などによく狐に憑かれたと言つたりする一種の白痴のやうなものが居ますね。あれは殆んど狂犬の毒素にやられてゐるらしいんですよ。第一、二十年も前に嚙みつかれたことがあつても、大概忘られてゐますからね。」

と、話し出すと、しつこく對手の困りぬくまで話さなければ氣のすまないFは、狂犬の話ばかりした。私はなるべく避けやうと思つても、かれは寧ろ無邪氣に話すのであつた。

「それに狂犬病なんてのは極く最近に日本では注意し出したんですからね。」

と言つた。

私はああして醫者に診てもらつたものの、もしや狂犬になつたのではないかと、鋭どい容貌を目に浮べた。そして私は

「ぢや狂犬は飼ひ主の見さかひがつかなくなるのかね。」といふと

「ひどくなると唾液を垂れるさうだ。見さかひも、しまひにはつかなくなるでせうね。」

と言つたので安心した。クロはよだれも流さないし、まだ私どもの見さかひがある、とすこし安心した。

Ｆと一しよに食事をしながらも、犬のことが氣になつて仕樣がなかつた。Ｆがかへつたあとで

「もし狂犬だとすると困るね。」

と妻にいふと

「大丈夫ですよ。でも醫者に診てもらつたんぢやありませんか。」

「それでも氣が氣でないな。突然、狂犬病にかかるとすると……」

と言ひながら、洗濯屋のおばさんが肝高い聲で叫びをあげて、嚙みつかれた足を妻に繃帶してもらつてゐた日のことが思ひ出された。あのおばさんが犬のやうに這つて歩いて、吠える眞似をしたり、北里研究所のうさぎのやうに、自分で自分の手足をがりがり食べはじめたら大變だと思つた。私は何んだか頭がふらふらするやうな氣がした。

「ともかく彼犬（あれ）は國へかへしたらどうか。國で生れたんだから故郷へかへした方がいいね。」

といふと、妻は

「でも何んでもないんですもの。あなたがひとりで狂犬だと考へ込んでゐらしやるんぢやありませんか。」

と、妻は自分が嫁にきて、犬を今かへすのが自分が歸へるやうな氣がするので反對した。

「ぢや僕が狂犬にしたとお前はいふのか。」

と、私はかつとなつた。

「いいえ。あなたが、そうお考へになるといふんですの。なんでもないのに。」

「だつてよその人にもう二度も噛みついたぢやないか。お前の愛と、よその人間の生命とがかへられてたまるか。ことに狂犬だつたらどうするのだ。」

「狂犬でないんですていふのに。」

と、妻もいくらか肝走つた聲で言つて、女らしい小さい怒りをふくんだ目で私を見た。私はそのとき、机の上にのせてあつた九谷の壺に、しらずしらず手が觸れた。からだぢうの堤を切つたやうな激怒がみな指さきにあつまり悶えた。私は壺をしつかりと手にとると、いきなり庭の敷石に叩きつけた。壺は微塵に砕け散つた。

妻はそのとき青くなつて隣の室へ逃げ込んだ。私は私の中にある野性的なものの凡てが今溢れはじめたことを知つた。それらのものがみな顔の表面に荒々しく蒼ざめて現はれはじめたのに、妻は驚いたものと見へる——私は後腦に重い打撃を與へられたやうなふらふらした眩惑と、神經衰弱みたいな感傷的な、一面に氣の狂れるやうな昂奮とをもつて、私は陶器の棚のそばへ近づいて行つた。棚には行儀よくならべられた皿や壺の類が、私の暴い感情に射りつけられたやうに一切に一つ一つ蒼白く震へて見えた。私はその一つをとると、妻とは反對の庭へたたきつけた。二個…三個…と順々にたたきつけてゆくうちに、私は私のしてゐることに限りない不幸と後悔と、そして自分の大切にしてあつめたものを、かうして無益に破ることの口惜しさに、心はなみだぐみたいほど淋しく悲しく感じ出した。しかしこの優秀な感情とは又た別な野蠻な怒りは、すぐそのそばで唸り出すやうに、私を驅り立て煮え立たせた。

妻はこれを見ると、いきなり唯蒼く震へる手を私のに捲きつけて、私のすることを停めやうとした。私は意地になつてこんどは一枚の皿を手にとつて投げやうとしながら、妻が停めるのに猶ほ猛けるのはあまりに頑なすぎると、一瞬に心がすこし靜まつた、しかしその靜まつたあとから、うしろから命令するやうに、みな破つてしまへといふ劇しい聲がした。

「私がわるうございましたから、おやめくださいまし。どうか、これだけはおやめくださいまし。」

と泣きじやくりながら一生懸命に祈るやうに言ひながら、私の手首をしつかりと握つた。私は二三度その手首をもぎ

放さうとしてゐたが　まるで全身のちからを込めた妻の手は、なかなか放れなかつた。

「ともかく放してくれ。」

と言つても

「放すとお破りなさいますから。」

と言つて、放さなかつたが、併し私のやや靜まつたのを見てとつて、やや安心したやうな顏をした。お前にはいまの私の心持ちがわかるものか。お前が生涯かかつても判らぬぞとふ氣が、私の奥の方から叫び立てた。冷やかな孤獨な、どうしても人間の最終まで引續く孤獨な心持ちで……。私は妻を押すやうにして

「もう破らないから安心したらいい。そしておれの室へはいるな。」

と、無理にかれを隣の室へ追ひ立てた。妻はどうにもならないといふ諦めと、もう破りはしないといふ目前の小さな安心から、すごすごと隣室へ行つた。私はその襖をかたく閉めた。

私は荒い息切れを自分でそれと知りながら、じつと床柱にもたれながら、あたまを靜ませやうとした。荒い馬がだんだん時のたつにしたがつて、その足掻きをとめたり靜めたりしてゆくやうに、私はへいぜいのあたまに自分を引き戻したいと努力した。私は私自らを知りつくしてゐながら、あまりに動物的な盲目的な發作に恐れをかんじるほど、豫期しないところに自分を見つけたのだ――。

私はふと煙草を喫みたくなつて、机のそばの卷煙草入れを見た。私のゐる床柱からそこまで四五歩離れてゐたので、私はふらふらと手をついて這ふやうにして行つて、箱のふたをガツタリとあけた。それが大變大きい音響のやうな氣がして、自分ながらピクリと神經がふるへた。おれはいま彼處まで這つて行つたな。まるで犬のやうに。――と考へだした。偶然だ。全く偶然に、しかも私の豫期しないうちに、犬の眞似をしはじめたのだと思つた。私はぞつとして室を見廻した。室はしづかで在るべきところに在るものがあつた。庭を見た。そこは一杯の陶器の破片が、きらきらと夜目にもそれと、鋭い青い光りをもつて、くらい土の上に散らばり、あるものは浮きあがつてゐた。

私はそつと庭へしのび出た。まるで盗人のやうに足音を偸んで、しつとりと濡れたやうに――するとクロはすぐいつものやうに私にまつはりついて、主人の愛撫を乞ふやうな哀れな目をして、私の足をぺろぺろなめたり、ひざのところに馳けあがらうとしたりした。クロの柔らかい熱をふくんだ舌ざわりは、私のからだのすみずみまでつたはつて、全身が氣味惡るさのためにぴりぴりと震へた。私は深い怨恨のあるもののやうに憎惡に顫へながら、すぐさま犬の胴ッ腹を蹴りつけた。主人に愛撫されることを豫期してゐたかれは、反對に不意打ちをされたので、悲しい聲をあげて椽側の下へ逃げ込んだ。その悲鳴はしづかなあたりにひびいた。私は私のしたことを、よくないと思ひながら名狀できない一種の苦痛以上な心持で、陶器の破片を見つめた。そのとき、そつと耳を立てると、妻は自分の室でしづかに忍び泣きしてゐるらしいのが、しづかに、しかも咽ぶやうに、永く永くつづいた。

空には暈をかむつたぼんやりした病的な黄いろい月が、どんよりと濁りながらにぶい光りをもつて、私の目にはいつてきた。いやな月夜だと思ひながら、夏らしくなつた茂みのなかに仄かにさしてゐる書齋の電燈の光りをじつと見た。自分の兇暴な姿がそれと關聯してすぐに思ひ出された。あたりはあくまで寂然(しん)としてゐた。――クロはと見ると、さきの痛い目にあつたのに懲りもしないで、じつと私をうかがひながら、いつでも私のそばへ呼ぶならば行かうとするらしかつた。しかし私が先刻のやうに、ふいに蹴りつけないかと、永い間生きてきた老犬らしい深い注意をもつて、やや怖れと不安とに顫へながら、主人の機嫌を氣にしながらそろそろと近づいた。それがいかにも鈍な臆病な、疑ひ深さうな顏つきなのだ。しかし私はその瞬間すぐに愛をかんじた。あんなに酷い目にあひながら、どこまでも愛を乞ひ祈るやうなその目付に、私は急にしやがむやうにして、いつもやるやうに膝をたたいて抱いてやるぞといふ樣子を示すと、かれはそのとき急にはつきりと毛並の色を變へるほど元氣になつて、もう大丈夫と思つたか、いきなり私の腕の中へ飛び込んで來た。手をなめたり泣いたり尾を烈しく振つたりして、かたくなな主人の前で、あらゆる歡喜を現はすべき努力に苦しむほど、深い嬉しさを示した。私はそのとき、しづかに抱きしめるやうにしてやつた。決して憎めないあるものを感じながら……しかも永い間さうしてゐた……。

十一

あさ、床のなかで昨夜破つた陶器の片を掃いてあればいいがと思ひながら、私はそつと雨戸のすきまから庭をのぞいた。そこには、鋭い刺々した碎け散つた破片が、あらはに烈しい初夏の日光のなかにきらきらと目を射りつけるやうに光つてゐて、ひと目見るなり自分の感情までざらざらした粗い痛みが泌みてくるやうで、夥しい不愉快な不吉な豫感とともに、朝の心をくらくした。同時に、けふも一日いやな氣持を引き續いて覺めさされた後悔と怒りを今はあきらかに感じた。あれを私の目のさまさない前になぜ掃いて置いてくれないのだ。但しは、私のああした粗暴な一瞬時の發作をかうした明るい日光のなかに、まざまざと恥ぢさせ、また後悔させる妻のたくらみなのか、または、いろいろ朝の用事のために掃き忘れてでもゐて、これから掃かうとするのか、それなれば一時も早く掃いてくれればいいと、まるで今はあの鋭い破片が視界から消えてゆくことのみを祈つた。さうした心の起りかけたところに、私は私の奥の方でしきりに警しめられてゐて、自分のしたことの善くないことが感じしめられた。私は昨夜あやふく妻を撲ぐらうとしたのだ。あのとき、私は私の野蠻な動物的な、苛立つた感情からかれを撲ぐらうとした。しかし、その感情は瞬時に冷たい理智に洗艶されて行つて、陶器のうへに怒りを加へた。——私はそれを考へると自分の卑劣さを目に別人のやうに仕立てて、かほの赤くなるやうな恥づかしさをかんじた。私はその正しい感情の發作とほりに彼女をなぜにぴつちりとやらなかつたか。かつて女をなぐつたことのない私は、あのときもやはり撲れなかつたのだ。

私はそのとき、庭の方でちやりん、ちやりんといふ例の陶器の破片を掃いてゐるらしい音がするので、そつと聽耳を立てた。それは碎片の大きさうなやつを一つづつ拾つては塵取りにのせてゐる音である。よく乾いた塵取りの板の上に金屬的な音をもつ碎片が、たがひに觸れ合ふらしい音だ。あれを何故もつとそつとしてくれないの。そつとすれば私にきこえないのだ。私はまた小さい怒りをかんじた。私は小さな咳をした。音はやんだ。やや朝つゆをふくんで濕つた地の上に、そつと掃かれてゆく竹ほうきのささやかな音だけがきこえて來た。

私は起きて庭へ出た。庭はさまざまな青い鮮やかな緑で覆はれてゐた。私の意地惡るい、かたくなな心はあたりに陶器の碎片を見つけはじめた。よく掃いてあつたが一片(ひとつ)だけ草の陰にきらりと光つてゐるのを見つけたとき、私は忍びよるやうにして取りあげた。その破片には九谷どくとくの鮮紅色の繪のつなぎの二三點が、ぽつちりと殘つてゐた。私はその完全だつた一個の壺としての形態を、ありありとあたまに描いた。その底深い趣味以上の生態をもつた、何かしら美しい果實のやうだつた昔のかれは、よく机のうへや、書棚の上に飾られたことや、いつも何氣なく目にとめながら私の心とゆききした感情のいみじさを今ははげしく感じ出した。私は自分のしたことが詰らぬことであつたことを悔みはじめた。いのちのない形態を破るといふことの、その心の低められた卑しい怒りを感じ出した。

その日私は妻に口もきかないで、默つて寂しく一日室でくらした。クロはときどき、路次へ出ては吠えた。そのたびに私はいらいらと神經が苛立つた。しかし日增しに大きくなつてゆく仔犬はもう目があいて、よちよちと庭をあるき出した。いつ呼ぶとなく、その名をツウシユカとつけておいた。私はその仔犬が大きくなつたら、クロは妻の實家へかへしてしまうと思つてゐた。

ところが二三日後、ある雜誌社の小僧さんが校正をもつて來たとき、クロが椽側の下にゐることを忘れて、椽側の方へ小僧さんを廻させると、いきなり、吠えもしないで食ひついた。小僧さんは青くなつて痛がつた。

「オイ、早く水で洗つて繃帶をしてあげなきやいけない——。」

と呼ぶと妻もあはてて出てきた。小僧さんの膝の下から少し血がにじみ出てゐた。

「まあ! ともかく、こちらへいらしつて下さい。——お痛いでせうね。」

と、妻は臺所で小僧さんの傷口を洗つたり、繃帶をしたりして氣の毒がつた。けれども小僧さんは元氣に

「そんなに痛くはありません。唯いきなり食ひついたものですから、吃驚してしまつたんです。」

と、青い顏をしながら言つた。私は

「狂犬ぢやないんです。田端の醫者に見てもらつたんですが……しかし今日は白山の家畜病院へもう一度診にやつ

て調べさせますから……本當に氣の毒なことをしましたね。」

と、私は犬を憎みながら、痛さうに少し跛をひきながら、高い足駄をからから云はせてゆく小僧さんを見送つた。そして私は妻に

「白山の病院へ一しよに連れて行つて好く診て貰つて來たらいい。もし狂犬だとすると小僧さんに今夜にでも豫防注射をしてあげなければならない。それからもう我慢ができないから國へ歸すんだね。」

と、言ふと妻も小僧さんの傷口を洗つたりしたせいや、良人がたへず犬のために神經をいらいらさせて、二三日前のやうな狂人めいたことをすることを考へ合せて、可愛想だけれど歸へしたらよいと思つた。

「え、さつそく歸へしませう。うちへは仔犬を育てると言つてやれば、何とも思はないでせうから。」

と、妻もその氣になつて、鎖をもつて犬をつれて病院へと出かけて行つた。出かけに

「狂犬でなかつたら證明證をもらつて來るんだぞ。狂犬だつたら處分して貰つてくるんだ。家へつれて來てはならん。」

と、言つておいた。狂犬のことはないが、もしものことがあつたら、そのまま處分して貰つて來いと言つたのは、妻として辛くきいたにちがひがないと思ひながらも、これだけ言つて置かなければと思つた。

私は庭をあちこちと歩いたりして、すこしも落ちつかなかつた。そこへ妻がかへつて來た。私はすぐ彼女の元氣さうな、いくらか安心したらしい顏色を見て、すぐ狂犬ぢやなかつたんだなと思つた。

「やつぱり子供を嚙んだので、氣が荒くなつたんですて。それも犬も十年以上生きてゐると、人間のやうに意地惡るくなるつて言つてゐました。牛なんぞも非常に荒くなるさうですよ。」

と言つて、證明書を見せた。

「さうか、そりやよかつたな。明日にでも國へかへさうぢやないか。」

「ええ。」

と彼女はまた澁つた。狂犬でないのなれば家に置いたつていいでせうと云ふやうな顔をした。

「上野から晩の直行が出る。それでかへせばいい。」

と言ひながら、ふとクロを見ると、ぼんやりして私の顔を見つめてゐた、東京にゐるのが今日きりだなと思つた。

「でも仔犬をどうしませう。まだお乳をほしがつてゐますもの。」

「あれはT君がほしいと云つてゐたから、あげればいい。」

「さう。あの方なら可愛がつて下さるでせうから、ようございますけれど、でも可愛想ですね。」

「處分するときは一度にやつてしまふんだ。いつまでも犬のことなぞ考へないで、しつかりしなけりや駄目だ。」

と、わざと叱るやうにいふと、かれは勝手の方へ行つた。

夕食のときにも妻はもの憂い、力ない氣振りを見せた。自分が嫁にきて一しよにつれて來た犬をかへすのが、かの女にとつては味方にはなれるやうで悲しかつた。むつかしい良人から暫くでも離れて少女時代から手なづけたクロと何かしら話しをするやうな心で居られた唯一の慰撫が、もう今日きりで捲ぎとられてゆくかと思ふと、食事もすすまなかつた。

私は自分の室で、何か妻が犬をあいてに、ぶつぶつとひとりごとをしてゐるのを聞きながら、妻の心にもなつて見ると可哀想にも思はれた。――私はふらりと出て廣小路でかなり立派な首輪の新しいのに、妻の實家の署名をさざませ、鎖も添えて持つてかへつた。

「國へかへすんだから、この新しいのをつけてやれ。」

と言つて首輪を出すと、妻はにはかに喜んで、クロを呼んだ。クロは仔犬に乳をやりながら庭にねそべつてゐた。あかるい月が仔犬の白と黒のぶちの毛並の上に、さやかに、美しく流れてゐた。このいみじい親子の睦まじい抱き合つて染さとねてゐる姿は、すぐ妻の心を哀しませ、涙をさそふた。クロはすぐ妻のところへ行つた。

「新しいおべべができたから、あすはこれをしておくにへ歸へるんですよ。おまへの生れたところへね。」

と言つて首輪は、古いのと換えられた。新しい金屬のニツケルめいた光りは、ちらちらとはでな裝ほひを與へた。クロもさうした首輪のあたらしいのに釣り込まれて嬉しさうに、しかも人間の言葉や、人間の爲ることを理解することに鋭敏なだけ、また妻を悲しませた。妻はいまから十年前のある日の暮れに、どこからどう迷ひ込んだかしれない一疋のクロ犬が、ちよろちよろと鼠のやうに庭をあるいてゐるのを見た。それを呼びよせると、すぐ手にまつはりついた。それがだんだん育つて行つた。そのころはまだ女學校へ出たばかりであつた。少女らしいお下げにまで、このクロがじやれついたことを考へた――故郷の古い町並みが目にうつつて行つた。くにから發つてくるとき、きびしく無爲に歸國してはならないと云つた頑固な父の顏が、いま、しきりに思ひ出された。

妻はいろいろな考へをそれからそれと追つて、いつまでも庭にゐて、犬のダニをとつたりして、室へはいらなかつた。仔犬も明日Tさんにあげてしまはなければならないし、クロは明日上野で檻に入れて、長い二百里を晝夜打通しでやらなければならない――この春つれて來たときは、直江津と高崎とで下車して、貨物列車に積まれた檻をわざわざ見に行つて菓子などをやつたことを思ひ出した。こんどもビスケツトを半斤ばかり檻のなかに入れてやらうと考へた。これにしても、ひとりであの長い途をやらなければならないことを寂しく可哀想に思つた。

十二

翌朝はカラリと靑く底晴れのした初夏の空が、美しい輝きで人家の屋根の上に澄んでゐた。妻は朝からクロにいろいろな菓子や、さかなの類をたくさんに食べさせ、途中でも腹のなかに永もちのするものを撰んでゐた。

「わたし上野まで送つてまゐりますから。」

と言つて車をよんで來たりした。

「お前の留守の間に仔犬は始末をしてしまふからね。クロをかへして仔犬をおくと、また放しにくくなるからね。」

と私がいふと

「でも仔犬は二三日置いておいて下さい。」
「駄目！　そんなことをしてゐると、また放さなくなるに決つてゐるぢやないか。」
「ぢや妾ひとりになつてしまうぢやありませんか。」
「猫がゐるぢやないか。——車が來たから出かけたらいい。」
と言つてゐるうちに、妻はきものを着かへて、犬を抱いて車に乘つた。車は路次を出て行つた。私はほつとした。これで人に食ひつくものがゐないし、神經も靜まり勉強もできると思つた。しかし妻の留守の間に仔犬を始末したいと思つた。仔犬は親がゐないので、クンクン鳴いて、そこらを嗅いで歩いた。
私はTを呼びに行つて、仔犬をつれにきてくれるやうにいふと、Tは「さつそく貰はう。」と言つて細君に
「目刺しを買つて置きなさい。それから今日から小骨の出るやうな魚をおさいに使はなければいかん。」
と言ひ渡すと、折柄、來合せてゐた二人の畫家も一しよに行くと言つて、みな私のところへ來た。
「や、なかなかいい犬だ。ツウシユカといふ名だつたね。露西亞語かい。」
と、からだの大きいTは、しやがむやうにして仔犬を手でなでたりした。
「コーリヤの愛犬でツウシユカといふのがゐる。その名をそつくり貰つたんだ。その犬は死んだ眞似をする藝を知つてゐる。——」
「露西亞の名前はいいな。ツーツー、さあ來い。」
と、抱きあげると、犬はおとなしくしてゐた。私は犬小屋と鎖とを一しよにやる約束だつたので、あとの畫家も手傳つて持つた。
「ばかに重いな。」と一人がいふと
「おむこ入りだからな。」と一人が言つた。
Tは私の方へきて

「妻君から小言は出ないだらうな。」

「じつはクロもけふ國へかへしたんだから一しよにした方がいいと思つてね。承知してゐるんだからいいよ。」

「ぢや、よろしく言つてくれ。」

と、Tの一行ががやがやと路次を出て行つた。その一行が何か戯談をいひ合ひながら行く聲がだんだん遠ざかると、私の家はしんと寂しくなり出した。私は犬小屋のあとを妻が見ても未練のないやうに、きれいに掃きながら、烈しい犬族の匂ひを今更らのやうに、あたらしく物珍らしく四邊にかいだりした。

妻は二時間たつても三時間經つても歸へらなかつたそのうち日がくれかけて、あたりが蒼くすずしくなりかけても歸つてこなかつた。私は庭をあちこち歩きながら、もしかしたら、クロと一しよに歸國したのではないかとも考へた。それにしても、そんな素振りさへもなかつたから……と思ひながら、ふと四五日前の私のした粗暴な行ひが、あれを歸國させたのではないかと思つた。昨日から何かしら憂い寂しい振りをしてゐたが、さきから、クロの歸國とともに、自分も歸へつてゆくことを企んでゐたのではないかとも考へられた。

夜になつた。私は何心なく庭を見てゐると、一臺の車が門の前にとまつた。そのなかからそつと脱け出すやうにして出たものがあつた。それは妻であつた。

私はわざと默つてゐた。すると、

「ただいま歸へりました。おことはりしませんでしたけれど浦和まで送つてまゐりました。」

と言つた。その目は泣きはれてゐた。私は默つてやや呆れ氣味で妻をながめた。その泣きはれた顔のなかに執念深い動物にたいする愛が、寧ろ氣味わるく現れてゐた。

その晩私だちは默つてくらした。妻は妻で、猫ばかり膝のうへにのせて、げつそりと痩せたやうな恰構で、縫物などをしてゐた。私はその靜かな、何かしら、ぼんやりと物忘れしたやうな氣の拔けた姿を見てゐると、かれの魂が北國行きの貨車のなかに置かれた、暗い檻のなかで藻掻きながら外へ出やうとする犬とともに居るやうな氣がするのであつ

た。そして此處にゐるのは、形體ばかり揃つた魂のない、決して聲を出さない人間のやうに、じつと押しだまつてゐるやうであつた。ことに頸首の生白い肌のところに、やや亂れかかつた幾筋かの髪のほほけ立つたのが、見てゐるうちにゆらゆらと搖れさうで、印象深く、しつこく私の視覺をとらへた。ただ、動くものは二つの手さきで、それがしきりに一枚の着物の袖ぐちを縫ひかかつてゐるのが、まるで蜘蛛が糸をくるやうに、音もない寂としたなかに、たくみに針をしやくつてゆくのが、着物でない別なものを縫つてゐるやうに感ぜられた。しかもがつくりと胸の方へおとしたあたまは、まつ黑に煙つてゐるやうな欝しい悩ましい重みをつたへたばかりではなく、それが、まるでづつと以前から此室の宙宇に凝り固まつてゐるやうに、しかも内部ばかりが生きてゐて永久に動くことのないもののやうであつた。

私はまた彼女のうしろが電燈に陰られてゐて、ぼうとして影をひいてゐるところを見つめたが、その影は青くも灰色でもない、間色で、しかも煙つたやうになつてゐる處に、もう今頃輕井澤あたり走つてゐるらしい列車に乘つてゐる筈の、黑い荒い毛並をした犬が、ちやんと前足をそろへて、耳をぴんとつツ立てて、之加も妻の方を向いて、何かしら悲しげに妻の顏や手の背中や、それらの全體を視界におさめながら、あたかも妻の身の災厄を守るもののやうに、じつと動かないで座つてゐるのを私は見つめた。その幻惑的であることが私にはつきりと解つてゐたものの、かう目の前にはつきりと座つてゐるのを見ると、妻がいつもあれだけ深く可愛がつてゐたものの魂が、たへず妻をとりまいてゐるのが當然のやうにも考へられた。そのとき、氣のせいか、いきなり妻がそつと顏をすこしかたむけて、いま、クロが座つてゐるところをじろりと横目で見たとき、私は内心飛びあがるほどの物凄い心地がして、ヒヤリと脇の下に汗をかんじた。しかも、そのじろりと見つめたなかに、かくしきれない優しい微笑がふくまれてゐるやうで、それがまたクロを愛撫するときにのみあらはす表情だつたのが、ふしぎと云へばふしぎであつた。あだかも、クロがああやつて幻惑的にあらはれてゐるのを、私のかんじたよりもずつと先刻から知覺してゐるやうでもあつた。私はそのとき、

「あ。クロが其處にゐる。——。」

と、腹のなかで呟やきながらも、あやうく聲を立てやうとするほど驚いたのは、悄然と水にぬれたやうに雫のやうなも

のを全身の毛並からしたたらしながら、だんだん妻の膝へ目がけて歩いて行くやうな氣がしたからであつた。それは、いつも妻が私の不在のときなど、よくクロを室へあげて置いて、クロをそばに座らせながら仕事をしてゐたから、私にはなほ明瞭とその姿が描かれたのである。不思議なときは實にふしぎ極まるもので、そのとき、妻の膝の上にまるまると寢てゐる猫が、そのクロの近づいたと思はれる瞬間に、何者かの感應をあらはすにちがひないと凝視めてゐると、はたして猫はぽつかりとその燐のやうな青い輝きのある目をひらいた。さうかと思ふとすぐ目をほそめた。そして奇怪な前足であたまを包むやうに抱きながら、らくらくと睡りはじめた。

そのとき、私は蛙のやうで決して蛙の聲ではない、くう、くう、といふ音をきいた。それは濕つた板などを指さきで叩くやうな音で、しかも、どこか虫のこゑのやうでもあつた。水のなかから起つてくるやうにも思はれた。私は庭へ出て行つてそつと聞耳を立てたが、そこからは起つてこなかつた。うしろの畑の方でもない。玄關のくらいところかとも思つたが然うでもない。

妻もそのとき、ぴつたりと針の手をやめて隣の室にゐる私をちよいと見た。私も妻の蒼白い顔を見た。なぜかその顔は陶器のやうにつめたく澄んでゐた。ふたりは一秒間に示し合せたやうに、きみのわるい音を目で問ひ合せた。

「あれは何んの音だらう。虫かな。」

と、私は喉にかすれて、とれないやうな聲で言つた。つまは

「何でございますかしら。」

と言つて、すこし耳を立てるやうにした。しかも、その蟲のなくやうな音が、くう、くう、くう、くう、として、つづいたり切れたり、どうかすると幾つのも皆一しよに啼いてゐるやうであつた。妻はそのとき、勝手の方をじつとうかがふやうにして聞いてゐたが、突然その蒼白い恐怖のいろをすこしおさめるやうにして

「あ、あれはあさり貝です。あさりが啼いてゐるんでせう。」

と、低い少し震へをおびた聲で言つて、こころもち肩をすぼめるやうにして言つた。

「そうか。あさりの泣くのか。」

と私はほつとした。目のない冷たい貝るゐが、けふ臺所から勝手に置かれてあつたことを思ひ出した。どこか硫黄くさいやうな、貝のふたのあいだから、うすあかい舌をちろりと出してゐる姿も、すぐ目にうかんだ。「あ、あれはあさり貝です……」と言つた妻のこゑが、あたりの宙宇に生きもののやうに漂ひながら、鋭い底の利いた聲で、もう一度私の耳にひびいた。「あ、あれはあさり貝です……」と……私はふりかへつて妻を見た。さつきとおなじい形で、猫をひざのうへにのせ、おなじく、びつしよりと濡れたやうな犬がそこに座つてゐるのが見えるやうな氣がした。あさりはやはり呟きはじめてゐた。くう、くう、……と永くおそらく夜のあけるまで……。

蘇峰 徳富猪一郎著＝滿天下の歡迎を感謝す

近世日本國民史 織田氏時代完成

全三冊 後篇新刊 前篇 中篇既刊

織田氏時代愈々完成す

上製各册 菊版クロース 函入七百餘頁 定價三圓五拾錢 郵稅各十八錢

□□□ 並製各册 四六版 七百頁 定價一圓六拾錢 郵稅各十二錢

江湖の歡迎愈々熾盛也

江湖の歡迎熾盛なる著者の『近世日本國民史』は今や『織田氏時代』後篇の刊行なりて、玆に其の第一期中の初期たる、織田氏時代の完璧を告げぬ。之を龍を畫く者に譬へんか、『前篇』は即ち手脚を描き、『中篇』は即ち腹背を描き、『後篇』は即ち頭を描き、睛を點じたるなり。前、中、後の三篇を貫通して、信長の全體、玆に始めて顯現し、其の時代の眞相、玆に始めて發露したりと謂ふべし。其の發賣部數前、中二篇を合して十三萬餘部、後篇又旣に四萬餘部を發賣し、織田氏時代完成と共に、本書の需要愈々旺盛なるは、本社の感謝に堪へざる所也。

改造的現代と信長時代

織田時代は、實に日本改造の一大時期なりき。此の時期こそ現代世界改造の一大縮圖と謂ふべけれ。乃ち織田氏時代は、現今の世界改造に向つて、一大暗示を與ふるものに非ずして何ぞ。將た現時の日本は、實質實材を進め、舊慣故例を破り、社會の風氣を清新快活ならしむるに於て、宜く織田氏時代に鑑むべきなり。本書は實に改造の活ける教科書と云ふべし。

■附註、年表、索引、肖像、地圖、戰圖■

前、中、後三篇を通じて附したる、古文書引用の附註、時代年表、人物年表、索引、並に精巧なる地圖、戰圖、肖像等は、興味と有益とを兼備ふる者にして、以て本書の光彩を添ふるに足る。

近世日本國民史 豐臣氏時代 甲篇 近刊

發行所 東京市京橋區日吉町 振替口座一三一〇〇 民友社



代官屋敷

大泉黒石

三輪子の父親が行衛を眩ませた頃、彼女の母親は東京へ出稼ぎに行つた。手足纏ひの三輪子は、暫くの間、私の家に預けられてゐた。彼女は七歳だつた。その時分、私は、祖母と二人で、代官屋敷の隣りに住んでゐた。祖母が六十五歳で、始めて貧しい家の主婦になつた時だ。

代官の屋敷跡と、私の家の庭とを劃る石垣のまん中から一株の巨きな老楠が、屋根から庭へかけて、綠色の翼を擴げてゐて、重なり合つた葉の隙間から、港の色が青く見えた。日沒頃になると、青白い、頬のこけた、艶のない髮を耳の上まで茫々と生やした神官の子が、楠の樹の叉に腰掛け乍ら、毎日笛を吹くのが見えた。

維新まで代官を勤めて來て、それから零落れて神官になつた高木の、先祖代々から住んで來た屋敷は、ぼろ〳〵に朽ちてゐた。神官の高木も、彼の妻も、楠の叉で笛を吹く彼等の子も一樣に青白く瘦せてゐた。

ある日、私は楠の樹の叉に登つて見た。すると、今まで知らずにゐた世界が、眼の前に廣々と見えた。枝を搖ぶつて、丸い楠の實が頻りに庭へ落ちるのを窓から眺めてゐた三輪子が出て來て、拾い始めた。小枝に手をかけて、さわ〳〵と搖ぶると、彼女が慌てゝ拾ひ廻つた。

その楠の實を、小さい私の部屋で數へた。机の代りに据えてゐる、大きな支那鞄の上に列べると、すぐ、一杯になつた。それを一纏めにして、筆立の中へあけると、中程まであつたりした。

私は翌日も楠の樹の叉に登つた。

穩やかな港の空を、婆羅門爪が鈍い弓の音を立てゝ唸つてゐた。ツォロンツォヴスキー燈臺のやうな、天主堂の鐘樓を掠め乍ら、咽喉の白い燕が、頻りに往來してゐた。その鐘樓を圍んだザンボアの蔭を、頭をかゞめて通り過ぎた尼僧の聖冠が、ぎら〳〵光つてゐた。私が生れぬ前から、沈みかけたまゝで、港の隅に傾いてゐる、帆柱も煙筒もない、大きな黑い洋船に、黃色い洪水のやうな日が流れてゐた。

木馬のやうな叉に腰掛けて、時々枝を搖ぶると、黑い實が、霰のやうに、ぱら、ぱら〳〵と落ちた。三輪子は、袂をひろげて、一一それを拾ひ廻つた。

楠の樹の蔭に蹲踞でゐる三輪子の膝が、ほ、だ、けて、赤い着物の裾から、圓い、ふ、く、ら脛が二つ見えてゐた。彼女が腰を屈めて步るくと、草履の裏に挾まつた紫色の熟れた楠の實が、ぷつ、ぷつと潰れて鳴つた。

巨きな瘤だらけの枝に摑まつて、また一搖り搖ぶると、黑い小粒が雨のやうに、落ちる。濕つぽい土の上に轉がつてゐる丸が、三輪子の手に拾ひ盡されるまで、私は樹の叉の木馬に跨つて物々しく茂つた梢を仰いだり、代官屋敷の草深い庭を眺めたりした。

そのうちに、ふと、葉蔭から、屋敷跡の古ぼけた屋根のない小さい井戸が見えた。つづいて井戸の縁に乘せてある白い紙包が見えた。

「何だらう」

と思ひ乍ら、今一度、廣々とした庭の隅から隅まで見廻したが、其の邊には人の姿が見えなかつた。

「三輪さん。一寸此處へ登つて見ないか。奇妙な物があるばい」

物好きな彼女は、

「何かのし？」

と、兩手に掴んでゐる楠の實を袂の中へ隱し乍ら、こそ〳〵這ひ上つて來た。三輪子が足を辷らさぬやうに、後ろから帶の結び目を捕へて、

「あれは、何ぢやろか？」

と、古井戸の緣を指して見せると、

「お菓子かしら？」

と熱心に白い紙包みを見詰めた。

「米のお供物かも知れんぞ」

「いゝえ。妾はお菓子と思ふけ」

「行つて見たら解るがな」

私は、樹の叉の木馬から、隣の庭までの高さを量つて見た。そして、

「俺が行つたら、お前も跟いて來るかい」

彼女は默つて頷いた。私の家の庭から代官屋敷までは、木馬を中央に、三尺ばかりの石垣を乘り越せば、造作なく入つて行けた。私が先に石垣を跨ぐと、三輪子が、私の眞似をして、跟いて來た。石垣から、古井戸まで二三間あつた。雜草に混つて、一面に蕗が生えてゐた。井戸端まで來て、手を出すのを躊躇した。然し態々石垣を越えて來て、途中で怖毛づいて引返すことも出來ずに、暫く、蕗畑の中で、屋敷跡を、ぐる〳〵見廻してゐた。廣々とした庭の片隅に戸を閉した小さいぼろ〳〵の家が、半ば傾いたまゝ、腐りかけてゐた。神官の住居は、其處だつた。

「紙の中を開けて見やうか」

と、私は後ろに小さくなつてゐる三輪子を振り返ると、

「水神樣の罰を被つたら、どうするえ？」

と彼女は、私の考へてゐないことを、怖れてゐた。
「斷つて開けたらよかろ―
「妾知らんよ」
それでも彼女は、怖々井戸端へ近寄つて來た。
「どう云ふて斷はろか？」
「水神様。々々々。この包みの中を見せて下さいと云ふて、早く開けないと、人に見つかるがの―
三輪子は、私が兩手に握つてゐた草履を引奪つて、袂の中へ入れた。空手を下げた、私は、勢、手を出さねばならなくなつた。

濕つた土の上に零れる花瓣の音よりも、靜かに、私は井桁の前に摺り寄つた。膝頭を其井桁に押しつけて、腰を屈め乍ら、そつと、手を伸べて、捻り紙を摘み上げる時に、坑の底で、ぎら〳〵と蛇の目のやうに光つてゐる水の上に、二つ三つの木片が、寂かに浮いてゐた。深い坑の奥が、罅裂けた鏡のやうに見えたときは、さすがにどきんとした。きめの荒い石の上に盛つてある小さい、小さい鹽の山が、袖に觸れて、ほろ〳〵と崩れた。

私は慌てゝ捻り紙を開けて見た。三輪子は後ろから覗き込んだ。そして、玩具の小猫のやうな形の「沖の石」と水仙の砂糖菓子とが出て來た時、私は全く意外だつた。こんな高價い菓子が、荒れ果てた庭の古井戸の隅に、紙に包んで上げてあらうとは、思ひもよらなかつた。握り飯を燒いて貰つて喜ぶ彼女と、金魚麩を輪切りにして砂糖も何もつけないで、食べて滿足してゐた私とは、紙包を解いたまゝで心配した。
「元の通りに、包んで置いときなんし」
と彼女は低い聲で、後ろから私語いた。そして、苔の濕りで、掌に乘せてゐるうちに、「沖の石」も水仙の花も、崩れさうになると、「早く戻して、歸らう」
とそわ〳〵し出した時、私も又、貴重な品を盜んでゐるやうな恐ろしさを覺えて、菓子包みを、井戸端へ放り出したさ

ゝ、蕗の間を、駈け間さうとして、出し抜けに、頭の上から、恐ろしい人間の聲を聞いて、悸み上つた。三輪子は、茶褪めて、袂から、私の草履を草原へ投げ出して、楠の果を、撒き乍ら、逃げた。然し逃げそこなつた私の腕は、その刹那に後ろから強く掴まれて、蕗畑の中へ、突きのめされた時、膝の骨が、ぎくりとした。

私を捕へたのは、神主の高木だつた。私は蕗畑から起き上つて今一度逃げやうとしたが腕を掴んで、藻掻く私を、宙に釣るすやうに、ずるずる、引摺り乍ら私を、表口へ廻つて、家へ連れて來た。私は一度代官屋敷の石垣の上から、凧を揚げて、辷り落ちた時、石垣を壊して嚴しい目にあつた。それ以來、神官の高木を恐がつてゐた。

私の家の戸口へ近づく時、彼は、

「異人の子！　貴樣は町内で一番悪い子だ」

と怒鳴つた。どんなに罵らうが、罵られて苦情を云ふのは、私の祖母一人だと高を括つてゐたんだ。私は町内の憎まれ者だつた。私を一番ひどく憎んだのは、高木だ。

高木に連れられて、祖母の前に突き出された時、彼は

「おい。婆さん。俺が今朝上げたばかりの井戸のお供物を、お前の子が盗つたぞい。お前は盲目だから、自分の子が他所で、どげんな悪戯をしてゐるか、解るまいがの、此奴、とても一通りの下童ぢやなか。掃除した井戸端を荒したり、石を打ち込んだりなあ。子供ぢやけん、強く言ふまいと思ふけど、放つとくと、癖になつて、今にどんな事を仕出すか知れんけ、一度辛い目を見せて置かにや」

と怒鳴つた。祖母が驚いて、戸口の隅に、おど／＼と慄へてゐた私を手探りに引寄せた。そして、神官の目の前で、私の頬を、恐ろしい力で切れる程つねつた。私が泣き出すと、

「ほんとうにお前、井戸のお供物を盗つたかの」

と、見えない白い眼を見張つて、私の顔を覗かうとした時、私は、臺所へ駈け込んで、薄い光が、窓から流れて來る米櫃の前で、頬を壓へ乍ら、足の顫ふを堪へてゐた。神官は、また入口に立塞つてゐた。祖母は暫く默つてゐたが、突

然、二口三口爭ふ聲が聞えた。和かな世界が、不意に眞つ暗く荒れて來るやうに心細くなつて、私は、暗がりに佇んだまゝ、凝乎として動けなかつた。すると、祖母の聲がした。

「そらあんた、子供たから、ちつとそつとの惡戲はしますだらう。あゝした、こうしたと云ふて、近所に居て一〻小言を持ち込まれちや、迚も同志住んでゐられぬけ。菓子盜つたな、惡かろが、お互に少しの事なら大目に見て呉れんと困るばい。あんたの方にも子供があることぢやけん」

高木は、澁い顏をして、祖母を睨み乍ら、

「住んで居られんけりや、引移つたらよからう。子供に碌々物を呉れないから、他所で、こんな眞似をするんぢやろ」

と、云つて、今一度私を探すやうな目付で、すた〳〵引揚げた。

「恐ろしい人間もあるもんぢやな」

と、高木の姿が見えなくなる頃、口を尖らせて、拳を固めて、打つ眞似をした、茶の間へ入ると、突然

「淸！　淸！」

と私を呼んだ。不安に襲はれてゐた私が、茶の間へ、おず〳〵入つて、祖母が、つつくり仕事の繿褸布を掻き退けて、坐りかけたとき、彼女は、針箱の斗抽を荒々しく掻き廻して、私の膝先に十錢銀貨を一つ放り出した。私は只祖母の顏を凝視してゐた。祖母の動作は一一私の心を脅した。

彼女が私に金を見せるのは、必ず怖ろしい報せが後を追ふて來る前兆なんだ。或時、私は、彼女にインキ・スタンドを買つて呉れとせがんだ。その賴みを無下に斥けられた腹癒せに、机の代りに使つてゐる支那鞄の隅にあるKeitaと云ふ羅西亞文字の「e」だけを、ナイフで抉り拔いて、その圓い穴に、インキ壺を嵌込んだことがあつたが着物を出し入れするはづみに、到々發見された。祖母は火のやうに怒つて、針箱から、一圓紙幣を一枚出した。そして、

「何にも云はない。可憐さうだから、是を持つて出て行け」

と云つた。そして、私を無理無態に土間へ引摺り下ろした。二人共穿き下ろしの足袋を泥まぶれにして狂つたことがあ

つた。或時彼女の針箱の中から、二十錢掠めて費ひ果した。五錢と二十錢とを摺り替へたり、誤魔化したりすることを面白がつてゐた私は、それを平氣で盜つたのが、丁度月末前で、殘り少なくなつてゐた小遣錢が、數へてあることを知らずにゐた。それが露見した時、彼女は、戸口から二町餘りの交番へ私を引摺つて行つて嚴しく説諭してくれと云つた。

すると、巡査が祖母と私とを、じろ〳〵見較べ乍ら、

「そんな事は、あんたの方で、篤と言つて聞かせなさい。孫の手癖が惡かのは、あんたが直さちやいくめ」

と相手にしなかつた。祖母の怒りは巡査の拒絶で一層つのつて、交番へ集つた群衆を押し退け乍ら、再び私の家へ戻ると、恨めしい針箱から、また紙幣を掴み出して、

「これを持つて出て行つたら、もう家へは、歸つて來なくてもよか」

と言つた。私は自分のたつた一人の味方であり、たつた一人の血を分けた祖母である彼女が、或時は、世の中で一番怖ろしかつた。是が三度目だ。私は十錢銀貨を見詰め乍ら

「何卒、勘忍してくだんせ」

と云ふと、彼女は、

「どんな菓子を奪つたぞい」

と尋ねた。

「こまかい砂糖子」

「盜つて食べたのかい」

「いゝえ」元の通りに、置いときました

「食べないならよか。何故そげな、性の解らぬ物を盜るんぞえ」

私は、慌てゝ

「はじめ、三輪さんが」

と云ひかけて、急に聲が咽喉に詰つて、先が出ずにゐると、祖母は歪んだ眉を釣つて、

「お三輪もゐましたのか」

聲を和らげた。

祖母の顔の筋が、そう〳〵緩んで來ると、私の大きな目から、鼻の脇を辷つた、一條の涙が、口の中へ、氣持ち惡く流れ込んだ。その後から、ぽろ〳〵と二つ三つ膝の上に零れた。

私は口惜しくなつて來た。別段に「沖の石」と「水仙花」とを盗んで食はなければ、飢えると云ふのではなし、强つて買つて呉れと、ねだつたら、祖母だつて、買つて呉れぬものでもなかつたんだ。神官の井戸の菓子を盗むのが、半ば怖く、半ば面白いために、やつたことを、食ひ度くて盗つたのだと思はれてゐるのが、口惜しかつた。私は、これだけの心持を祖母に見せたかつた。だから、私を一番よく知つてゐる筈の祖母の口から、盗んだ、盗んだと云はれるのが、腹立たしかつたんだ。

「これに懲りたろ。これつきり裏に出くんぢやなかぞい。他所の子のした事でも、矢つ張りお前の故にされるけ。解りましたか」

私は默つて頷いた。

祖母は、疊の上に放り出した十錢銀貨を、手探ぐりに摑んで、

「お前が盗つた菓子を、これで買つといで。紙屋町の稲荷屋に行つたら、あるぢやろ。これから高木へ行つて詫びて來るから」

と、簞笥の小抽斗から、大きな風呂敷を出したとき、私はほつと吐息した。事件が段々結末に近づく心强さが胸に漲るのを覺え乍ら、立ちかけるとき、

「着物の着せ方が可笑しいと云ふて笑ふし、汚れてゐると云ふて笑ふし、馬鹿々々しか。誰が、井戸のお供へを拾つて食べるかのし。五月蠅い憎まれ口を利いて廻るから、先祖代々の代官屋敷も潰れるぞいひがみ屋奴！」

と呟いて、苦笑した。

紙屋町まで、十町ばかりあつた。私の顔を見ると、いつも家の中から飛び出して來て、後ろから、囃し立てゝ、石を擲る中學生の家や、私を捕へて、墨や筆や、ラムネの硝子玉を強奪する腕節の強さうな小僧の居る店が、通り路にあつた。其處を一散に駈け拔いて菓子屋に行くと、「沖の石」も「水仙花」もあつた。大きな、擴げると、一間の縱橫にひろがりさうな風呂敷に、小さい干菓子を、くる／＼と包んで、出る迄、齒の拔け落ちた福齋屋の主人が見送つてゐた。

この菓子の包みを引つ奪くるやうにして神官の家へ出掛けた祖母が、間もなく、むつつりし乍ら戻つて來て、何か言はうとして、面到臭さうに、風呂敷を疊み直して、簞笥へ藏ふのを見ると、菓子は高木の神官が取つたに違ひないと思つた。これで、事件に一段落がついたと思ふと、直ぐ、また、のび／＼として氣持ちにならうとした。そして、井戸端から姿を晦ませたつきり出て來ない三輪子のことが氣になつた。そして態々引つ掛けて行つた羽織を脫いて、黑襟の絆纏に着替へて長火鉢の前に坐つた祖母の潰れてどろ／＼に溶けた白眼が、凝乎と私の方へ向いてゐるのに出逢ふと、又暗い心地になつた。何だか、それが、地震の前のやうに靜かで、氣味が惡かつた。

祖母が盲目なんだ。二つとも眼は開いてゐるが見えないんだ。見えない眼を見張つて凝乎と、かうして見詰められると、どうしても、眞個に見ゆるとしてか思はれない。私はどんな小さい秘密でも、盲目の祖母の前では出來なかつた。

私は祖母が怖い。彼女の顏は、私の記憶が始まる瞬間から、蒼白く瘦せて、片眉だけ方角を間違へたやうに歪んでゐる。鼻は細く銳い。鼻の下に、薄い毛が一分ばかりの長さに伸びてゐる。彼女は私の母が死ぬ迄使つてゐた鏡臺に向つて、時々顏に剃刀を當てる。その度每、眉や、鼻の下の髭を、處々剃り殘して、知らずにゐるんだ。

祖母の顏が恐ろしく見えるのは眞夜中に目を醒まして、ひよろ／＼として細長い骨ぎすの腕に、抱かれてゐるのを發見する時なんだ。母親の懷に潛り込んで寢たのは、一週間でお終ひになつて、それから後は、この祖母に抱かれて寢た。或時、彼女は怒つて私を終日押入れの中へ幽閉した。或時、彼女は、私を、丁度世間の人々が言ふやうに「それだから、

お前は異人の子だ」と罵つて毆ることもあつた。足で蹴ることもあつた。異人の子だ、と、世間の人々が私を罵る度に、その人々へ恐ろしい權幕で喰つて掛ることを習慣にしてゐる彼女から、異人の子だと罵らるゝ時、私は避難所に縋した。その彼女が、九歳になつた私に萎んだ乳房を咬へさせてゐることも度々あつた。私は學校を嫌つた。學校を嫌つたのは、生徒に虐められるのが怖いからだ。色々、學校へ出ないで濟むやうな口實を考へ乍ら、或冬の朝、通り路の石橋の上から、深い川底を覗いてゐると、白い湯氣のやうな河霧の中を、筏が流れて來た。筏の上には、簑を着た背の低い農夫が、青菜を積んで、側に竹竿を擔ぎ乍ら、蹲んでゐた。

私は氣を奪はれて、眺めてゐると、だんだん、簑を着て蹲んでゐる農夫の形が、獺のやうに化つて來た。怖毛づいて、家へ引返した。

「お婆さん。私は學校に行かんでもよかろがの」

と云つた。祖母は、面喰つたやうに、

「何故行かんでよからうか」

と不審つた。私は、その時、こう云つた。

「私が、石橋の上を通ると、河の中から、獺が、こつち來いと、手招ぎしたけ。おそろしかつた。もう學校へ行きたうない」

すると、無智な彼女は、それを眞個にして、

「そら、おそろしかつたろ。明日から、妾が學校まで送つてやるから、行かにや」

と云つて、毎朝送つて來た。私は、盲目の彼女を僞つて濟まないと思ひ乍ら、一冬送つて貰つた。私は彼女にこうした怖い親しみを持つて來た。成る程、私の爲に彼女は樣々の苦勞をするだらう。―然し、私も彼女のお蔭で、絶へず氣をもんだ。或日私の留守に、教師が家庭を訪問に來て、出し拔けに、

「妾共では、保險は致しません。お通りなされ」

と彼女に斷はられたことがあつた。私は、學校でその、教師に呼びつけられて、この話を聞いた時、赤面した。

祖母は杖の代りに、私に手を引かせて歩いた。毎月一日に、私の家から一里餘り距れてゐる居留民地の、或外國人が建てた銀行へ、死んだ母親が遺して行つた少しばかりの金を、廿圓づゝ引出しに行つた。金を受取る手間が取れると、彼女は、もどかしがつて、

「たつた二十圓の端金を遣り取りするのに、そんなに暇がかゝるなら、千圓も取らうと云ふたら、一日かゝるぢやろ」

と怒鳴つたり、

「廿圓で、どうして諸式の高い今日、二人生活して行けるかのし。もちと出しておくれ。」

と、係員に食つてかゝつた。私達は、一ケ月廿圓で、屋賃を拂つて、生活してゐたんだ。一年に盆と新年とに、顏を見せる少かばかりの、親しくない姪や甥が、來る度に、

「お婆さんも、外へ出る時には、杖をつかんと、怪我でもあつちや、大變ばのし。」

と云ふと彼女は、きつと、

「妾は、盲目ぢやなかたい」

と云つて、其人達が、歸つた後で、

「そんなに心配なら、杖の一本も買つて來るとよかろ。彼奴共は、皆口の先ばかりで、ほんたうに親切なところがなか」

と云つたりした。

私は、それから、長火鉢の側で、針箱を引寄せて、彼女が毎夜定めて、勤めのやうに、つゞくる襤褸仕事の相手に、暫くの間祖母の傍を離れる譯に行かなかつた。

祖母は、私の母や、叔母の着物や羽織や、私には珍らしい色々の布類を持ち出して、誰に着せるのか、誰にやるの

た、解らない物を拵へるのを日課にしてゐた。一度縫つた處へ二度も三度も針を通して知らずにゐて、後で私に、毟り散らした。私は、洋燈の下で、一一針の目に糸を通して、一尺ばかりの長さに切つて、次々、彼女の手に握らせた。

縕縸仕事が始まらうとする時、今まで見えなかつた、三輪子が出て來た。耳銳い祖母が、三輪子の足音を聞きつけて、

「お三輪かい」

と聲を掛けた時、三輪子は、困つた樣子をした。そして心配さうに、祖母の前に坐つた。

「今迄何處にゐましたかの？」

と云はれても、默つて返事をしなかつた。路畑から出口を違へて逃げたゝめに、今迄に歸る路を探してゐたんだと私は思つた。

「お前は女子の癖に色々な惡戲をするするのし。楠の木に登れと云ふたのも、學校に時計を持つて行けと云ふのも、お前ぢやろがのし。お前が、何でも先に立つて、して見せるけ。」

祖母は、白い眼の玉を、ぐる〳〵と動かし乍ら涙ぐんだ彼女を見詰めてゐた。

「お前も意氣地のない。女子の眞似ばつかりしてゐるぞい」

三輪子は、祖母の兄の孫だ。丁度、私の頬をつねつたやうに、三輪子が膝の上で、きちんと揃へてゐる手を、憎くらしさうにつねつた。三輪子の手を膝の上に探さうとして、枯れた皺だらけの兩手を伸べて、宙をまさぐる時、三輪子が頻りに目をしばたき乍ら、つねられるのを待つてゐるのを見ると、可憐相でならなかつた。彼女は、短かい前垂を掬ひ乍ら、出て行つた。

「お前のお蔭で、いつも、いゝ恥を掻くぞい。この年になつてから、他所で頭を下げて廻らせる、お前のやうな性根なしの不孝者が、何處の國にゐるかい」

私は默つて祖母を見詰めてゐるうちに、無性に悲しくなつた。祖母はまたかう云つた。

「今日は、お前が意地汚ない眞似をしたんで、顔から火の出るやうな目に遭つて來たぞい。[illegible]の奴、妾に向つて、お前は、娘を賣つたんぢやろと云ふた。畜生。あんな人間になかろ。これから、代官屋敷へ一足でも踏み込んで見ろ。お前は家に入れないから。よう覺えて置くんぞ」

　それから、私に、

「もう、寢たがよか」

と云つた。私が、

「まだ寢ねない」

と云ふと、

「そんなら、針に糸でも通して呉れるか」

と云つた。祖母の云つた事が一一胸にこたへた。口惜しさうな祖母の顏を見てゐると、いつの間にか、分別を忘れて、直ぐ樣復讐をしやうと思つた。

　針の目に、一本づつ糸を通し乍ら、高木に對して、出來る限りの大きな復讐を與へやうと考へた。彼が、私と祖母に與へた侮辱に相當する充分な仇を報ゆる手段が浮んだとき、私は、幾本目かの針の目に糸を通してゐた。一尺か二尺位で、切る糸を、切らずに置いた。切らずに置けば、いつまでも、代りの針に糸を通さなくてもいゝと思つてさうした。

　祖母に感づかれぬやうに、茶の間を忍び出やうとする時、臺所の戸棚で、ことことと音がした。はつと思ふと、三輪子が、蒲鉾のやうな物を摘み出して、支那鞄の部屋に入つて行くのが見えた。私も彼女も、夕飯の時刻を、はづして、知らずにゐたんだ。

　當分針の糸が盡きないことを確めて、恐ろしい決心をした私は、そつと臺所へ拔け出した。臺所の椽の下から、石油德利と、泥を詰めて棄ててあつたインキ壺を取り出した。マツチの灯で、インキ壺の泥をあけて、石油を注き込んだ私の手は、わくわく顫えてゐた。石油の小壺に栓をして、今一度、祖母の樣子を窺つて、それから、裏庭へ出て、楠の枝にぶ

ら下り乍ら、代官屋敷へ入つた時、動悸が劇しく打つてゐた。

私は、闇の底に、暫く、ぼんやり立つてゐた。美しい星が、頭の上で輝いてゐた。港の沈みかけた黒い洋船に、青い灯が、ほとほとゝ光るのを、此晩に始めて見た。代官屋敷は、どの邊にあるのか、見當がつかなかつた。路畑をさく〳〵と分けて歩く度に、脛の丸く膨れた筋が、びく〳〵と攣るのを覺へた。井戸へ近づく前に、五分間ばかり路畑の中で蹲んでゐた。男の咳のやうな重苦しい音が聞ゆるやうな氣がした。

井桁に這ひ寄つた私は幾度も石油を水の中へ注ぎ込まうと努めた。井戸の奥を覗いた刹那、寂しい星の光が、眞つ黒い水の底から、泡のやうに、する〳〵と登るのが見えた。井桁に縋りついて、目的を果せなかつた私は、一二間離れて、インキ壷を思ひ切つて投げ込んだ。大地の奥で、物凄い波の音がして、私は逃げた。

臺所の暗がりに、ぼんやり蹲踞んでゐると、全身の脉が駈け出した。それを紛らすために、立ち上つて、じめじめした板の間を行つたり來たりしてゐるうちに氣がついた。私は泥足でゐたんだ。足を拭かうとして、雑巾を探してゐると、石油德利に觸つた。私は泥足を疊の上に摺りつけて、祖母の部屋へ入ると、針の糸は、餘程短かくなつてゐた。私は恐怖に駈られて、

「お婆さん、糸を通さうか」

と云ふ聲が、烈しく顫へてゐた。凝乎と坐つてゐると、井戸の水を潜つて行くインキ壷が現はれた。毒々しい紫や紺や赤い色が、忽ち水面に擴がつて、焔のやうに輝いて來た。煙のやうな異樣な臭が物凄く噴き出て來た。

最後に、石油の混つた井戸の水を飲んだ高木が咳を始めた。咳は段々重苦しくなつて、遂に彼が倒れた。倒れたまゝ遂に起きなかつた彼が突然、黄色い目を開き乍ら、私を見て笑ふ景色が浮んだ。私は、ぎよつとして突立つた。が、凝乎としてゐられなくなつた。祖母が

「洋燈の油は、まだ切れないかの」

と呟やいた時には、たまらないで、茶の間を飛び出した。自分の無鐵砲を悔ゆることよりも、差し當り、どうしたら、無事にこれが知れないで濟むだらうかと思つた。恐ろしい幻は私の部屋から部屋へ追ひ廻した。

どう云ふはづみであつたか、突然私の頭に浮んだインキ壺には栓がしてあつたやうだつた。栓をしたまゝ、夢中で井戸の中へ投げ込んだやうにも思はれた。私は臺所と茶の間の間の、暖簾の下で、どつちであつたか、一心に考へた。それから、愈々どつちであるか、確かむるために、臺處の椽の下を調べた。古草履や、鼻緒の切れた下駄の下から、草鞋虫が、ぞろ〳〵と這ひ出して逃げ紛つた。何處を掻き廻しても、インキ壺の栓は見出せない時、私は、いくらか安心した。インキ壺には、栓をして持ち出したことが解つた。そして、栓をしたまゝ投げ込んだに違ひないと思ふと、私の胸には急に嬉しさが込み上げて來た。それと同時に、今迄汗を掻いて、狼狽へ廻つたのが、忌々しくなつて來た。忌々しいと云ふよりも、これだけの心配をさせる神官が一層憎くなつた。インキ壺は確かに、栓を穿めてあつたんだ。私の頬は、後から押し寄せて來る口惜しさで、眞つ赤に火照つた。私は針の目に糸を通さねばならぬ時刻も何を忘れて了つた。

戸棚の中から、庖丁を持ち出して、代官屋敷の蕗を切り盡したのは、その晩だつた。始めから、二坪餘りの蕗を悉く切らうとは思はなかつたが、一本切つた庖丁の刄は、夢のやうに次の一本をも倒してゐた。すくすくと莖を揃へて水々しく伸びてゐる莖が、物音をも立てずに倒れて行くのが、折り重なつて波のやうに續いてゐるのに氣が附いた時には、ありだけの蕗は、私の前に横はつてゐた。

庖丁を戸棚の隅に隱して、慌てゝ支那鞄の部屋に入ると夕方食ひ物を、こそ〳〵探してゐた三輪子が一日の出來事を忘れ果てたやうに、眠つてゐた。枕の先に、楠の實を詰めた筆立が轉がつてゐた。

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同　神田區裏神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　日本橋區本石町	至誠堂
同　本郷區本富士町	盛春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同　四條西洞院	前田大盛社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

○定價　金五拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾錢但支那を除く）

國別／册數	內國	外國
六册	金參圓	金參圓六拾錢
十二册	金六圓	金七圓貳拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金八圓五拾錢外國は金拾圓貳拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし。

廣告取次所

博報堂、弘報堂、正路喜社、一星社
金蘭社、萬年社、電通社、信賴社
三誠社、東亞通信社

送金注意

一誌代郵稅　は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金　口座は東京三十四番なり
一郵券代用　は謝絕す但し郵便局に不便の地に限り一割増にて代用せらるゝを拒まず
一代金引替　小包の取扱は一切謝絕す
一集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

一金一圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
一金拾圓迄　金八錢

但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌を發送せず
一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正九年一月三十日印刷納本
大正九年二月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　菅谷壽治
印刷人　高木酉三

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所　中央公論社
電話（長小石川一四四〇｜小石川三四二〇）
電信略號コウロン

印刷所
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 10,20; Single copy 60 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す